國譯一切經 大集部 三

昭和十六年八月二十五日印刷
昭和十六年九月一日發行

複製不許

編輯兼發行者 東京市麹町區三番町[illegible] 岩野眞雄

印刷者 東京市芝區愛宕町二丁目三番地 藤澤[illegible]夫

印刷所 東京市芝區愛宕町二丁目三番地 日進舍

發行所 東京市麹町區飯田町七番地十號 大東出版社
振替東京一九四七
電話[illegible]

昭和六年八月二十五日印刷
昭和六年九月　一日發行

不許
複製

國譯一切經　大集部　三

編輯
發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一一九四七一番
電話芝{三二一〇一四〇六}番

兩角製本所　製本所

索　引

凡例

◇本索引は大集部の第一・第二・第三に亘るもので、抽出した語句はなるべく本文の內容と關係あるもの又は他との比較に資する所ありと考へられるものを主とした。從つて脚註に於てのみその語句の見出さるるものはその數極めて少ない。

◇配列は主として五十音順に依つたが、一一の場合はなるべく同一文字に始まるものを一所に集め、法數に關するものもその數字の下に彙集する方法を取つた。

◇頁數の始に存する括弧內の數字は大集部の册數を示すものであり頁數は通頁(各頁の下位に存するもの)に據つた。例へば(2) 153とあるは、大集部第二册の153 頁(本丁頁五三九)に在ることを示す。(譯者記)

—エ—

—オ—

—カ—

—ス—

—ソ—

—タ—

—チ—

—テ—

——大集部一・二・三索引終——

佛の言はく『行を失せずとは、菩薩、十方の佛前に至らんに、常に當に自ら身體を慚ぢ、自ら生死を慚ぢ、自ら意のために罪に墮し、校計して知る能はざるを慚ぢ、常に五十校計を持して、還自ら慚づべし、是を菩薩、行を失せずとは爲す。自ら慚ぢざれば、常に行を失するなり』と。

佛是の如く說きたまへるに、諸の菩薩、各各自ら慚ぢ、各各自ら悔ひ、各各自ら、非常・苦・空・非身を滅盡せんと念じたり。諸の菩薩、經を聞いて大に歡喜し、前んで佛の爲に禮を作し、頭面もて佛足に著け、受行して去りぬ。

大方等大集經卷第六十（終）

り、惡色にも亦爾り、好聲にも亦爾り、中聲にも亦爾り、惡聲にも亦爾り。好香にも亦爾り、中香にも亦爾り、惡臭にも亦爾り。美味・好語言にも亦爾り、中味・中語言にも亦爾り、惡味・惡語言にも亦爾り。好細軟にして身に可なるにも亦爾り、中細軟にも亦爾り、惡麁堅苦痛あつて、身に可ならざるにも亦爾り』と。

佛、諸の菩薩に問ひたまふらく『寧ろ是を知るや不や』と。諸菩薩の言はく『佛說を聞いて、皆知りぬ』と。佛、諸の菩薩に言はく『汝曹寧ろ是れ有るを信ずるや、無きや』と。諸菩薩の言はく『是れ有るを信じ、衆疑はざるも、但だ解せざるのみ』と。

佛、諸の菩薩に問ひたまはく『汝曹發起して我が所に來至して、寧ろ汝の意中の、幾たびか轉じたるを知るや。汝、我が造說の經を聞いてより以來、汝の意幾たびか轉じたるを知るや』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『幾たびか轉じたるを知らず』と。佛、諸の菩薩に問ひたまはく、『何を以ての故に、幾たびか轉じたるを知らざる』と。諸菩薩の言はく『我れ佛の說きたまへる經を聞いて歡喜し、幾たびか轉じたるを知覺せず』と。佛の言はく『汝曹來至し、今意の轉ずるを覺せずして、生死に墮せんこと、譬へば〔四二〕摩竭國中の塵の、多少を知らざるが如くなり。菩薩は但だ坐するのみにて、行を失し、自ら生死の多少を知覺せず。是の故に即時に佛を得ざるなり』と。諸の菩薩、各各、稽首して、歡喜受行しつ。

諸の菩薩、各各稽首して言はく『未だ佛の、五十校計を聞かざりし時は、自ら用つて行を失せずとしたり。佛、五十校計を解したまふを聞いては、自ら行を失するを知りぬ』と。佛の言はく『汝亦行を失し、亦行を失せず』と。菩薩復問ふらく『何を以て行を失し、亦行を失せざる』と。佛の言はく『汝十方の佛前に至り、自ら貢高、自ら譽言して「我れ是の五十校計の罪、有ること無きを解せり」と〔言はんに〕、便ち罪に墮し、行を失せん、是を亦行を失すとは爲す』と。

〔四二〕摩竭國。摩揭陀國に同じ。

精進して行ずれば、亦當に十方佛の智慧を知るべし』と。

諸の菩薩、佛に問ひまつるらく『我れ何の因縁もて、生死の多きこと、是の如くなる』と。佛の言はく『汝曹、諦に安般守意の[三九]三十七品經、十二[四〇]門、三向中の微意を行ぜず、生死百八中の細微の意を、分別し校計することを知らざるが故に、生死をして多くして、佛を得難からしむるなり』と。

佛の言はく『汝の心未だ起らざる時、中に[四一]五百四十の百八愛行有り、心轉じて意と作るや、中に五百四十の百八愛行有り。意轉じて識と作るや、中に五百四十の百八愛行有り。轉じて眼に入るに、眼所見の好色には、中に五百四十の百八愛行有り、眼所見の中色には、中に五百四十の百八愛行有り、眼所見の悪色には、中に五百四十の百八愛行有り。

『轉じて耳に入るに、耳所聞の好聲には、中に五百四十の百八愛行有り、耳所聞の中聲には、中に五百四十の百八愛行有り、耳所聞の悪聲には、中に五百四十の百八愛行有り。轉じて鼻に入るに、鼻所聞の好香には、中に五百四十の百八愛行有り、鼻所聞の中香には、中に五百四十の百八愛行有り、鼻所聞の悪臭には、中に五百四十の百八愛行有り。轉じて口に入るに、口所得の好味美・好語言には、中に五百四十の百八愛行有り、口所得の中味・中語言には、中に五百四十の百八愛行有り、口所得の悪味・悪語言には、中に五百四十の百八愛行有り。轉じて身に入るに、身所得の、好細軟にして身に可なるものに、中に五百四十の百八愛行有り、身所得の中細軟に、中に五百四十の百八愛行有り、身所得の、悪麁堅・苦痛あつて、身に可ならざるに、中に五百四十の百八愛行有り』と。

佛の言はく『一心の中に、五百四十の百八愛行有り、五百四十の百八愛行の中、一の愛は當に一の生死を受くべし。一の愛は當に一身を受くべし。是の如くして盡きざれば、五百四十にして、爲に五百四十の生死の身をば受く。意にも亦爾り、識にも亦爾り。好色にも亦爾り、中色にも亦爾

【三九】三十七品經。三十七菩提分を說ける經の義、卽ち大集經を謂へるか。
【四〇】門。麗本聞に作る、今三本に依る。十二門、三向の義、不詳。
【四一】五百四十。恐らく百八を五大に關係せしめて得たるなるべし。

『十には菩薩常に當に、力を盡して貪を却け、受求を得ざらしむべし。受求する者は、菩薩に應ぜずと爲す。菩薩諦に我が校計する所をば、分別思惟する、是を菩薩の五十校計と爲す』と。

佛言はく『諸の菩薩、安般を行じて意を守るや、常に苦んで行を失し、行を失せざるもの有ること無し』と。時に諸の菩薩、佛に問ひまるつらく『何を以ての故にか、我曹菩薩と作つて、常に苦んで行をば失するや』と。佛の言はく『菩薩は生死苦習を厭はざるが故に、自ら生死の習を覺せざるが故に、諦に生死盡くれば、所有無きを知らず、諦に佛泥洹の道有るを知らざるが故なり』と。

佛の言はく『諸の菩薩、自ら用つて、菩薩の道を作すべからざるが故に、貢高にして十方の人に勝るとす』と。

佛の言はく『未だ佛を得ざれば、生死の苦習、未だ盡と合せず、未だ道と合せず、常に身體の苦痛有り、亦寒熱の苦有り、亦飢渇の苦惱有つて、斷ずる能はず。是の如き菩薩、未だ自ら其の善に怙るべからず』と。佛の言はく『我れ未だ佛を得ざりし時、自ら智慧の能く及ぶ者無しと謂ひ、自ら禪を知ること、能く及ぶ者無しと謂ひ、自ら微細の滅心を知ること、及ぶ者有ること無しと謂へり』と。

佛の言はく『我れ已に身を立てゝ、釋迦文佛と作るや、還自ら校計するに、菩薩たりし時の所知は、譬へば一菩薩の智の如くなり。今已に佛と作るや、知る所有ること、譬へば十方佛國中の、有らゆる萬物の菩薩の如くなり』と。佛の言はく『十方佛所有の菩薩の智慧は、未だ一方の佛の、一小塵智をも得る能はざるなり』と。

菩薩即ち稽首して、佛に問ひまつつて言はく『我曹は癡、何を以てか多くして、佛の一塵智にも及ぶ能はざる』と。佛の言はく『汝生死の苦・習を厭はざるを以ての故なり、早く佛を取らざるが故なり、細微の意を知らざるが故なり、本を滅し根を斷ずるを知らざるが故なり。汝曹力を盡し、

【三七】諦の下。麗本には求の字を加ふるも、今三本に依つて略す。

【三八】萬物の菩薩。萬物を知る菩薩の謂なるべし。

し。是を菩薩の校計の法とは爲す。

『五には菩薩、當に復、百八を校計し、十方の阿羅漢を牽いて證者と作すべし』と。諸菩薩の言はく『百八を校計し、阿羅漢を牽いて、證と作すとは云何』と。佛の言はく『菩薩の行を失するは、但だ貪著に坐するが故なり。當に阿羅漢の泥洹に去つて、所有無きを牽くべし。[二四]我れ何をか所念と爲して行をば失する。何の爲にか當に、是の苦所念に坐すべきと。阿羅漢の泥洹を牽いて、常に證と作す。是を菩薩の校計の法と爲す。

『六に若し復行を失すれば、當に百八を校計し、辟支佛の泥洹、所有無きをば牽いて證と作すべし。是を菩薩の校計の法と爲す。

『七に菩薩若し行を失すれば、當に復百八の無所有なるを校計し、當に十方過去佛の泥洹、無所有なるを牽くべし。十方の過去佛は、皆我が師なり、皆泥洹を取つて去りぬ。[二五]我れ何の失行をか爲し、世間に行在すると。菩薩已に證を牽いて、便ち還行を揷す。是を菩薩、證を牽く校計の法とは爲す。

『八には菩薩復行を失すれば、當に復現在の十方佛、亦當に泥洹に去るべきを牽くべし。常に當に自の證を牽き已り、自ら證し、當に卽ち還行ずべし。是を菩薩の百八――證を牽いて還行ずる――校計の法と爲す。

『九には菩薩當に百八の、復行を失するを校計すべし』と。佛の言はく[二六]『我れ今釋迦文佛と作る。我が主どる所の天地・帝王・人民など、皆我に屬し、自在に飛行し、大威神あるも、我れ要ず般泥洹して去り、無所有に歸すべし。常に當に我を牽いて證と作すべし、常に當に意を堅くして、佛を求むべし、我を持つて證と作し、意轉ぜざれ。轉ずれば行を失すと爲し、便ち百八の愛行中に墮盛すべし。是を菩薩の校計と爲す。

【二四】本文に。我爲所念失行、何爲當坐是苦所念とあり。

【二五】本文に我何爲失行云云とあり。

【二六】我れ今……證と作すべしの句は、卷第五十九に在つては、第八(卽ち第四十八)の校計に就て述べられたり。從つて卷五十九に於て、第八、第九の二に分たれ、卷五十九に於ける第九は、本卷に缺けたり。

當に泥洹は無所有なり、何を以ての故にか、復雜相の念有らん、當に復滅すべきを校計すべし。是をば菩薩、雜相の念を知つて、校計すとは爲す。

『十に菩薩は、當に校計して、自ら滅には所有無く、長く泥洹の相を受け、泥洹は長生して、復滅せざるを知るべし。是を菩薩、泥洹を受くるの相を校計すべしと爲す。是を菩薩の十校計とは爲す』と。

[三一] 佛の言はく『菩薩には復十の校計有り』と。諸の菩薩佛に問ひまつらく『何等をか菩薩の十校計とは爲す』と。

佛の言はく『一に菩薩は自ら百八の罪を知る。亦當に十方の人の爲に、百八の罪を說き、亦當に人の爲に、十方の生死・五道の苦痛を說くべし。常に當に十方の人の爲に、萬物の成敗・本末、生死の無所有なるを說くべし。是を菩薩の一校計とは爲す。

『二には菩薩、當に十方の成敗を校計し、證を牽いて用つて人に示すべし。是を菩薩[三二]證を牽いて校計し、人に法を解せしむと爲す。

『三には菩薩、當に十方の人の所有は、皆貪に坐するが故に著す。貪を以て著するを、皆癡と爲すを校計すべし。菩薩は常に當に人の爲に、貪に著するを解し、人の癡を解すべし。菩薩は亦當に、[三三]貪と癡とを持て、自の况に還すべし。我れ未だ菩薩道を知らざりし時、貪・癡も亦劇しかりきと。是の菩薩、是の校計を得ては、常に當に慈心もて、人に貪と癡とを解すべし。是を菩薩の校計とは爲す。

『四には菩薩、常に當に百八を校計し、十方の癡人を牽きて證を爲すべし』と。佛の言はく『十方の人、所念は皆、百八の癡に坐するが故なり。菩薩の百八の癡を去るを、乃ち不癡とし、菩薩行を失すれば、百八行するを便ち癡と爲す。常に當に十方の癡人を牽いて證と作し、行を失するを得ざるべ

【三一】以下第五の十校計を擧ぐ。

【三二】本文に。牽證校計解人法とあり。

【三三】本文に。當持貪癡還自况と云へり。

に盡さしむべし、當に慧に入り罪より出づることを求むべし、便ち菩薩に應ずるの法なり。
『二には當に、[26]菩薩の百八を校計して、空に入るの法を求め、便ち罪空の法に出づべし。是をば菩薩の百八校計――罪より出でて道の空に入る――とは爲す。
『三には菩薩當に、百八の罪法、[27]初めて起るや、空より生ずる[時なる]を校計すべし。當に知るべし、滅するや空に歸する[時なる]を校計すべきを。是をば菩薩、百八の生滅を校計すと爲す。[28]空に合するが爲に、以て生滅を知る、是をば菩薩の諦の校計とは爲す。
『四には菩薩當に、百八の持空の法と解盡の法とを校計すべし』と。諸の菩薩、復佛に問ひまつるらく『何等をか持空の法、解盡の法とは爲す』と。佛の言はく『菩薩は一切、十方所有の本末、皆空なるを知り已り、空を知つて有らゆるもの、當に復滅盡すべきを知る。菩薩の知り盡すを、以て諦と爲す。卽ち復百八に貪せず、復欲に行著せず。菩薩能く自ら解して、當に盡を知るべし。是を菩薩、持空の法、解盡の法を校計すと爲し、是を菩薩、百八解盡を校計して法に應ずとは爲す。
『五には菩薩、當に百八の、法を盡せば復生ぜざるを校計すべし。已に復生ぜざるを知る、是を菩薩、法を盡せば、復生ぜざるを校計し、已に復法を生ぜざるを知るとは爲す。
『六に菩薩は當に、百八の盡を校計し、當に泥洹を得て長生し、復滅せず死せざるべし。菩薩是の校計を得て、自ら苦を知れば、是を菩薩、[29]法のごとく泥洹を知り、樂んで法を校計すとは爲す。
『七に菩薩は當に校計して、百八の盡と泥洹の念とを知るべし。[30]是を菩薩、泥洹を知り、相念を校計すとは爲す。
『八には菩薩、當に百八の、捨相の念を滅盡して、復念ぜざることを校計すべし。是を菩薩百八の、相念を捨し、復校計を念ぜざるとは爲す。
『九には菩薩、當に所念盡きざれば、便ち雜相の念生ずるを校計すべし。雜相の念を知るを以て、

【二六】本文に。當校計菩薩百八、求入空法、便出罪空法とあり。
【二七】本文に。當校計百八罪法、初起空生時、當知校計滅歸空時とあるも、卷五十九の始には當校計百八罪法初起時空當知滅時歸空とあり。今後者に從つて讀みたり。
【二八】本文に。爲合空以知生滅とあり。
【二九】本文に。是爲菩薩法知泥洹云云とあり。
【三〇】卷五十九の初に。當校計百八應相念と云へり。

[二一]佛の言はく『復菩薩には、未だ佛を得ざる百八の惱有りと爲す』と。諸の菩薩、佛に問ひて言はく『何等をか菩薩の百八の惱とは爲す』と。佛の言はく『謂はく菩薩未だ佛を得ざれば、十方泥犁中の人、拷掠毒痛するを見ては、往いて度脫せしめんと欲するも、度脫せしむる能はずして、便ち惱を生ず。謂はく、菩薩の未だ佛を得ざるや、禽獸・蜎飛・蠕動、及び人民の、轉相拷掠し毒痛し、相殺すを見ては、菩薩度せんと欲するも、度する能はずして、便ち惱を生ず。謂はく、菩薩の未だ佛を得ざるや、薜荔・餓鬼の、食する所無きを見て、度脫せしめんと欲するも、度する能はずして、便ち惱を生ず。謂はく、菩薩の未だ佛と作るを得ざるや、世間人所作の、惡貪婬・瞋恚、[二二]烹殺・祠祀、貪利・强盜、快心・恣意などを見、是曹の人、死して五道に生れ、苦痛の斷絕有ること無く、上諸天と爲ると雖も、別異有ること無く、要ず五道に死しては、苦痛を生ずるを見、便ち時に佛を得ざれば、便ち惱を生じ、便ち百八の愛の行を增盛す。是をば、菩薩の未だ佛を得ざる百八の惱と爲す。『謂はく、菩薩未だ佛經の要、百八の黠を得ず、未だ佛泥洹の要を得ず』と。諸の菩薩、復佛に問ひけらく『何等をか百八――佛經の黠を得る――とは爲す』と。佛の言はく『謂はく、菩薩能く自ら六情を護り、百八を行ぜざれば、佛の經黠を得と爲す』『何等をか、未だ佛泥洹の要を得ざるとは爲す』と。佛の言はく『謂はく、菩薩未だ佛を得ざれば、未だ泥洹の要を得ず』と。

[二三]佛の言はく『諸の菩薩は、當に百八の出罪の要を校計すれば、便ち泥洹の要に入るを得べし』と。菩薩復佛に問ひまつつて言はく『何等をか出罪の要もて、便ち泥洹の要に入るを得るとは爲す』と。佛の言はく『謂はく菩薩の所念をば罪と爲す、出の要もて當に滅すべし。滅すれば、泥洹の要に入るを得とは爲す。一切の六情の百八滅するをも、亦泥洹の要に入ると爲す。是をば菩薩、百八の罪を出で、泥洹の要に入るとは爲す。是をば菩薩の[二四]十校計と爲す』と。

佛の言はく『菩薩には復[二五]十校計有り。第一に菩薩相聚會すれば、但だ當に百八を校計して、當

【二一】第二十八の校計。

【二二】烹。にるなり。

【二三】第二十九の校計。

【二四】十。第三の十校計なり。

【二五】十。第三一―四〇の十校計なり。

の、惡麁堅苦痛あつて、身に可ならざるをば、當に惡麁堅苦痛あつて、身に可ならざるを辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしむ。是を惡麁堅苦痛あつて、身に可ならざるを辱し、道に入るとは爲すなり』と。

佛の言はく『菩薩、是の如きを行ずれば、菩薩の忍の戒行に應ずと爲す。菩薩は忍辱を以て、便ち[一八]百八の合道の願を得、便ち百八の本信入道を得、便ち百八の、癡を出でて慧に入ることを得、便ち百八の、歡喜還滅を得、便ち百八の佛の悲心を得、便ち百八の、未だ佛道を得ざるの愁を得るなり。

『何等をか、佛の百八の悲心とは爲し、何等をか百八の、未だ佛道を得ざるの愁とは爲すとならば、謂はく、菩薩、佛の悲心を得ては、十方[一九]泥犁中の人を念ずるも、度脱せしむるを得難し。謂はく、菩薩は佛の悲心を得ては、禽獸・蜎飛蠕動を念ずるも、度脱せしむるを得難し。謂はく、菩薩は佛の悲心を得て、薜茘中の餓鬼を念ずるも、度脱を得難し。謂はく菩薩は佛の悲心を得ては、二十八天及び諸の天の、長壽にして[二〇]憍樂し、苦習を知らざるを念ずるも、度脱せしむるを得難し。謂はく、菩薩は佛の悲心を得ては、世間の帝王・豪貴を念ずるも、度脱せしむるを得難し。謂はく、菩薩は佛の悲心を得ては、世間の癡人の、解せざるを念ずるも、度脱せしむるを得離し。謂はく、菩薩は佛の悲心を得ては、十方の五道、一切の五道、一切の同法を念ずるも、度脱せしむるを得難し。是の如き菩薩をば、佛の悲心を得て、便ち佛の愁を得とは爲す。謂はく、菩薩は十方五道の勤苦を念ずるも、度脱を得しめ難き愁あり。菩薩已に悲し、已に愁すれば、百八の愛復增多す。是の如く菩薩は、百八の愛の增多を用ふ可らざるが故に、悲愁せざるなり』と。

佛の言はく『我れ但だ、十方五道の勤苦悲愁を用ての故に、佛を得たり。是を菩薩未だ、佛を得ざる百八の悲と爲し、是を菩薩未だ、佛を得ざる百八の愁と爲す』と。

【一八】以下は。五十の中、第二十二―第二十七なり。

【一九】泥犁(Niraya)。地獄なり。

【二〇】憍。驕に同じ。

『轉じて耳に入るに、耳所聞の好聲をば、當に好聲を辱して念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしめん。是をば百八を辱して道に入ると爲す。耳所聞の中聲をば、當に中聲を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしめん。是をば中聲を辱して道に入るとは爲す。耳所聞の惡聲をば、當に惡聲を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしめん。是をば惡聲を辱して道に入るとは爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香をば、當に好香を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしめん。是をば好香を辱して道に入るとは爲す。鼻所聞の中香をば當に中香を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしめん。是をば中香を辱して道に入るとは爲す。鼻所聞の惡臭をば、當に惡臭を辱して、念ぜしむるを得ざれは、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしむ、是をば惡臭を辱して道に入るとは爲す。

『轉じて口に入り、口所得の、美味・好語言には、當に美味・口語言を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしむ。是を美味・好語言を辱して、道に行るとは爲す。口所得の中味・中語言には、當に中味・中語言を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち八百を辱して勝るるを得ざらしむ。是をば中味・中語言を辱して、道に入るとは爲す。口所得の惡味・惡語言をば、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしむ。是をば惡味・惡語言を辱して道に入らしむとは爲す。

『轉じて身に入り、身所得の、好細軟にして身に可なるをば、當に好細軟にして身に可なるを辱し、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしむ。是をば細軟にして身に可なるを辱して道に入るとは爲す。身所得の中細軟には、當に中細軟を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して勝るるを得ざらしむべし。是をば中細軟を辱して道に入るとは爲す。身所得

『轉じて身に入り、身所得の、好細軟にして身に可なるもの、好細軟にして、身に可なるに從ひ、當に忍んで、轉せしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是をば好細軟の、身に可なるを忍び行を忍ぶの戒とは爲す。身所得の中細軟をば、中細軟に從ひ、當に忍んで、轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是をば中細軟を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。身所得の惡麁堅苦痛あり、身に可ならざるをば、當に忍んで、轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是を惡麁堅苦痛あつて、身に可ならざる[を忍び]行を忍ぶの戒とは爲すなり。

佛の言はく『是を菩薩の十校計とは爲す』と。

佛の言はく『菩薩には復、十の校計有り』と。諸の菩薩、稽首して佛に問ふらく『何等をか十の校計とは爲る』と。佛の言はく『菩薩は當に能く耐辱すべし。能く耐辱すれば、便ち道に入るなり』と。諸の菩薩、佛に問ひけらく『何等をか、耐辱して道に入るとは爲す』と。佛の言はく『菩薩は心に所念有らば、當に心を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八の罪を辱し、勝るるを得ざらしめん。是をば辱心もて道に入るとは爲す。轉じて意に入るに、意に所念有らんに、當に意を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八の罪を辱し、勝るるを得ざらしめん。是をば意を辱して道に入ると爲す。轉じて識に入るに、識に所念有るに、當に識を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八の罪を辱して、勝るるを得ざらしめん。是をば識を辱して道に入るとは爲す。

『轉じて眼に入るに、眼所見の好色をば、當に好色を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしめん。是をば好色を辱して道に入るとは爲す。眼所見の中色をば、當に中色を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしめん。是をば中色を辱して道に入るとは爲す。眼所見の惡色をば、當に惡色を辱して、念ぜしむるを得ざれば、便ち百八を辱して、勝るるを得ざらしめん，是をば惡色を辱して道に入るとは爲す。

【七】十。第二一—三〇の十校計なり。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色をば、好色に從つて、當に忍んで轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是を好色を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。眼所見の中色をば、中色に從つて、當に忍んで轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを行ざるべし、是をば中色を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。眼所見の惡色をば、惡色に從つて、當に忍んで、轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざらん、是をば惡色を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲をば、好聲に從つて、當に忍んで轉ぜしむるを得ざらしめば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是をば好聲を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。耳所聞の中聲をば、中聲に從つて、當に忍んで轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是をば中聲を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。耳所聞の惡聲をば、惡聲に從つて、當に忍んで、轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是をば惡聲を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香をば、好香に從つて、當に忍んで轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是をば好香を忍び行を忍ぶの戒と爲す。鼻所聞の中香をば、中香に從つて、當に忍んで轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是をば中香を忍び行を忍ぶ戒と爲す。鼻所聞の惡臭をば、惡臭に從つて、當に忍んで轉ぜしむるを得ざれば、百八便ち行ずるを得ざるべし。是をば惡臭を忍び行を忍ぶの戒と爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言をば、當に忍んで、轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是を美味・好語言「を忍び」行を忍ぶの戒と爲す。口所得の中味・中語言をば、中味・中語言に從ひ、當に忍んで、轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是を中味・中語言を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。口所得の惡味・惡語言を、當に忍んで、轉ぜしむるを得ざれば、百八は便ち行ずるを得ざるべし。是を惡味・惡語言を忍び行を忍ぶの戒とは爲す、

滅する、是をば行を進めて道に入るとは爲す。鼻所聞の惡臭をば、惡臭に從つて力を盡し、惡臭を盡して百八を滅する、是をば行を進めて道に入るとは爲す。

『口所得の美味・好語言をば、美味・好語言に從つて力を盡し、美味・好語言を盡して百八を滅する、是をば行を進め道に入るとは爲す。口所得の中味・中語言をば、中味・中語言に從つて力を盡し、中味・中語言を盡して百八を滅する、是をば行を進めて道に入るとは爲す。口所得の惡味・惡語言をば、惡味・惡語言に從つて力を盡し、惡味・惡語言を盡して百八を滅する、是をば行を進めて道に入るとは爲す。

『轉じて身に入り、身所得の、好細軟にして身に可なるを、好細[一五]軟にして身に可なるに從つて力を盡し、好細軟の身に可なるを盡して、百八を滅する、是をば行を進めて道に入るとは爲す。身所得の中細軟をば、中細軟に從つて力を盡し、中細軟を盡して百八を滅する、是をば行を進めて道に入るとは爲す。身所得惡麁堅苦痛あつて身に可ならざるをば、惡麁堅苦痛あつて身に可ならざるに從ひ、力を盡して、百八を滅する、是を行を進めて道に入るとは爲すなり』と。佛の言はく『行を進めて道に入れば、便ち能く忍持して戒をば行ず』と。

[一六]諸の菩薩、佛に問ひて言はく『何等をば忍持して戒を行ずるとは爲すや』と。佛の言はく『菩薩は已に能く當に、戒を忍持して戒を離れざるべし。是の如くなれば、乃ち菩薩の行に應ずるなり。菩薩は心動ずれば、當に百八を忍んで、轉ぜしむるを得ざるべし、是をば心を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。轉じて意に入り、意に所念有るに、當に意に從つて忍び、轉ぜしむるを得ざれば、百八便ち行を得ざるべし。是をば行を忍ぶの戒とは爲す。轉じて識に入り、識に所識有るに、當に識に從つて忍び、轉ぜしむるを得ざれば、百八便ち行ずるを得ざるべし。是をば識を忍び行を忍ぶの戒とは爲す。

【一五】軟。麗本は濡に作る、今三本に從ふ。

【一六】第十五の校計を述ぶ。

るを、還戒に應ずと爲す。身所得の中細軟の生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するを、還戒に應ずと爲す。身所得の、惡麁堅苦痛にして、身に可ならざるもの、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するを、還戒に應ずと爲す』と。佛、是の如きを說きたまふに、諸の菩薩、皆歡喜して受行したり。

〔一三〕佛の言はく『諸の菩薩は、精還を以て戒に應じ、便ち行を進めて道に入るなり』と。諸の菩薩、佛に問ひまつつて言はく『何等をか精還の戒もて、行を進め道に入るとは爲すや』と。佛の言はく。

『菩薩は心に所念有るに、心に從つて力を盡し、所念を盡して百八を滅す、是をば行を進め道に入るとは爲す。轉じて意に入り、意に所念有るに、意に從つて力を盡し、所念を盡して百八を滅す。是をば行を進めて道に入るとは爲す。轉じて識に入り、識に所識有るに、識に從つて力を盡し、所識を盡して百八を滅す。是をば行を進めて道に入るとは爲す。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色をば、好色に從つて力を盡し、好色を盡して百八を滅す。是をば行を進めて道に入るとは爲す。眼所見の中色をば、中色に從つて力を盡し、中色を盡して百八を滅す。是をば行を進めて道に入るとは爲す。眼所見の惡色をば、惡色に從つて力を盡し、惡色を盡して百八を滅す。是をば行を進めて道に入るとは爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲をば、好聲に從つて、力を盡し、好聲を盡して百八を滅す。是をば行を進めて道に入るとは爲す。耳所聞の中聲をば、中聲に從つて力を盡し、中聲を盡して百八を滅す。是をば行を進めて道に入るとは爲す。耳所聞の惡聲をば、惡聲に從つて力を盡し、惡聲を盡して百八を滅す。是をば行を進めて道に入るとは爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香をば、好香に從つて力を盡し、好香を盡して百八を滅する、是をば行を進めて道に入るとは爲す。鼻所聞の中香をば、中香に從つて力を盡し、中香を盡して百八を

【一三】第十九の校計を述ぶ。

もの、生出するも、卽ち還滅に入るをば、淨に入るとは爲し、百八の不捨淨を滅すとは爲す。菩薩は是の如き不捨淨を行ずれば、[二二]便ち能く百八を精還して戒に應ずるなり』と。佛、是の如きを說きたまへるに、諸の菩薩、皆歡喜・受行したり。

[二三]諸の菩薩、復稽首して、佛に問ひまつつて言はく『何等をか百八を精還して戒に應ずとはなす』と。佛の言はく『諸の菩薩、道を行ずるの心起れば、卽ち精還して百八を滅するを、還戒に應ずと爲す。轉じて意に入るに、意生ずるも、卽ち精還して百八を滅するを、還戒に應ずと爲す。轉じて識に入るに、識生ずるも、卽ち精還して百八を滅するをば、還戒に應ずと爲す。

『轉じて眼に入るに、眼所見の好色、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するをば、還戒に應ずと爲す。眼所見の中色、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するをば、還戒に應ずと爲す。眼所見の惡色生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するをば、還戒に應ずと爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲の、生ずるも卽ち精還もて百八を滅するをば、還戒に應ずと爲す。耳所聞の中聲の、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するをば、還戒に應ずと爲す。耳所聞の惡聲生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するをば、還戒に應ずと爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香の、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するをば、還戒に應ずと爲す。鼻所聞の中香の、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するを、還戒に應ずと爲す。鼻所聞の惡臭の、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するを、還戒に應ずとは爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言の、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するを、還戒に應ずと爲す。口所得の中味・中語言の、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するを、還戒に應ずと爲す。口所得の、惡味・惡語言の生ずるも、卽ち精還もて百八を滅するを、還戒に應ずと爲す。

『轉じて身に入り、身所得の、好細軟にして身に可なるもの、生ずるも、卽ち精還もて百八を滅す

【二二】本文に便能精還百八應戒とあり。

【二三】以下。第十八校計を述ぶ。

百八不捨淨を滅すと爲す。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。眼所見の中色の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。眼所見の惡色の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。耳所聞の中聲の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。耳所聞の惡聲の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入るとは爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。鼻所聞の中香の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。鼻所聞の惡臭の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入るとは爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入るとは爲し、百八の不捨淨を滅すとは爲す。口所得の中味・中語言の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入るとは爲し、百八の不捨淨を滅すとは爲す。口所得の惡味・惡語言の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入るとは爲し、百八の不捨淨を滅すとは爲す。

『轉じて身に入り、身所得の、好細軟にして身に可なるもの、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すとは爲す。身所得の中細軟の、生出するも、即ち還滅に入るをば、淨に入るとは爲し、百八の不捨淨を滅すとは爲す。身所得の惡麁堅苦痛あり、身に可ならざる

見の中色の念、還盡くれば、百八便ち盡きん、是を不捨盡と爲す。眼所見の惡色の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。

『轉じて耳に入るに、耳所聞の好聲の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。耳所聞の中聲の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。耳所聞の惡聲の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。鼻所聞の中香の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。鼻所聞の惡臭の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。口所得の中味・中語言の念、還盡くれば、百八便ち盡きん、是を不捨盡と爲す。口所得の惡味・惡語言の念還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。

『轉じて身に入り、身所得の好細軟の、身に可なるの念、還盡くれば、百八便ち盡きん、是を不捨盡と爲す。身所得の中細軟の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と名く。身所得の惡麁堅苦痛の、身に可ならざるの念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と名く。是の如き菩薩の不捨盡もて、便ち百八の淨に入るなり』と。佛、是の如く說きたまふに、諸の菩薩、皆歡喜して、稽首受行したり。

二

諸の菩薩、復稽首して、佛に問ひまつつて言はく『何等を爲すを百八淨とは爲す』と。佛の言はく『若し菩薩有り、心起生すれば念を出し、卽ち還滅に入るをば、淨に入るとは爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。轉じて意に入り、意生出するも、卽ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、百八の不捨淨を滅すと爲す。轉じて識に入るに、識の生出するも、卽ち還滅に入るをば、淨に入ると爲し、

【二】第十七の校計を述ぶ。

佛の言はく『是の如くんば曹のごときは、未だ解せずと爲す。何を以ての故にか「我れ解せり」とは言ふ』と。諸の菩薩、皆稽首して慚ぢ、受行したり。

諸の菩薩、佛に報へて言はく『佛、我が爲に解したまふと雖も、我れ尙ほ未だ解せず。願はくは佛、當に復、我が爲に解したまへ、當に復何等を行ずべきやを』と。佛の言はく『諸の菩薩、道を行じて、無數劫以來、生死の本意を憶ふに、譬へば菓實の種、土中に著して大樹を生じ、已に大樹を成ずれば、樹上には百種億億の枝枝を生じ、億億萬の葉枝を生じ、枝には億億萬の實を生じ、一の實は當に復轉じて一樹を生ずるが如くなり。菩薩の坐禪して、我が本罪を棄てんこと、譬へば樹葉を取つて、一一之を滅じ、實を取つて、一一之を滅じ、便ち復種より生ぜざらしめ、枝を取つて、一一之を滅するが如し。是の如くして、葉と實と枝とを、滅盡・了瓣するも、但だ根有り、根は譬へば、本願の一意所起の本罪の意の如しと爲す。譬へば樹根の、枝葉を生ずれは、當に復之を滅すべく、滅せざれば、當に長養して、實復生すべく、滅すれば復生ぜざるが如し。菩薩の意を守るや、譬へば樹根を守つて、樹をして枝・葉・實を生ぜざらしむるが如し。生ずれば爲に當來の罪を增し、滅すれば爲に當來の罪を增さず、爲に本罪をも滅す。是の如く、菩薩は、本罪未だ盡きざれば、常に當に百八の不捨盡を念ずべきたり』と。諸の菩薩、稽首して言はく『我が爲に我が解せざるところを解したまはんを』と。

[一〇] 佛の言はく『心を捨盡せざれば、所念有り、念を生ずること還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。轉じて意に入るに、意の念を生ずること還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。轉じて識に入るに、識の念を生ずること還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。

『轉じて眼に入るに、眼所見の好色の念、還盡くれば、百八便ち盡きん。是を不捨盡と爲す。眼所

【九】憶。麗本は意に作る、今三本に從ふ。

【一〇】第十六の校計を說く。

見なり。鼻所聞の中香は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。鼻所聞の惡聲は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり、口所得の中味・中語言は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。口所得の惡味・惡語言は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。

『轉じて身に入るに、身所得の好細軟の、身に可なるもの、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。身所得の中細軟は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。身所得の惡麁堅苦痛の、身に可ならざるもの、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり』と。

佛、諸の菩薩に告げたまはく『若し罪の、空の中に生ずるを見ざれば、亦空の中に滅するをも見ざらん。是の如き諸の菩薩は、尙ほ未だ應に解すべからず』と。諸菩薩の言はく『是の如くんば、我れ解を覺知すと爲す』と。佛、諸菩薩に問ひたまはく『若し何の因緣もてか覺せんに、諸の菩薩は、何を以ての故に、常に坐禪ぜざる。何を以ての故にか、復飛行して、十方の佛所には到る』と。菩薩の言はく『我れ本願有るを以つての故に、得ず、行かざるのみ』と。佛の言はく『若し本願有つて、十方の佛所に到るが如く、何の因緣もてか、坐禪して罪を棄つるや。設令汝坐禪して罪を棄てんには、本願も、當に滅すべし』と。佛諸菩薩に問ひたまはく『若し曹、無數劫より以來、作す所もて、過去の生死の罪、當に滅すべきや不や』と。諸菩薩の言はく『我れ當に過去無數劫の本罪を滅すべし』と。佛の言はく『若し尙ほ能く無數劫の本罪を滅せんには、何を以ての故に、獨り本願の罪をば滅せざる』と。諸菩薩の言はく『佛、我に是を問ひたまふも、我れ卒に解する能はず』と。

以ての故に、多少を知らざる』と。諸菩薩の言はく『我れ但だ能く寒熱を覺するのみ、多少をば知る能はず』と。

佛の言はく『菩薩は自ら心の生を覺せざれば、正に罪の百八と罪の多少とを受けんこと、譬へば寒熱の水火たるを覺せず、火の生じたる以來の、多少を知らざるが如くなり。菩薩にして自ら、心の轉生以來の多少を知らざらんに、是の如き菩薩は、但だ能く枝を覺するも、根を覺する能はざるなり。是の如き菩薩は、罪の空の中に入るをば、尙ほ未だ解せざるなり』と。諸の菩薩、皆稽首して佛に問ふらく『願はくは更に我が爲に、罪の空中に入るをば說きたまはんを』と。

[八]佛の言はく『菩薩は百八の罪——空の中に入り、不可見なる——有り。何等をか百八の罪とは爲す。若し菩薩、心に所念有らんに、空の中より生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、心の生滅をば見るべからず。譬へば人語の、聲有るも不可見なるが如し。要ず聲有りと爲すも、空の中に在つて、見るべからず。轉じて意に入るに、意は空の中に生じ、復空の中に滅す。中に百八の罪有るも不可見なり。轉じて中に入るに、識は空中に生じ、復空中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。

『轉じて眼に入るに、眼所見の好色は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。眼所見の中色は、空の中に生じ、空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。眼所見の、惡色は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり、耳所聞の中聲は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。耳所聞の惡聲は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可見なり。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香は、空の中に生じ、復空の中に滅し、中に百八の罪有るも、不可

【八】以下。第十五の校計を說く。

の中に百八の——後世に當に復、生じて受くべき——不滅あり。口所得の惡味・惡語言の、生ずるや轉じて便ち滅し、滅の中に百八の——後世に當に復、生じて受くべき不滅有り。『轉じて身に入り、身所得の好細軟の、身に可なるもの、生ずるや轉じて便ち滅し、滅の中に百八の——後世に當に復、生じて受くべき——不滅有り。身所得の巾細軟の、生ずるや轉じて便ち滅し、滅の中に百八の——後世に當に復、生じて受くべき——不滅有り。身所得の惡麁堅苦痛の、身に可ならざるもの、生ずるや轉じて便ち滅し、滅の中に百八の——後世に當に復、生じて受くべき——不滅有り』と。

菩薩の言はく『我れ何を以ての故にか、罪生じて復滅する。何を以ての故に、我れ了に見ざる』と。佛、諸の菩薩に問ひたまはく『汝曹の心、寧ろ轉ずるや不や』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我が心轉じて生ず。設我が心、轉じて生ぜざらんに、亦佛と共に語る能はざらん』と。佛、諸の菩薩に問ひて言はく『若し心生ぜん時、寧ろ還自ら心の生ずるを覺するや不や』と。諸菩薩の言はく『我れ但だ、識もて因緣を見ん時、*初めて起生する時を覺せず』と。佛の言はく『汝所說の如くんば、尙ほ心初生の時をも知る能はず。何ぞ能く罪無からん』と。佛是の如く說きたまふに、諸の菩薩、皆慚ぢて稽首し受行したりき。

諸の菩薩、佛に報じて言はく『我が爲に解して微しく[六]大に促したまへ、願はくは佛、更に復、我が爲に解したまはんを』と。佛、諸の菩薩に問ひて言はく『汝曹生れてより以來、寧ろ能く、身中の溫熱に、幾所の[七]火か有るを覺したるや。身中の寒に幾所の風か有り、身中に幾所の水か有るべきを覺したるや』と。諸菩薩の言はく『我れ還自ら具に分別して、多少を知る能はず』と。佛の言はく『若し多少を知らざれば、寧ろ寒熱は水なるや火なるやを知るや不や』と。諸の菩薩、佛に報へて言はく『我れ寒熱には水火有るを知る』と。佛言はく『汝尙ほ寒熱の水火なるを知る。何を

*初めて云云。本文に、不覺初起生時とあり。

【六】本文に爲我解微大促とあり。文中、大の字、麗本太に作るも、今三本に從ふ。

【七】火。五大の中の火大なり。次の風もまた風大なり。

言はく『菩薩は自ら怙んで「我れ罪無し、罪滅したり」など。言ふべからず。佛の言はく『要ず百八の本罪の、滅と不滅とを校計すべし』と。菩薩佛に問ひけらく『何等をか百八本罪の滅と不滅とは爲す』と。佛の言はく『菩薩は心生ずるも、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復生じて、受くべき――不滅有り。轉じて意に入るに、意の生ずるや、轉じて復滅し、滅の中に百八の――後世に當に復生じて受くべき――不滅有り。轉じて識に入るに、識の生ずるや、轉じて復滅し、滅の中に百八の――後世に當に復生じて受くべき――不滅有り。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色の、生ずるや轉じて便ち滅す。滅の中に百八の――後世に當に復、生じて受くべき――不滅有り。眼所見の中色の生ずるや、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復生じて受くべき――不滅有り。眼所見の惡色の生ずるや、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復生じて受くべき――不滅有り。

『轉じて耳に入るに、耳所聞の好聲の生ずるや、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復生じて受くべき――不滅有り。耳所聞の中聲の生ずるや、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復、生じて受くべき――不滅有り。耳所聞の惡聲の生ずるや、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復、生じて受くべき――不滅有り。

『轉じて鼻に入るに、鼻所聞の好香の生ずるや、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復、生じて受くべき――不滅有り。鼻所聞の中香の生ずるや、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復、生じて受くべき――不滅有り。鼻所聞の惡臭の生ずるや、轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復、生じて受くべき――不滅有り。

『轉じて口に入るに、口所得の美味・好語言の、生ずるや轉じて便ち滅し、滅の中に百八の――後世に當に復生じて受くべき――不滅有り。口所得の中味・中語言の、生ずるや轉じて便ち滅し、滅

細軟を本と爲し、中細軟は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべし。身所得の惡麁堅苦痛の、身に可ならざるを本と爲し、惡麁堅苦痛の、身に可ならざるが、欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべし』と。

佛の言はく『菩薩は要ず、當に是を斷ずべし、乃ち應に菩薩たるべし。斷ぜざれば應に菩薩と爲すべからず。是の如きは、尙ほ未だ解せざるなり』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我れ已に因緣を解せり』と。諸菩薩の言はく『我れ佛の所說を聞くに、我れ一切、罪の中に墮せず』と。

佛諸の菩薩に問ひたまはく『汝寧ろ菩薩の[二]髡頭[三]剃鬚して、沙門と作るを見るや不や』と。諸の菩薩言はく『然り、沙門と作るを見る』と。佛諸菩薩に問ひたまはく『沙門の頭を髡り鬚を剃る時に當つて、沙門の頭髮了に盡[四]澌するや不や』と。諸の菩薩言はく『盡澌す』と。佛の言はく『盡澌する時に當り、沙門は寧ろ願ふて、復頭鬚をして生ぜしめんと欲するや不や』と。諸菩薩の言はく『生ぜしめんことを願はず』と。佛諸の菩薩に問ひたまはく『頭の鬚髮、何を以ての故にか復生ずる』と。諸菩薩の言はく『自然にして生ず。沙門は亦生ぜしめず』と。佛の言はく『沙門の頭に鬚髮の生ずるや、寧ろ能く自ら、日に長ずること、幾分なるを知るや』と。諸の菩薩、佛に報へて言はく『沙門の頭に、鬚髮の生ずるや、自ら日に長ずることゝ幾分なるやを知ること能はず』と。

佛の言はく『菩薩の自ら微微として、百八の罪を盛るの行を覺する能はざること、譬へば沙門の、自ら頭に髮の生ずる有るも、日に長ずることゝ幾分なるやを知らざるが如し。是の如く菩薩の罪に坐して自ら知る能はざるに、我れ罪無しと言ふは云何』と。佛、諸菩薩に問ひたまふらく『寧ろ之れ有るや不や』と。諸の菩薩、卽ち稽首して悔ぢ、受行したりき。

[五]諸の菩薩、佛に報じて言はく『願はくは佛、當に復我が爲に解を爲したまはんことを』と。佛の

【二】髡。髮をそること。
【三】剃。麗本別に作る、今三本に從ふ。下同じ。
【四】澌。つくす。
【五】以下。第十四の校計を說く。

の生死を盛るを斷ずべし。眼所見の惡色を本と爲し、惡色は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り、菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべきなりと。

『轉じて耳に入るに、菩薩の耳所聞の好聲を本と爲し、好聲は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべきたり。耳所聞の中聲を本と爲し、中聲は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべし。耳所聞の惡聲を本と爲し、惡聲は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩要ず當に、是の百八の生死を盛ることを斷ずべし。

『轉じて鼻に入るに、菩薩の、鼻所聞の好香を本と爲し、好香は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべし。鼻所聞の中香を本と爲し、中香は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべし。鼻所聞の惡臭を本と爲し、惡臭は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛ることを斷ずべし。

『轉じて口に入るに、菩薩口所得の美味・好語言を本と爲し、美味・好語言は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛ることを斷ずべし。口所得の中味・中語言を本と爲し、中味・中語言は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべし。口所得の惡味・惡語言を本爲し、惡味・惡語言は、欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩要ず當に、是の百八の生死を盛ることを斷ずべし。

『轉じて身に入るに、身所得の好細軟の、身に可なるを本と爲し、細軟は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべし。身所得の中

卷の第六十

十方菩薩品の二

佛の言はく『菩薩の坐禪數息して定意を得ず、定意を得るも久しからざるは、但だ坐して、本罪を斷ぜざるが故にして、禪をして不安ならしむるに、菩薩自ら言はく「我れ何の因緣もて、本罪斷ぜざる」と』。佛の言はく『菩薩坐して、生死を斷ずることを校計せざるを用ての故に、本罪をして斷ぜざらしむるなり』と。佛の言はく『本罪を斷ぜんと欲すれば、當に當來の生死の意を斷ずべく、當に本罪生死の意を滅すべきなり』と。

諸の菩薩、佛に問ひて言はく『何等をもて、當に當來生死の意を斷ずべく、當に本罪生死の意を滅すべき』と。佛の言はく『心の所動を本罪と爲し、轉じて因緣を得るをば、當來生死の罪と爲す。要らず當に當來の生死を斷ずべし、乃ち應に菩薩たるべし』と。諸の菩薩皆稽首して言はく『願はくは佛當に復我が爲に、當來生死の罪を解したまふべきを』と。

佛、諸の菩薩に告げたまはく『心の動ずる所、因緣合するを得、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要らず當に、是の百八の生死を盛ることを斷ずべし。菩薩は意の動ずる所に因緣を得、意を遠くる能はずして、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべきなり。菩薩は本識の爲に動ず、復識中に百八の生死を盛る有らんと欲す。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛ることを斷ずべし。

『轉じて眼に入るに、菩薩の眼所見の好色を本と爲し、好色は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八の生死を盛るを斷ずべし。菩薩の眼所見の中色を本と爲し、中色は欲を動かして分別せしめ、中に百八の生死を盛る有り。菩薩は要ず當に、是の百八

【一】以下。第十三の校計を說く。

の惡麁堅苦痛の、身に可ならざるもの多く、止守せざるが故に、身の本罪は百八行なり』と。佛、是の如く說きたまふに、諸の菩薩、皆歡喜受行したりき。

大方等大集經卷第五十九

【四五】佛の言はく『菩薩是の如くんば、尙ほ未だ應に解すべからず』と。諸菩薩の言はく『何を以ての故に、復未だ解せざる』と。佛の言はく『但だ坐するも、菩薩には本より止守せざる百八の行有るが故なり』と。諸の菩薩、皆稽首して言はく『願はくは佛、當に復、我が爲に解きたまはんを』と。佛の言はく『菩薩は心に、本より念ずる所多く、止守せざるが故なり。心の本罪は百八の行なり。轉じて意に入るに、意には本所念多く、止守せざるが故に、意の本罪は百八行なり。轉じて識に入るに、識は本所念多く、止守せざるが故に、識の本罪は百八行なり。

『轉じて眼に入るに、眼は本所見の好色多く、止守せざるが故に、眼の本罪は百八行なり。眼は本所見の中色多く、止守せざるが故に、眼の本罪は百八行なり。眼は本所見の惡色多く、止守せざるが故に、眼の本罪は百八行なり。

『轉じて耳に入るに、耳は本所聞の好聲多く、止守せざるが故に、耳の本罪は百八行なり。耳は本所聞の中聲多く、止守せざるが故に、耳の本罪は百八行なり。耳は本所聞の惡聲多く、止守せざるが故に、耳の本罪は百八行なり。

『轉じて鼻に入るに、鼻は本所聞の好香多く、止守せざるが故に、鼻の本罪は百八行なり。鼻は本所聞の中香多く、止守せざるが故に、鼻の本罪は百八行なり。鼻は本所聞の惡臭多く、止守せざるが故に、鼻の本罪は百八行なり。

『轉じて口に入るに、口は本所得の美味・好語言多く、止守せざるが故に、口の本罪は百八行なり。口は本所得の中味・中語言多く、止守せざるが故に、口の本罪は百八行なり。口は本所得の惡味・惡語言多く、止守せざるが故に、口の本罪は百八行なり。

『轉じて身に入るに、身は本所得の好細軟の、身に可なるもの多く、止守せざるが故に、身の本罪は百八行なり。身は本所得の中細軟多く、止守せざるが故に、身の本罪は百八行なり。身は本所得

【四五】以下第十二の校計を說く。

『轉じて口に入り、口所貫の美味・好語言の、中に五陰有り、中に習有る。是を生死を貫くとし、闘して不動ならしむる者は道に墮し、闘せざる者は罪に墮す。口所貫の中味・中語言の、中に五陰有り、中に習有る、是を生死を貫くと爲し、闘して不動ならしむる者は罪に墮し、闘せざる者は罪に墮す。口所貫の惡味・惡語言の、中に五陰有り、中に習有る、是をば生死を貫くと爲し、闘して不動ならしむる者は道に墮し、闘せざる者は罪に墮す。

『轉じて身に入り、身所貫の好細軟にて、身に可なるの、中に五陰有り、中に習有る、是をば生死を貫くと爲し、闘して不動たらしむる者は道に墮し、闘せざる者は罪に墮す。身所貫の中細軟の、中に五陰有り、中に習有る、是を生死を貫くと爲し、闘して不動ならしむる者は道に墮し、闘せざる者は罪に墮す。身所貫の、惡麁堅苦痛にして、身に可ならざるの、中に五陰有り、中に習有る、是をば生死を貫くと爲し、闘して不動ならしむる者は道に墮し、闘せざる者は罪に墮するなり』と。

佛の言はく『菩薩の行ずるや、要ず當に、闘して不動ならしむべし。動ずれば未だ解せずと爲す』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我曹當に坐禪して不動ならしむべし』と。佛、諸の菩薩に問ふて言はく『禪し已るに復動するや不や』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『禪より覺むれば、復動す』と。佛諸の菩薩に問ひたまはく『何を以ての故にか、復動するや』と。諸菩薩の言はく『自然に動するなり』と。佛諸の菩薩に問ひたまはく『何を以ての故に、自然に動するや』と。諸菩薩の言はく『我れ何の因緣に從つて動するやを、解せず・知らざるなり』と。佛の言はく『是の如き諸菩薩は、尙ほ未だ解せざるなり』と。諸菩薩の言はく『願はくは佛、當に復我が爲に解きたまはんを』と。佛の言はく『菩薩、[四四]禪の自然に動覺する所以は、菩薩に百八の闘生ありて、動と不動と止まらざるが故なり』と。佛是の如きを說きたまへるに、諸の菩薩、皆稽首・受行したり。

【四四】本文に菩薩所以禪自然動覺者とあり。

に習有る、是を貫生と爲す。意に關して便ち不動なれば、地水火風空の痛痒・思想・生死の識を受けず、五陰と習を受けず。關せざる者罪に墮し、關意不動なるものは道に墮す、是を關生と爲す。

『轉じて識に入り、識も亦、地水火風空色の痛痒・思想・生死の識を貫き、便ち五陰と習と有りて、便ち生死を貫く。不關の者は、生死の痛に墮し、關する者は、道に墮することを爲して、生死を爲さず。

『轉じて眼に入り、眼所貫の好色の、中に五陰有り、中に習有る、是を生死を貫くと爲し、關するも不動ならしむる者は道に墮し、關せざる者は罪に墮す。眼所貫の中色の、中に五陰有り、中に習有る、是を生死を貫くと爲し、關して不動ならしむる者は道に墮し、關せざれば罪に墮す。眼所貫の惡色の、中に五陰有り、中に習有る、是をば生死を貫くと爲し、關して不動ならしむる者は道に墮し、關せざる者は罪に墮す。

『轉じて耳に入り、耳所貫の好聲の、中に五陰有り、中に習有る、是を生死を貫くと爲し、關して不動ならしむる者は道に墮し、關せざる者は罪に墮す。耳所貫の中聲の、中に五陰有り、中に習有る、是をば生死を貫くと爲し、關して不動ならしむる者は道に墮し、關せざる者は罪に墮す。耳所貫の惡聲の、中に五陰有り、中に習有る、是を生死を貫くと爲し、關して不動ならしむる者は、道に墮し、關せざる者は罪に墮す。

『轉じて鼻に入り、鼻所貫の好香の、中に五陰有り、中に習有る、是を生死を貫くと爲し、關して不動ならしむる者は、道に墮し、關せざる者は罪に墮す。鼻所貫の中香の、中に五陰有り、中に習有る、是をば生死を貫くと爲し、關して不動ならしむる者は、道に墮し、關せざる者は罪に墮す。鼻所貫の惡臭の、中に五陰有り、中に習有る、是をば生死を貫くと爲し、關して不動ならしむる者は道に墮し、關せざる者は罪に墮す。

聞の中香を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。鼻所聞の惡臭を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。口所得の中味・中語言を痛と爲し、中に五陰有り、習有る、是を種痛と爲す。口所得の惡味・惡語言を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。

『轉じて身に入り、身所得の、細軟にして身に可なるを痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲し、身所得の中細軟を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲し、身所得の惡麁堅苦痛にして、身に可ならざるを痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲すなり』と。

佛の言はく『菩薩、是の百八の痛を斷じて、乃ち應に菩薩の行と爲すべく、痛を斷ぜざれば、應に菩薩の行と爲すべからず。是を菩薩の十校計とは爲すなり』と。

佛の言はく『諸の菩薩は、是の如きを、尙ほ未だ解せざれば、當に復校計すべきなり』と。諸の菩薩、佛に問ひけらく『當に復何等をか校計すべき』と。佛の言はく『菩薩當に百八の關生を校計すべし』と。諸の菩薩、佛に問ひけらく『何等をか百八の關生とは爲す』と。

[四〇]佛の言はく『菩薩の心所貫の、痛痒・思想・生死の識の、中に五陰有り、中に習有る、是を貫[四一]生と爲す』と。佛の言はく『[四二]心に關して、痛痒・思想・生死の識に入らしめざれば、便ち五陰無く、習有ること無し』と。佛の言はく『五陰と習とに關し、心をして動ぜざらしむれば、生死の痛關を斷ずる者と爲す。[四三]地水火風空を貫く、痛痒・思想・生死の識の爲に、中に五陰有り、中に習有る、是を貫生と爲す。

『意に關しても便ち不動ならんに、地水火風空の痛痒・思想・生死の識を受けず。中に五陰有り、中

【四〇】以下第十一の關生を說く。關は貫なり、故に關生とは下文に云ふ貫生及び貫生死と同義なるべきか。本節に云ふ關と貫との義、分明ならず。

【四一】貫生。下文に依れば、生は生死の略、貫生とは生死を貫くの謂なるべし。

【四二】本文に。關心不使入痛痒思想生死識、便無五陰云云とあり。

【四三】本文に爲貫地水火風空。痛痒思想生死識、中有五陰云云とあり。

佛の言はく『諸の菩薩は、尙ほ未だ因緣生死の痛を厭はず』と。諸菩薩の言はく『我れ因緣生死の痛を厭ふを用ての故に、菩薩と作れるのみ』と。佛の言はく『汝曹、生死の痛を厭ひたらんには、何を以ての故にか、道の栽をば種ゑず、何を以ての故にか、因緣生死の痛と罪と罪栽とを種ゆる』と。諸の菩薩、佛に報へて言はく『我れ日に道栽を種ゆ』と。佛の言はく『如若し道栽を種えたらんには、何を以ての故にか、因緣生死の百八痛か有る』と。諸の菩薩、卽ち慚ぢて、稽首受行したり。

諸の菩薩、皆稽首して、佛に問ひて言はく『佛、我が爲に經を說きたまふと雖も、我れ是を解せず』と。佛の言はく『我れ若曹の、百八の痛を種ゆる見、我れ汝曹の解せざるを知る』と。諸の菩薩、復稽首して言はく『願はくは佛、我をして解せしめたまはんを』と。

[三八]佛の言はく『菩薩の心に所念有り、心を得んと欲するも能はず、時を以て痛に坐するを得、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。轉じて意に入り、意に所念有り、復意に可なると、意に可ならざるとを念ずるを[三九]痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。轉じて識に入り、識に所識有り、我に可ならざるを痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。眼所、見の中色を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。眼所見の惡色を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有るを種痛と爲す。耳所聞の中聲を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有るを種痛と爲す。耳所聞の惡聲を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の香好を痛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を種痛と爲す。鼻所

【三八】第十の。種痛を說く。

【三九】痛の上。麗本種の字を加ふ、今三本に依つて省く。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。眼所見の中色を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。眼所見の惡色を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。

『轉じて耳に入り、耳の聞く好聲を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。耳所聞の中聲を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。耳所聞の惡聲を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香を因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。鼻所聞の中香を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。鼻所聞の惡臭を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。口所得の中味・中語言を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。口所得の惡味・惡語言を因緣の[三七]著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。

『轉じて身に入り、身所得の、好細軟にして身に可なるを、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。身所得の中細軟を、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。身所得の、惡麁堅苦痛、身に可ならざるを、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし』と。

【三七】著。麗本之を缺くも、今三本に依つて加ふ。

の菩薩に問ひたまはく『曹のごときは、要ず當に更に、幾たびか生死して、當に佛を得べき』と。諸の菩薩、佛に報へて言はく『我曹の生死は、尙ほ未だ要有らじ』と。佛復諸の菩薩に問ふらく『何を以ての故に、要有ること無きや』と。諸の菩薩の言はく『我れ自ら罪福の多少を知らず。是を用つての故に、我れ要を知らず』と。

佛、諸菩薩に告ぐらく『是の如くんば、曹のごときは、天下の人と、何等の異か有る』と。諸菩薩、佛に報へて言はく『我れ能く飛んで、十方の佛國に到る。我れ能く、佛の語りたまふ所を曉る』と。佛の言はく『若し曹能く飛んで、十方の佛國に到り、能く十方の佛の、語りたまふ所を曉らば、曹のごときは、何を以て、時に應じて佛を取らざる。何を以ての故に、復生死の要ある』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我曹尙ほ本罪の、未だ盡さざる有るが故なり、本願功德の福、未だ滿たざるを用ての故なり。是を以ての故に、我曹時に應じて佛を得ざるなり』と。

佛の言はく『若し曹、天下の人は但だ五陰と生死の習とに坐するが故に、罪有りと言はば、今曹のごときは、亦當に復生死の習もて、罪有るべし、曹のごときは、何を以ての故に、語つて我れ罪無しとは言ふ』と。諸の菩薩、皆慚ぢて、稽首受行したり。

[三六] 佛の言はく『我れ是を說くと雖も、菩薩尙ほ未だ解せざらん』と。諸の菩薩、稽首して言はく『願はくは佛當に、復我が爲に解したまはんを』と。佛の言はく『菩薩は百八の因緣有つて、痛に著す』と。諸の菩薩、佛に問ふらく『何等をか、百八の因緣の著痛とは爲すや』と。佛の言はく『菩薩、心に所念有るを、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有りて、當に因緣生起の痛に坐すべし。轉じて意に入り、意に所念有るを、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。轉じて識に入り、識に所識有るを、因緣の著痛と爲し、中に五陰有り、中に習有つて、當に因緣生死の痛に坐すべし。

【三六】以下。第九を說く。

爲す。耳所聞の中聲を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。耳所聞の惡聲を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。鼻所聞の中香を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。鼻所聞の惡臭を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。口所得の中味・中語言を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。口所得の惡味・惡語言を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。

『轉じて身に入り、身所得の好細軟の、身に可なるを罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。身所得の中細軟を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。身所得の惡麁堅苦痛にして、身に可ならざるを罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す』と。

佛、諸の菩薩に問ひたまはく『若し曹是の罪有るや不や』と。諸菩薩の言はく『我れ但だ五陰有るも、罪有ること無し』と。佛復諸の菩薩に問ふて言はく『天下に何等をか、人をして罪有り、道を得ざらしむる者と爲すや』と。諸の菩薩、佛に報へて言はく『天下の人、皆貪に坐して、佛道を得ざるなり』と。佛の言はく『天下の人、貪して生死するは、五陰と習と有るが爲なるや不や』と。諸菩薩の言はく『罪有ればなり』と。

佛諸菩薩に問ふて言はく『若し曹、見を持つて身に佛を取らば、當に復生死すべきや』と。諸の菩薩、佛に報へて言はく『我曹當に復、生死すべし。是の現在の身より、佛を得ざらん』と。佛諸

す。身所得の、中細軟の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。身所得の、惡麁堅苦痛の、身に可ならざる、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。是の如きを栽の不斷と爲す』と。

佛の言はく、『若し菩薩有つて道を行じ、我れ是の栽無しと言はんに、是の如きを貢高と爲し、自ら栽を種ゆと爲す。便ち自ら度脫する能はず、便ち黠意有ること無く、栽罪の多少を知る能はず。譬へば身生の毛をば、其の人亦、自ら一一の數を校計する能はず、自ら毛の多少を知る能はざるが如し。諸の菩薩、道を行じて、自ら罪を除く能はずして、反つて「我れ佛道を求め、十方を度せんと欲す」と言ふ。是の如く、當に自ら度する能はざるに、何ぞ能く十方を度せん。菩薩の道を行じて、能く栽を去れば、便ち能く十方を度せん、栽を去らざれば、便ち十方を度する能はず』と。佛是の如く說きたまふに、諸の菩薩、皆歡喜して受行したり。

〔三五〕佛の言はく『是の如き菩薩は、尙ほ未だ應に解すべからず』と。諸の菩薩、復稽首して言はく『是の如く未だ解せざるをば、願はくは佛、我が爲に解きたまはんを』と。佛の言はく『菩薩には百八の罪識有り、滅せざれば、應に菩薩と爲すべからず』と。諸の菩薩、佛に問ふて言はく『何等をか百八の罪識とは爲す』と。佛の言はく『謂はく、菩薩の心の所念を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲す、是を罪識と爲す。轉じて意に入り、意の所念を復念ずるを罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲す。是を罪識と爲す。轉じて識に入り、識の所念を忘れざるを罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色を罪と爲し、中に五陰有り、習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。眼所見の中色を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。眼所見の惡色を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲を罪と爲し、中に五陰有り、中に習有るを識と爲し、是を罪識と

【三五】以下。第八の識を述ぶ。

當に坐して禪を行じ、數息相ひ隨ひ、止・觀還淨なるべし。淨なるを得ば栽を除くと爲し、不淨なれば栽を除かずと爲す。是の如くして禪より起ち、若しは人中に在らんに、當に校計を行ずべく、當に栽、斷去すべし』と。

諸の菩薩、佛に問ふて言はく『當に校計して栽を去るには、云何がすべき』と。佛の言はく『道を行じて、一心に定意を得ざるをば、栽を滅せずと爲す』と。佛の言はく『一心に定意を得ざれば、心に所念有り、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。轉じて意に入り、意の中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。轉じて識に入り、識の中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。

『轉じて眼に入り、眼の好色を見るや、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。眼所見の中色の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。眼所見の惡色の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。

『轉じ、耳に入り、耳所聞の好聲の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。耳所聞の中聲の、中に五陰有り、中に習有りて、便ち栽を生ず。耳所聞の惡聲の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。鼻所聞の中香の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。鼻所聞の惡臭の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言の、中に五陰有り、中に習有りて、便ち栽を生ず。口所得の中味中語言の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。口所得の惡味・惡語言の、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生ず。

『轉じて身に入り、身所得の、好細軟の、身に可なる、中に五陰有り、中に習有つて、便ち栽を生

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。鼻所聞の中香の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。鼻所聞の惡臭の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。口所得の中味・中語言の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。口所得の惡味・惡語言の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。

『轉じて身に入り、身所得の好細軟にして、身に可なるの、滅すべからざるを愛と爲す。身所得の中細軟の、滅すべからざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。身所得の惡麁堅苦・痛痒の、身に可ならざるを、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す』と。

佛の言はく『菩薩の道を行ずるや、却つて百八の愛を校計せず、自ら百八の愛の、罪に墮する知らざること、譬へば新生の小兒、小より大に至るも、自ら日に幾所の大を增すやを、知る能はざるが如し。菩薩の道を行ずるや、罪の多少を覺する能はざること、譬へば是の如し。若し菩薩、道を行じて、百八の愛の墮罪を覺せば、便ち當に自ら慚づべく、便ち當に自ら斷ずべく、便ち當に自ら離るべく、便ち當に自ら滅すべし。是の如く愛の斷ずるを、菩薩に應ずと爲す』と。佛是の如くに說きたまへば、諸の菩薩、皆稽首して受行したり。

[三四] 佛の言はく『菩薩の道を行ずるや、當に百八の栽を校計すべし。道を行じて、百八の栽を校計せざれば、應に菩薩の行と爲すべからず。栽を去れば、乃ち菩薩の行に應ず』と。諸の菩薩、佛に問ふて言はく『當に栽を去るには云何すべき』と。佛諸の菩薩に告げて言はく『菩薩獨り一處に處り、

【三四】 五十校計の第七を述ぶ。この段に云ふ栽の義、明ならず。

る能はざるが如し』と。

佛の言はく『菩薩の道を行じて、百八の墮を校計せざるは、譬へば婬泆の妬女、自ら罪の多少を知らず、亦苦痛を厭はず、亦自ら校計して、還つて罪を慚ぢず、生死・五道の苦痛を知らず、自ら三惡道に墮するを知らず、自ら行を慚ぢて、我れ道に墮すと言はざるが如し。是の如く、世世に自ら殃を受くるなり。還自ら慚[三一]愧せば、[三二]我有ること無し。學道の弟子、諦に學せよ』と。是の諸菩薩、皆歡喜して、稽首受行したり。

[三三]佛の言はく『菩薩是の如きは、尙ほ未だ應に解せりと爲すべからず』と。諸の菩薩、佛に問ひて言はく『何を以ての故に、未だ解せずとは爲す』と。佛の言はく『謂はく菩薩、百八の愛を校計する能はざるが故に』と。諸の菩薩、佛に問ふらく『百八の愛を校計するとは云何』と。佛の言はく『菩薩の禪を行ずるや、一意一心をも滅せしむる能はずして、但だ坐して百八に著するが故なり。一には菩薩、心に所念有り、滅する能はざるを愛と爲す。中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。心轉じて意を作し、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。意轉じて識を作し、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。眼所見の中色の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。眼所見の惡色の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。耳所聞の中聲の、滅する能はざる、是を愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。耳所聞の惡聲の、滅する能はざるを愛と爲し、中に五陰有り、中に習有る、是を愛と爲す。

【三一】愧。麗本斯に作る、今三本に依る。
【三二】我。麗本、利に作る、今三本に依る。
【三三】五十校計の第六を說く。

中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲し、耳所聞の惡聲の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲し、鼻所聞の中香の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲し、鼻所の惡臭の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。

『轉じて口に入り、口所得の、美味・好語言の、中に五陰なり、中に習有る、是を墮と爲し、口所得の、中味・中語言の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲し、口所得の惡味・惡語言の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。

『轉じて身に入り、身所得の好細軟の、身に可なる、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲し、身所得の、好細軟の、身に可なる、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲し、身所得の、惡麁堅苦痛の、身に可ならざる、中に五に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。是を百八の墮行と爲す』と。

佛、諸菩薩に告げて言はく『百八の墮を校計して、自ら罪に墮するを知らざれば、苦痛當に後に在るべし。亦羞慚を知らずして、自ら說いて、能く百八の墮を斷ずる道を行ずと言ふ』と。

佛の言はく『是の人は、譬へば婬泆の妬女、上頭にして婬泆、自ら己が妊身するを可とし、胞胎の兒、腹中に在りて、日に大となること幾所なるを知らず、婬泆の妬女、復婬泆を爲して自ら可とし、兒十月を成就して、當に生るべきに至り、兒の當に轉ずべくして未だ轉ぜず、當に生るべくして未だ生れざるに、其の母腹痛もて、自ら慚し自ら悔ひ、當に痛を墮すべき時、妬女の啼聲、第七天に聞えん。兒の生れ已つて後、其の母痛み愈え、便ち復婬泆を念じ、便ち慚を念ぜず、痛を念ぜず、便ち復婬泆なること、故の如く、是の如くにして、苦言ふべからざるに、妬女亦自ら苦痛を覺

ての故にか、欲せずとは言ふ』と。

佛復、諸の菩薩に問ひて言はく『汝寧ろ三十二相の、身に可なるを具せんと欲するや不や』と。諸菩薩の言はく『我れ勤苦して相を具するは、但だ身に可ならんと欲するのみ』と。佛の言はく『若し身に可なる如きは、欲と爲す。何を以ての故にか、欲せずとは言ふや』と諸の菩薩、稽首して、各自ら慚ぢぬ。

二九 佛の言はく『是の如き菩薩は、尚ほ未だ所怙有らず』と。諸の菩薩、稽首して言はく『願はくは佛、我を哀み、當に爲に說きたまはんを』と。佛因つて、爲に說きたまふらく『菩薩の道を行ずるや、若しは數息行禪し、若しは自ら定意に怙り、當に百八の墮を校計すべし。滅すれば禪に應じ、滅せざれば禪に應ぜず』と。諸の菩薩、三〇 佛に問ひて言はく『禪とは棄惡と爲す、百八の墮滅すれば、棄惡と爲し、滅せざれば棄惡と爲さず。若しは禪より覺めて起ち、若しは行步坐起に、因緣を得て、人の爲に經を說き、見る所の萬物に、能く自ら百八の墮を校計して、能く著せざらしめ、能く罪に墮せしめざる、是を菩薩の校計の行と爲す』と。

諸菩薩、佛に問ひて言はく『百八の墮を校計するには、當に何の所より起すべき』と。佛、諸の菩薩に告げたまはく『百八の墮を校計するには、菩薩の心所念の中に、五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。心轉じて意を作す、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。意轉じて識を作す、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。眼所見の中色の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。眼所見の惡色の中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲の、中に五陰有り、中に習有る、是を墮と爲し、耳所聞の中聲の、

【二九】以下第五に百八の墮を說く。

【三〇】本文に依れば「禪とは云云」以下諸菩薩の問なれど、內容は佛の答と覺し。此の間に或は數字乃至數十字の脫字あらんか。

せしめんと欲す』と。佛の言はく『若し人の爲に經を說くは、人をして解せしめんと欲する爲なるが如き、是の如きを欲欲と爲す。何を以ての故にか、無欲なりとは言ふや』と。

佛、復菩薩に問ひたまはく『若し人の爲に經を說かんには、寧ろ人に布施を敎ふるや不や』と。諸菩薩の言はく『然り。我曹、人に布施を敎へん』と。佛、諸菩薩に問ひたまはく『若し人に布施を敎へんには、何等を持つてか佛に與ふる』と。諸の菩薩、報じて言はく『我れ第一に、人をして好色華を持たしめんと欲す』と。佛の言はく『汝は色を欲せざるに、何を以ての故にか、人をして五色の好華の、眼に可なるを持つて、佛に與ふへしむる。是の如きを、汝色を欲すと爲す。何を以ての故に、我曹色を欲せずとは言ふ』と。

佛復諸菩薩に問ひたまふらく『寧ろ十方の佛、經を說きたまふを聞くがごときは、耳に可なるや不や』と。諸の菩薩、報じて言はく『十方の佛、我が爲に經を說きたまふは、耳に可なり。我曹皆歡喜す』と。佛の言はく『汝經を聞いて歡喜するが如きは欲と爲す。何を以ての故にか、無欲なりとは言ふ』と。

佛復、諸の菩薩に問ひて言はく『若し人に敎へて、佛の爲に香を燒かしむるや不や』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我れ日に自ら行き、衆華・名香を取り、持用て佛に上る』と。佛の言はく『汝行いて衆の華香を採るが如きは、鼻に可なるを得て、持つて行いて佛に上らんと欲するなり』と。佛の言はく『若し香華の、鼻に可なるを得んと欲する如き、是の如きをば欲と爲す。何を以ての故にか、無欲なりとは言ふ』と。

佛復、諸の菩薩に問ひて言はく『若し曹、人の爲に經を說くに、寧ろ口に可ならんと欲するや不や』と。諸菩薩の言はく『我曹人の爲に經を說くや、分別して口に可ならんと欲す。人をして意に解せしめんと欲すればなり』と。佛の言はく『若し口に可ならんとするが如きは欲と爲す。何を以

『轉じて口に入り、口所得の美味・語言を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。口所得の中味・語言を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。口所得の惡味・語言を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。

『轉じて身に入り、身所得の好細軟の、身に可なるを欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。身所得の中細軟の、身に可なるを欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。身所得の惡麁堅痛あり、身に不可なるを欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す』と。

佛の言はく『諸菩薩、曹のごときは、但だ坐するのみにして、欲欲を解せず』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我曹欲欲有ること無し』と。佛、諸菩薩に問ふて言はく『若し曹、佛を求めて十方の人を度せんと欲するや不や』と。諸菩薩の言はく『然り。我曹、佛を求めて十方の人を度せんと欲す』と。佛諸菩薩に報じて言はく『是の如きを欲欲とは爲す。何を以ての故にとならば、欲無しと言ふを以てなり』と。

佛、諸菩薩に問ひたまはく『若し意に寧ろ、十方勤苦の人を念ずるや不や』と。諸菩薩の言はく『然り、我曹、勤苦の人を念ず』と。佛の言はく『諸の勤苦の人を念ずるがごときは欲と爲す、何を以ての故に、欲無しとは言ふ』と。

佛、諸の菩薩に問ふて言はく『若し曹、十方の佛所に至りて經を問ふに、若しは[二八]念じて忘ると爲すや不や』と。諸の菩薩報じて言はく『我れ問ふ所の經をば、我れ皆識つて忘れず』と。佛諸菩薩に問ひたまふらく『汝、十方佛の說きたまへる經を識らば、寧ろ傳へて人の爲に經を說くや不や』と。諸菩薩の言はく『然り。我れ日に行じて、人の爲に經を說かん』と。佛の言はく『若し人の爲に經を說かば、寧ろ人をして解せしめんと欲するや不や』と。諸菩薩の言はく『然り。人をして解

【二八】念。麗本今に作るも、三本に依る。

何ぞ能く他人をして、佛を得しめん。若し曹、功徳未だ滿たざれば、自ら佛を得ること能はざらんに、何ぞ能く他人をして、佛を得しめん』と。佛の言はく『若し曹、生死の罪をば、意に未だ盡さざらんには、自ら佛を得る能はざるべし、何ぞ能く他人をして佛を得しめんや』と。諸の菩薩、皆稽首して慚[二六]愧したり。

[二七]諸の菩薩、復佛に問ふらく『是の如く、我れ何の因縁もて、佛をば得ざる』と。佛、諸菩薩に報じて言はく『曹のごときは坐して、安般若しは守意を行ぜず、百八欲を校計して、欲を捨せざるが故なり』と。諸菩薩の言はく『安般・守意を行じ、百八欲を捨することを校計せんに、欲とは云何』と。佛諸菩薩に報へて言はく『曹心所念のごとく、念復念ずるを欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有る、是を欲欲と爲す。轉じて意に入り、意復念ずるを欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを、欲欲と爲す。轉じて識に入り、識を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを、欲欲と爲す。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。眼所見の中色を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。眼所見の惡色を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。耳所聞の中聲を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。耳所聞の惡聲を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。鼻所聞の中香を欲と爲し、欲中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。鼻所聞の惡臭を欲と爲し、欲の中に五陰有り、中に習有るを欲欲と爲す。

【二六】愧。麗本缺く、三本に依って加ふ。
【二七】次に第三の校計を述ぶ。

中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如くして、生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す。

『轉じて身に入り、身の多く得る所の、好細軟にして身に可なるは、生死の罪なり、中に五陰あり、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如くして、生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す。身の多く得る所の中細軟は、生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如くして生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す。身の多く得る所の、惡麁堅苦痛にして、身に可ならざるは、生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如くして生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す』と。佛の言はく『是を百八の顚倒と爲し、是の如き菩薩をば、解せずと爲すなり』と。

諸の菩薩、佛に報じて言はく『我れ生死に顚倒すと雖も、我れ經法に依つて、人を度せんと欲す』と。佛諸菩薩に問ふて言はく『汝人を度せんには、人をして何等の道をか作さしめんと欲求するや』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我れ人をして、悉く佛道を得しめんと欲す』と。佛の言はく『曹輩のごときは衆多なり、何を以ての故に、自ら佛を取らずして、但だ群輩相隨ふや』と。諸の菩薩の言はく『我れ相隨ふと雖も、經行を離れず』と。

佛、諸菩薩に問ふて言はく『曹輩のごときは、寧ろ能く一日に、倶に佛を得るや不や』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我れ倶に佛を得ること能はず』と。佛諸菩薩に問ふ『何を以ての故に』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『我が輩の中には、相の未だ具せざる有り、我が曹輩の中には、功德の未だ滿たざる者有り、我が曹輩には、生死の罪の、未だ盡きざる者有ればなり』と。佛諸菩薩に告げたまはく『若し曹輩に、相の未だ具せざる者有り、功德の未だ滿たざる者有り、罪の未だ盡きざる者有ること、若し曹の言ふが如くならんには、相未だ具せざる者、自ら佛を得る能はず、

無數劫なるを、顚倒と爲す。
『轉じて眼に入り、眼の多く視る所の好色は、生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如き生死の、無數劫なるを、顚倒と爲す。眼多く視る所の中色は、生死の罪あり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如き生死の、無數劫なるを、顚倒と爲す。眼多く視る所の惡色は、生死の罪なり、中に五陰有るに、中に習有り、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如き生死の、無數劫なるを、顚倒と爲す。
『轉じて耳に入り、耳の多く聞く所の好聲は、生死の罪あり、中に五陰なり、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如き生死の、無數劫なるを、顚倒と爲す。耳の多く聞く所の中聲は、生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如くして生死の無數劫なるを、顚倒と爲す。耳の多く聞く所の惡聲は、生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如き生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す。
『轉じ、鼻に入り、鼻の多く聞く所の好香は、生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如き生死の、無數劫なる、是を顚倒と爲す。鼻の多く聞く所の中香は、生死罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如くして、生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す。鼻の多く聞く所の惡臭は生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如くして、生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す。
『轉じて口に入り、口多く得る所の、美味・好語言は、生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言ふ、我に無罪なりと。是の如くして、生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す。所の多く得る所の中味・中語言は、生死の罪なり、中に五陰有り、中、習有るに、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如くして、生死の無數劫なる、是を顚倒と爲す。口の多く得る所の、惡味・惡語言は、生死の罪なり、

るを疑と爲す。鼻所聞の中香に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。鼻所聞の惡臭に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、自ら知らざるを疑と爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。口所得の中味・中語言に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。口所得の惡味・惡語言に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。

『轉じて身に入り、身所得の、好細軟にして身に可なるに、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。身所得の中細軟に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。身所得の惡麁堅苦痛の、身に可ならざるに、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す』と。

[二三]佛の言はく『菩薩是を去らざれば、未だ應に菩薩とは爲すべからず』と。諸の菩薩、佛に問ひけらく『何を以ての故に、應に菩薩とは爲すべからざる』と。佛の言はく『[二四]安般守意を行ぜず、百八の顚倒を校計せざるを用ての故なり』と。諸の菩薩、佛に問ふらく『何等をか百八の顚倒とは爲す』と。

佛の言はく『謂はく、菩薩の心に多く念ずる所を、生死の罪と爲す、中に五陰有り、中に習有るに、自ら言つて、我れ無罪なりと。是の如くして生死すること、無數劫なるを、顚倒と爲す。轉じて意を作し、意の多く念ずる所は、生死の罪なり、中に五陰有り、中に習有るに、自ら我れ無罪なりと言ふ。是の如くして、生死無數劫なる、これを顚倒とす。意轉じて識を作し、[二五]識の多く識る所は、これ生死の罪なり、中に五陰有るに、中に習有り、自ら言ふ、我れ無罪なりと。是の如き生死の、

【二三】次に五十校計の第三。百八顚倒をいふ。
【二四】安般。安那・般那（Ānā-pāna）の略、數息觀と譯す。
【二五】識。麗本に缺くも、三本に依つて加ふ。

を滅せざるが故に、未だ飛行して、十方の佛國に至る能はざるなり』と。佛の言はく『譬喩ば諸の菩薩は、但だ能く著を說き滅を說くのみ。但だ說くのみにて、行ぜざるを、名けて癡と爲す』と。

諸の菩薩、佛に問ふらく『何に從つて、當に黠を得べきや』と。佛諸の菩薩に告げて言はく『所著を癡と爲す、要ず當に滅すべし。著せざるをば、乃ち不癡と爲す、要ずしも未だ黠とは爲さず』と。

三

諸の菩薩、佛に問ふて言はく『何を以ての故に、復未だ習とは爲さざるや』と。佛諸の菩薩に告げて言はく『復百八の疑有つて、解せざるが故なり』と。諸の菩薩、佛に問ひけらく『何等をか百八の疑とは爲すや』と。佛の言はく『菩薩は自ら心の生と心の滅とを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。自ら意の生と意の滅とを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるをば疑と爲す。自ら識の生と識の滅とを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑とは爲す。

『轉じて眼に入り、眼所見の好色に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。眼所見の中色に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。眼所見の惡色に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。

『轉じて耳に入り、耳所聞の好聲に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑と爲す。耳所聞の中聲に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを疑とは爲す。耳所聞の惡聲に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰あり、中に習有り、知らざるを疑とは爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香に、自ら生滅あるを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざ

【三】以下。五十校計の第二、百八疑を校計することを述ぶ。

するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。『轉じて身に入り、身所得の、好細軟にして、身に可なるに、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。身所得の中細軟の、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを、癡と爲す。身所得の惡堅苦痛にして、身に可ならざるに、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。菩薩の道を行ずるや、要ず當に數息校計すべきこと是の如くなるべし』と。菩薩即ち稽首受行したり。

諸菩薩の言はく『佛我が爲に癡を說きたまふと雖も、我れ未だ解せず』と。諸の菩薩、佛に問ふらく『設ひ我れ百八の癡の著を知り、[三]癡の滅を知ると雖も、當に癡と爲すべきや、黠と爲すべきや』と。佛諸の菩薩に報へて言はく『著を知り滅を知ると雖も、續いて尙ほ癡未だ解せず』と。諸の菩薩復佛に問ふらく『我れ未だ佛の、數息を說きたまへるを聞かざりし時は癡なりき。我れ佛の說きたまふを聞きて、已に知るに、何を以ての故にか、癡とは爲したまふや』と。佛諸の菩薩に告げたまはく『譬喩ば新學の菩薩、未だ飛ぶ能はず、但だ耳に、十方の佛、願じて往かんと欲したまふを聞くも、要ずしも未だ飛ぶ能はざるが如し。是の如きは、十方の佛を見まつること未だしと爲す』と。諸の菩薩、報へて言はく『是の如きは、但だ願有るのみと爲す。要ず十方の佛を見まつらずと爲すや』と。佛諸の菩薩に告げて言はく『若曹今、我れ百八の癡の著と滅とを說くを聞くと雖も、譬へば新學の菩薩の、但だ十方の佛國に到らんことを願欲するも、飛んで往くこと能はざるが如し』と。

佛復諸の菩薩に問ふて言はく『新學の菩薩は、何を以ての故に、十方の佛國に到らんことを願ふて、飛び往く能はざるや』と。諸の菩薩、佛に報じて言はく『癡を壞する能はざるを用て、未だ罪

【三】癡。大正本、縮刷本共に設我知百八癡著知滅滅とあつて、別に註記無けれども、上の滅の字、恐らくは癡の誤なるべし。下文に、雖知著知滅、續尙癡未解など云へば、私に癡としたり。

諸の菩薩、佛に問ふて言はく『當に[18]百八の癡は、心より本起るを校計すべしとは云何』と。佛諸の菩薩に告げて言はく『若し菩薩有り、心に所念有るに、自ら心の生と心の滅とを知らず。[19]中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。轉じて意に入り、意に所念有るに、自ら意の生と意の滅とを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。轉じて識に入り、識に所識有るも、自ら識の生と識の滅とを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。

[20]『轉じて眼に入り、眼好色を見るに、自ら著を知らず、自ら滅を知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。眼所見の中色の、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。眼所見の惡色の、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。

『轉じて耳に入り、耳の好聲を聞き、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。耳所聞の中聲の、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。耳所聞の惡聲の自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。

『轉じて鼻に入り、鼻所聞の好香の、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。鼻所聞の中香の、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。鼻所聞の惡臭の、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。

『轉じて口に入り、口所得の美味・好語言など、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。口所得の中味・中語言の、自ら著するを知らず、自ら滅するを知らず、中に五陰有り、中に習有り、知らざるを癡と爲す。口所得の惡味・惡語言の、自ら著

【一八】百八云云。五十校計の第一。

【一九】中に五陰有り、とは染の謂・中に習有りとは淨の謂。

【二〇】この段。心と意と識とを分ちたるは、(一)他の五根に在つては、好・中・惡の三に分でるに對すると、(二)是によつて過・現・未の三世に配する意なりとせらる。

佛の言はく『菩薩は復、十の校計有り、第一には當に、百八の、慧に入り罪を出づることを求むるの法を校計すべく、第二には當に百八の、空法に入り・空を度出するを求むることを校計すべく、第三には當に、百八の[一四]罪法、初めて起るの時空、當に知るべし、滅する時も空に歸するを校計すべく、第四には當に、百八の持空の法と解盡の法とを校計すべく、第五には當に、百八の、法を盡せば復生せざることを校計すべく、第六には當に、百八の、泥洹長生して滅せざるを校計すべく、第七には當に、百八の應相の念を校計すべく、第八には當に百八の、捨相の念を校計すべく、第九には當に、百八の、雜相の念は、當に知るべし、雜相なることを校計すべく、第十には當に、百八の受相、長生して不滅なることを校計すべし。是を菩薩の[一五]十校計と爲す』と。

佛の言はく『菩薩復十校計有り、第一には當に百八の、十方の生死、萬物の本末成敗を校計すべく、第二には當に、百八の、十方の成敗を校計して證を作すべく、第三には當に、百八の、十方人の所有　皆癡なることを校計すべく、第四には當に、百八を校計し、十方の癡を牽いて證と作すべく、第五には當に、[一六]百八を校計し、十方の阿羅漢、泥洹に去つて無所有なるを、證と作すべく、第六には當に、百八を校計して、十方辟支佛の、泥洹に去れるを牽いて證と作すべく、第七には當に、[一七]百八を校計し、十方過去の、若しは師の、泥洹に去れるを牽き、當に牽いて證を作すべく、第八には當に、百八を校計して、十方今現在の佛・亦當に泥洹に去るべく、今我れ釋迦文佛と作り、主る所の天地・自在・變化も、要ず當に復、泥洹に去るべく、若しは當に我を牽いて、用つて證と作すべく、第九には當に、百八を校計して、十方當來の佛も、亦當に泥洹に去るべく、當に牽いて證と作すべく、第十には當に、百八を校計し、力を盡して貪を却け、佛を求むること、我の如くせば、亦當に般泥洹に去るべし、是を合して菩薩の五十校計とは爲す』と。諸の菩薩、皆稽首して、教を受けたり。

【一四】罪法云云。麗本には罪法也空時に作るも、三本は罪法初起時空と爲す。今昇に從ふ。

【一五】十。五十の中、三一—四〇の十校計なり。

【一六】本文に。當校計百八、十方阿羅漢、泥洹去、無所有、作證とあり。

【一七】本文に。當校計百八、牽十方過去、若師泥洹去、當牽作證とあり。

黠を得んと欲すれば、五十の校計有り、五十の校計中の、細微の罪を知れば、便ち黠を得ん』と。
諸の菩薩、佛に問ふらく『何等をか五十の校計とは爲す』と。佛の言はく『五十の校計とは、謂はく心より本起るなり。知らんと欲すれば、第一には當に、百八の癡を校計すべく、第二には當に、百八の疑を校計すべく、第三には當に、百八の顚倒を校計すべく、第四には當に、百八の欲を校計すべく、第五には當に、百八の墮を校計すべく、第六には當に、百八の愛を校計すべく、第七には當に、百八の栽を校計すべく、第八には當に、百八の識を校計すべく、第九には當に、百八の因緣の著を校計すべく、第十には當に、百八の種を校計すべし。是を[七]十の校計とは爲すなり』と。

佛の言はく『菩薩は復、十の校計有り、第一には當に、百八の關生を校計すべく、第二には當に、百八の止行を校計すべく、第三には當に、百八の斷生死を校計すべく、[八]第四には當に、百八の滅と不滅とを校計すべく、第五には當に、百八の罪——空不見に入る——を校計すべく、第六には當に、百八の不捨盡を校計すべく、第七には當に、百八の、淨を捨せずして淨に入ることを校計すべく、第八には當に、百八の精[九]進戒を校計すべく、第九には當に、百八の進んで道に入ることを校計すべく、第十には當に、百八の忍戒を校計すべし。是を菩薩の[一〇]十校計とは爲す。

『菩薩には復、十校計有り、第一には當に、百八の辱道を校計すべく、第二には當に、百八の合道の願を校計すべく、第三には當に、百八の本信入道を校計すべく、第四には當に、百八の出癡・入慧を校計すべく、第五には當に、百八の歡喜滅を校計すべく、第六には當に、百八の未だ佛を得ざるの悲を校計すべく、第七には當に、百八の未だ佛を得ざるの愁を校計すべく、第八には當に百八の、未だ佛を得ざる惱を校計すべく、第九には[一一]當に百八の、未だ佛の經を得ざるの黠と、未だ佛の[一二]泥洹の要を得ざるとを校計すべく、第十には當に、百八の、罪を出づるの要と、未だ泥洹の要に入ることを得ざるとを校計すべし。是を菩薩の[一三]十校計と爲す』と。

【七】十。五十の中、一一—一〇の十校計なり。
【八】第四。以下は卷六十に詳說す。
【九】進。麗・宋・明本、還に作る。今元本に依る。
【一〇】十。五十の中。一一—二〇の十校計なり。
【一一】本文に。當校計百八未得佛經黠、未得佛泥洹要とあり。
【一二】泥洹。(Nirvāṇa)。の音寫、涅槃に同じ。
【一三】十。五十の中、二一—三〇の十校計なり。

を守り、色をして不著ならしめ、滅盡に歸して、道栽を種ゆ。謂はく、菩薩能く耳を守り、聲をして不著ならしめ、滅盡に歸して、道栽を種ゆ。謂はく、菩薩能く鼻を守り、香をして不著ならしめ、滅盡に歸して道栽を種ゆ。謂はく、菩薩能く口を守り、味をして不著ならしめ、滅盡に歸して、道栽を種ゆ。謂はく、菩薩能く身を守り、細滑にして不著ならしめ、滅盡に歸して、道栽を種ゆ。菩薩是の如く、能く六情を守つて、好惡に不動なるを得、常に守つて滅盡せしむる、是をば厚にして、道に隨ふこと深しとは爲すなり』と。

菩薩復佛に問ふらく『何等をか、菩薩の行薄しとは爲す』と。佛の言はく『謂はく、菩薩行を失し、時に行ずるを得る有り、時に行ずるを得ざる有り、時に菩薩能く心意識を守り、道に隨ふ有り、時に眼を守る能はず、便ち行を失して、道に隨はざる有り、時に眼を守るも、耳を守る能はざる有り、時に能く耳を守るも、鼻を守る能はざること有り、時に鼻を守るも、口を守る能はざること有り、時に能く口を守るも、身を守る能はざること有り、時に能く身を守るも、坐禪を守る能はざること有り、時に能く坐禪するも、校計する能はざること有り、時に能く校計するも、行ずる能はざること有り、時に能く行ずるも、分別する能はざること有り、時に能く分別するも、細軟微意を知る能はざること有り。是を以ての故に、菩薩は道に隨つて、行を失すること有り、行を得ること有り。是を以ての故に、菩薩の道を行ずるや、薄厚の不等有るなり』と。

菩薩佛に問ふらく『是の如くんば、當に何等の行をか作すべき』と。佛の言はく『要ず菩薩は、當に自ら校計を行ずべく、當に自ら校計を[四]修することを知るべし。[五]校計を修するをば菩薩は黠と爲し、校計を知らざるを、癡と爲す』と。

問ふて曰はく『當に黠を校計すべく、當に癡を校計すべしとは云何』と。佛の言はく『已に癡を校計すれば、便ち能く黠を校計せん』佛の言はく『人には[六]百八の愛有つて癡ならしむ。校計して

【四】修。麗本隨に作るも、今三本に依る、以下同じ。

【五】校計云云。この前に、本文には不修校計の四字あり。恐らくは衍。故に之を略したり。

【六】百八の愛。百八の煩惱を數ふるに、經論の數へ方一準ならず。本經に說くが如きは、亦その一たり。百八の數は、六根が、その對境に對する場合に於て各三（卽ち眼等の五根には上中下・又は好惡中の三・意根には心意識の三を分つ）あり、その各に染と淨とあれば、一根に就て六をなし、六根にて三十六をなす。この三十六をば三世に配するに依り百八を成ずるなり。

巻の第五十九

十方菩薩品第十三

*高齊天竺三藏　那連提耶舍譯

佛、王舍國、法淸淨處に在しける時、自然に師子座に、帳を交絡したり。佛時に[一]三十二相を現はしたまふに、光影十方に表現したり。諸の菩薩、皆來り謁して、佛に問ひまつりぬ『菩薩は何の因緣もて、癡ある者有り、黠[二]ある者有り、慧ある者有り、能く飛ぶ者有り、能く坐して三昧・禪を行ずる者有り、能く徹視する者有り、能く飛ばざる者有り、坐して禪を行じ、三昧を行ずる能はず、定意に久しくする能はざる者有り、智慧に厚薄なる者有るや。同じく菩薩の行にして、何の因緣もて薄厚や有る。同じく心意識有り、同じく眼耳鼻口身もて、何の因緣もて、行の異をば得る』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、十方の過去の佛、現在の佛、諸の當來の佛は、皆人の能く、心意識・眼耳鼻口身を計するを說き、皆說いて同法と爲す』と。佛の言はく『人能く六情を校計して、一切十方佛の智慧を得とはするなり』と。

佛、諸の菩薩に告げて言はく『諸の菩薩に、厚薄有り』と。諸の菩薩、佛に問ふらく『何等をか薄厚とは爲す』と。佛の言はく『菩薩の厚とは謂はく、菩薩の道を行ずるや、道に隨つて行ずること深きなり。菩薩の薄とは、道を行じて、悉く行に隨ふ能はざるなり。謂はく行に多少有り、道に隨ふこと少きなり。是を菩薩の薄とは爲す』と。

諸の菩薩、佛に問ふらく『何等をか、菩薩常に道に隨ひ、行を失せざると爲すや』と。佛の言はく『謂はく菩薩常に心意識を守つて、不動ならしめ、滅盡[三]に歸して道栽を種ゆ。謂はく、菩薩能く眼

※譯者に就て、大集部三、各品概要の項參照。

【一】三十二相。卷六、註五四以下參照。

【二】黠。さかしきなり。又わるがしこきなり。

【三】滅盡云云。文に歸滅盡種道栽とあり。道栽とは道を修するためのさだめ(制)なるべし。

を作せり『一切十方の諸佛菩薩、及び諸の龍の、今現在するもの、願はくは悉く我を念じ、一切の諸天下の、有らゆる種子・芽莖・枝葉・華果、五穀及び諸の藥味と、地味の精氣、衆生の精氣、善法の精氣とをして、增長して損ずる無からしめんを。又復此の四天下中の、三寶の種性をして、相續して斷ぜざらしめ、功德天をして、一切の諸願を、皆悉く滿足せしめ、常に功德天をして、能く一切衆生の資財を豐足せしめ、亦能く一切衆生を教化して、一切の惡を遠離し、菩提の心を發さしめ、又諸の衆生をして、三惡道を離れ、天中に生ずるを得しめんことを』と。卽ち呪を說いて曰はく

『多地他　牟尼尸婆　牟尼那佉　牟尼波羅　牟尼婆利　薩斫婆於婆差帝利多囉波羅那　膩羅婆耶婆薩婆毘闍　耶婆悉利梨　莎婆呵

此の陀羅尼句、某甲を擁護せんを、莎波呵』と。

爾の時世尊、觀世音菩薩と、功德天とを讚へて言はく『善い哉・善い哉』と。功德天に告げて言はく『淸淨智、一切の諸佛及び諸の大衆は、已に加護を作し、此の四天下中の五穀の種子・芽莖・枝葉をば、悉く成熟せしめ、又亦汝をして、能く衆生を化しむ。汝今應當に、衆生を教化すべし』と。

爾の時、帝釋憍尸迦、佛に白して言はく『世尊、當に何が此の法門を名け、云何が受持すべき』と。佛、憍尸迦に告げたまはく『此の經をば名けて、如來共功德天本願要誓經と曰ひ、亦須彌藏菩薩所願と名け、亦陀羅尼篋と名け、亦增長地味と名け、亦三昧方便教化衆生と名くべし』と。

此の法を說きたまへる時、功德大天、須彌藏菩薩摩訶薩、及び一切諸來の龍・大龍、幷に其の眷屬、一切の神仙・天人・阿修羅・乾闥婆衆など、佛の所說を聞き、皆大に歡喜したり。

大方等大集經卷第五十八

勇の怨を學するも　猶ほ及ぶ能はず。　夜叉に執せらるれば　狂亂して種種に語るが如く愛の夜叉に執せらるれば　狂亂すること是にも過ぎたり。　世に吉祥の人有りて　能く恩愛の怖を離れたまへり　若し能く愛を乾竭せば　則ち世の彼岸に度らん』と。

爾の時、觀世音菩薩、亦偈を說いて言はく

『貪瞋癡は人を惑はし　狂亂して正念無からしめ　一切の善を遠離し　重惡の業を造作せしむ。　父母を敬尊せず　善道を散滅し　三寶を敬信せず　又諸の逆業を造らしむ。　悲愍の心有ること無く、暴惡甚だ怖る可し　彼の瞋心の力の故に　阿鼻地獄にこそ入れ。　衆生は瞋恚の故に　迭互に相食噉し　數數惡道の中にて　衆の苦に逼迫せらる　善知識をば遠離して　惡心に躓頓[二〇]せられ　常に諸有の海に處つて　黑暗の路をば遊行するなり。　菩薩は大悲の身あり　是の如き衆生の爲に　自ら己が樂をば捨て　彼をして解脫を得しむ。　菩提の行を修習し　三種の事を造作し　勝法の幢を建立し　衆生の惡をば除滅す、一衆生の爲の故に　廣く諸の苦行を集め　精勤して道法を修し　財及び身命を捨てたり。　一一の衆生の爲に　無量劫のあひだ苦を受けて、衆生を救拔せんための故に　世の苦惱をば堪忍したり。　功德天は勇猛なり　住まつて衆生を敎化して　貪欲の衆生の爲に　菩提の心をば發起したり』

爾の時、功德天、一斛の器を以て、諸の種子を盛り、觀世音菩薩摩訶薩に奉上し、是の言を作せり『我れ今、此の一切の種子を以て、善丈夫に施しまつる、一切の種子を增益せんと欲するが爲なり、願はくは、我が意に欲する所をば、成滿せしめたまはんを。又我をして、能く四天下に於て、衆生資生の具を充足し、惡に於て暴虐、善を斷ずる衆生より、其の苦惱を拔かしめ、菩提に安住するの種を得しめたまはんを』と。

爾の時觀世音菩薩摩訶薩、即ち手を以て、彼の種子の器を執り、遍く十方に示して、是の如き言

【二〇】頓。つまづくなり。

らば、一には貪力の因緣の故に、二には瞋力の因緣の故に。是の因緣を以て、非時の雲雨・霜雹・寒熱を起し、衆生所有の種子・芽莖・枝葉・華果、五穀の滋味を損壞し、悉く燋然し乾枯し墮落せしめて、衆生資生の具を損減し、身・口・意をして、種種の諸重惡の業を造作せしむ。衆生は此の重業の障を以ての故に、過去の一切善根を燒滅して、遺餘有ること無く、善知識を遠離して、常に三惡道に在るなり。或は衆生有り、現在世に於て、衣食の爲の故に、乃至は五逆の重業を造作し、惡業を以ての故に、無量劫のあひだ、人身を得ず、設使久しき後に、人身を得んも、或は諸根殘缺し、或は正念を失し、旃陀羅家〔一八〕下劣の種姓、工巧〔一九〕の家に生れ、貧窮下賤にして、衣食充たず、資生乏短ならん。又復惡業を以ての故に、善知識に離れ、身口意の惡業の障を以て行じ、復三惡道の中、乃至は阿鼻地獄に墮せん。是れ其の勝路なり。是の如き善男子は、飲食短乏の故に。是の諸衆生は、久しく生死に處り、沈流すること絕へず、具に三塗種種の極苦を受けん』と。

爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく

『有らゆる諸苦の生ずるは　皆飲食に由るなり　若し飲食を離るれば、諸の苦則ち生ぜざらん』と。

爾の時、無垢威德帝釋、即ち偈を說いて言はく

『奇なるかな、恩愛の羂　乃至有頂にいたるまで、是の如き廣大の羂は　皆飲食に因つて生ずればなり。　凡夫は二種の因もて、身を愛繩・係縛し、逃避するを得ざらしむること、猶し鹿の羂に著けるが如くなり。　或は走り或は徐行するも　起ち已つて還復墮せんこと　愛の毒藥の過の故に、或は啼き或は喜笑す。　機關に苦の輪逼り　猶ほ油を壓する麻の如く、一切の諸人天も　愛の逼迫すること亦然り。　百千衆の伎術には　種種の巧なるを見ると雖も　愛の人天を戲弄する、巧妙なること彼にも過ぎたり。　貪愛の毒の過は　能く一切の人を害す、設ひ武

〔一八〕旃。麗、眞に作るも今三本に依る。旃陀羅は屠利を業とする下賤の族。
〔一九〕工巧(Śilpasthāna)。伎術機關・陰陽・曆數等に關する學業をいふ。これ等に關與するもの、亦下賤とせらる。

ん』と。
爾の時世尊、諸龍を讃へて言はく『善い哉・善い哉』と。爾の時、一切諸來の大衆も、亦諸龍を讃へて『善い哉・善い哉』と。
爾の時、須彌藏菩薩も、亦善い哉と讃へ、善い哉と讃じ已り、功德天に告ぐらく『清淨智、汝今乃ち、是の如き無量の諸大菩薩有り、以て善友に、猶ほ故のごとく、調伏の輪を轉じて、衆生を成熟する能はざるや』と。
時に功德天、須彌藏菩薩に語つて言はく『若し菩薩摩訶薩、願力自在の因緣を以ての故に、此の穢惡にして五濁ある佛刹に生を受け、是の如き善知識の伴に値ふを得んこと、我れ今日に、是の如き相應の善友に遇ふて得たらんが如くならんには、彼の人には、阿耨多羅三藐三菩提、便ち掌中に在り、則ち爲に、六波羅蜜を滿足せん。若し勇猛精進の菩薩有り、善友の所攝と爲らば、一切種智は、便ち掌中に在らん』と。
佛の言はく『是の如く、是の如し。清淨智、汝所說の如し。若し菩薩摩訶薩の、願力自在にして、衆生を成熟する因緣の爲の故に、五濁の世に生れ、勇猛に精進し、堅固にして退せず、四攝の法を以て相應せる有り、是の如き大善知識の伴の所攝を爲らんに、一切智智は、已に掌中に在り。當に知るべし、彼の人便ち爲に、六波羅蜜を滿足し、三惡道を離るるを。當に知るべし、是の人、胞胎を遠離せるを。當に知るべし、是の人、無學地に住し、諸有の漏を盡すを。當に知るべし、彼の人、一切諸佛の爲に憶念・護持せらるるを。當に知るべし、是の人、[一七]離欲地に住するを』と。
爾の時、會中に、天帝釋の、無垢威德と名くるが有り、合掌して佛に向ひ、是の言を作せり『世尊、何の因・何の緣によつて、是の諸龍・大龍は、世間衆生の資財を損壞するや』と。
佛の言はく『二の因緣有りて、是の諸龍等、能く世間衆生の資財を壞す。何等をか二と爲すとな

【一七】離欲地。三乘を共通して立てし十地の第六位。欲界九品の惑を斷盡せし位。

大雨澍がしめん」と。

爾の時、會中の諸大龍、及び諸の龍仙など、諸の來集せる者、船華功德大陀羅尼を聞くを得、欣喜踊躍して、自ら勝ゆる能はず、深く自ら慶幸し、慈心と後世を信ずる心とを起し、三寶の中に於て、淨信もて尊重し、恭敬の心・希有の心と、自己の畜生趣に生ずる惡業を懺悔するの心と、無上の大乘に入るの心とを生じたり。彼の諸龍等、各力能に隨ひ、佛を供養せんと欲したり。諸龍・大龍など、或は金末・銀末、牛頭栴檀・堅黑・沈水・龍堅栴檀、多摩羅葉香などを雨らす有り、又優鉢羅華・波頭摩などの種種の諸華、種種の衣、種種の蓋、種種の幢幡、金繩・珠瓔を雨らしぬ。

一切の諸龍・大龍、佛に向って合掌し、一時に聲を同じくして、是の言を作せり『大德婆伽婆、我等一切、三寶の所に於て、增長・信樂の心に住す。我等は今、世尊の前に於て、誠實の誓を說かん。在在處處の、城邑・聚落・人民の中に、是の如き船華功德陀羅尼を顯示せん。是の如く、一切諸餘の陀羅尼――謂はく水宅心陀羅尼、磨刀陀羅尼、幢蓋願陀羅尼、能求尸利子利奴陀羅尼、船華功德陀羅尼、及び四天王所說の陀羅尼、幷に四龍心陀羅尼など――是の如き等の大陀羅尼をば、在在處處に、一一顯示・演說し、受持・讀誦せん。我等諸龍は、彼彼の處、城邑・聚落・邊地・山川に隨ひ、其の時節に隨ひ、雲を起して雨を降らし、寒溫調適ならしめん。我等彼彼の處に於て、自軍と他軍との、鬪亂・諍訟・疫病・飢饉・死亡等を滅除し、其をして、處處安隱にして豐熟し、人民安樂にして、甚だ愛樂すべからしめん。我れ又彼の種子・芽莖・枝葉・華果・樹木・五穀・藥草をして增長せしめ、其の味を損減せざらしめん。衆生の依報も、豐饒にして、肥膩甘甜、膠味妙香など、能く出生せしめん。我等も亦能く、閻浮提の一切諸王をして、悉く慈心・利益の心・無怨の心・違諍無き心を生ぜしめん。是の如く婆羅門・刹利・毘舍・首陀、乃至夜叉にも、慈心を生ぜしめ、乃至優婆塞・優婆夷にも、和合の心を生ぜしめん。此の陀羅尼の、至到する處に隨ひ、我等能く、上に說く所の如き事を爲さ

爾の時、觀世音菩薩　彌勒菩薩摩訶薩に語つて言はく『我れ今汝に、大陀羅尼の、船華功德と名くるを與へん。此の陀羅尼句を以て、諸の衆生に於て、被るに大慈鎧の音を以て、說法を爲さんに、是等の衆生は、汝の三昧・神通の力を以ての故に、正法を聞くを得て、諸の惡心、及び諸の邪見と、諸の惡知識及び諸の惡件を除き、恒常に慈悲の善根を憶念し、一切の衆生に於て起す所の憐愍の心、深く後世を見るの心、十不善を遠離するの心、十善の道に住する心、悉く能く一切衆生を淸淨ならしむる心もて、法雨を降注すること、衆生の欲に稱ひ、一切の寃家にも、共をして欣喜し、信樂の心を生ぜしめん』と。卽ち呪を說いて曰はく、

『多地耶他　藍步莎婆利　迦莎耶跋迷　三稱移婆竭隸　陀婆何楞伽闍隸　暮力差素何　叉莎婆梨蘇呵　風祇　阿婆路迦隸　悉陀阿毘婆差馳呵　那頻婆子梨　阿毘扇陀遏礫　搔婆遮羅　阿婆囉何羅斯　婆羅呵初地利　壇迦何囉都裔　三摩提羯泥　婆羅闍尼帝利　摩訶浮多多究細　阿囉拏尼隸　婆提呵賒迷尼羅居蘇迷　莎波呵

此の陀羅尼句、國主を擁護せんを、莎婆呵』と。

『是の如く、彌勒、此の船華功德大陀羅尼は、此の陀羅尼の鎧を以て、菩薩摩訶薩、衆生の爲に法を說かんに、若し諸の衆生、此の陀羅尼の音の、一たび耳を經るを聞かば、乃至微細の蚊・蚋・蟲等も、濁惡の心皆悉く消滅し、善法の中に於て、安住の心を得ん。況んや復人等、此の陀羅尼を聞くを得んをや。若し人有り、雨を求めんと欲すれば、當に泉源の、龍居の處に至り、此の陀羅尼を誦すべし。一日に誦すること一千八遍なるべし、日に是の如くして、乃ち七日に至らん。復種種の好華・名香、百味の飲食を以て、龍の池中に散ぜよ。唯酒肉・五辛不淨の食を除く。月の七日より十四日に至るべし。十五日の旦に於て、當に胡椒の末を以て蓖麻油に和し、呪すること一千八遍にして、白𣯵の上に塗り、龍の泉中に棄てんに、能く此の龍をして、彼の人所に於て、大欣喜を生じ、便ち

利奴と名くるを說かん。此の四天下中に、希有にして、未だ有らず、未だ見ず、未だ聞かざるところなり。如來の作したまへる、是の如き大衆に、我れ今此の能懺尸利子利奴大陀羅尼を說かん。これ大威力有りて、一切の種子・芽莖・枝葉・華果・藥味を增長し、潤澤甘美にして、悉く皆豐饒、一切の衆生をして、能く信戒・多聞・布施・智慧・慈悲の方便を作し、一切の助菩提分の法を長養せしむ』と。即ち佛前に於て、呪を說いて曰はく、

『多地他　阿曼爾耶居閉　伽婆叉毘誓渠　盧遮盧迷　鉢吒叉盧迷尸利耶叉居蘇迷那　婆鎩闍地　何囉闍跋迷車吒婆波摩嚌　畢素狼祇阿佛囉素棣　何婆伽闍差　盧摩浮闍差　鉗毘囉婆素迷　阿奴摩耶薩利鉢羅賒都裔　莎波呵

此の陀羅尼句、某甲を擁護せんを、莎波呵』と、

爾の時文殊師利、佛に白して言はく『世尊、此の陀羅尼を以て、高幢上に書き、大音聲を以て、之を讀誦せん。復此の陀羅尼を以て、[一五]摩陀那果の汁を呪すること一千遍、用つて樹木・田苗・五穀に散ぜん。若しは此の呪を以て、諸の[一六]螺・鼓を呪し、之を吹擊せんに、其の音聲、所到の處に隨ひ、有らゆる華果・五穀・藥味などの、地に依つて生ずる者をば、一切の災害は、能く毀壞する無く、能く乾枯する無く、能く燒滅せざらん。亦復能く其の精氣を奪はず、又亦能く其の勢力を損せず、能く劫奪する無からん。若しは天・若しは龍、乃至大威德、薜荔・鬼、若しは魔、若しは魔子、若しは魔の眷屬など、能く害を爲さざらん。況んや餘の衆生、及び衆生の數をや。惟宿業の定障あるを除く』と。

爾の時世尊、讃へて言はく『善い哉・善い哉、善男子、汝今善能四天下の中に於て、施德の乘に升りぬ。善男子、汝復又能く、無量の衆生の、無上菩提の道を助成す』と。爾の時、一切の諸菩薩衆、文殊師利菩薩を讃へて言はく『善い哉・善い哉、汝作す所の如く、常に應に是の如くすべし』と。

【一五】摩陀那（Madana）。醉果と譯す　之を食すれば、人をして醉はしむといふ。

【一六】螺。麗本壘に作る、今三本に依る。

幢蓋摩尼願眼と名け、大威德有り、大威勢有り、大威力有り、多聞の藏を滿たし、智慧の藏を滿たし、諸佛・聲聞の成就したまへる所たり。若し如來の所に於て、形壽を盡して、淨戒に安住し、[一]優婆塞戒に安住し、若しは[二]沙彌戒に住し、若しは[三]具足戒に住するもの、若しは器なるも、器に非ざるも、若し此の幢蓋摩尼願眼大陀羅尼に於て、能く受持讀誦すること七日七夜、慧觀の方便もて、恒常に五受陰を觀察し、數數此の幢蓋願眼大陀羅尼を誦し、七日七夜に於て、能く誦すること百千遍を滿さんに、便ち[四]持を聞き、聞くに隨つて能く受くるを得、無量の辯才を得、刹利・婆羅門・毘舍・首陀、及び一切の衆生をして、敬信の心を生ぜしめん。又復能く資財に豐足し、天道に趣向し、常に親近して、諸佛の前に生るるを得しめん』と。卽ち佛前に於て、呪を說いて曰はく

『多地他　帝利拏　僧是若翅　鼻帝利拏頻碑迦嘘陀差　捕婆蘇閉　遮摩囉諶碑　阿婆羅差　阿差耶盧　脾阿遲耶兜摩帝彌利尸利婆毘莎婆利鴦渠闍陀是禰　闍闍囉奴迷　阿那摩輸地彌梨佉其梨差居羅婆嚌末伽差袍　婆莎婆利　阿佛梨帝蘇步　莎婆囉佉逝　蘇謨帝謨泥　莎波呵

此の陀羅尼、某甲を擁護せんを、莎波呵』

爾の時世尊、無盡意菩薩を讚へて言はく『善い哉・善い哉、善丈夫、我が法中に於て、善く住持を作せり。汝能く此の幢蓋願眼大陀羅尼を顯現し、能く一切衆生に多聞の眼を示したり』と。爾の時、一切の菩薩大衆、無盡意菩薩を讚へて言はく『善い哉・善い哉、善丈夫、汝現在及び未來世に於て、若し一切の大乘に趣向する衆生有らんに、則ち能く住持・多聞の聚を增長せん。汝今此の幢蓋願眼・滿足多聞の大陀羅尼を、能く顯示したるが故に』と。

爾の時、文殊師子童利菩薩摩訶薩、卽ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、合掌して佛に向ひ、是の言を作せり『世尊、我も今亦、此の四天下の、有らゆる樹木・華果、五穀・藥味、芽莖・枝葉、及び地に依る衆生資須の具をして、其を豐足せしめんと欲し、擁護の爲の故に、大陀羅尼の、能懼尸利子

【一】優婆塞戒。不殺・不盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五戒これ優婆塞の受持すべき戒法なり。

【二】沙彌戒。勤策律儀ともいふ。前の五戒の外、離高廣大牀戒、離花鬘等戒、離歌舞等戒、離金寶物戒、離非時食戒の五を加へたるもの。時には後の五の數へ方を異にす。男子の出家してこの十戒を受けしを沙彌といふ。

【三】具足戒。比丘・比丘尼の受くべき戒（この戒を受けしものを比丘といふ）。比丘に二百五十、比丘尼に五百の別あれども、是に由つて、一切の境に於て、罪を離れしむる意よりして、具足戒といふなり。

【四】持。陀羅尼の譯、また總持といふ。

惡刹利王、及び後世を見す、比丘を惱亂する者をして、是の如きの惡を得しめんを』と。

爾の時、一切諸來の龍衆、及び乾闥婆衆は、各是の言を作せり『願はくは我を放捨せんを。若し刹利王にして、法に違し、惡を行じ、法・僧を惱亂せんに、我れ當に、誓に順じて還るべし、我等をして、自の宮内に、遊戲歌舞し、自在に樂を受けしめんを』と。爾の時、一切諸來の大衆、同聲に讃へて言はく『善い哉・善い哉』と。

爾の時、地藏菩薩摩訶薩、合掌して佛を禮し、是の言を作しぬ『世尊、我に一切の三昧有つて、神通に遊戲す。今亦幢杖大陀羅尼門を說かんと欲す、若し此の幢杖大陀羅尼門にして、一たび耳に經んには、有らゆる耳病、悉く除愈するを得、亦一切の貪・瞋・癡等の、煩惱の諸病を除かん。設ひ全く滅せざるも、能く輕薄ならしめん。此の呪を以て海皮を呪し、禪を安ずる百千遍、用つて王鼓に塗るに、聲を聞く有らん者は、有らゆる貪・瞋・癡等の一切の煩惱、悉 皆微薄となり、佛法の中に於て、淸淨の信と、恭敬・愛樂・希有の心とを得、亦勇猛にして法行に隨順す、深く後世を信じ、資生豐足なるを得、衆人愛樂して、憙見せざる莫けん』と。卽ち呪を說いて曰はく、

多地他　崩伽婆　末帝阿虞波　摩帝器多羅浮　革波那蹇地　句那摩合棘摩蹉奴棣　橋何囉那地　那叉跋迷　盤陀何囉輸迷　捭伽羅者梨迷嚧醯多何羅鞞　俘伽羅蘇　婆伽那子梨泥安陀栴逝梨迦　囉浮逝　雞舍盧醯　三摩提頭婆利　莎波呵

此の陀羅尼句、某甲を擁護して、怖畏を離れしめんを、莎波呵』と。

爾の時如來、地藏菩薩摩訶薩を讃へて言はく『善い哉・善い哉、善丈夫』と。及び一切の大衆、亦共に讃へて言はく『善い哉・善い哉』と。

爾の時、無盡意菩薩、卽ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、合掌して佛に向ひ、是の言を作せり『佛及び大衆、唯願はくは隨喜したまはんを。我れ今亦大陀羅尼を說かんと欲す。一切如來語言音聲發・

哉、大丈夫、汝の應に作爲すべき所は、一切の衆生を利益せんと欲するなり』と。是の時、一切の龍衆、驚怖戰慄し、悶亂して性を失ひぬ。

爾の時、乾闥婆仙の、名けて藥生と曰へるが、卽ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、合掌して佛に向ひ、是の言を作せり『諸佛大衆、當に一心に念ずべし、若しは現在、若しは未來に、惡刹利王の、愚癡にして智無く、憍慢に害せられ、後世を顧みず、欺誑して悲無く、比丘・比丘尼を惱亂し、乃至は如來に歸依して、鬚を剃り、袈裟衣を著したる者に、惱亂を作さんに、我れ當に彼の刹利王の所に於て、三昧力を以ての故に、是の誓を作し、彼の惡王をして、現に果報を得しむべく、當に王の身及び其の眷屬をして、資生・樂具をば、諸の龍國の爲に侵奪せられ、及び內賊、反逆・擾亂を爲し、河池は枯竭し、或は復潦溢し、疫病に惱まされ、惡星變現し、寇賊競ひ起り、耽荒著樂し、家親・眷屬は、乖散して安んぜず、四大變異し、鬼神嬈亂し、天及び諸龍乃至餓鬼も、威德有る者も、悉く皆安んせず、刹利・婆羅門・毘舍・首陀の、若しは男、若しは女も、亦悉く安んぜず、師子・虎狼・惡獸・毒蟲も、亦皆安んせざらしむべし。我れ今彼の惡王の國を、破壞せんと欲するが爲の故に、此の誓を作すなり。何を以ての故にとならば、是の諸惡王は、如來の所に出家〔一〇〕剔髮し、一切諸佛の所に住し、三寶の種を持興する者に於て、惱亂を作せばなり』と。卽ち呪を說いて言はく、

『多地他　跋泥　耶婆那鉢隸　摩訶跋那泥　度嚧　摩遮嚌　鳩蘇摩婆羅帝　育多衫婆差　鞞摩地利多差婆嚧鉢那耶　鉢利婆利菩摩　度嚧迦囉　迷泥何鎌闍斯　邏迷帝利　裴摩跋多　磨輸嚧佉誓　那耶那嫌居隸　卑婆車鞞梨栖　陀那譲制脩伽毘舍差　波羅刹帝　波羅民　陀達隸　浮彌頗師嚌　于嚧摩陀隸　婆那伽逝浮摩嚌　阿婆嚌　頗那耶比梨使　什婆迦邏迷修多羅差　乾闥婆斯迷　莎波呵

此の陀羅尼句、某甲を擁護して、怖畏と災禍と無からしめんを　莎波呵

【一〇】剔。剃に同じ。

等を洗浴し、慚愧の衣を服せしめ、三十七助菩提分の鬘を以て、頭首を莊嚴し、種種の三昧・陀羅尼・忍地を以て、我等の心意識を莊嚴し、大乘の車に昇らしめたまふ。

『我れ今、五濁を離れたる清淨の佛土に往き、佛世尊――諸の清淨大菩薩衆の爲に圍遶せられて、大乘の法處を說きたまふ――に隨はんと欲す。是の故に我等、佛の敎を敬受す。我れ今に於て、及び自の眷屬と、堅固・弘誓の大願に安住せん。在在處處の城邑・聚落・山川・邊城に、若しは聲聞乘の人、若しは辟支佛乘の人、若しは菩薩乘の人、若しは出家、若しは在家、若しは持戒、若しは破戒、若しは多聞、若しは少聞、若しは精進、若しは懈怠、若しは定、若しは亂、若しは念ある、若しは念を失せるあらんに、但だ如來の所に於て、愛信・恭敬し、心に希有を生じ、法・僧の所、及び聖愛戒に於ても、亦復是の如くし、三菩提に於て、意に隨つて趣向し、愛信し恭敬して、希有の心を生じ、堅固に安住して、所住の處に隨はん。

『若し我が眷屬の、若しは龍父・龍母、若しは男龍・女龍、若しは龍男・龍女、及び龍の眷屬など、在在處處の城邑・聚落・山川・邊險に隨ひ、非時の風雨・旱潦・災雹・寒熱など暴起せしめ、五穀の種子・芽莖・枝葉、及び諸の藥味・資生の具を傷害し、在在處處――佛の諸聲聞・弟子・福田の住する有る處に隨ひ、若し諸龍有りて、我が命敎に違せんには、我れ今誓を立て、其の身體をして、一切攣縮し、神通を退失して、遊行する能はず、焦熱身に觸れ、諸根閉塞せしめ、依報失壞し、爲作する能はさらしめん』と。卽ち呪を說いて曰はく、

『多地耶他　佛陀闍耶　婆羅差　阿摩尼迷菩哆婆離梨　阿婆木提　鉢囉帝耶尼梨阿婆尼邏迷　侖龍喩筏邪蘇鄔卑鉢梨卑　婆什婢婆雉陀婆梨　婆囉謡訖利移　莎波呵

此の陀羅尼、某甲を擁護せんを、莎波呵』

爾の時、一切の諸來の大衆、歡喜踊躍し、合掌して摩那蘇帝龍王を讚嘆して言はく『善い哉・善い

爾の時、一切の大衆、難陀・跋難陀を讃へて言はく『善い哉・善い哉』と。

爾の時、阿那婆達多龍王、亦佛前に於て、自ら擁護を誓ひ、諸の眷屬に勅すること、亦上に說けるが如くにして、卽ち呪を說いて曰はく、

『多地他　那摩比梨世　那婆那摩比梨世阿奴差那婆躬　闍鼻跨　佉伽裴佉鉢囉都嚧安　膺賀耶斯隸那囉耶拏翟迷比　那悉鬆隸　阿貽迦囉迷　阿初是泥　移徙牟尼薩卑　莎波呵

此の陀羅尼、某甲を擁護し、怖畏と殃禍と無からしめんを、莎波呵』

爾の時、婆樓那龍王、亦佛前に於て、眷屬に教令し、及び自ら要誓すること、亦上に說くが如くにして、卽ち呪を說いて曰はく、

多地他　兮摩卑迷　蘇羅綺拏翟泥　多摩頻　度帝利泥　婆羅叉達利迷伽僧俱迷　比耶牟苓　翅世　徒嚧謨提摩移多那鋸斯　折摩奚雞　遮羅何囉鴦耆　那荼達埊犍荼迦都隸　莎波呵

此の陀羅尼句、某甲を擁護せんを、莎波呵』

爾の時、摩那蘇婆帝龍王、卽ち座より起ち、偏袒右肩、右膝著地し、合掌して佛に向ひ、是の言を作す『大德婆伽婆、若し我に依る諸龍天龍の、胎生・卵生・濕生・化生する有らん。婆伽婆、若しは現在未來に、惡刹利王等有り、刹利王法を捨てて、惡行を行ぜんに、是の王は、當に阿鼻地獄に趣く先道たるべし。當に知るべし、皆是れ惡刹利王の過のみ。龍王は無辜なるも、橫に惡名を加へらる。此の因緣を以て、龍王瞋恐し、諸の惡業を作さん。然りと雖も、我等如來の敎を敬受す。

『世尊、譬へば人衆の中に、妙寶女有り、澡浴して清淨、香を以て身に塗り、轉輪聖王の上妙の衣服を著け、其の頭首に、勝七寶の鬘を著け、眞金の繩・臂印・環釧を以て、以て自ら莊嚴し、大象の乘に乘り、眷屬圍遶して、刹利王の所に送詣せんが如し。是の如く世尊、我等諸龍は、畜生所攝の、損壞の身なり、貪・瞋・慢の爲に、染汚せらる。如來は今是れ法輪王たり、第一調伏の水を以て、我

さず、己が資財に於て、慳惜耽著し、施手を舒べず、沙門・婆羅門に於て不信、貧窮と行路の乞匃の者に施さず、皆已が宮內、及び其の眷屬には給濟せず、亦復如法の樂をも與へざらん。彼彼の國土を守護する諸天・夜叉、羅刹・阿修羅、鳩槃茶・餓鬼等の、大威德有るもの、彼等一切、刹利王に於て、瞋怒の心を起し、彼の國土をして、鬪諍・飢饉・疫病・刀兵など、競ひ起らしめ、乃至五穀・藥味など、悉く皆損壞せしめんこと、彼の諸龍及び大龍などの過には非らず。彼の龍王等、實には過失無きに、横に惡名を得るなり。

『譬へば風有り、彼の臭屍を吹かんに、世間の人、便ち臭風なりと言はん、然も彼の風性、實には臭に非らざるが如し。是の如く世尊、惡刹利王も、亦復是の如く、慳貪を以ての故に、一切の國土を護る者、瞋恚の心を起し、瞋恚を以ての故に、其の國を破亂し、横に諸龍の爲に、惡名を作すなり。然りと雖も、我れ彼の龍の爲に、敎令を作さん、若し彼の諸龍、若しは過去、若しは未來に、我が敎に違し、若しは是の如き諸佛所有の、聲聞・弟子の、持戒多聞所居の國土に於て、若しは我が眷屬——胎生・卵生・濕生・化生——の、若しは男龍・女龍、龍父・龍母、龍男・龍女、及び龍の眷屬など、彼の城邑・聚落・山川・谿谷に於て、非時の風雨・旱潦・災雹・大寒・大熱を作し、衆生の五穀・華果・及び諸の藥味・資生の具を傷害し、佛・聲聞・弟子・福德の人の所に於て、損害を作して、彼の諸龍等、我が命に違はば、當に爲に誓を立て、彼の諸龍をして、身體攣縮し、遊行する能はず、神通を退失し、焦熱身に觸れ、一切の依報、悉く皆損壞し、復餘積無く、能く作す所無からしめん』と。即ち呪を說いて曰はく、

『多地他　婆囉拏輸迷　鳩牛婆頭囉蹄婆嚧拏懼碑　阿迦羅蹄　翅賒泥毘摩何囉伽蹄　鳩拏鼻　阿羅耆　阿多沙隸　那耶那耽碑　迦羅鳩世　衰鴦懼波羅製乾　陀何羅婆斯　莎婆呵

此の陀羅尼句、某甲を擁護せんを莎波何』

【八】匃、こふなり、もとむるなり。

【九】胎生(Jarāyuja)。母胎に在つて形を成し、後出生するもの。卵生(Aṇḍaja)。卵に在つて形を成し、後出生するもの。濕生(Saṁsvedaja)虫の如く濕によつて形を生ずるもの。化生(Upapāduka)。依託する無く、業力に依つて忽ち起るもの、地獄と天等の衆生の如し。

己が過を審にせずして、妄に諸龍・大龍の與に、惡名を作すなり』と。

佛、龍王に言まはく『已に曾て、一切の諸王に教勅したり。「若し教行に順する者は、人・天の樂を得、乃至涅槃の樂を獲得せん。若し惡刹利王、教行に順ぜざれば、乃至は阿鼻地獄に墮せん」と。復龍王に告ぐらく「各各自ら己が眷屬を誡め、當に嚴教を設けて、違犯せしむる莫く、彼をして、現在及び未來世に、我が法及び三寶の種を壞つ莫からしむべし」と』。

爾の時龍王、佛に白して言はく『是の如く、是の如し、婆伽婆、是の如く、是の如し、修伽陀。世尊、彼彼の土に隨ひ、若しは持戒、多聞所居の處有らんに、彼の國中に於て、其の所有の我が眷屬――若しは男龍・女龍、龍父・龍母、龍男・龍女、及び龍の眷屬――の、彼の國土――若しは城邑・聚落・一切の諸處――に於て、非時の風雨・霜雹・寒熱を作すに隨ひ、五穀・華果・藥味・資生の具を傷壞せん。世尊、若しは彼の福田所居の處に、若し諸龍有つて、我が教に違背せんには、我れ與に誓を立て、彼の惡龍をして、其の身焦瘦し、神通を退失し、焦熱身に觸れ、依報滅壞し、復辭蹐無く、爲作するに堪えざらしめん』と。卽ち呪を説いて曰はく、

『多地耶他　那伽咽前徙　那伽泥迷　那伽陀囉　輸伽囉　輸伽囉　闍邏輸伽囉　阿鼻摩祇娑　波呵　婆囉目佉　迦羅帝步徙　那婆薩耽韓　帝闍耶婆頗隷　毘目睑羯隷　莎波呵

是の如き陀羅尼句、某甲を擁護し、一切の怖畏、一切の災害をして、悉く消滅せしめんを莎波呵』

爾の時、一切の大衆、善住龍王を讃へて言はく『善い哉・善い哉、大龍王、能く一切の衆生を護ることや』と。爾の時、會中の一切の龍衆、驚怖・恐懼したり。

時に難陀龍王、婆難陀龍王、座より起ち、偏袒右肩し、合掌して佛に向ひ、是の言を作せり『大德婆伽婆、若しは現在世・未來世に、若し惡刹利王の、資財を慳惜して、自ら受用せず、亦他にも施

する行の杖たり、則ち是れ吐薬にして　能く煩惱の毒を吐かしむ、則ち是れ金剛にして、修羅の怨[六]を壞す、則ち是れ一切善法の寳藏たり、清淨の水の如く、能く罪染を洗ふ。諸法を觀ること、猶し明鏡の如く、能く亂心を攝すること、猶し羅網の如く、能く禪定を容るること、猶し寳篋の如く、猶し大地の如く、能く諸の波羅蜜を生じ、應當に頂戴すべきこと、髻の明珠の如く、能く忍辱を容るること、猶し屋宅の如く、則ち是れ淨器にして十地の行を容れ、諸の外道を障ふること、猶し城郭の如く、則ち是れ良醫にして、煩惱の病を治し、諸の學者に於て、須彌山の如く、煩惱の蒸を除くこと、猶し明月の如く、邪見の闇を除くこと、猶し淨日の如く、智慧の藏と爲ること、猶し大海の如く、菩提分の法に於て、猶し華臺の如く、一切智智に於て、猶し　賢瓶[七]の如く、一切の佛護りたまふこと、猶し如意珠のごとし。

『又此の袈裟は、一切諸佛の加護したまふ所たり、諸の衆生に於て、法雨を雨らすが故なり。是の故に婆伽婆、若し惡刹利王、佛法を破壞し、比丘・比丘尼、乃至器と非器――佛に依つて出家したる――を惱亂せんには、若しは其の身を治罰して、或は其の物を税め、乃至命を斷たん。是の故に其の國中には、佛を敬信する天・夜叉、羅刹・阿修羅、鳩槃茶・餓鬼等有つて、大威德有り、彼の一切の刹利王の所に於て、瞋恚の心を起し、彼の國土をして、鬪諍・飢儉、疫病・刀兵など、競ひ起らしめ、非時の風雨・旱潦・寒熱など、五穀の種子・芽莖・枝葉・華果・藥味を損傷せん。是れ龍の過には非ざるなり。

『是の諸龍等、實には自ら無辜なるに、横に惡名を得るなり。大德婆伽婆、譬へば婆羅門の、自ら蒜を食し已り、寶女と通じ、已が臭妄を言はず、寶女を怨んで、汝臭穢なりと言はんが如し。世尊、是の刹利惡王も、亦復是の如し、刹利の法を捨てて、首陀の行を行じたり。是の因緣を以て、彼の國土を護る、威德の諸天、乃至薜荔等、心に瞋忿を生じて、國土を破壞するに、國王臣民に、

【六】怨。麗に寃に作る、今三本に依る。

【七】賢瓶。賢は善の謂、また德瓶、吉祥瓶など名く。所求のものを出す瓶なりといはる。

前に於て、眷屬を率ひて、是の如き災禍を起作せしめず、佛の法燈に於て、三寶の種姓をば、世に久住せしめ、速に滅せしめざることを約したり』と。

爾の時、一切の諸來大衆、同聲に須彌藏龍仙菩薩摩訶薩を讚へて言はく『善い哉、善い哉』と。

爾の時、善住龍王、座より起ち、偏袒右肩し、合掌して佛に向ひ、是の言を作せり『大德婆伽婆、我に依屬する諸龍・大龍――所謂胎生・卵生・濕生・化生――は、佛弟子・聲聞菩薩、徒衆・眷屬、所住の國土に從ひ、慈心もて相向ひ、怨害の心無く、安等の心に住す。又彼の國土に、王たるを得る者、佛法の中に於て、淨信の心を得、佛法を擁護し、傲貴自在を恃み、憍慢を生じて、佛法を毀壞せず、亦比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷を惱亂せず。有らゆる、佛に依つて出家せるもの、若しは器なるも、器に非らざるも、鬚髮を剃除し、袈裟を服持して、彼の人のところに至らんに、信心もて護持せん。

『其の國土中に、或は餘の衆生有り、佛法の中に於て、怨刺を起さんに、國王は應當に、法の如く遮約せん。其の國中の先王、敬信あり、曾て沙門及び婆羅門に、田宅・封邑を施し、其をして受用せしめ、更に追奪せず。若しは輔相・明智の大臣有らんに、和合して一心に、共に國事を治し、財を得ること堅固にして、施手を嘗紓せん。是の刹利王は、善く國土を護り、一切國中の、有らゆる鬪諍穢濁をば、前に說く所の如くせん。我等諸王は、各各自ら己が眷屬に勅して、災變を起さざらしむ。

『何の故に我れ今、是の如き勅を作すとならば、此の[五]袈裟染衣は、一切過去の諸佛、常に加持したまへる所なればなり。又此の袈裟は、則ち一切の諸菩薩の種たり、則ち是れ涅槃に趣向する正路たり、卽ち是れ剛刀にして、能く煩惱を斷ず、則ち是れ涅槃の種子たり、則ち是れ道を失したる者の燈明たり、亦是れ病を除く藥たり、大猛風の如く、無明の雲を吹く、則ち是れ惡道に行かんと欲

【五】袈裟染衣。袈裟色に染めたる衣、卽ち出家の衣。

此の陀羅尼呪句の、某甲を擁護せんを、莎波呵

『大德婆伽婆、若し衆生有り、諸毒龍の爲に、惱亂せられんに、當に我が名を稱へ、幷に此の陀羅尼を誦すべし、能く此の龍の貪・瞋・慢・妬と、毒惡の心とを滅せん。我れ淸淨天耳の、人の耳に過ぎたるを以て、之を聞くを得ん。我れ聞くを得已つて、若しは四生の龍・大龍・龍父・龍母、龍男・龍女、及び龍の眷屬などに、彼をして敬信の心を生ぜしむる能はず、猶ほ是の如き、非時の風雨、寒熱・旱潦、災雹の惡等を作すも、若し滅せずんば、又我れ、一切衆生に、安樂の因緣を與へ、其の願を滿たさざらんには、我れ便ち一切の十方三世の諸佛を欺誑するなり、亦我をして阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得しむる莫からん。

『是の如く大德婆伽婆、我れ過去に、然燈佛の所に於て、佛の眷屬大衆の前に於て、是の如き堅固の大願を發したり。是より以來、常に善く安住して、衆生を敎化したり。復億那由他・百千佛所の諸佛の、現に眷屬の在る前に於て、亦是の如き堅固の大願を作し、我れ常に大精進力に安住し、衆生を敎化し、策勤して倦まざりしこと、我が今の世尊の前に於ける堅固の精進等の如くにして、異有ること無し、諸の惡龍を降伏せんと欲するが爲の故に。

『世尊、我れ過去阿僧祇劫已來を念ずるに、未だ曾て、一念の頃も、堅固勇猛の精進の心を捨することを憶念せず、常に堅固の精進に安住して、衆生を敎化したり。乃至今日も、亦復一切の衆生を敎化するなり。此の諸龍王は、大乘の法に於て、精進修行す。謂はく此の善住龍王は、一切の象龍の王たり、此の難陀龍王・婆難陀龍王は、一切の蛇龍の主たり、此の阿耨達龍王は、一切の馬龍王の主たり、此の婆樓那王は、一切の魚龍の主たり、此の摩那蘇婆帝龍王は、一切の蝦蟇龍の主たり。是の如き等の諸大龍王は、能く衆生の與に、諸の衰惱を作す、自餘の諸龍は、自力もて上のごとき衰患を作すに堪えざるなり。此の五大龍王は、大乘に安住し、大威德有り。是の大龍王は、各各佛

無く、其の心常に、惡法と相應し、衆生を惱亂し、衆生を損壞し、資生の具は、毒惡麁獷にして、諸の衆生に於て、悲愍の心無く、後世を見ざる――を除き、我が所化衆生に於て、障難を爲作せしむる莫からんを。是の故に世尊、彼の衆生に於て、應に大悲を起し、彼の諸惡を滅したまふべし』と。

爾の時世尊、須彌藏龍仙菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、汝往昔、然燈佛の所に於て、諸龍を化せんが爲に、大勇猛の弘誓の大願を發したり。汝須彌藏、四生の龍・大龍の毒惡有り、過去未來現在の、有らゆる氣毒の龍、見毒の龍、觸毒・齧毒、貪毒・瞋毒・癡毒の龍等の、此の諸惡龍をば、今當に云何がして、如法に彼の所有の惡業を除き、諸衆生の、有らゆる資生の具をして、損減する所無く、三寶の中に於て、信樂愛敬し、深く後世を信じ、惡業を離れしめん』と。

爾の時、須彌藏龍仙菩薩摩訶薩、佛に白して言さく『世尊、我れ當に、彼の毒龍の宮中に入り、結加趺坐し、龍の[三]頻申三昧に入り、此の三昧の力を以ての故に、彼の惡龍をして、貪・瞋・傲慢を、皆悉く消滅し、柔和調伏にして、其の心寂靜に、深く後世を信じ、一切衆生の所に於て、慈悲憐愍もて、救濟の心を起さしめ、彼の毒龍をして、心に敬信を生じ、亦一切衆生を惱亂せず、衆生の心地を安置救濟せしめん。又世間の有らゆる風雨・旱潦、[四]災雲・大雲、寒熱などに害せられんに、彼の諸衆生、當に我が名を稱へ、十指掌を合し、是の如き言を作すべし「大慈悲者、我を念じ、我を念じて、能く龍を化伏したまはんを。須彌藏菩薩は、種種の方便・智慧あり、勇猛に無上菩提の道を修行したまへり、唯願はくは、我を救ひ、我が苦を除滅せんを」と。

『是の言を作し已り、卽ち呪を說いて曰へ

「多地耶他　薩耽婆步闍　毘梨荼步闍　輸拒盧梨荼步闍　迷盧闍婆　伽除婆步闍炎　炎阿泥婆步闍　蘇摩羅阿跋多步闍儐善步闍　莎波呵

【三】頻申三昧。奮迅三昧に同じ。また師子頻申三昧と名く。この三昧に入れば、師子の奮迅するや、諸根を開張し、身毛皆竪ち、威怒の相を現ずるが如くなるに喩へたるなり。
【四】災。麗・元・明本は有に作る、今宋本に依る。

卷の第五十八

須彌藏分第十五　陀羅尼品第四

爾の時世尊、功德天に告げて言はく『清淨智、我れ往昔に於て、汝と二人、因陀羅幢相王佛の所に於て、同じく誓願を發したるに、我れ今汝と、願滿足するを得たり。我れ今已に、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。汝も亦、功德の處に住しぬ』と。

功德天の言はく『是の如く、是の如し。大德婆伽婆。是の如く、是の如し、大德修伽陀。我と世尊とは、所願已に滿てり、我と世尊とは、善欲已に滿ちぬ。我れ世尊と共に、昔因陀羅幢相王佛の所に於て、同じく誓願を發し、今願悉滿ち、心意滿足す。是の故に如來、世に出現したまへるなり。我れ今、功德の處に住するを得つ。我れ今、功德の處を得と雖も、猶ほ故のごとく、未だ能く、昔の本願を滿たし、衆生を成熟する能はず。何を以ての故にとならば、此處には多く、象龍・馬龍・蛇龍・魚龍・蝦蟇龍有り、彼ら此の界の諸衆生の中に於て、惡行を起し、甚深の作光陀羅尼を說くと雖も、猶ほ故のごとくにして、未だ此の諸惡龍を制せざればなり。彼の龍は、常に非時の寒熱・惡雲・暴雨、旱潦の不調を起して、衆生及び五穀の芽莖・枝葉・華果・藥草を傷害す。

『大德世尊、今此の世界四天下中には、諸龍・大龍、及び龍の眷屬、男龍・女龍、龍男龍女など、有らゆる龍趣に生じたる者、彼れ一切皆已に來集しつ。又十方世界の一切の佛刹の、諸天菩薩摩訶薩など、皆來つて集會し、及び一切の天・夜叉、羅刹・乾闥婆、緊那羅・鳩槃荼、餓鬼・毘舍遮、富單那・迦吒富單那等、一切來集したり。又復世尊、聲聞・弟子・人非人等も、亦悉く來集して、大集會に在り、法を聽かんが爲の故に、佛前に住したり。一切の衆生は、四食によつて活く。大德婆伽婆、今正に是れ時なり。唯願はくは、此の諸惡毒龍――災害の方便もて、如來の所に於て、信心有ること

【一】修伽陀(Sugata)。善逝と譯す。佛十號の一。

【二】四食。摶食、觸食、思食、識食をいふ。

の種、及び法眼をして、久しく世に住まるを得しめ、此の愚闇・薄福にして、我慢の爲に壞せられ、善根を修せざる、惡刹利及び諸の宰相をして、我が是の如き、百千萬億阿僧祇劫の、精勤苦行もて集むる所に於て、不滅不壞ならしめ、比丘比丘尼、優婆塞・優婆夷など、惱亂有ること無く、無惱を以ての故に、諸天忿らず、天忿らざるが故に、一切の衆生、悉く皆、如上の樂具を獲得すればなり』と。

大方等大集經卷第五十七

須彌藏分第十五滅非時風雨品第三

ん。若し毒有るを食せんに、能く食者をして、腹痛吐下し、身心逼惱し、支体攣縮し、熱病顚狂し、心亂れて食を失し、迭に相劫奪鬪諍し、殺生・偸盜乃至邪見ならしめん。是の諸衆生、常に上の如き惡法と相應せしめん。所謂若しは天、或は龍、或は夜叉・羅刹、阿修羅・迦樓羅、緊那羅・鳩槃茶、乾闥婆餓鬼、毘舍遮、或は富單那、或は迦吒富單那、或は人、或は非人など、諸の衆生に於て、惱害する能はざらん。

『多地他　那鼻　摩訶那鼻　初何囉那鞞　阿鼻其那鞞僧輸沙拏那鞞　鼻何囉闍佉鉢帝　利蹇荼　涅利何隷　斫初婆晰　佉拏　毘迷蹄　帝都脩　莎波呵　鶖求囉蹄　莎波呵　布蹴賊耶迷　莎波呵　頗羅賃鞞　莎波呵　薩智耶都脩　莎波呵　睒梨囉　那婆迦羅摩毘沙　莎波呵

『此の陀羅尼句、此の國土を擁護せんを、莎波呵』『汝清淨智、此は是れ磨刀大陀羅尼たり。汝此の磨刀大陀羅尼の力を以て、諸の衆生に於て、能く上の如き諸の大事業を作し、能く大[三一]藥を爲さん。是の因縁を以ての故に、汝今則ち能く、諸の衆生をして、汝の化を稟受せしめん』と。

是に於て一切の諸來大衆、地藏菩薩を讃へて言はく『善い哉・善い哉』。爾の時世尊、亦地藏菩薩を讃へて言はく『善い哉・善い哉、善男子、汝今能く、一切衆生の爲には、大妙藥の如くなり。何を以ての故にとならば、汝の身は卽ち是れ微妙の大藥なり、汝は此の四天下の、一切の衆生の中に於て、衆生の藥たり、能く一切衆生の苦惱を滅し、能く一切衆生に、樂具を施し、大悲を成就す。汝能く是の如き甚深の、磨刀大陀羅尼力を顯示したるが故に、此の衆生の、地味・精氣・種子、華莖・枝葉・華果、諸味の五穀・藥草などをして、衰損せざらしめ、毒の増長する無く、衆生の食を具足・成就し、彼の衆生をして、穢濁・鬪諍、悉く皆消滅して、善行を修するに堪えしむ。此の四天下の、非時の風熱・寒溫・旱潦、皆悉く消除し、日月・星宿・晝夜、月半月、[三二]時節年歳の變怪など、此を滅せんが爲の故に、此の磨刀大陀羅尼をば說きつ。此の陀羅尼力を以ての故に、我が三寶

【三一】藥。麗本樂に作る、今三本に依る。

【三二】月の下。麗本等四本、晝の字有り、一本之を缺く。今後者に依る。

闍羅鉢利訶利　悤多羅婆利訶利　特叉鉢利訶利　珊尼摩鉢利訶利　蘇婆婆鉢提犁　劬摩耶婆末陀柰谿　阿那耶波盧誓　迷羅跋迷　阿羅那求師佉羅　毘闍𨽻　那羅延拏婢諶林𨽻　憂羅伽阿尼彌徙　宮闍囉婆胡迷　訶闍賃𨽻羯磨毘羅犁舍羅摩拏婆離犁　佉曷羅伽奢迷阿斯那迷　阿耆尼鉢底利　能求耽鼻犁　婆耶遮婆留尼揵吔賃𨽻犁　釋迦囉是若移阿那鵄提帝利那耶娜尼利　帝利耶頭婆佛阿地子瑟癡帝　莎婆訶　使此莎天子乃其眷屬悉皆吉祥莎婆呵　那羅延拏　尼羅移莎婆呵　斫迦囉跋多迦羅迷　莎婆呵

此の水風摩尼宮陀羅尼輪、一切呪術章句を說きたまへるに、一切佛刹の有らゆる大地は、六種に震動し、諸來の大衆、戰慄不安、心驚き恐怖して、同聲に唱へて言はく『南無・南無　佛陀耶』と。

爾の時佛、功德天に告げたまはく、『清淨智、汝此の水風摩尼宮陀羅尼輪の力を以つて、能く一切の鬪諍、一切の毒害ある夜叉・羅刹、修羅・惡龍、乃至人非人等、及び諸の禽獸、一切非時の風熱・寒冷、災雹・旱潦等の過を除き、悉く皆消滅せしめん。清淨智、此の陀羅尼は、能く五穀をして、悉く皆成好ならしめ、諸の衆生をして、壽命を增益し、果報を增長し、乃至一切の善法を增長し、未だ無上涅槃に入らざる已來失壞せしめず。若し此の陀羅尼を聞き、受持・讀誦し、如說に行ずれば、彼の人必らず定んで、涅槃に趣き、三界に安住せん』と。

爾の時、地藏菩薩、佛に白して言はく、『世尊、我れ亦摩刀大陀羅尼を說かんと欲す。此の陀羅尼の力を以て、一切衆の、果報・所須及び地味をして、悉く減損する無からしめ、能く地の精氣を毀奪する無からしむ。又亦能く毒氣を放つ者無く、亦復能く其の善味を壞する無く、其をして變じて、澁惡と爲らしむる能はず、亦復其をして隱沒せしむる能はず、亦復此の大地をして、五穀・芽莖・枝葉・華果・藥草を生ぜざらしむる能はず、亦復其の精氣を奪ふ能はず、又復其に毒氣有らしめず、亦乾枯せず、又澁惡ならず、不熟ならしめず、寒熱も傷けず、食用するに障無く、食し已るに毒無け

【三〇】佛陀耶。は語尾變化なり。

爾の時佛、功德天に告げて言はく『淸淨智、此の大陀羅尼は、諸佛如來時に乃ち之を說く。如來今大衆會の前に於て、自ら要誓す、此の水風摩尼宮陀羅尼輪は、一切の十方三世の諸佛、加持したまふ所たり、今當に顯示すべし。一切の十方諸來の菩薩、此を聞くを得なば、彼の諸菩薩は、能く十方無佛の國土、五濁の世中に住し、能く此の水風摩尼宮陀羅尼輪を顯示し、此の陀羅尼力を以ての故に、其の國の有らゆる、非時の風熱・寒溫・旱潦など、悉く皆除滅し、此の陀羅尼に由るが故に、彼の毒惡にして、慈愍無き衆生の、來世を顧みざるもの——。謂はく天・龍・夜叉・羅刹・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮・富單那・迦吒富單那・人・非人等、乃至禽獸をして、信樂の心を得て、柔和軟善、念力善巧にして、正法を樂求し、正法を護持して、三寶の種を紹がん。

『此の陀羅尼力を以ての故に、彼の佛刹土の有らゆる衆生、壽命を增長し、身色を增長し、五穀を增長し、資生を增長し、安樂を增長し、無患を增長し、名譽を增長し、持戒を增長し、多聞を增長し、布施を增長し、慈悲を增長し、智慧を增長し、方便を增長し、三昧を增長し、陀羅尼を增長し、地觀を增長し、出世を樂うことを增長し、衆生を化することを增長し、大乘に入ることを增長し、勝願を增長し、地地の轉入を增長し、陰・界・入を觀察することを增長し、慚愧を增長し、功德を攝して佛土を莊嚴することを增長し、六波羅蜜の行を增長し、一切十方の諸佛に、常に護念せらるることを增長し、佛・一切の菩薩・善友に値遇することを增長し、神通に遊戲することを增長し、一切の煩惱を壞して增長せざらしむることを增長し、神通を增長して彼岸に度り、一切の善法乃至無上の涅槃退滅せしめず』と。即ち呪を說いて曰はく

『多地他、蘇婆羅　婆羅底　那耶婆羅底　掣婆吒婆羅底　阿那婆羅底　奢婆多喝囉婆羅底　奢囉翳婆羅底鳩牟尼婆羅底　珊支囉婆羅底　掣陀婆羅婆羅底　婆羅婆羅底　婆羅鉢利訶利　婆羅婆羅多鉢利訶利　那耶鉢利訶利　婢毘遮鉢利訶利耶若鉢利訶利蘇婆羅鉢利訶利　頻頭鉢利訶利

現ずべからず。譬へば轉輪聖王の、主兵藏の臣、王の敎を奉ぜずして四兵を發さんこと、是の處有ること無きが如し。是の如く菩薩は、悉く是れ佛子、佛の心より生じ、佛の口より生じ、法より化生す。是の故に一切の諸菩薩等、如來に請はずして、神變を現ずる有ること無し。

『清淨智、復陀羅尼輪有りて、水風摩尼宮集一切呪術章句と名け、一切の三世諸佛の三寶の性を建立す。清淨智、汝今如來に、水風摩尼宮大陀羅尼輪集一切呪術章句を問ひまつるべし。若し佛說きたまはば、我れ亦隨喜せん。汝等若し能く此の陀羅尼を受持せんに、一切の所願、皆悉く滿足せん』と。

爾の時、大功德天女と、大辯天女・大堅固天女・作光大天女、可意天女・安隱天女・多摩羅堅固天女・明星主天女 奢摩天女・頗梨天女など、是の如き等の上首天女は、八萬四千那由他の天と百千の衆とに、前後圍遶せられて、座より起ち、合掌して佛に向ひぬ。時に功德天女、卽ち佛前に於て、偈を說いて言はく

『能く極惡濁の煩惱を滅し、垢を離れて無垢、清淨に行じたまへり、我等、陀羅尼を渴仰す、唯願はくは總持の輪を演說したまはんを。牟尼の說は寂にして穢濁無く、三寶熾然ならしむる、最勝の句たり、修羅等をして淨心を得、地味を增長して毒惡無からしむ。能く寒熱暴風雨を除きたまふ、願はくば、精氣を奪ふを守護し、穀藥果味等を食せしめ、强記にして患を除き善行を修するを說きたまはんを。毒害と諸惡見とを滅除して、最勝無上の法に歸信ぜしめたまふ、或は精氣を奪ひ煩惱多きもの、云何ぞ此の衆生を敎化せん。此の諸天等は牟尼に於て、最上甚深の妙を希求し、菩提に趣向するの道を顯示して、諸の衆生をして大乘に入らしめたまはん(ことを以てす)。大集は雲集して果願滿じ、十方の菩薩は佛法を讃ふ、云何ぞ諸惡龍を降伏し、雨澤調適にして苗稼茂らしめん』と。

能く其をして、所須く豐足せしむる能はず。亦復衆生を成熟する能はず。汝今是れ大丈夫なり、正法の中に於て、自在の智慧と善巧を得たり。又汝已に一切三昧の陀羅尼忍を度し、善能く智慧の彼岸を觀察し、慈悲もて莊嚴し、通・智の彼岸を、汝悉く已に度したり。又汝彼の諸菩薩の中に於て、最勝の幢なり、已に能く一切の衆生を成就したり。汝今我が爲に、應當に此の四天下の中に、悲愍の心を起し、自智もて觀察すべし、云何ぞ能く此の四天下の諸惡毒龍、夜叉・羅刹、阿修羅・鳩槃茶・餓鬼・毘舍遮、迦吒富單那等、一切の惡鬼をして、皆悉く降伏せしめ、風雨時に順じ、水旱調適にして、秋實豐茂し、寒溫和平ならしめんと。

『是の因緣を以て、諸の地味をして、勢力を增長し、氣味香善ならしめ、食用に患無く、念力を增益し、色貌充潤にして、甚だ愛樂すべく、意に稱ふ事、皆世に出て、此の大地に依る諸の衆生等、食用に過無く、念力を增長すること、上に說く所の如くならんを』と。

爾の時地藏菩薩、功德天に告げて言はく『清淨智、我れ今能く、此の佛刹土の、有らゆる四大をして、普遍して餘無く、悉く能く變じて、天の飲食と爲らしめ、諸の衆生をして、百千劫のあひだ、食するも盡す能はざらしめん。何を以ての故にとならば、但だ此の衆生、福德薄きが故に、食する能はざる所たり。此の勝報に於ては、其の應器に非ざればなり。清淨智、我れ又能く、此の娑婆佛刹をして、變じて天宮及び天の臥具と爲し、莊嚴・衣服・香樹・果樹・種種の音聲、衆妙の伎樂・衆寶の莊嚴など、悉く能く爲作せん。此の諸衆生は、福德を遠離し、又其の器に非ず、受用するに堪えざればなり。唯如來・應・正遍知を除き、十住の菩薩、及び首楞嚴三昧に住して、自在を得たる者、乃ち能く受用せん。

『清淨智、又我れ能く、一切の衆生をして、第四禪に置き、餘有ること無からしめんに、豈に龍・富單那等をば、降伏する能はざるべけんや。又我れ應に、佛の未だ聽許したまはざるに、而も神變を

『是より以來、復十千の佛所に於て、是の如き願行を増進したり。此の善根を以て、今賢劫の中に於て、大功德處を得たるも、今猶ほ此の大業を成すに堪えず。何を以ての故にとならば、昔より以來、無量の惡龍、及び夜叉・羅刹、阿修羅・鳩槃茶餓鬼・毘舍遮等、世間に出生し、諸の衆生に於て、毒惡凶暴にして、信無く悲無く、慈愍の心無くして、惡法を行じ、非時の風雨・旱澇・災雹などあり、寒熱不調にして、種種に返逆し、自軍と他軍、怨憎闘諍し、熱風暴起して、來世を顧みざればなり。

『是の諸衆生、彼の過去の諸佛の、加持したまへる所の作世水宅心陀羅尼に於て、信樂を生ぜず。彼の惡衆生、信樂せざるが故に、諸の種子・芽莖・枝葉・花果、美味の五穀、藥草及び諸の資生をば、破滅毀壞して、其の精氣を奪ひ、諸の地味に於て、毒氣を放つて吹く、是の毒氣を以て、其の地味をして、雜毒澁惡、雜病無膩にして、臭穢無味ならしめ、此の大地をして、是の如き等を作さしむ。是の因緣に由つて、衆生樂まず。若し地味に依り、衆生、此の種子・芽莖・枝葉・華果の諸味を食し、五穀・藥草・資身の具を食せんに、便ち惡心を生じ、剛獷にして毒惡、諸の衆生に於て・悲愍の心無く、後世を顧みず、諸病の爲に逼られ、身色麁惡となり、種種の煩惱諸苦のために害せられ、惡見を具足し、邪歸依に住して、三寶の所に於て、信樂と尊重・恭敬・希有の心とを生ぜず、乃至禽獸も、亦復種種の惡見に執し、本道を迷失し、諂曲にして實無く、但だ口言有るのみ。

『彼の諸衆生、三寶の中に於て、身口・心意に、善法を遠失し、破戒の比丘は、禁攝する能はず、彼の持戒「のものに」於て、放任相應し、辯才大德の諸比丘の所に、常に遠離を生じて、親近する能はず。罵詈・毀謗・輕弄・惱亂あつて、其の過を稱揚し、慚愧を遠離し、十善の道を離れ、心に一切の善行を愛樂せず、遠離の心を起す。

『爾の時衆生、福智を遠離し、壽命短促にして、惡道に趣向す。是の故に我れ今、彼の衆生に於て、

衆生の資座、皆悉く衰耗して、闇冥と作らんに、願はくは我れ、爾の時、彼の衆生に於て、福德もて加被し、智慧の威力もて、悉く遮止して、其をして信心を生ぜしめ、又衆生をして資生に乏しからさらしめ、惡を行ぜしめず、善法を增長せしめ、佛の應に度すべき所に、化を受くるの衆生、三寶の性を紹いで、斷絕せざらしめ、勢力增盛に、又我をして[二八]依報を得ること自在ならしめ、衆生を敎化して、阿耨多羅三藐三菩提を得しめんと。今佛前に於て、發す所の發願をば、未來世に於て滿足するを得んに、唯願はくは[二九]印可して、賜ふに善哉と言はんをと。爾の時、因陀羅幢相王佛、卽便印可し、讃へて言はく「善い哉・善い哉、善男子、汝所願の如く必ず滿足することを得ん。』と『又善男子、我れ當に汝に、作世水宅心陀羅尼を施すべし。汝此の陀羅尼心を以て、能く衆多の衆生を成就し、又無量の衆生をして、資生に豐足し、果報に乏しきこと無からしめ、又能く煩惱の暴流を度らしめん』と。卽ち呪を說いて曰はく

多地耶他　闍藍婆　摩訶闍藍婆　阿奴呵闍藍婆婆囉闍藍婆　郁伽闍藍婆　夜叉毘梨闍藍婆
那伽毘梨闍藍婆優維伽毘梨闍藍婆　阿薩帝鼻梨闍藍婆　阿輸婆比梨闍藍婆　摩嗟比　梨闍藍婆
曼厨迦比梨闍藍婆　佉目羅比梨闍藍婆　崩起比梨闍藍婆　阿摩比梨闍藍婆蘇脂目佉闍藍婆婆
摩囉婆摩囉闍藍婆摩囉比闍迦荼鉢多羅布琉波頗藍婆素叉梨牛婆素　達摩耶若　比利使致搔醯藍
婆　伽苦步　羅婆窮　窮　婆羅窮頻頭窮　婆羅闍比　婆婆呵

『是の陀羅尼句は、若しは他人及び自己の身の爲に其の名號を稱し、此の陀羅尼を誦することを爲せば、一切の怖畏、一切の殃禍は、悉く皆消滅せん。善男子、此れ作世水宅心陀羅尼なり。汝若し此の心陀羅尼を以てせば、便ち能く衆多の衆生を成就せしめん。汝善男子、我れ昔、彼の因陀羅幢相王佛の所に於て、此の作世水宅心陀羅尼を受持し、彼の佛の所に於て、種種に供養し、戒を持し、多聞にして、布施し精勤したり。

【二八】依報。正報に對す。身心は卽ち實の果報にして、この心身の依止すべき身外の諸物、卽ち國土、家屋、衣食などをいふ。
【二九】印可。その得たる所を證明して、許可し稱美すること。

に住し、具に種種の、尤劇苦惱をば受く、一人の爲の如く、衆多のためにも亦然り。我れ樂うて、聲聞の智慧、及び緣覺の智を求めず、亦求めんと願はず。唯無上最勝の智慧を求むるのみ、予今當に知るべし、我れ勝道を行ずるを。乃至無量恒河沙數の、苦惱の衆生、未だ苦を脫せざる來、彼の諸衆生を、度せんと欲するが爲の故に、我れ終に、菩提正覺を取らじ。汝今當に知るべし、亦應に是の如く、諸の衆生に於て、常に應に悲を起すべし。應に常に勇猛に、善法を修行し、此を以て、無上の正道に迴向すべし。煩惱の火中より、衆生を救脫せんには、汝當に勇猛なるべし、何ものか極苦惱ならん。應當に布施調柔を修行せんには、佛道を成ずるを得んこと、疑有ること無きたり。若し我れ、無上の菩提を成ずるを得んに、汝衆生に於て、飲食を給施せよ。我れ時に汝に、勝菩提の記を授けん、汝當に堅固の誓願に安住すべし」と』。

爾の時功德天、地藏菩薩摩訶薩に語つて言はく『善男子、我れ爾の時に、因陀羅幢相王佛の所に於て、是の如き願を作しぬ「乃至我れ世間に住し、其の久近に隨ひ、種種に精勤して、難行苦行し、布施調伏、禁攝[二六]・放逸、及び諸の禪定と、衆事を營助すると、多聞と捨の行とを、皆悉く修習し、有らゆる種種の、捨て難きを能く捨せん。是の我が父の如く、當來の世に於て、人壽百歲、煩惱忿諍もて、穢濁迷惑ある惡世界の中に、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん」と。

『我れ彼の國中に於て、現に功德主と爲り、釋迦牟尼佛の境界の衆生、及び其の眷屬に於て、無上の衣服・飲食資身の具を施するを得、即ち釋迦牟尼佛の前に於て、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを得つ。若し彼の衆生、暴惡麁獷にして、慈愍の心無く、亦惡行と惡心とを反復する無く、是の如き種種の諸惡を成就し、風雨時ならず、或は復旱[二七]潦し、寒熱不調にして、諸の災變を作し、衆生の有らゆる、諸華果實、五穀藥草、及び諸の善味など、悉く皆殄滅し、其の精氣を奪ひ、

【二六】禁攝。禁戒を以て攝受するなり。

【二七】潦。大水なり。

時に功德天、是の如き言を作せり『是の如く、是の如し、仁者の說く所の如くなり。唯願はくは、我れ本の因緣を說かんことを聽したまはんを。我れ往昔を念ずるに、無量の劫を過ぎて、我れ釋迦牟尼佛と共に、菩薩行を修して、同じく誓願を發したり。「汝若し能く、無上の道を成ずるを得たらん時、願はくは我れ、彼の四天下中の、功德處に到り、功德處を得已つて、一切の衆生中に於て、其の所須の衣食の具に隨ひ、悉く皆給與せん」と。

『仁者善く聽け、過去世に於て、無量の劫を過ぎ彼の時に佛有り、因陀羅幢相如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號したるが、世に出現したまひ、人壽千歲なりき。彼の時、優婆塞有りて、光無垢德と名け、聰慧にして調柔、多聞にして無畏、四衆の爲に、法を說くに、衆の歸伏する所、多く眷屬有りき。彼に長子有り、無垢德と名けたり。卽ち偈頌を以て、其の父に問ひて曰はく

「父今何の故に、勤心して下らず、其の事業と、及び自の身命とを捨つる。　衆生を護らんが爲に、勇猛に勤を增し、何の故にか此の身に、滅度をば取らざる」

『爾の時光無垢德、復偈頌を以て、子に報へて言はく

『吾れ世の苦を見るに、癡迷の衆生、生老病死のために、逼迫せられ、煩惱の火熾にして、惡道に沈流す、故に我れ勇猛に彼の火を滅せんと欲す。又智減少して、未來を見ず、生死の河と極重の惡處とに墮し、惡道に對して、正路を迷失す。彼を救度せんが爲に、この故に我れ修行す。又布施と[三五]調攝とを、成ずる能はず、而も常に、人天の安樂を遠離し、善知識に於て、常に相乖背す、願はくは衆生に、出世の要路を示さんと。　煩惱の獄中には、常に衆生を係く、眼目有ること無く、復救ふ者も無し。　惡見に執着して、血・肉を噉食す、彼を除かんが爲の故に、この故に我れ修行す。我れ衆生に於て、是の如き悲念もて、一一の人の爲に、阿鼻獄

【三五】調攝。調伏して攝受するならん。

上涅槃に入らん。

『是の如く清淨智、彼の菩薩摩訶薩は、是の如き大堅固の鎧を被、最初に禪波羅蜜の本業を修習し、能く欲界を過ぎて、禪の分を了知し、五支を斷除して、五支を成就し、乃至四神足に遊戲し、善能く一切の佛刹に往詣し、迅疾なること電の如く、一切の諸佛を供養し、正法を聽聞し、衆生所有の三道――所謂煩惱道・業道・苦道――を乾渇す。是の如く清淨智、菩薩摩訶薩は、禪波羅蜜を滿足し已りて、便ち能く六波羅蜜を滿足し、六波羅蜜を滿足し已つて、速に阿耨多羅三藐三菩提を得るなり』と。

爾の時、世尊、是の禪波羅蜜の本業を說きたまへる時、彼の衆中に於ける五萬の衆生――曾て過去に此の法を修行したり。是の故に今、無生法忍を得、八萬四千の菩薩、首楞嚴三昧を得、九萬九千の菩薩、禪波羅蜜を滿足するを得、無量無邊の衆生未だ曾て發さざりし無上菩提の心を發し、是の心を發し已つて、不退轉地に住したり。

須彌藏分第十五　滅非時風雨品第三

時に地藏菩薩摩訶薩、功德天に告げて言はく『清淨智、汝今當に此の四天下の、端嚴殊妙にして、一切菩薩の、應に供養し憶念し守護すべき所、其の長夜に於て、應當に恭敬すべきところなるを觀ずべし。今釋迦牟尼佛は、一切の菩薩摩訶薩を集めたまへる故に、一切の菩提の道を顯示し、不退轉輪を行じ、善巧方便と佛灌頂地を究竟したまふ。乃至汝檀波羅蜜を行じ、最上不退轉の行を滿足すべし。若し汝是の如き最上の福田に於て、諸の飮食を以て、供養を修せんに、此の精勤を以て、速に能く六波羅蜜を滿足し、六波羅蜜を滿足し已り、則ち能く究竟して、一切種智に安住せん』と。

に説く所の如く、獲得せしめんと欲し、然る後、無語言・一切法空三昧に入る。

『彼の菩薩摩訶薩、此の三昧に入る時間、乃至佛刹に、要期する所の衆生の分齊に隨ひ、彼の菩薩、福德・智慧・三昧の力を以ての故に、定に住する時に隨ひ、上に説く所の如く、種種の資生、及び諸の樂を具し、乃至未だ定を出でざる來、諸の衆生をして、悉く皆獲得せしむ。

『彼の菩薩、此の定に入る時、身の苦・心の苦有ること無く、亦飢渴も無く、火も燒く能はず、水も漂す能はず、※乃至劫火も害する能はざる所、及び劫水も亦爛らす能はず、風災の爲に散壞せられず、又復疫病・飢饉・刀兵等の爲に、其の命根を劫盡せられず。滅度を取らんと欲せんに、竟に隨つて自在なり。又人・非人の毒風・暴熱も、侵惱する能はず。

『又彼の菩薩、定に在つて未だ起たざるに、其の所念に隨ひ、無量の佛刹をして、一微塵に入らしめんと欲し、又復十方國土の、一切の諸佛、及び大菩薩・聲聞・眷屬をば、一爪甲に於て、悉く能く見るを得て、遺餘無からしむ。又一切の衆生をして、一毛孔に入らしむるに、彼の衆生、自の境界に於て、悉く見ること故の如し。又十方世界の無量の佛刹の、有らゆる諸風をも、菩薩悉く一毛端に入り、風の境界に隨ひ、虚空を遊行し、廣狹に去來するに、諸の障礙無からしめ、彼の毛端に於て、亦增減無きこと、本の如くにして異る無し。又十方の一切諸佛の世界の、有らゆる水界をも、菩薩は能く、一豆稭に入らしめ、水の廣狹に、流注往來するに隨つて、亦障礙無く、彼の豆[二四]稭に於て、增減無し。

『又彼の菩薩、復胎に處せず――自の願力によるを除く、惡趣に生ぜず、女形を受けず、下劣に生ぜず、諸根具足して、終に缺減せず、身口意の行に、過失有ること無く、亦無佛の世界に生ぜず――自の願力により、衆生を化せんが爲なるを除く。是の菩薩は、常に佛を見、法を聞き、衆僧を供侍することを遠離せず、亦福德・智慧の無畏の方便もて、衆生を敎化することを遠離せず、乃至無

※劫火、次の劫水及び風災と共に大の三災と稱せられ、壞劫の時、この世間を破壞する災害なりとせらる。詳しくは倶舍論一二、婆沙論一三三以下參照。

【二四】稭。秸なり。

界、及び四天下と、此の佛世界との、一切の衆生の諸有の所須・資生の具をして、其の相貌に隨ひ、其の多少に隨ひ、其の所樂に隨はしめんと欲す。所謂飮食・衣服・臥具・瓔珞莊嚴の具、園林・屋宅、形色・相貌、支節[三二]・身分、可愛の色・聲・香・味・觸等なり」と。是の如き等の事を見んと欲し、是の時菩薩、便ち此の三昧に入る。菩薩此の三昧に入り已るに、其の時節に隨ひ、此の佛世界・四天下の一切衆生、上に說く所の如き、所須の具をば、充足するを得たり。

『或は復、是の念を作す「我れ定に住する時節の遠近に隨ひ、諸衆生の、多少の分齊に隨ひ、衆生身心の病――謂はく風・黃[三三]癃等の分の病、――と、或は人・非人の所作を除かんと欲す。是の如くして、貪瞋癡等の煩惱の諸病を滅し、及び十不善業を滅して、十善業道の中に住せしめんと欲す」と。便卽此の三昧に入り、彼の菩薩摩訶薩、其の定に住する時節の久近に隨ひ、其の所爲の多少に隨ひ・衆生は、上に說く所の如き身心の病苦など、悉く皆除滅したり。

『又菩薩、復是の願を作す「我れ定に住する時節より已來、地獄の種種の苦、畜生の中の、互に相殘食する等の苦、閻魔羅界の、飢渴等の苦、及び寒熱の苦、怨憎會の苦、愛別離の苦、求不得の苦を滅せんと欲するに隨ひ、願の分齊に隨ひ、諸の衆生をして、一切の苦惱及び不善の法を離れ、一切の善法を成就し、諸の衆生をして、慈心もて相ひ向ひ、利益の心、不動の心、無怨の心、無諍の心、無鬪訟の心、哀愍の心、乃至禪正受善住の心、不迷惑の心、及び衆生の愚惑を滅するの心を生ぜしめ、又衆生の常見・斷見及び諸見の聚を滅し、三寶の所に於て、恭敬供養して、希有の心を生じ、諸の衆生をして、四顚倒を離れ、四不顚倒に住せしめ、四聖諦及び第一義諦に於て、心善く安住せしめん」と。是の如く菩薩、福德・智慧・善巧方便の力のために、加持せらる。菩薩爾の時、衆生を化する因緣の爲の故に、三昧に入らんと欲し、乃至未だ三昧より出でざる已來、此の國土及び閻浮提の四天下、乃至此の一佛刹の有らゆる衆生をして、其の分齊に隨つて、安樂の事をば、上

この菩薩を出すも、說話の連絡、前後妥當ならざるものあり。或は多少の脫文あらんか。

【三二】支。麗本肢に作る。今三本に依る。

【三三】癃。心病なりといふ。

く九十九那由他百千の毛孔の門の、一一の毛孔の中に、出入の息の生滅を觀察し、出入の息の生滅と、相應して住するを觀察す。

『若し菩薩、毛孔の小相を觀ぜんと欲すれば、但だ毛端に、息の從つて往來するを見て、即ち能く小を見る。若し大を見んと欲すれば、便ち能く芥子許の如きを見るを得、若し[18]菴摩勒果許の如きを見るを得んと欲すれば、即ち能く見ることを得、若し能く[19]頻螺果許を見るを得んと欲すれば、亦即ち能く見、若し一由旬・千由旬乃至一の四天下を見るを得んと欲せんに、一一の毛孔に、之を觀察し、廣を見んと欲するに隨ひ、即ち能く廣を見るなり。

『彼の時菩薩、是の如きの念を作す「衆生は眼の迷惑を以て、生死に係縛され、相續して斷ぜず、生死の流に漂ひて、種種の苦を受くるなり」と。菩薩復是の念を作す「我れ今、一切の色想を棄捨して、已に無言三昧を得・諸の聲聞辟支佛地に非ず。彼の地界に於て、亦無所得なり。

『水界・火界・風界・虛空界・識界も、亦無所得なり。陰・界・入を[20]得ず、前際に非ず、後際に非ず、此世に非ず、他世に非ず、善業の報に非ず、惡業の報に非ず、生に非ず、滅に非ず、煩惱有るに非ず、煩惱を離れたるに非ずして、所得有ること無し」と。菩薩是の如くにして、寂滅の住に住するなり。

『彼れ若し、無量劫に於て、此の一切法の、語言無き空三昧に於て、若しは住し、若しは加ふるを得んと欲せんに、菩薩是の如く、自智加持三昧力の故に、便ち能く此の一切法の、無語言空三昧に於て、無量劫のあひだ住し、亦能く六波羅蜜を滿足す、衆生を成就する因緣の爲の故に。

『清淨智、是の如く、[21]地藏菩薩摩訶薩は、此の一切法の、無語・言空三昧に於て、自在の彼岸に到りぬ。是の菩薩、此の三昧に入らんと欲したる時の若き、福德智慧の力を以て、衆生を成熟せん爲の故に、先づ是の願を作す『乃至我れ未だ、三昧を出でざる已來、此の時中に於て、此の國土の境

【一八】菴摩勒(Amalaka)。餘甘子といふ。經論中、明瞭なる譬として、掌中の菴摩勒果の如しと云へば、一握の大さなるべきか。

【一九】頻螺。また頻婆(Bimba)慧苑に依れば、此の方の林檎に似たりといひ、瑜伽略纂には、吉祥果なりといふ。拳大の果なるべし。

【二〇】得。麗・宋二本行に作る。今元明本に依る。

【二一】地藏。梵に Kṣitigarbha 乞叉底蘖婆、忉利天に在って、釋迦如來の付囑を受け、毎日晨朝に、恒沙の禪定に入って、衆機を觀じ、二佛の中間、無佛の世界に於て、六道の衆生を教化する大悲の菩薩なり。安忍不動なること、大地の如く、靜慮深密なること、秘藏の如くなれば、地藏と名くと。本文には、是に突然

ち能く、餘の五波羅蜜をも滿足するなり。清淨智、此の菩薩摩訶薩は、一切の出入の息の中、及び五受陰に於て、其の生と滅とを觀じ、既に觀察し已つて、渴愛を消竭し、聲聞決定聚の中に墮せず、四神足に於て、神通に遊戲し、善能く一切の佛刹に往詣すること、迅疾にして電の如く、諸佛の所に於て、供養聽法し、一切衆生の三道を乾竭す――謂はく煩惱道を業道と苦道となり。欲界を出づと雖も、欲界を捨せず、衆生を化せんが爲の故に、現に諸趣に生れて、胎の爲に染せられず、衆生煩惱の羅網を斷除し、然も衆生に於て無所得なり。

『清淨智、此の菩薩摩訶薩は、出入の息に隨ひ、各各別觀す。[一六]但だ新は非なるが故に、如實に了知す。是の如くにして、出入の息中に、色受の陰を如實に了知し、受・想・行の陰も、亦如實に了知す。是の如く、出入の息中に、識受の陰をも、如實に了知し、出息の異と入息の異とに於て、出息の異を知り、入息の異を知り、入息の異の中に、受・想・思・觸・念を知り、出息の異の中にも、受・想・思・觸・念を知ること、亦復是の如くなり。入息の受の時は、出息の受に非ず、出息の受の時は、入息の受に非ず。是の如く三有輪轉して、受・想・思・觸・念の因緣の故に、相續して斷ぜず、生死の海に漂ひて、渡る能はず、數數生じ老し死し已つて、還生じ、如實に此の法を覺知する能はず、如實に彼の生死を出づる能はず、出入の息に於て、如實に觀察する能はざるなり。

『復次に、是の如き出入の息は、[一七]九瘡の門に於て、出入往來す。是の如く九十九那由他百千の毛孔の門は、一切皆悉く、息出で息入る。而も九十九那由他百千の毛孔は、不增不減にして、過去に非ず、未來に非ず、初に非ず、中に非ず、後に非ざるを覺知する能はず、住を知らず、出を知らざるなり。

『復是の念を作さん「我れ今、一切の毛孔の、出息と入息との、生滅の方便もて、應に生滅の相と、相應して住すべし」と。是の菩薩摩訶薩は、九の瘡門の、出息入息の生滅に隨つて觀察し、是の如

【一六】本文に但新非故とあり。

【一七】九瘡。また九孔といふ、兩眼、兩鼻、兩耳、口と兩便道となり。

他の賊の爲に、却害せられず。二には亦惡賊・毒獸・蚊虻・蝗蟲等無けん。三には旱潦及び非時の風雨、寒熱等の觸有ること無けん。四には土地平正にして、諸の丘墟・谿澗・崘壙など無けん。五には彼の國の一切の種子、五穀・諸藥・草木・林樹など、蓊蔚として茂盛し、諸の辛苦・澁惡等の味・華・果無からん。六には諸の惡聲・鬪諍・返逆・飢饉[一五]、病患及び非時の死無からん。七には彼の國の衆生、長命端正にして、豐盈に適樂し、穢濁の心無く、快樂に遊戲し、如法に修行して、天上に生れん。八には其の國土の中は、諸の福田依住する所となり、禪定三昧を愛樂し隨順せん。九には彼の國土の衆生、飲食の須つ所は、悉く皆乏しき無く、上妙可愛の資成の四大は、根・性に稱順して、増長すること無違ならん。十には其の土の人民、勇健强記にして、慈悲の心あり、命終しては天に生れん。清淨智、此の十種の法は、善能く彼の國土を莊嚴す。

『清淨智、此の菩薩摩訶薩は、業の障礙を以て、大乘を捨離し、聲聞地に住し、達して衆生を化す。此は是れ聲聞の禪波羅蜜遊戲三昧なり。聲聞は此を以て禪分を了知し滿足し、三界の窟宅、及び諸有の縛を出で、五支を斷除して、五支を成就し、三界を越過して、無學地に住し、神通に遊戲し、八解脱に到り、禪定の彼岸に、一劫のあひだ修行して、一切諸佛の子と爲るを得、佛口より生じ、法より化生せん。彼れ是の如くなりと雖も、猶ほ故のごとく、諸佛の土に往き、諸佛を供養し、佛より法を聽く能はず、亦復衆生の三種の道を乾竭する能はざらん。若し能く是の如く、三昧に遊戲すれば、其の所住の國土に隨ひ、上の如き大功德の利を獲得せん』と。

須彌藏分第十五　菩薩禪本業品第二

爾の時佛、功德天に告げて言はく『清淨智、云何が菩薩摩訶薩は一切の聲聞・辟支佛と共ならざる、禪波羅蜜の本業の差別を滿足するとならば、若し菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を滿足し已らんに、便

【一五】饉。麗本儉に作る、今三本に依る。

無からしむ。彼には相有ること無く、語言有ること無く、狀貌有ること無く、假名有ること無く、三行寂靜、極寂靜、寂靜、寂滅にして、無緣三昧を得。此の是の如きを、禪定に遊戲する禪波羅蜜の本行とは名く。

『諸の菩薩摩訶薩、一切の聲聞辟支佛と、禪の本業を共にし、若しは此より以下の精進に住すれば、或は須陀洹果、或は斯陀含果・阿那含果を證し、或は乃至阿羅漢果に住せん。若し菩薩、堅固の精進・大悲の心もて、一切の衆生を顧念せんに、無量の福德智慧の聚、之が爲に疲勞せん。彼の菩薩摩訶薩は、是の如き禪の本業に於て、三昧に遊戲し、方便に安住すれば、阿耨多羅三藐三菩提を退せず、聲聞決定の衆中に墮せず、禪定本業の大鎧を捨せず。

『彼の菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を滿足し、禪波羅蜜を滿足し已りて、便ち能く六波羅蜜を滿足す。清淨智、乃至若しは國土中に、或は比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷あり、聲聞の乘に趣かんと欲し、緣覺乘に趣かんと欲し、或は大乘に趣き、或は善男子・善女人あり、是の如き禪の本業に於て、三昧に遊戲し、係念思惟せんに、所住の處に隨ひ、彼の國土の一切天王など、常に善く守護し、一切の龍王、一切の夜叉王、一切の阿修羅王、一切の緊那羅王、一切の摩睺羅伽王、一切の餓鬼王、一切の毘舍闍王、一切の羅刹王等、當に善く彼の國を護るべし。

『若し國土中に、是の如き禪相應福田の住する有らば、彼の國土の彼の刹利王は、十種の愛樂すべき法を得ん。』何等をか十と爲す。一には安隱に一切の患を滅せん。二には長者ならん。三には上妙の色を得ん。四には皮膚鮮軟ならん。五には支節愛すべからん。六には善眷屬を得ん。七には能く善業を修せん。八には念を係けて、慈悲方便あらん。九には恒に名稱と福器と相應せん。十には命終して天上に生ぜん。是を十と爲す。

『又彼の國土には、復十種の殊勝なる利益を成就するを得ん。何等をか十と爲す。一には自の賊・

「我れ一切衆生を利益せんが爲に、大鎧を被服し、禪定を勤修したり。我れ今應に身の樂を捨せん」と。彼の菩薩摩訶薩、出入の息を止め、相續［四］攀緣の心を捨し、意を鼻端に係け、出入の息に於て、心を住めて觀察せん。又彼の心、剎那に散壞するを觀じて生を知り滅を知らん。又彼の心は、剎那の相にして、應に散壞すべく、生無きこと、水中の月の如く、光影の如く、陽焰の如く、電の如く、心意識と一切の陰界入とは、泡の如くなるを知る。是の故に身の樂を棄捨し、彼の法の生滅を思念して、第四禪に入るなり。

『爾の時、卽ち是の如き相の起る有り、菩薩復、目を閉づと雖も、大日光の如く、照見すること明了なり。彼の菩薩は、是の念を作す「此の攀緣光明の相を以ての故に、一切の衆生、陰界入など、不斷にして、增長すること熾然たり。我れ今、應當に、心念もて、攀緣の光明を止むべし」と。彼れ復此に於て、滅の方便を以て、受・想・思・觸・憶集生滅を捨し、勝淸淨善寂滅の城に入り、身口意の業を住止す。

『彼の菩薩、還定より起ち、出入息の相を取り、觸念の相を觀じ、還空定に入り、空定より起ち、復出入息の生滅攀緣の相を觀じ、便ち無願三昧に入り、無願三昧より起ち、出入息の寂滅を見て、無相定に住し、是の如くして、則ち能く四念處、及び三解脫門を修滿す。

「彼の菩薩、出入息の生滅を觀じ、生滅を觀ずるを以ての故に、四正勤を修すること滿足す。彼の菩薩、出入息の出沒する相を觀ずるを以て、便ち能く具に、四神足を修滿す。彼れ出入息を觀ずるが故に、卽ち能く其の身を散壞すること、猶し窓の塵の如し。爾の時、卽ち五根を修滿することを得、出入息出沒の方便を以て、三行を觀察し、是の如くして、便ち能く五力を修滿す。彼れ出入息受想の方便を除くを以て、觀察して寂滅を除き、是の如くにして、七菩提分を修すること滿足す。彼れ出入息・風の方便を以て念じ、一切の大地界、及び一切の色などを散壞して、悉く皆餘

【四】攀緣。心に獨り起らず、必ず所對の境あり、彼に攀ぢ緣りて起るをいふ。

を滿せるを以て、衆生の爲の故に、能く如來應正遍知の所に於て、此の義を問へるなり。汝清淨智當に至心もて聽き、善く之を思念せよ、我れ今汝の爲に、分別して演說せん』と。

功德天の言はく『是の如し世尊、我れ當に聽受すべし、唯願はくは之を說きたまはんことを』と。

是に於て世尊、功德天に告げて言はく『清淨智、汝所問の如く、云何が菩薩摩訶薩は、最初に禪波羅蜜の本業を修學し、學し已つて禪の分を[一]知り、能く欲界を過ぎて、五支を斷除し、五支を成就し、四神足に於て、神通に遊戲し、善能く一切佛刹に往詣して、迅疾なること電の如く、一切の佛所に於て、供養聽法——衆生三種の道を竭さんが爲の故に。何等をか三と爲す、謂はく業道・煩惱道・苦道——し、能く修道所作の福事を生じ、禪波羅蜜を滿足し、禪波羅蜜滿足の故に、六波羅蜜を具足し、六波羅蜜を滿足し已り、速に阿耨多羅三藐三菩提を得る。

『清淨智、此の菩薩摩訶薩、初めて禪定を修するや、一切出入の息の相に於て、心を係け念を緣ず。彼の菩薩摩訶薩は、不亂の心を以て、出息・入息す。入るに隨つて息心に觸る。彼の入息・心に觸るるをば、名けて[二]覺と爲す。出すに隨つて息心に觸る。出すに隨つて息の、心に觸るるをば、名けて觀と爲す。乃至・喜樂、一心、あつて心を亂さず。將に欲界を出でんとすれば、覺・觀を離れ、貪欲及び瞋恚蓋を斷除し、一切の惡法を伏すべし。初禪を得れば、覺有り觀有り、彼の時卽ち、是の如き相の起る有り。[三]一切の身分、悉く皆震動して、身に充遍す。

『若し菩薩、增上勇猛にして、係念・專注せんに、彼の時、便ち能く覺・觀を滅し、喜と樂と一心とにして、第二禪を得、喜の過を除かん爲に、精勤して止まざれば、既に喜を滅し已つて、第三禪の樂を得ん。菩薩爾の時、其の身適樂にして、猶ー煖乳を、以て身體に灌ぐが如く、希有の樂を得んこと、天の身想の如くなり。

『彼れ是の如き勝樂を成就するを得て、三寶の中に於て、信心を增上するを得、復是の念を作す

【一】知。原文は智に作るも前の文に知とあれば、恐らく知の誤なるべし。

【二】覺等。覺以下の觀・喜・樂・一心の五を五支とす。これ初禪の特質をなすものなり。

【三】一切の身分云云。初禪に入る其の未至定（Anāgamya）に在つて、自心の微に動搖するを感じ、或は微痒を感ず、卽ち動痒輕重、冷煖澁滑の八觸を發すをいふ。これ色界の四大の極微と欲界の夫と轉換するが爲に、此の觸相を發すなり、これ初禪に入りたる相なり。

計する衆生に於て、大悲の心を起し、復是の念を作す「我れ當に彼の常を計する衆生を化すべし。我れ是の如き、持戒の鎧甲を以て生死の大海を度し、乃至灌頂法王の位を受くるを得しめんと欲す』と。是の諸の菩薩、持戒福事の行、及び十善道を以て、衆生を成熟し、無上諸佛の大海に入らしめ、乃至灌頂法王の位に安置せん。

『世尊、此に復衆生有り、十善道を行じて、而も淸淨ならざれば、殺・盜・婬、乃至貪・瞋等に於て、身見の衆生、福德智慧減少なるが故に、貧財知乏にして、勤苦して追求するも、得る能はざらん。彼の諸衆生、若し出家淸淨の戒を以てせざれば、以て成熟する無けん。是の故に菩薩摩訶薩は、彼の殺・盜・婬・妄語・兩舌・惡口・綺語、貪瞋等の、身見惡行の衆生の所に於て、大悲の心を起し、無常の方便を以て、諸の衆生をして、佛法の中に入らしめ、出家の戒を以て、衆生を成熟せしむ。此は卽ち是れ、我が忍と進との鉀冑なり。是の出家の戒を、卽ち船筏と爲して、生死の海を渡るなり。是の緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、持戒・福德及び無常の方便を以て、出家　律儀戒の衆生を、敎化し成熟す。彼の菩薩、是の業を以ての故に、乃至無上諸佛の大海に入らしめ、乃至灌頂法王の位に安置し、菩薩摩訶薩、便ち能く自ら無上諸佛の大海に入るなり』と。

爾の時、功德天、佛に白して言さく『大德婆伽婆、云何が菩薩摩訶薩は、最初に禪波羅蜜の本業を修學し、學し已つて諸の禪の分を知り、能く欲界を出で、〔一〇〕五支を斷除して、五支を成就し、四神足に於て、神通に遊戲し、善能く一切の佛刹に往詣するに、迅疾なること電の如く、一切佛所に於て、供養聽法――衆生三種の道を竭さんが爲の故に、何等をか三と爲すとならば、謂はく業道と煩惱道と苦道となり――し、禪波羅蜜を滿足するや。云何が禪波羅蜜を滿足して、六波羅蜜を具足し、六波羅蜜を滿足し已りて、速に阿耨多羅三藐三菩提をば得るや』と。

佛の言はく『善い哉、善い哉、淸淨智、汝淸淨智は、此の法中に於て、疲勞を爲して、此の法行

【七】身見。衆生の身に於て、實の我ありとする見解なり。薩迦耶見(Satkāyadṛṣṭi)とひ、種種に譯せらる。

【八】貲は貨財の謂。

【九】律儀戒。諸の〔法〕律儀〔則〕を守つて、過非を離るる戒行。

【一〇】五支。卷十二、註六、參照。

卷*の第五十七

高齊天竺三藏那連提耶舍譯

須彌藏分第十五　聲聞品第一

十方一切の諸佛に南無したてまつる、

是の如く我れ聞く、一時婆伽婆、佉羅帝山に住し、牟尼仙の住處に依りたまひ、大聲聞衆——衆數を過出し、一切皆是れ佛の大弟子なる——の與に、大菩薩衆——無量無邊にして、悉く十方の諸佛世界より、來つて集會せる——の與に、次第に梵翼記分を究竟したまへり。

爾の時、衆中に、佛を去ること遠からずして、功德天有り、佛前に住し、法を聽かん爲の故に、卽ち座より起ち、合掌して佛に向ひ、佛に白して言さく『大德婆伽婆、諸の菩薩有りて、施福の船[一]䑐を以て生死の海を渡す。何を以ての故にとならば、此の佛の世界は、五濁もて極めて穢れ、多衆生有るも、功德智慧、悉く皆減少す。是の因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、此の衆生に於て、大悲の心を起したまへばなり。又此の衆生、[二]無因論を說き、資財短乏して、勤苦して追求すれども、得る能はず、是の諸の菩薩、若し施を行ぜざれば、彼の罪惡の衆生をば、化する能はず。是の故に、諸の菩薩、是の如き念を作す「我れ今、[三]檀度の鎧を被り、大精進を起し、汎く船䑐を施して、生死の海を越えしめん」と。是の諸の菩薩摩訶薩、布施福德の事を修行して、諸佛無上の大海に入り、乃至最上[四]灌頂法王の位に入らしむ。

『世尊、復衆生有り、[五]計常見に在れば、廣く資財に乏しく、身を苦しめて求索するも、亦得る能はず。菩薩若し、戒と施とを修行せざれば、則ち彼の衆生を成熟せず。是の故に菩薩摩訶薩[六]常を

※卷第四六—五六の十一卷に就ては大集部第三の八頁參照。

【一】䑐。海中の大船。
【二】無因論。無因有果の執なり。卽ち萬物は因なくして、自然に有りとする執見をいふ。
【三】檀度。檀は檀那（卽ち施）の略。度は波羅蜜の譯。
【四】灌頂（Abhiṣecani）。印度に在つては、國王卽位の折、四大海の水を以て、その頂に灌ぎ、祝意を表す。この習慣により、法王の位に卽く者も、亦灌頂の式を受くるものと考へられ、灌頂法王と云ふなり。密教にては灌頂の式を行ふ。
【五】計。妄念を以て、邪に道理を推し量るをいふ。
【六】常。常見なり、凡ての物は常住なりとする見解。

不捨を行ぜん。復次に龍王、若し國土有り、此の經を抄寫せんに、其の中の衆生、常に慈心を生ぜん。復次に龍王、若しは居家、乃至國土に、此の經を抄寫する有らんに、其の中の衆生、常に人・天に生れて、惡道に入らざらん。

『大王、是の如く、日藏大授記經は、何の國土なりとも、如法に抄寫し、安置・供養して、數數讀誦するに隨ひ、具足して此の十種の利益を得ん。何を以ての故に、若し此の日藏經を讀誦して、如說に行ずる者有らんに、彼の福德の聚は、百劫の中、說くとも盡すべからざればなり。龍王、此の日藏大集大授記經は、是の如く甚深にして、能く大願を滿し、能く大に利益す』と。

是の經を說き已りたまふに、十方の佛刹の諸來の菩薩、此の三千大千世界なる、娑婆國土に到り、大に集つて聚合し、幷に此の菩薩摩訶薩衆、乃至魔王・天龍・夜叉・羅刹、阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽、鳩槃茶餓鬼、毘舍遮・富單那、人非人等、分に隨つて悟解し、心を滿足し、皆大に歡喜して、各供養を設け、僉然として住しぬ。

大方等大集經卷第四十五※

※卷第五十五以下に「月藏分」有るべきなれど、都合によつて、大集部第四に出でたり。

五穀豐饒にして、種種の資生・錢財・寶物など、悉く皆具足せん。復次に龍王、若しは宅內、或は復衆の中に在つて、此の日藏大授記經を抄し、抄し已つて供養せんに、其の處所に於て、則ち六十億の菩薩摩訶薩、數來つて、此の經を禮拜供養せん。是の因緣を以て、種種の惡事・鬪諍・疾疫、種種の惡病、穀米※の貴儉なること、國土の饑荒、他方の賊盜、非時の風雨など、一切皆滅せん』と。彼の六十億の菩薩摩訶薩など、佛に白して言さく『世尊、我れ當に、種種に擁護供給して、心に稱ふことを得しめん』と。

『復次に龍王、若しは家內、或は大衆の中に、此の日藏大授記經を抄して、如法に安置すること有らんに、彼の帝釋天、及び諸の梵天・四天王天、二十八夜叉大將、幷に其の眷屬、乃至大德天幷に其の男女、娑羅娑陀天、牢固地天、善住樂天など、一切の眷屬、皆其の國に至り、日夜至心に、常に守護を加へ、其に安樂を與へん』と。

時に帝釋天、乃至善住樂天等、是の語を聞き已り、是の如き言を作せり『是の如し、是の如し。我及び眷屬は、常に當に至心もて、往いて彼の國を護るべし』と。

『復次に龍王、若しは居家、乃至國土に、此の經を抄寫する有らんに、福德天[二八]人の、過去世に於て、多佛を供養し、布施・持戒したる、是の如きの人、彼に於て生を受けん。復次に龍王、若しは居家、乃至國土に、此の經を抄寫する有らば、其の中の衆生、精進勇猛にして、五欲を樂はず、常に檀那波羅蜜、乃至般若波羅蜜を行ぜん。復次に龍王、若しは居家、乃至國土に、此の經を抄寫する有らば、福田の衆生、常に樂んで安住せん。

『復次に龍王、若し國土有り、此の經を抄寫せんに、其の國には、常に種種の善法有りて、雨の如くに下らん。

復次に龍王、若し國土有り、此の經を抄寫する有らんに、其の中の衆生、十善の業に於て、常に

※儉、乏しきなり、豐らざるなり。

【二八】人。麗本下に作るも、今三本に依る。

羅略修多羅を、一心に奉持し、諸の衆生の爲に、廣く分別して說かん』と。

時に衆の會せる魔・天・龍王・夜叉・羅刹、阿修羅・迦樓羅、緊陀羅・摩睺羅伽、鳩槃荼・薜荔多・毘舍遮など、現に集に在る者、悉く是の如くに說けり『不可思議なり、釋迦如來の、能く是の如きを作して、衆生を利益したまへることや』と。各大に歡喜し、種種の音樂、種種の寶、種種の衣、種種の瓔珞・花鬘、燒香・塗香などを以て、空より散じ、如來を供養したり。

是の時、娑伽羅龍王、佛に白して言さく『世尊、惟願はくは如來、暫く海中に入り、我が家內に住し、我が微供を受けたまはんことを――我を憐愍したまふが故に。若し佛如來にして、我が宮に至りたまはば、我の眷屬は、一切皆、此の日藏授記大陀羅尼を聞くを得ん』と。

時に娑伽羅龍王、復佛に白して言さく『世尊彼の大海中の一切の男女にして、若し此の大乘日藏大授記經を聞くことを得、專心に聽かんには、幾許の福をか得る』と。

佛の言はく『龍王、若し善男子、四天下の、中に滿つる七寶を以て、如來に布施せんも、復衆生有り、具足して、此の大乘日藏大授記經を聞き、一心に聽かんには、前の福德の、百倍も及ばず、百千億倍も及ばず、乃至算數の及ぶ能はざる所なり。大王、若し是の甚深の經典を聽く有らんに、其の福量り難し』と。

爾の時、娑伽羅龍王、復是の言を作す『若し佛世尊にして、大海に入りたまはずんば、我れ當に此の日藏授記大集經典を抄して、我が宮中に置くべし。是の因緣を以て、彼の海中に於て、幾許の諸龍か、福德增長する』と。

佛の言はく『龍王、有らゆる處に、此の日藏大授記經を抄し、如法に安置して、恭敬供養するに隨ひ、則ち能く十種の利益を獲得す。何等をか十と爲す。若し人有り、能く如法に此の經を抄寫し、一心に供養せんには、其の家內をして、一切吉祥ならしめん。若しは衆中に在つて、大自在を得、

云何が心相なる。乃至行の差別を知り、作し已つて涅槃の道に入り、凡夫地を過ぐるを、生死を出づと名く。禪定の中に於て、心能く除却する、此を則ち思と名く。

『是の如く、風は不去不來なり、彼の思は、識中に是の如く依止す。眼は眼の如く、乃至意は意の如く、各相觸れず、三受盡き已るを、名けて聖人と爲す。

『是の如く、善男子、眼は是れ識の因緣に非ず、色は是れ眼の因緣に非ず、乃至意は是れ法の因緣に非ず、法は是れ意の因緣に非ず。何を以ての故にとならば、此の二境界は、遠に非ず、近に非ず、亦聚集に非ず、亦思量に非ず、亦和合に非ざればなり。何を以ての故に、不可說の故に、此岸彼岸の中に、依止せざるが故に、實際に依るが故に』と。

佛此を說き已りたまへるに、時に魔子伽羅支、二萬の眷屬は、曾て過去の佛の法中に於て、福德を修行したれば、皆順忍を得たり。復無量無邊の衆生有り、亦過去に於て、衆の德本を殖へたれば、或は初禪乃至四禪を得たり。或は須陀洹果、斯陀含果、阿那含果を得たる有り、或は當來に、小乘の中に於て、福を爲すの種子、乃至當來に、辟支佛中に、種子と爲るを得たる有り、或は復阿耨多羅三藐三菩提心を發したるも有り。

時に彼の衆中に、六十頻婆羅の龍有り、過去以來未だ曾て佛に値はざりしに、今此の法を聞いて、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。

時に此の一切の、三千大千の佛刹の大地は、六種に震動し、大動し遍動したり。一切の十方の諸來菩薩摩訶薩は、各種種の菩薩の三昧を得、三昧を得已つて、各種種の寶、種種の衣、種種の香、種種の花を以て、佛上に散じて如來を供養し、是の如き言を作せり『是の如く世尊、不可思議なり、我れ昔より來、未だ曾て、是の如き大集の、此の三昧力陀羅尼を說けるをば、見聞せざりき。此れ卽ち釋迦牟尼如來、第二の利益もて、妙法輪を轉じたまへるなり。我等今、此の日藏大授記〔二七〕鞞富

【二七】 鞞富羅(Vipula)。廣大と譯す。

名けて、氣息の入出と爲す。此を身の行と名く。彼の息は、出入・去來の動作あるも、彼・此の出・入は、各相識らず。新識若し生ずれば、舊識住せず。體性爾るが故に、聚集に非ざるが故に、亦異にも非ざるが故に。如如の中に於て、各相依らず。虛空平等なれば、風は空中を行くも、風は亦空に非ず、空も亦風に非ず。何を以ての故にとならば、彼此觸れず、各境界に非ざればなり。彼の二は、皆空にして、亦不可說なり。何を以ての故にとならば、相と離相との故に。增減無き故に、此岸及び彼岸に依らざるが故に、第一義諦は、如如に住するが故に。此を身行と名く。此の故に身行は、識の依止に非ず、亦伴侶に非ず、是れ和合に非ず、是れ聚集に非ず、常に依止せず。相と離相との故に。是の識は、亦復身に依止するに非ず、和合を離るるが故に。此を身行とは名く。

『云何が口行なる。口行の二種を、名けて覺・觀と爲す。云何が是れ覺、何者か是れ觀なる。出入の息に於て、二種の心を生じ、思惟し憶念する、是を名けて覺と爲す。乃至細心次で生じ、是の如くして漸く除き、清淨の心を得るを、亦名けて覺と爲す。是の覺は、出入に依止するが故に生じ、生じ已つて卽ち滅す。[二六]眼塵も亦復覺せず、此彼境界の相、相離るるが故に、性・相無きが故に。乃至其の長短を說くべからざる、是を名けて覺と爲す。

『何者か是れ觀なるとならば、若し人有り、冷相の身に觸るるを觀ずれば、是の中に於て行ず。或は復、熱相は一切氣息にして、皆風のごとし。彼の風の因緣もて、觸知を觀ずる、此を名けて觀と爲す。各境界を離れ、彼此の相を離れ、乃至其の長短を說くべからざる、是を覺觀と名く。

『云何が意行なる。意の行を思と名く。云何が思と名くる。一切の法を知り、乃至能く、時の出入の氣息と、非時の出入の氣息とを知り、此の出息は彼の入息に非ざるを知り、彼の入息は彼の出息に非ざるを知りて、差別を悉く知るなり。是の如く思量して、行順の相と非行順の相とを知る、此を則ち名けて、彼の風に依止すと爲す。是の如き二種は、說くことを得べからず。云何が是れ思、

【二六】眼。麗本根に作る、今三本に依る。

眼の因縁は眼識より生ず、彼の因縁の故に、色は可見なり。乃至意の因縁より意識生ず、彼の因縁の故に、法は可知なり。眼識は可得に非ざるなり。何を以ての故にとならば、餘處より來るにも非ず、餘處に去るにも非ず、眼は常住に非ざればなり。三世の中に於ては、一切皆空なり。如來の眼は、見を滿すに非ず、亦見を滅ずるにも非ず。和合の見に非ず、相離の見に非ず、亦相觸するにも非ず、亦依止するにも非ざるなり。

『譬へば日の出でて、光一切を照すが如し。其れ窓處有れば、明焔皆入りて壁土上を照らす。而も是の壁光は、是の念をば作さず「我れ暗なり、我れ明なり」と。此の光は、但に獨り、一壁に在るのみに非ずして、衆多の壁に及ぶ。因緣を以ての故に、是の光生ずること有るなり。此の壁及び光は、合するに非ず、離するに非ず。壁に因つて光を見るなり。而も此の壁光は、是の念を作さず、「日能く我を生ず」と。日も亦「我れ此の光を生ず」とは念ぜず。何を以ての故にとならば、日滅沒すれば、光も亦隨つて滅し、去處・來處一切皆空にして、一の見るべきもの無ければなり。日の因縁を以ての故に、能く照耀して、此の光色を見、光の顯赫照耀の因縁を以ての故に、見るべきを得るなり。

『彼に於て識を生ずること、亦復是の如くなり。是の[二四]内の六入は、外の六入を生じ、亦外の六入も、内の六入を生ず。外の六入は、亦因縁に非ず、内の六入も、亦因縁に非ず。何を以ての故にとならば、彼・此の性は離にして、亦聚集に非ず、亦和合にも非ず、亦依止にも非ざればなり。乃至内入外入も、彼の和合の識も、亦聚集に非ず、亦和合に非ず、亦依止に非ず。何を以ての故にとならば、各相[二五]待たずして、境界離するが故なり。

『此の法及び識は、智慧もて諸行の因縁を知見し、行の因縁の故に識有り。而も此の識の生ずるに、即ち三種の行あり、云何が三行なる、身行・口行及び意行なり。云何が身の行なるとならば、身行と

【二四】内の六入は。感覺機關としての六識なり。外の六入は是が對象たる六境をいふ。

【二五】待。麗本、持に作るも今三本に依る。

受けんと欲す。汝若し曾て、佛邊に於て惡を作したらんには、今懺悔して、三歸依を受くべし。我今汝と共に、倶に往いて佛を見まつり。禮拜供養して、至心に法を聽き、煩惱魔を斷じて、淸淨道に入り、怖畏を離れ、涅槃の城に到らん』と。

時に魔波旬、其の眷屬、八十億の衆の與に、前後圍遶せられて、佛所に往詣し、到り已つて、足に頂を接して佛を禮し、是の如き偈を說けり。

『佛兩足尊は、世中の勝たり、自ら寂滅を得たまひ、亦他に敎へたまふ、忍辱・精進もて衆生を愍みたまふに、我等愚癡にして惡意を興し、過去の諸業の行をば知らざるも、惟佛世尊は、能く了知したまふ。國土をば內身の中に苞藏して、我が心をして種種の惑を遠ざけしめたまふ。三世の諸佛は大慈悲あり、我れ禮して一切の殃を懺するを受けたまへ、法・僧の二寶にも亦復然り、至心に歸依して異有る無し。　願はくは我が今日供養する所もて、世の導師を恭敬・尊重せん、諸惡永く盡きて、復生ぜざらんを、壽を盡して如來の法に歸依しまつる』と。

時に魔波旬、是の偈を說き已り、佛に白して言さく『世尊、如來は我及び諸の衆生に於て、平等無二なり。心常に歡喜し、慈悲もて忍を含みたまふ』と。佛の言はく『是の如くなり』と。

時に魔波旬、大歡喜を生じ、淸淨の心を發し、重ねて佛前に於て、接足頂禮し、右遶三匝し、恭敬合掌し、却いて一面に住まり、世尊を瞻仰して、心に厭足無かりき。

時に彼の衆中に、一魔子有りて、迦羅支と名けたり。其の眷屬と、座より起ち、佛前に到り、接足頂禮し、長跪して佛に白して、是の如き言を作せり『世尊、云何が眼と名くる。眼は是れ色の因緣なりと爲すや、色は是れ眼の因緣なりと爲すや。乃至意・法の因緣も、亦復是の如きか』と。

佛の言はく『善男子、眼は是れ色の因緣に非ず、色は是れ眼の因緣に非ず、乃至意は是れ法の因緣に非ず、法は是れ意の因緣に非ず。善男子、眼の眼性は空なり、眼識の識性も空なり。善男子、

るが故に、四神足・三摩跋提を得しめ、能く一切の諸悪見を除くが故に、乃至能く、阿耨多羅三藐三菩提を了せしむるが故に』。而して神呪を說かく

『多経呥阿摩　阿摩婆婆　阿摩波利婆婆　三舍耶揭婆　波利婆婆　蜜多羅蜜多羅舍羅耶　蜜多羅波利婆婆　蜜多羅三森若　耶尼瞿盧陀三森若耶　摸極叉三森若耶　示利苦伽婆優婆矣羅闍　毘那舍耶　三摩舍羅耶帝羅阿那　薄迦嵐摩　婆婆迦嵐摩示利地毘迦羅婆那三摩若那阿波婆伽那羅夜那跋伽摩　薩婆多　他阿伽多地悉他那跋伽　莎呵

爾の時世尊、是の呪を說き已り、大衆に告げて言はく『此の陀羅尼をば、亦賢面と名く。一切の諸佛、加護したまふ所、能く禪定三摩跋提を生じ、能く一切の諸惡を盡し、乃至能く、阿耨多羅三藐三菩提を了す。若し今現在及び未來世に、大支提處に、若しは餘の衆有り、或は魔、或は天、或は龍・夜叉、或は復羅刹、或は阿修羅、或は迦樓羅、或は緊陀羅、或は鳩槃茶、人非人など、或は水・火・種種の惡事を以て、支提を壞せんと欲せんに、汝等應に、三世の諸佛を念ずべし。諸佛を念じ已り、彼の衆生に於て、慈悲の心を起し、是の如き大陀羅尼を誦持せんに、諸の一切の惡心の衆生をして、悉く皆除滅せしめん。若しは諸の魔王、及び人非人など、如來の所に於て、心に樂はざらん者も、悉く歡喜を生じて、恭敬供養せん』と。

時に佛、神力もて、魔波旬をして、自の宮內に於て、即ち安住するを得しめたまへるに、自然に此の陀羅尼を聞き、此の呪を聞き已つて、即ち佛所に於て、歡喜の心を生じ、大信心を得、信心を得已つて、啼泣雨淚し、諸の眷屬を集め、是の如き言を作せり。

『汝等一切、諦に聽き諦に聽け、我れ今此の大牟尼の處に於て、大忍心を得て、不動なること、山の如くなり。彼の牟尼等は、慈悲を滿足し、大光明を放ちて、一切の龍、一切の天・人、一切の修羅を照したまふ。我れ亦彼に在り、牟尼の所に於て、諸の惡を興造したれば、今懺悔して、三歸依を

佛の言はく『善い哉・善い哉、善男子、汝怖畏する勿れ。何を以ての故にとならば、過去の諸佛も、亦此處を以て、一切の龍王・夜叉に付囑したり。我も亦是の如く、此の二十の大支提處を以て、諸龍及び夜叉衆に付囑す。所以は何とならば、未來の衆生は、多く八難に在り、彼等をして惡業を盡くさしめんと欲するが故なり。慢心を薄からしめんための故なり、涅槃を樂ましめんための故なり。乃至資生の須つ所、飲食湯藥など、乏しき所無からしめんための故なり。風雨時に順じ、華果茂盛し、五穀熟成して、常に安樂ならしめんための故なり。是の因緣を以て、諸の龍及び夜叉等に付囑す。

『未來世の一切諸佛も、亦二十の大支提處に於て、林樹に經行し、坐禪苦行して、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ、乃至涅槃して、塔廟を安置せん。及び佛の弟子、法行の比丘、四果の聖人も、亦彼に於て住し、一切の天人、皆彼處に於て、禮拜供養せんに、多く功德を生じ、涅槃の道を起さん。彼の佛世尊も、亦二十の大支提處、及び諸弟子を以て、龍王及び夜叉等に付囑し、守護を加へしめん。

『善男子、我れ今汝の爲に說かんに、一切惡心の衆生、悉く歡喜を得、亦諸の三昧力を生じ、亦一切の惡邪の煩惱をも除き、大授記陀羅尼呪を得ん。此の陀羅尼は、過去未來の一切諸佛の加助隨喜するところ。此の呪は、能く惡心の衆生をして、柔軟を得しむるが故に、一切の諸福德を修せしむるが故に、習惡の人をして、心に歡喜せしむるが故に、一切の福德、皆成就するが故に、種種の大願を、彼岸に達せしむるが故に、大智慧の中に、安隱に住せしむるが故に、大聞持陀羅尼を得しむるが故に、大方便智もて、究竟を得しむるが故に、一切の怨家に、歡喜を生ぜしむるが故に、能く一切の諸災患を除くが故に、大難を出でしむるが故に、怖畏を離れしむるが故に、大事を辦ぜしむるが故に、大に諦を見せしむるが故に、大忍を得しむるが故に、大智海の中に、深遠に入らしむ

なる聖人住處には、迦葉如來も、亦彼處に於て、七日のあひだ結加し、解脱の樂を受け、七日を過ぎ已つて禪定より起ちたり。我れ時に彼の瞿摩娑羅香牟尼の住處に到り、禮拜供養したり。時に迦葉佛も、亦平等法行の比丘の、方便・坐禪・正慧を精勤し、善法を修する者を以て、我に付囑したまへり』と。

時に祇利呵婆達多龍王、佛に白して言はく『世尊、我れ誓つて此の瞿摩娑羅香の大支提所をば、常に護つて捨てざらん。乃至佛の諸弟子、法行の比丘の、精勤して善を修し、畜を受けざる者をも、我等守護せん。乃至法盡き、或は水、或は火、或は龍・夜叉、或は鳩槃茶など、彌勒佛の時には、瞋忿して惡を作さんも、是の如き時中は、我が所護には非ず』と。

佛の言はく『善い哉、善い哉、龍王、若し能く是の如く、至誠心を發さば、我が法を加護し、法母を住持し、法をして久しく住まらしめよ。是れ我が眞の伴なり、是れ好檀越なり』と。

是の時、座中に、六十億の菩薩摩訶薩、幷に及び十方の餘の佛刹中の一切の菩薩など、皆悉く娑婆世界に來集し、日藏大授記經を聽き、聞き已つて、一切同じく、佛に白して言さく『是の如し、世尊、我等今より、常に此の四天下中の、牟尼の住處に來つて、禮拜供養し、種種の華、種種の幡蓋、種種の金銀を持して、以て奉散すべし。亦復此の日藏授記惡業盡陀羅尼を持し、佛所說の如く、廣く一切衆生の爲に、之を宣說せん。我れ今自身を利し、他身の惡業を盡さんが爲の故に、菩提の道を行じ、六度を滿足す。今此の衆中に、多億の魔、及び無量阿僧祇の、天・龍・夜叉・阿羅漢・迦樓羅・緊陀羅・摩睺羅伽有り、悉く此の會に在つて、世尊を圍遶しまつる。惟願はくは如來、此の二十の牟尼聖人の住處を以て、普く皆付囑して、當來の魔天・龍王・夜叉・羅刹、及び緊陀羅・阿修羅をして、異心を生じ、此の二十の大支提處に於て、空にして守護無く、彼の惡人及び非人等をして、破毀を興さんと欲せしむる莫れ』と。

舊は衆生無かりき。一切の來れる者、皆是れ他國よりしたり。世尊、此の二十八の諸夜叉將は、護持することを肯んぜず、我れ今此を怪む。所以は何とならば、彼れ護らさるを以ての故に、我等諸龍は、惡名を得るなり』と。

佛の言はく『龍王、是の如く說く莫れ。何を以ての故にとならば、今二萬の大福德人の、四諦を見たる有り、〔三〕沙勒國より、彼に往つて住す。彼の二萬の福德の衆生、大力有るを以ての故に、此の瞿摩娑羅香山の大支提處に於て、日夜常に來つて、一切供養す。龍王當に知るべし、是の如きの時恒に饑乏せず。

『又迦葉佛の時、彼の于闐國をば、迦邏沙摩と名け、國土廣大にして、安隱豐樂、種種の華果をば、衆生受用したりき。彼の國には、多く百千の五通の聖人、世間の福田有り、其の中に依止し、念を係けて坐禪し、阿耨多羅三藐三菩提を樂へり。其の國土、安隱豐樂なりしを以て、彼の土の衆生、多く放逸を行じ、五欲に貪著し、聖人を誹毀して、爲に惡名を作し、灰・塵・土を以て、彼の聖人に坌りぬ。時に諸の行者、斯の辱を受け已り、各彼の國を離れ、散つて餘方に向ひぬ。時に彼の衆生、聖人の去るを見て、心大に歡喜したり。是の因緣の故に、彼の國土中の、水天・火天など、皆忿瞋を生じ、有らゆる諸水・河池・泉井など、一切枯竭したり。是の時國土、自然に丘荒したり』と。

佛龍王に告げたまはく『我れ今久しからずして、瞿摩娑羅牟尼の住處に往き、結加すること七日にして、解脫の樂を受け、于闐國をして、我が滅度後、一百年に於て、是の時に、彼の國、還復興立し、城邑郡縣・村落多饒にして、人民熾盛、皆大乘を樂ひ、安隱快樂にして、種種の飲食、及び諸の果華など、乏少する所無からしめん』と。

時に僧兒耶大夜叉將、佛に白して言はく『世尊、是の如く是の如し』と。佛の言はく『大夜叉將、汝過去久遠の事を憶ふや不や』と。僧兒耶の言はく『我れ往昔、迦葉佛の時を念ずるに、此の牛角山

〔三〕 沙勒＝疏勒國か。

復次に、一切の菩薩摩訶薩、一切の辟支佛、一切の阿羅漢、得果の沙門、一切の五通の神仙聖人も、此の二十の聖人住處なる、大支提中に於て、常に加護を加へん。一切の衆生、福德を增さんがための故に、一切衆生の、惡業盡きんが爲の故に。

『是の如く、過去の一切聖人は、是の如き二十の支提を付囑したまへり。我れ今、付囑すること、亦前佛の如くす。一切の流轉海中なる、怖畏の衆生をして、安樂を得しめんと欲するが故なり。堅固に護持して、散壞せざらしめんとするが故なり。』

時に一切の龍、佛の付囑したまへる、二十の支提聖人の處を受け已り、是の如き言を作せり『大聖世尊、我等諸龍は、障礙多し、睡眠を貪嗜すること、癡の如くにして異ることなし。一夜の睡眠は、人中の二十一年に當る。是の如く、我等睡つて猶ほ覺めず、或は惡人及び非人等有りて、或は水、或は火もて、支提を毀壞せん。我等、或は睡り、或は飮食せん時、或は復、喜歡もて、世の欲事を爲さんとき、此の如き因緣もて、此の惡事をば、則ち却くる能はざらん。是の故に、我れ一切の過去・現在・當來の、佛法の中に於て、諸の不善を成ぜん』と。

爾の時世尊〔三二〕二十八の夜叉の將に告げて言はく『我れ今、此の聖人の住處を持つて、汝に付囑す。此の二十の支提は、福德の住處たり。好んで愛敬を加へ、精心もて護持せよ』と。時に二十八の夜叉の將言はく『敬つて佛の敎に順ぜん。二十の支提をば、如來付囑したまふ、豈に敢て持せざらん。但だ瞿摩娑羅香山の一處をば、我れ受け取り難し』と。

時に祇利呵婆達多龍王、即ち佛に白して言さく『世尊、如來は今、于闐國なる牛角峯山なる、瞿摩娑羅乾陀牟尼の大支提處をば、我に付囑したまへり。然も彼の國土・城邑・村落など、悉く皆空曠にして、有らゆる人民は、悉く他方の餘の國土より來れり。或は餘の天下、或は餘の刹中なる、菩薩摩訶薩、大辟支佛、大阿羅漢、得果の沙門、五神通の人など、彼に向ひ、瞿摩娑羅を供養したり。

息と、支那との交易の仲介地なりき。

【三〇】牛頭山。下の文に、牛角峯とす。

【三一】瞿摩娑羅香。仝に、瞿摩娑乾陀に作る。

【三二】二十八夜叉。金光明經に依れば、毘沙門等の四天王に、各二十八部の鬼神衆ありといふ。

復閻浮提中なる、蘇波洛崩薩無牟脂鄰陀羅名香牟尼聖人の住處を以て、牟脂鄰陀羅龍王に付囑したまへり。

復閻浮地中の、[一四]乾陀羅國なる、大利舍那若摩羅と名くる、牟尼聖人の住處を以て、伊羅跋多羅龍王に付囑したまへり。

復閻浮提の内、[一五]罽賓國中なる、[一六]宮摩尼佉と名くる、牟尼聖人の住處を以て、呼留邏龍王に付囑したまへり。

復閻浮提中なる、[一七]菴浮利摩國の、億藏炎と名くる、牟尼聖人の住處を以て、邏浮邏龍王に付囑したまへり。

復閻浮提中なる、[一八]震旦漢國の、那羅耶那弗羅婆娑と名くる、牟尼聖人の住處を以て、海德龍王に付囑したまへり。

復閻浮提の內、[一九]于闐國中の、水河岸上、[二〇]牛頭山邊、近河岸側なる、[二一]瞿摩娑羅香大聖人の、支提住處を以て、吃利呵婆達多龍王に付囑して、守護供養せしめたまへり。

此の大支提は、皆是れ過去の大聖・菩薩、大辟支佛、大阿羅漢、得果の沙門、五通の神仙などの、諸聖の住處たり。是の故に、過去一切の諸佛は、次第に付囑したまへり。流轉・怖畏の衆生をして、善根を增長し、菩提を得しめんと欲したまふが故なり。

是の如き、十方の無量無數、阿僧祇利なる、過去の諸佛及び諸菩薩は、皆彼の大支提處に住し、常に加護を加へたまへり。諸の衆生の惡業をして、盡さしめんとしたまへるが故なり。未來世に於ても、無量無邊阿僧祇利の、諸佛・菩薩摩訶薩、聲聞・緣覺、亦復此の二十の大支提に住し、常に守護を加へたまはん。諸の世間をして、福德を增さしめんための故に、一切衆生の惡業を、盡さしめんための故に。

【一四】乾陀羅(Gandhāra)。中印度の北方、信度(Indus)河の流域にあり、古印度と希臘との交通の要路に當り、西紀前后の製作にかゝる佛像の發見せらるるもの多きを以て知らる。西域記二參照。

【一五】罽賓。北印度にあり、Kaśmīra。乾陀羅國東北に在り。(西域記三)。唐朝以前は、罽賓の名を以て、支那に傳へられ、迦濕彌羅の名の用ひられたるは、唐以來の事に屬す。

【一六】宮。麗本宮宮に作る、今三本に依る。

【一七】菴浮利摩。中印度にありき。慧音に依れば、菴とは菴羅 Āmalaka の謂、其の果以て疾を療するに堪ゆ。諸國の中、この國最も多く產出したるを以て名くと。

【一八】震旦(Cīna)。また脂那、至那に作る。支那なり。かゝる國名の存するは、少くともこの部分は、支那を知れる地方に於て(必ずしも支那に於てとは云はずとも)成れるを示す。

【一九】于闐。西域記十二には瞿薩旦那(Kustana)の名を用ひたり。支那の西邊、新疆省和闐の古名。この地は、漢代西域兩道の南道にして、希臘ローマ人の殖民地たる大夏・安

復東弗婆提洲中の、昵迦羅陀蓮華牟尼聖人の住處を以て、[七]婆私模砌叉龍王に付囑し、乃至法行の弟子を、守護供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

復北欝多羅越洲の中なる、香峯炎聖人住處を以て、地行龍王に付囑し、乃至法行の弟子をば、守護供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

復大海中の、娑伽羅龍王宮なる、摩尼藏炎牟尼聖人の住處を以て、娑伽羅龍王に付囑し、乃至供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

復須彌山頂なる、帝釋住處、開華藏殿牟尼聖人の住處を以て、伊羅跋龍王に付囑し、乃至守護供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

復此の閻浮提中の、難陀婆陀那大德聖人牟尼の住處を以て、[八]閻浮迦龍王に付囑し、守護供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

復此の閻浮中なる、[九]裨奢利なる、善住牟尼聖人の住處を以て、婆須吉龍王に付囑し、守護供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

復此の閻浮中なる、[一〇]迦毘羅婆須都の、善香迦那燈牟尼聖人の住處を以て、阿那婆達多龍王に付囑し、守護供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

復閻浮提中なる、[一一]摩伽陀國の、毘富羅朋迦牟尼聖人の住處を以て、山德龍王に付囑し、守護供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

復閻浮提中なる、[一二]摩偷羅國の、愛雲炎と名くる牟尼聖人の住處を以て、閻婆迦質多羅龍王に付囑したまへり。

復閻浮提中なる、[一三]憍薩羅國の、闍耶首陀馱と名くる牟尼聖人の住處を以て、吃利彌迦龍王に付囑したまへり。

【七】婆私模棶叉。卷四十三には婆私無俱叉に作る。

【八】閻浮迦。卷四十二には閻浮伽に作る。

【九】裨奢利。梵に Vaiśāli, また吠舍釐に作る。廣嚴と譯す。中印度に在り、南方の摩揭陀と對時したる、種族跋祇人の都城なりき。維摩此の國に住し、七百の賢聖、第二結集をなせる處として知らる。西域記七、參照。

【一〇】迦毘羅婆須都（Kapilavastu）。所謂迦毘羅城なり。釋尊下生の地。中印度にあり。釋迦族の領土たりき。西域記卷六、參照。

【一一】摩伽陀（Magadha）。中印度、恒河の南に在り、釋尊當時はその國の文化大に開け、佛屢遊化せられたり。王舍城、竹林精舍、尼連禪河、靈鷲山などを以て知らる。西域記八、九、參照。

【一二】摩偷羅（Mathura）。同じく中印度恒河の東岸に在り。孔雀と譯す。西域記卷四、參照。

【一三】憍薩羅（Kosala）。中印の國、摩揭陀の北に在り、波斯匿王の所領として知らる。同名の國、中印の最南にも在り、慈恩傳には南憍薩羅國と呼べり。

或は弟子有つて、奴婢・僮僕・田地を受けず、清淨心を以て、精勤苦行したり。是の如きを、一切我れ皆、守護したり。今日如來、復此處を以て、我に付囑し、住持守護せしめたまふ』と。

爾の時、世尊、復西瞿耶尼なる、須彌山下の、何羅闍低羅山中の、聖人の處所――名けて雲盡と曰ふ――を以て、寶護龍王に付したまへり。時に寶護龍、佛に白して言はく『世尊、是の如く是の如し、世尊の教の如し。過去迦羅鳩村駄如來も、亦此の雲盡聖人住處を以て、我に付囑したまへり。我れ爾の時に於て、此の處及び佛弟子、如法の行者を守護し、乃ち法滅に至りぬ』と。

爾の時世尊、復東弗婆提なる、須彌山下の、靑鴦伽那山中の支提聖人の住處――聖人生と名くる――を以て、[四]蘇摩呼嚧叉龍王に付したまへり。時に彼の龍王、佛に白して言はく『世尊、是の如く是の如し。世尊の教の如し』と。

爾の時世尊、復須彌山下なる、北脇の間、華齒山中なる支提聖人の住處――香峯牟尼と名く――を以て、[五]毘昌伽蘇脂龍王に付し、乃至清淨法行の比丘をも、亦皆付囑したまへり。時に彼の龍王、是の如き言を作せり『是の如く是の如し、世尊の教の如し。過去に迦羅鳩村駄如來も、亦此の香峯聖人住處を以て、我に付囑し、及び法行の比丘を、守護供養せしめたまへり。乃至迦葉如來も、亦復是の如くなりき。今日の如來、又香峯支提處を以て、我に付囑したまへり。我れ當に守護すべし』と。

佛の言はく『善い哉、善い哉、汝大龍王、是の如く、能く我が法を護り、法母を住持せしめよ。汝は是れ我が伴、大善知識にして、如法の檀越など、一切の衆生、我が法に依るに、國土久住し、利益照明なり』と。

爾の時世尊、復西瞿耶尼洲中の、那焰牟尼聖人の處所を以て、[六]瞿婆嵐婆龍王に付囑し、乃至法行の弟子を、守護・供養せしめたまへること、亦復是の如くなりき。

【四】蘇摩呼嚧叉。卷四十三に蘇婆呼嚧叉に作る。

【五】毘昌伽蘇脂。卷四十三に毘昌伽蘇致に作る。

【六】瞿婆嵐婆。卷四十三には瞿婆羅婆に作る。

巻の第四十五

日藏分　護塔品第十三

爾の時、長老阿若憍陳如、佛に白して言はく『此の日藏［一］修多羅は、長夜の照明にして、一切龍の、惡業果報の不可思議を說き、復菩薩の眞實の行法を說く』と。

佛の言はく『是の如く、是の如し。憍陳如、此の四天下には、大［二］支提・聖人住處有り、若し衆生有りて、方便・坐禪・正慧を精勤せんには、當に知るべし、此の處をば則ち不空と爲す。是の如き福地には、則ち爲に、日藏の法寶を流布す。

『何者をか名けて、大支提處とは爲すとならば、此の閻浮提內の王舍城中の、聖人處所なり。大支提とは、乃ち是れ過去無量の如來、無量の菩薩、無量の緣覺、無量の聲聞、曾て其の中に於て、道を修して滅度したるところ。今悉く現に有り、當來も亦然らん。過去の諸佛・菩薩・聖人は、皆以て［三］婆婁那龍に付授し、擁護し住持し安立せしめたり。我も今亦、此の處所をして、光明久住せしめんと欲し、還以て婆婁那龍に付囑せん。若し衆生有り、能く我が法を護り、方便・坐禪・正慧を精勤せんに、諸の富伽羅、應に常に守護し、供給・供養すべし』と。

爾の時、婆婁那龍王、是の如き言を作せり『是の如く是の如し。世尊の教の如し。往昔過去に、迦羅鳩村駄應正遍知も、亦此處を以て、我をして守護し、供給・供養し、方便・坐禪・正慧を精勤せしめたまへり。善法を修する者、爲に檀越と作りぬ。我れ爾の時、供給守護して、乃ち法の滅するときに至る。

『次に復佛有り、拘那迦牟尼、乃至迦葉と名く、亦此處を以て、我に付囑し、守護供養せしめたまへり。我れ爾の時に於て、供給守護し、乃至法盡きたること、亦復是の如くなり。彼の佛の法中に、

【一】修多羅（Sūtra）。契經と譯す。縱を以て正翻と爲す。もと言敎能く法義を貫穿して、散失せしめざること、縱を以て花を貫穿し、散せざらしむる如きを意味するに依る。契とは理に契ひ、機に合ふをいひ、經とは、法相を貫穿して、所化を攝持すること經（たていと）の緯（よこいと）に於けるが如くなるを示す。

【二】支提（Caitya）。また制底といふ。積聚を義とす。土石を積聚して、之を成せばなり。義を以て靈廟と翻ず。

【三】婆婁那龍王（Varuṇa-nāgarāja）。

捨せず。是の因緣を以て、諸四輩の、種種の供養を感ず。時に知事の人、利養を得已り、或は自ら私に食し、或は復盜んで、親舊の俗人に與ふ。是等の緣を以て、久しく惡道に處り、出で已つて還入る。是の如き愚暝は、當來の果報の輕重を見ず。

『我れ今戒勅す、沙門弟子、法を念じて住持し、自ら「我は是れ沙門、眞の法行の人なり」と稱ふるを得ざれ。衆僧に猗るが故に。他の信施の物――或は餅、或は果、或は菜、或は華――は、但だ是れ、衆僧所食の物なれば、輒ち一切の俗人に與ふるを得ざれ。亦「此は是れ我が物なり」と云ひ、衆に別れて食するを得ざれ。又亦衆僧の物を以て、貯積興生し、種種に販賣して、利益有りと云ひ、世の譏嫌を招くを得ざれ。又亦貴きを出し、賤きを收め、世と利を爭ふを得ざれ。又亦飲食、及び僧の因緣の爲に、諸の衆生をして、三惡道に墮せしむるを得ざれ。應に須らく、安善の法中に勸引し、比丘衆をして、眞に三寶を信ぜしめ、諸の衆生、乃至父母を攝して、安隱を得しめ、三解脫に置くべし』と。

大方等大集經卷第四十四

食をば食すべからず。寧ろ利刀を以て自ら屠り、身體皮膜を膾として自ら噉はんも、其れ在家の諸俗人有つて、應に僧の雜食を受け取るべからず。寧ろ自身を以て彼の、室に滿てる大火・猛焰中に投ぜんとも、其れ在家の俗人輩有り、應に僧の床席に坐臥すべからず。寧ろ[17]大火もて熱せる[18]尖鐵錐をば拳手もて握持して焦爛[19]せしめんも、其れ在家の俗人等有り、應に私に僧物を用ふるべからず。寧ろ勝利の好刀[20]砧を以て、而も自ら其の身肉を[21]鑕切せんも、出家清淨の人に於て、一念の瞋恚心をも發起する勿れ。寧ろ自手を以て兩眼を挑り、捐棄して之を投じ、地に擲たんも、其れ善法を習行する者有らば、應に忿瞋の心を懷いて視るべからず。寧ろ熱鐵を以て其の身を[22]鍱せられ、東西に起動し行・坐・臥せんも、應に瞋忿心もて妬嫉し、而も衆僧の淨施衣を著くべからず。寧ろ灰汁・鹹[23]鹵水の、熱沸し、口を燥かすこと猶し火の如くなるを飲まんも、應に貪・毒惡の心を懷いて、衆僧の淨施藥を服食すべからず』と。

爾の時世尊、此の偈を說き已りたまへるに、一萬四千の諸惡龍等、悉く三歸を受け、有らゆる過去現在の業報と、諸の苦惱の中より、解脫するを得、深く三寶を信じて、其の心不退なりき。復八十億の諸龍衆等有り、亦三寶に於て、歸敬の心を起したり。

爾の時世尊、憍陳如に告げたまはく『汝觀ぜよ此等の諸惡衆生、自ら其の心を誑き、或は怖畏貧窮の因緣を以て、或は惡道に於て、怖畏を生じ、善法を修行し、或は比丘所得の種種資生の具を作すを。皆是れ信心ある檀越の施する所なり。而も是の衆生、或は自ら食噉し、或は他人と、或は衆人と共に、盜竊隱藏して、私處に自ら用ふ。是の如き業の故に、三惡道に墮し、久しく勤苦を受く。復衆生有り、貧窮下賤にして、自在を行ず。是の故に出家して、富饒と解脫と安樂とを得んことを望み、既に出家し已り、懈怠・孄墮にして、經を讀誦せず、禪・慧・精勤を、捨して習せず、[24]知僧事を樂ふ。復比丘有り、晝夜精勤して、善法を樂修し、經典を讀誦し、坐禪・習慧をば、須臾も

【一七】大。麗本火に作るも三本に依る。
【一八】尖。麗本炎に作る、今三本に從ふ。
【一九】使。仝には便に作る、今三本に從ふ。
【二〇】砧。麗本枯に作る、今三本に依る。
【二一】鑕切。肉を切ること。
【二二】鍱は鐶(かねのわ)なり。鏁(くさり)なり、鎖(つなぐ)と通ず。
【二三】鹵。しほつちなり。
【二四】知僧事。卷第三十四の終りを見よ。

龍、佛に白して言さく『大悲世尊、唯願はくは、慈哀もて、我を救濟したまひ、我をして彼の怨家の毒龍より脫れしめたまはんことを』と。

爾の時世尊、手を以て水を抄ひ、誠實の語を發し、是の如き言を作したまへり『我れ曾て往昔、饑饉の世に於て、爾の時願ふて、大身の衆生――長廣無量なる――と作り、神通力を以て、虛空中に於て、是の如き言を唱へぬ「彼の野澤中に、大身の蟲有り、名けて不瞋と曰ふ、汝等往いて、其の身の肉を取るべし。以て飮食と爲せば、不饑を得べければなり」と。時に彼の世中の人非人等、此の聲を聞き已り、一切悉く往き、競ひ取つて之を食したり』と。

是の眞實諦眞の語を說きたまへる時、彼の龍の腋下なる小龍、卽ち出でぬ。時に此の二龍、倶に佛に白して言さく『世尊、我等久しきや近きや、此の龍身を離れて、殃罪を解脫せんこと』と。

佛龍に告げて言はく『此の業は大にして重く、五無間に次ぐ。何を以ての故にとならば、若し〔一五〕四方常住の僧物、或は現前僧物、篤信檀越の重心の施物、――或は華、或は果、或は樹、或は園、飮食・資生・床褥・敷具、疾病の湯藥、一切の所須など――をば私に自ら費用し、或は持つて外に出で、乞はれて知識・〔一六〕親里・白衣に與へんに、此の罪は、阿鼻地獄に受くる所の果報よりも重し。是の故に汝等、三歸を受くべし。三寶に歸し已らば、乃ち冷水の中に住することを得ん。是の如く三たび稱へ、三たび受けんに、身卽ち安隱に、水中に入ることを得ん』と。

爾の時世尊、卽ち諸龍の爲に、偈を說いて言はく

『寧ろ利刀を以て自ら身の、支節・身分・肌膚肉を割かんも、有らゆる信心もて捨施したる物を、
俗人の食せんこと、實に難しと爲す。　寧ろ大赤熱鐵丸を呑み、口中より光焰を出さんも、
有らゆる衆僧飮食の具をば、應に外に於て私に自ら用ふべからず。　寧ろ大火の、須彌のごとく
なるを以て、手を以て捉持して自ら食せんも、其れ在家の諸俗人有り、應に輙ち僧に施したる

〔一五〕四方僧物。卷三十四、註二五參照。

〔一六〕親里。俗緣の者、白衣は在俗の者。

る』と。是の時世尊、即ち龍女の爲に、三歸の衣を授けたまへり。
時に彼の衆中に、復一龍有り、種種の臭惡、一切の諸蟲など、其の口中を滿たし、及び咽喉の內には、膿血流出し、見聞する有る者、皆悉く捨て去りぬ。時に佛、見已つて即便問ふて言はく『善男子、汝過去に於て、何の惡業をか作して、是の如きの報をば受くる』と。彼の龍、口を張るに、其の口內より、種種の蟲を出し、膿血流溢して、猶し熱火の如くなりき。復口を張ると雖も、竟に言ふ能はずして、即ち還口を閉ぢたり。
爾の時世尊、即ち彼の龍の爲に、偈を說いて言はく
『汝過去の盜の因緣と、聖人を輕戲したるを以て、是の報を受く、至誠もて我が此の實の言を聽かば、即ち淸涼を得て諸の苦を滅せん』と。
爾の時世尊、實語を說き已り、即ち少の水を以て、龍の口中に瀉ぎたまへるに、火及び蟲膿など悉く皆滅盡し、龍口淸涼となり、是の如き言を作しぬ『大聖如來、我れ過去の迦葉佛の時を憶ふに、曾て俗人と作り、田に在つて地を犂きたるに、一比丘有り、來つて我より五十錢を乞求したり。我れ時に報へて言はく「穀熟するを待つことを聽せ、當に汝に食を與ふべし」と。比丘復言はく「若し當に、五十にして得べからずんば、十文を願乞すべし」と。我れ爾の時、彼の比丘を瞋り、之に語つて言はく「乃至十錢も、亦相與へじ」と。
『時に彼の比丘、心に懊惱を生たり。又餘の時に於て寺舍の中に往き、樹林の下に入り、輒便[一四]現在僧物十菴羅果を盜み取り、私に之を食ひぬ。彼の業の因緣もて、地獄に苦を受け、惡業未だ盡きずして、野澤の中に生れ、餓えたる龍身と作り、常に種種諸蟲の爲に食噉せられ、膿血流溢し、饑渴もて苦惱す。又彼の比丘は、瞋忿の心・惡業の緣を以て、死して便即小毒龍身と作り、我が腋下に生れて、我が血を味ひ、熱氣身に觸るるに、堪忍すべからず。是の故に我が身には、熱き膿血滿つるなり』と。

【一四】現在僧物。現前僧物に同じ。一結界の中に、現に在る衆僧に屬する衆物、即ちその個々に供養せる衣・食等をいふ。

虻・諸の惡毒蠅の爲めに唼食せられ、身體の臭處、見聞すべきこと纔かりき。

爾の時世尊、大悲心を以て、彼の龍の婦、眼盲ひて困苦せるを見たまひ、是の如くに問ひて言へり『妹よ、何の緣の故に、此の惡身をば得たる。過去世に於て、曾て何の業をか爲したる』と。

龍婦答へて言はく『世尊、我が今の此の身は、衆の苦逼迫して、暫時も停ること無し。設ひ復言はんと欲するも、說くこと能はず。我れ過去三十六億を念ずるに、百千年のあひだ、惡龍の中に生れ、是の如き苦を得、乃至日夜、刹那も停まらざりき。我れ往昔九十一劫に、〔三〕毘婆尸佛の法の中に於て、比丘尼と作りたるも、欲事を思念せること醉人にも過ぎ、復出家したりと雖も、如法なる能はず、伽藍の內に於て、床褥を敷施し、數數非梵行の事を犯し、快欲の心を以て大樂受を生じ、或は他の物を貪求して、多く信施を受けたり。是の如くなりしを以ての故に、九十一劫のあひだ、常に・天人の身を受くるを得ず、恒に三惡道にて、諸の燒煮を受けたるが爲なり』と。

佛又問ひて言はく『若し是の如くなりしならば、此の中の劫盡きなば、妹は何處にか生るる』と。

龍婦答へて言はく『我れ過去の業力の因緣を以て、餘の世界に生れ、彼處に劫盡くれば、惡業の風吹いて、還來生せん』と。此の時、彼の龍婦、此の語を說き已り、是の如き言を作せり『大悲世尊、願はくは我を救濟したまへ、願はくは我を救濟したまはんを』と。

爾の時世尊、手を以て水を掬ひ、龍女に告げて言はく『此の水は名けて瞋陀留脂藥和と曰ふ。我れ今誠實もて言を發し、汝に語る、我れ往昔、鴿を救はんが爲の故に、身命を棄捨し、終に疑念もて、慳惜の心を起さざりき。此の言にして若し實ならんには、汝の惡患をして悉く皆除差せしめん』と。

時に佛世尊、口を以て水を含み、彼の盲龍婦女の身に灑ぎたまふに、一切の惡患・臭處・皆差えたり。既に差ゆるを得已り、是の說を作して言はく『我れ今佛より、三歸を受けんことを乞ひまつ

【三】毘婆尸。Vipaśyin. 勝觀、種種見など譯す。過去七佛中の第一佛。

に曾て俗人と作りぬ』と。或は復說ける有り『我れ 〔八〕迦羅拘村駄佛法の中に、曾て俗人と作れり』と。或は復說ける有り、『我れ 〔九〕迦那迦牟尼佛の法中に、曾て俗人と作れり』と。或は復說く有り、『我れ 〔一〇〕迦葉佛如來の法中に、曾て俗人と作りぬ』と。或は復說く有り『我れ釋迦牟尼佛の法中に、曾て俗人なれり』と。

『或は親舊問訊の因緣を以て、或は復去來聽法の因緣もて、寺舍に往還し、信心有るの人、僧に供養の故に、華果・種種の飲食を捨施したるに、比丘得已つて我に迴施したれば、我れ得て便ち食したり。彼の業の因緣もて、地獄の中に於て、無量の劫を經るあひだ、大猛火中に、或は燒かれ、或は煮られ、或は洋銅を飲み、或は鐵丸を吞み、地獄より出でて、畜生中に墮し、畜生の身を捨てて、餓鬼の中に生れ、是の如くして、種種に備に辛苦を受け、惡業未だ盡きず。此の龍中に生れて、常に苦惱を受け、熱水は身を爛らかし、熱風は身體を吹き、沙を熱し、土を熱し、糞を熱し、灰を熱す。食口中に入れば、變じて銅汁と成り、或は鐵丸と作る。一切の時に於て、所食の物、口に入ればロ焦け、咽に入れば咽爛れ、腹に入れば腹然え、直に過ぎて地に墮ち、遍體穴を穿つ。是の如き苦を受けて、堪忍すべからず。唯願はくは如來、慈哀して救濟したまはんことを』と。

佛諸龍に告げたまはく『此の惡業は、佛物を盜むと、等しくして差別無し。比丘の逆業も其の罪半の如し。然も此の罪報の受、未だ盡きざるが故に、脫するを得べきこと難し。汝等今當に、盡く三歸を受け、一心に善を修すべし。此の緣を以ての故に、賢劫中に於て、最後の佛――名けて 〔一一〕樓至と曰ふ――に値ひ、彼の佛の世に於て、罪除滅するを得ん』と。

時に諸龍等、是の語を聞き已り、皆悉く至心に、其の形壽を盡し、各三歸を受けたり。時に彼の衆中に盲龍の女有り、口中𧏾爛し、諸の雜蟲の、狀屎尿の如きを滿たし、乃至穢惡にして、猶し婦人の如く、根中不淨、〔一二〕臊臭あつて看難く、種種に食を噉めば、膿血流出し、一切の身分は、常に蚊

【八】迦羅拘村駄。梵に Krakucchanda, 拘留孫佛とも云ひ、所應斷已斷、成就美妙など譯す。七佛の第四佛。

【九】迦那迦牟尼 Kanakamuni, の音寫、また拘那含牟尼ともいふ。金寂、金仙人など譯す。七佛中の第五の佛。

【一〇】迦葉佛。Kāśyapa, 七佛中の第六佛。

【一一】樓至。梵に Rucika, また盧至に作る。愛樂佛又は啼哭佛と譯す。

【一二】臊なまぐさきなり。

如き種種の惡業を造り、惡業を以ての故に、無量の身を經て、三惡道に在り。亦餘の報を以ての故に、生れて龍の中に在り、極大の苦をば受く。青色龍の如く、我も亦是の如くなり』と。

爾の時世尊、諸龍に語つて言はく『汝、水を持つて如來の足を洗ふべし、汝の殃罪をして、漸く除滅するを得しめん』と。時に一切の龍、手を以て水を掬ふに、水皆火と成り、變じて大石と作り、手の中に滿ちて、大猛炎を生じたり。棄て已るに復生じ、是の如くすること七たびに至る。一切の龍衆、是の如きを見已り、驚怖・懊惱・啼泣・雨涙したり。

佛諸龍に告げたまはく『汝、罪業を造つて、是の惡報を得。善業を修する人は、好果を受く。我れ今、汝に教へて、眞實の誓を說かん。若し佛導師、一切を憐愍せんに、諸の衆生に於て、平等無二なり。此の言虛しからずんば、願はくは我が諸龍の火炎、時に滅せんことを』と。是の誓を作し已りたまへるに、火炎皆滅したり。

時に餓龍等、乃至八たび過ぎ、手を以て水を捧げ、如來の足を洗ひ、至心に懺悔すらく『我れ今日より、更に惡を造らじ』と。是の如く懺し已り、各佛に白して言さく『如來、大慈もて、願はくは、我を救濟したまはんことを』と。佛、諸龍に言はく『汝の此の惡業は、餘有つて未だ盡きず。彌勒佛の世に、當に人身を得、佛に値ひて出家し、精進・持戒して羅漢果を得べし』と。

時に諸龍等、宿命心を得、自ら過ぎし業を念じ、啼泣して面に雨らし、各是の如くに言へり『我れ往昔を憶ふに、佛法の中に於て、或は俗人の親屬と爲れる因緣あり、或は復聽法に、來去せる因緣あり、所有の信心もて、種種の華果・飲食を捨施し、諸比丘と共に、次に依りて食したり』と。

或は說いて言ふ有り『我れ寺舍に往き、衆僧に布施し、或は復禮拜して、是の如くに喫噉したり』と。或は復說いて言はく『我れ毘婆尸如來の法中に、曾て俗人と作りにき』と。或は復說ける有り『我れ尸棄佛如來の法中に、曾て俗人と作れり』と。或は復說ける有り『我れ[七]毘葉婆如來の法中

【七】毘葉婆。梵に Viśva-bhū,また毘舍浮に作り、一切勝、一切有など譯す。過去七佛中の第三の佛。

能く人身を得と雖も、備に種種罪惡の業を造つて、三寶を供養する能はざらん。死後には衆の苦、皆聚集して、地獄・餓鬼に具に之を受く。設ひ復、龍王の身と爲ると雖も、所有の眷屬幷に妻子など、貧窮・饑餓・諸の熱惱あり。頂上に如意の寶有ること無く、居住の空澤に毒蟲多く、枯涸して常に乾き、水有ること無し。是の如きは皆過去世に由る、曾て佛法に於て比丘と作り、或は蘭若に苦行の人を見、嫉妬・慳心もて飲食を惜み、遠客の比丘來つて寄止するも、瞋忿もて怒を懷き心に喜ばず、擅越は平等に飲食を施すも、中に於て遮止して、便ち罵詈す。設ひ清淨の好流水有るも、屎尿糞穢もて其の中を滿し、所有の居住・行・坐・處は、一切臭穢にして皆不淨たり。或は清淨の持戒者有るも、是の如きを見已つて皆遠離し、若しは餘處に好人有るを聞くも、心に此の者の來るを欲する無し。彼の人、惡業の因緣の故に、死して地獄に墮すること無量世たり、灰河・沸屎・燒赤銅など、無量億年のあひだ楚毒を受く。是の如く餓鬼の中にも饑渴し、生れて曾て漿水の名をも聞かず、餘の報にて復龍道の中に生れ、具足して多年辛苦を受く。龍身を得と雖も常に饑餓し、所生の處に在るも空にして水無し、或は枯澤・惡焦山に在り、水を絕し常に乾いて飲食無し。死し已つて數地獄の中に入るに、大火の熱惱、身に充遍す、彼に在つて無量の歲を經、是の如くして餓鬼の中に循り還る。自ら禪を修して能く救濟するに非ずんば、佛如來を禮拜し供養せよ、戒を持し、智慧あつて多聞を學し、精進もて慳慢の想を捨したり。妬嫉は心を毒して最も惡しと爲す、此の業の因緣をば、須らく斷除すべし、死せん時是の殃を受くるを憶念し、決定して疑無く、早く懺悔せよ』と。

爾の時如來、是の偈を說き已り、たまふに、彼の、龍衆中の二十六億の諸餓龍等、過去の身を念じて、皆悉く淚を雨らし、是の如き言を作せり『唯願はくは、哀愍して、我を救濟したまはんことを。大悲世尊、我等過去世時を憶念するに、佛の法中に於て、出家するを得たりと雖も、備に是の

久年の酥[六]を以て、火上に煎じ已り、此の陀羅尼を誦すること、一千八遍、以て此の藥を呪し、用つて眼上に塗り、諸の緣事を捨てて、七七日の中、佛を念じ像を造り、至心に發願せよ。時に彼の衆生、惡業消盡し、清淨の眼を得ん。若し財有らば、幷に寺舍を營み、力の所辦に隨ひ、資生を布施せんに、是の如き一切の惡業、皆盡き、當來の世、無量の世中に、常に眼を失はざらん』と。

爾の時、一切の諸龍衆等、是の如き言を作しぬ『南無・南無大悲世尊、能く三世の衆生に、利益を施し、眼を失すれば明を得しめ、一切の惡業を、清淨無垢ならしめたまふ』と。

爾の時龍有り、名けて青色と曰へるが、大聲に唱喚し、偈を說いて言はく

『世尊は能く諸の罪垢を除きたまふこと、猶し大河の、一切を洗ふが如くなり、悉く衆生の種種の行を知りたまふ、是の故に佛をば、衆中の尊と稱しまつる。我が所居は澤中に停住するも、大野の枯泉にして水有ること無く、熱風身を吹いて、火よりも劇し、形體屋舍は臭くして堪へ難し。八千億年、彼に住し、曾て一日として歡樂を受けたること無く、常に衆生の爲に食噉せらる、眷屬の大小、悉く皆然なり』と。

爾の時世尊、偈を說いて答へて言はく

『若し衆生有りて諸の罪を造らんも、而も復福德を修營し、寺舍を建立し、鐘鈴を施し、種種の飮食もて、僧を供養せん。此の雜福の因緣を以ての故に、所生の中に在つては、業に隨つて受け、惡を造らば苦辛は地獄の如く、食を施せば快樂あること、天堂に似たり、或は復龍の中に來生し、彼の善業の因緣に緣るが故に、龍頭の中より、自然に、希有なる如意妙寶王を出す。欲念する所、皆意に隨ひ、種種の果報をも、皆悉く具せん、枯泉及び旱澤に處りと雖も、能く上妙の清流水を出す。　清淨なる虛空に密雲を布き、地平なること掌の如く、泉池湧き、行住坐臥所在の處に、皆能く念に應じて、諸の水を生ぜん。　若し一切の諸衆生有らんに、復

【六】酥。醍醐に作るも、今三本に依る。

呪を說いて、言はく

『多經哋、斫畧佉婆　婆蘭那佉婆　羯磨佉婆　阿難闍那　毘囉闍佉破　蘭多若摩　尼婆羅那都夜
阿鞞梅陀羅　樹低　頻頭輸第　吃利波輸第頗羅輸第　阿誓　多誓　多隸　多隸　婆細陀索繼
陀索繼嗚盧羅避　摩訶嗚盧羅避帝腹阿邏多那婆羅帝　莎呵。

爾の時世尊、此の實淨眼陀羅尼を說き已りたまふに、彼の梨闍龍は、淸淨眼を得、餘の五萬三千の龍も、亦淨眼を得、及び餘の八十四那由他の、夜叉・鳩槃茶・薜荔多・毘舍遮・人非人等・罪垢消滅して、皆淨眼を得たり。

爾の時、善德天子、佛に向つて合掌し、偈を說いて言はく

『彼の十力ある世の導師を看よ、能く諸龍の眼をして淸淨ならしめたまへり、今世に若し佛に
値ふことを得ざらんには、諸の失眼の者常に盲冥ならん』と。

爾の時世尊、長老憍陳如に告げたまはく『汝此の淨眼陀羅尼呪を持す可し、若し衆生有り過去の惡業、今現在、或は當來の世に、或は四大の病、或は惡人の呪、或は毒藥に因るなど、此の緣を以つ一の故に、卽便目を失はんに、是の如き衆生は、應當に此の淨眼陀羅尼を誦すべし。自ら過去に造る所の惡業を悔ひ、諸の衆生に於て大慈悲を起し、至心に念佛して、餘事を捨て、七七日の中、晝夜六時に、手を以て眼を拭はんに、是の因緣を以て、淸淨の眼を得ん。

『若し衆生有り、過去世に於て、諸の惡業を作し、或は法を毀ち、或は聖人を謗り、說法の者に於て、爲に障礙を作し、或は經を抄寫するに、文字を洗脫し、或は他の眼を損壞し、或は他を暗蔽したらん。此の業の緣の故に、今盲の報を得。是の如き重惡業の因緣の故に、七七日の中に差るを得ざれば、應當に此の陀羅尼を抄寫し、至心に誦持し、彼の業を悔過すべし。復海沫と甘草と　呵梨勒[二]と　阿摩羅[三]と　毘醯羅[四]との、此の五種の藥の　擣沫[五]を、蜜もて和し、舊き龜甲の中に盛著し、

【二】呵梨勒。梵は、Haritaki, 天主將來と譯す。五藥の一、果の名。

【三】阿摩羅 Āmalaka, また菴摩羅に作る。果の名、玄應によれば胡桃の如く、其の味、酸くして甜(アマ)しといふ。藥用とせらる。

【四】毘醯羅。また毘醯勒と云はる。果の名。善見律一七によれば、その形桃子の如くにして甜(アマ)く、服すれば癩を治すと云ふ。

【五】擣沫、手でうち、たゝき、粉沫とせるもの。

是の語を說きたまへる時、一切の諸龍、皆大に懊惱し、往先の咎を悔ひ、悉く佛前に於て、至心に供養したり。

爾の時、衆中に一盲龍有り、名けて頞羅機梨耆と曰へるが、聲を擧げて大に哭し、是の如き言を作せり『大聖世尊、願はくば我を救濟したまはんを。願はくば我を救濟したまへ。諸佛は慈悲もて、一切を憐愍したまふ、我れ今身中に、大苦惱を受け、日夜常に、種種の諸蟲・小蛇・蝦蟇の爲に唼食せられ、熱水中に居て、暫時の樂も無し』と。

佛の言はく『梨闍、汝過去世に、佛法中に於て、曾て比丘と爲り、禁戒を毀破し、內に欺詐を懷き、外に種種の善相威儀を現じ、廣く眷屬を貪つて弟子衆多、名聲四遠して、聞知せざる莫かりき。彼の諸弟子、是の如く說いて言へり「我が和上は、阿羅漢果を得たり」と。是の因緣を以て、多く供養を得、供養を得已つて、獨り之れを受用し、持戒の人を見ては、反つて惡み加說す。彼の人、懊惱して、是の如くに、念言す「世世の生中、願はくは我が在らん所に、汝の身肉を食はん」と。是の如き惡業もて、死して龍の中に生れたり。是れ汝の前身なり。衆生願の故に、汝の身を食噉し、惡業の因緣もて、此の盲報を得、熱水の中に住まるなり。又過去無量劫中に於て、赤銅地獄中に在融し、常に諸の蟲の爲に食噉せられたり』と。

爾の時龍衆、此の語を聞き已り、憂愁啼哭して是の如き言を作せり『我等今、皆悉く至心にして、咸共に懺悔す。願はくば此の苦をして、逸に解脫を得しめたまはんことを』と。

爾の時如來、金色の手を出して、彼の龍の面を摩し、是の如き言を作したまへり『汝等諦に聽け、我れ過去に於て、曾つて國王と作り、名けて善眼と曰へり。是の時、一の盲婆羅門有り、來つて我より、一眼を求索せんことを乞へり。我れ時に歡喜して、兩眼を皆與へたり。若し我が此の言、誠にして不虛たらば、汝梨闍をして、清淨の眼を生ぜしめ、一切の諸罪、悉く皆除滅せん』とて、卽ち

だ、諸の火燒を受け、地獄より脫るるを得て、餓鬼中に生れ、復無量百千萬歲を經るあひだ、辛苦を受け、餓鬼中に死して、還地獄に墮ち、地獄より脫れ已つて、餓鬼中に生れ、是の如くして、三十一劫を經たり。汝等諸龍、諦に聽き諦に受けよ、其の婆樹帝、流轉の中に於て、具足して是の如く、諸の辛苦をば受けたり』と。

佛の華面に言はく『彼の婆樹帝とは、豈に異人ならんや、卽ち汝の身是れなり。乃往過去の惡業の因緣の故に、大地獄・餓鬼・畜生に生れ、輪轉して苦を受け、是の三十一大劫を經るの中、備に衆の苦を受け、未だ曾て暫くも捨せざりき。餘の殘業の故に、龍の中に來生して、是の惡報をば受くるなり』と。

時に華面龍、是の語を聞き已り、大聲に啼哭し、身を擧げて自ら投じ、四支を地に布き、禮拜して佛に白し、是の如き言を作せり『我れ今至心に、佛に從つて懺悔す、我れ大癡惑あり、大慢にして愚曚、方便を解せず、好惡を差別して、是の罪業を造る』とて、低頭合掌し、至心に發露して、敢て覆藏せず。『如來世尊、我れ今至誠、骨髓に入り、佛に歸し、法に歸し、比丘僧に歸しまつる。今より意を發して、乃ち壽の盡きるまでに至らん』と。是の時中に於て、優婆塞を作る。

佛の言はく『善い哉、善い哉、善男子、汝今地獄・餓鬼などの惡道の業報有るも、是の如く至心に、我れに歸依せば、彼の業を盡すを得。此の中に死し已つて、彌勒佛に値ひ、人身を得、彌勒佛の法中に於て出家し、羅漢果を證せん』と。

佛、華面に言はく『更に狐疑する莫かれ』と。時に彼の裴多富沙人王は、三月の中に於て、種種の資生を以て、尸棄如來、及び諸の菩薩・聲聞衆を供養したるが故に、今此の報を得、婆伽羅大龍王の身を受けて、猶し天の樂の如く、三十一劫のあひだ、三惡に生れず、常に人天に生れて、是の如き報を受け、彼も亦阿耨多羅三藐三菩提行の因緣の爲の故に、此の龍中に來り、得生を願欲す』と。

常に衣服無く、赤體にして行くや。我が父王の如きは、樂の受最も勝れ、轉輪王の果報の如くにして異らず』と。

佛の言はく、『華面、諦に聽き諦に聽け、善く之を思念せよ。我れ當に汝の爲に、本事をば說かん。乃往過去三十一劫に、佛世尊有し、名けて尸棄多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰へり。時に彼の世中に王有り、名けて裴多富沙と曰ひぬ。彼の富沙王、三月中に於て彼の佛、幷に及び無量百千の須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢、幷に大菩薩摩訶薩の衆を供養し、種種の衣服・飮食・湯藥を以て、之に供給し、至心に聽法し、旣に法を聞き已つて、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を發し、是の如くして三月のあひだ、供養を設け已り、彼の富沙王、尸棄佛及び餘の衆僧の爲に、寺舍を造立し、種種の衣・飮食・湯藥・臥床・被褥を施し、具足富饒ならしめたり。

『彼の富沙王の第一太子をば、裴多婆樹帝と名けたり。彼の婆樹帝、佛を見て法を聞き、流轉の中に於て、大怖畏を生じ、父王の邊に從つて、禮拜諮啓し、請ふて、佛に就て出家せんことを願求せんと欲したるに、王、子に報へて言はく「往かんと欲すれば意に隨へ、汝の出家に任す」と。旣に出家し已り、又父に白して言はく「我れ父王の寺上に、停止せんと欲す」と。富沙王の言はく「亦汝の意に隨ひ、彼の寺中に住せよ」と。

『時に尸棄佛の衆僧弟子、彼の寺中に在つて、座臥を受用し、飮食を敷噉しるたに、彼の富沙の子、裴多樹帝、嫉妬心を生じ、彼の舊住の佛弟子衆を忿り、恒に之を瞋罵したり。時に彼の衆僧、瞋罵せられ已り、悉く皆寺を離れつ。彼の婆樹帝、僧の去るを見已り、歡喜心を生じ、卽ち自ら念言すらく「彼れ去らば好し、我れ大に安隱なり」と。衆僧去り已る。

『時に婆樹帝、恣に寺內の衣服・飮食を用ひ、餘人の來る有るも、住まるを聽さざりき。彼の婆樹帝、具に是の如き諸惡業を造り已り、命終の後、大地獄中に生れ、無量千億那由他歲を經るあひ

を起し、是の如くして死し已り、龍の中に願生す。復次に龍王、諸の衆生有り、小乘を求め、福田を得んと欲して、聖人を覓むる中に、布施を捨し福德供養を報ぜん。是の如き因緣もて、自の願力の故に、龍の中に來生す。復次に龍王、諸の衆生有り、嫉妬と慢との故に、彼の業の因緣もて、龍の中に來生す。復次に龍王、諸の衆生有り、多く憍慢を起し、語言に饒なれば、彼の自業を以て龍の中に來生す。復次に龍王、諸の衆生有り、佛・法・僧寶を信ぜず、又和上・阿闍梨、及び餘の大德に供給せず、又父母二親に供養せず、中に於て種種の瞋忿・毒心・愛憎・憍慢・癡の因緣の故に、福田中に於て、邪錯を行じたるが故に、是の業緣を以て、龍の中に來生す。復次に龍王、諸の衆生有り、種種の癡・慢のために、惡業の力多く、福德力少く、心に怖畏するが故に、龍中に願生す。復次に龍王、諸の衆生有り、妄語・兩舌・惡口あつて、慈悲なく、此の三業の緣の故に、龍の中に來生するなり』と。佛の言はく『此の十種の業の因緣を以ての故に、來つて龍の中に生ず。

『復三業の因緣有つて、龍の中に生ず。何等をか三とは爲す。諸の衆生有り、惡業に堅固にして、身口意を造るに、彼の業熟するが故に、地獄の中に生れて無量の劫を經、大極苦を受けて、解脫を得難く、大業を免ると雖も、小業未だ盡きずして、龍の中に、或は畜生の中に、或は餓鬼の中に生じ、此の三惡業の因緣を以つての故に、龍の中に來生するなり』と。

時に娑伽羅龍、復佛に白して言はく『是の如し世尊、而も此の龍の中には、或は諸の龍有りて受くる所の樂報、猶し諸天の如く、或は餘の龍有りて、樂を受くること人の如く、餓鬼の如く、畜生の如くなる者有り。或は餘の龍有つて、地獄の中に、大辛苦を受くる如くなり』と。

是の事を說き已るに、時に娑伽羅大龍王の子――青蓮華面と名くる――が、前んで佛に白して言はく『世尊、我れ何の惡業の罪の因緣の故にか、龍の中に來生――身大にして端正なるも、有らゆる色の觸、或は復衣裳及び、坐臥處など、一切時に於て、我が身に受用するに、猶し火燒の如く、

卷の第四十四

日藏分中　[一]三歸濟龍品第十二

爾の時空中より、自然に種種の香華、種種の寶衣、種種の音樂、種種の歌舞を雨らして、虛空を充滿し、一切の天・龍・夜叉・羅刹、及び阿修羅など、悉く皆恭敬したり。

爾の時世尊、諸の大衆・菩薩・聲聞の與に、左右圍遶、前後隨順せられ、須彌の頂より、龍身の橋を踏んで、佉羅坻なる聖人の住處、梵天所敷の寶師子座に下り、彼の座に坐したまへり。

爾の時、虛空中の一切の天・龍・夜叉・羅刹、幷に阿修羅・緊那羅等、各供養を設け、種種の香末、種種の香華、種種の寶衣などをば、以て佛上に散らし、右遶三匝し、禮し已つて坐したり。

爾の時、娑伽羅龍王、佛に白して言はく『世尊、何の因緣の故に、我等一切は、龍中に在つて生れたる』と。佛の言はく『龍王、諦に聽き、諦に聽け、我れ今王の爲に、分別廣說せん。『十種の業有れば、龍中に來生するなり。何者をか十と爲す。諸の衆生有り、六波羅蜜を行じ、阿耨多羅三藐三菩提覺を得んと欲し、亦願ふて惡障礙無きことを得んと欲し、或は復多く布施を修し、時を以て施を捨するを得んと欲したる、願の因緣の故に、龍中に來生するなり。

復次に龍王、或は衆生有り、大乘の中に於て、捨施を修行したる、福德果報因緣の故に、龍中に願生す。復次に龍王、或は衆生有り、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、布施を行じて福報多しと雖も、淸淨なる能はず、地獄・餓鬼・畜生中を怖畏する因緣の故に、龍中に願生す。復次に龍王、諸の衆生有り、阿耨多羅三藐三菩提を行ぜんと欲したる時、高心と大慢力とを生じたる因緣の故に、龍中に願生す。復次に龍王、諸の衆生有り、菩提を發し、阿耨多羅三藐三菩提を行ぜんと願じたる時、多く瞋恚を生じて、他の衆生を恨み、瞋忿を以て、彼の地獄・餓鬼・畜生に向へる因緣の故に、長く瞋忿

【一】以下の二卷。日密分には全く相當文を缺く。

は衆生有り、地獄・畜生・餓鬼等の中に、餘報の惡業、悉く盡滅するを得ん。是の如くして、夜叉・貧窮の因縁も、一切皆盡きて、大富を得ん。或は衆生有りて、人中の貧窮・惡業の報盡き、及び諸の惡病、皆除愈を得、獄禁の衆生は、皆解脱を蒙らん』と。

爾の時、娑伽羅龍王、卽ち佛前に於て、偈を說て讚歎すらく、

『眞金にして垢を離れ、滿月の面のごとし、清淨の行具して最勝の田たり、三界の天人龍中の尊たり、能く衆生の濁と垢惱とを去りたまふ。施・戒・忍辱及び精進もて、眞實平等の心を成就し、諸龍を解脱せしめて安樂を施し、往昔の誓願力を憶念したまふ。慈悲もて、久しく衆の業行を修して、堅固なること彼の諸の衆生に勝れたまふ、是の如くして備に衆の苦辛を受け、彼の龍の諸の惱む所をば忘れたまはず。種種の流轉をば越度するを得、生死海の彼岸に出過し、自身解脱して群生を濟ひ、智水もて龍を洗ひ、清淨ならしめたまふ』と。

梵なり、天中の大天なり、人中の大人なり、沙門中の大沙門なり、婆羅門中の大婆羅門なり。大慈悲の中にて、大悲最勝、無上の尊にして、大丈夫たり。已に生死の流を度つて、彼岸に轉じ、一切の世中にて、最勝の檀那、曇摩、僧琰摩たりと。

『何者か檀那なるとならば、所謂捨施なり、乃至頭目・手足、須つ所の肢節をば、皆悉く能く捨するなり。況んや復餘の物をや。此を檀那と名く。

『何者か曇摩なるとならば、清淨に戒を持し、乃至は人來つて頭を索めんに頭を與へ、心に瞋恚せず、慈悲を失はざる、是を曇摩と名く。

『何物か僧琰摩なるとならば、六根を捨せずして、一心に禪定し、一切福德の言語をば、誦持・憶念して忘れず、此の二の思量・思念を、已に修する、是の二種をば、僧琰摩――一切衆生平等の心法とは名く。

『若し我が捨の法――曇摩と檀那、及び僧琰摩――と四梵行の法、聖八正道の法との、是の如きの法をば、慈心もて熏ずるが故に、此の一切の法をば、無量劫に於て、慈心もて修するが故に、我が所得の如く、一切の諸法をば、衆生の中に於て、廣演宣說せん。亦導師と作つて、衆生を悲憐し、其の意を開解せん。此の事を演說しては、缺減する所無けん。汝等今應當に、一心に信受・奉行して、諸禪を學習すべし。種種の蘭若、或は林樹の下、或は復塚間、種種の山巖・崖岸の中に住し、彼に於て坐禪せよ。生死を盡さんが爲の故に、大精進を勤め、身心に倦まざれ、下心を作す莫れ。成す所無き故に、死時には悔惱せんと。

『此の我が一切所教の法をば、是の如く說き已らんに、此の娑婆界三千大千佛刹の中なる、百億の四天下――一の四天下には、則ち無量億那由他百千の衆生有り――なる、彼の諸衆生、種種の善根・功德を具足し、或は陀羅尼を得、或は忍を得、或は法眼を得、或は須陀洹、乃至阿羅漢を得ん。或

力もて、是の如く說法して、此の一切の三千大千、娑婆世界佛刹の中なる、有らゆる一切無量の衆に及ぼせ。彼の諸衆生は、我が說法を聞き、能く聽受せん。憍陳如、一切の諸法は、悉皆無常なり、一切の諸法の、生と住とは無常なり。何を以ての故にとたらば、生の因緣の故に。眼の如く識生じ、生じ已つて住し、住し已つて念じ、念更に生ず。此は卽ち是れ苦なり。是の生の因緣は、卽ち是れ苦の生なり、卽ち是れ癰瘡なり、卽ち是れ一切の十二有支なり、卽ち是れ老病死の因緣にして、是の如く念念に生滅するなり。

『眼の因緣の如く、耳・鼻・舌・身も、亦復是の如くなり。憍陳如、住は暫く有りと雖も、滅は更に漸く生ぜん。此れ譬へば窓の如し。此の生住の緣、此の苦の因緣もて、此の百種の老病及び死有り。是の如く展轉して、漸く因緣を生ず。眼は見て業を造る、見に隨つて、隨つて念じ、念に隨つて、隨つて造る。造る所の生死の因緣は、窮り無し。

『憍陳如、眼の寂滅なるが如く、光滅沒の故に、衆色を見ず。彼の日沒すれば、窓の中見えざるが如し。若し因緣滅すれば、一切の患滅し、十二の有支も、一切寂滅ならん、生死寂滅ならん。日沒の緣の如く、耳・鼻・舌・身も、亦復是の如くなり。

『憍陳如、如し心寂滅ならば、所緣も亦滅せん。此の窓の因緣は、本不生なるが如く、一切の萬法も、亦復是の如くなり。是を苦の滅と名く。一切の患滅すれば、十二の有支も、一切寂滅なり。生死を究竟し、諸有の邊を盡さんこと、亦復是の如しと。

『憍陳如、衆生は眼の生滅を知らずして、耳・鼻・舌・身の所染に隨逐す、是の故に、五道の中を流轉するなり。我の聖法は、能く生死を離れて、彼岸に過ぎしむ。是の故に如來は、一切の眼の生滅を斷ぜんが爲の故に、法を演說したまひ、亦爲に苦の斷と苦の行の法とを說き、一切の苦の中に、其の底を盡すを得たまへるなり。是の故に如來は、此の法を得已りたまへり。是れ一切の天・梵中の大

如く、乃至頭を擧げて帝釋の宮に到り、自ら佛を見まつりぬ。是の如く西方の護寶龍王も、北方の毘呂伽蘇脂龍王も、東方の蘇摩呼嚧叉王も、各大海に還り、舊の宮中に於て、悉く本形を復し、乃至前の須彌山の如き頭もて、自ら來つて佛所を見たるに、餘の無量那由他百千萬億は、猶ほ彼處に在つて、出づることを得る能はざりき。

時に一切の龍、大聖人に向ひ、此の獄中に於て、是の如くに稱說したり『願はくは我を救濟したまはんを、願はくは我を救濟して、速に解脫せしめたまはんを』と。

爾の時、難陀・優波難陀の二龍王等、佉羅山なる聖人の住處より、各自身を以て、須彌山に依り、大橋を化作し、帝釋の宮に[二三]往き、是の如き言を作せり『惟願はくは如來、此の橋上を踏んで、須彌の頂より下り、佉羅坻なる聖人の處に坐し、一切龍の歸依の爲に、說法したまはんことを』と。

時に帝釋天、是の如く念言したり『此の龍は、身澁にして毒氣あり、皮麁なり、或は如來を傷けまつらん、定んで安隱ならず』と。是の念を作し已り、卽ち天服を以て龍身を覆へり。又天中の牛頭栴檀、[二四]優羅伽娑羅栴檀、多摩跋香の、此の三種の香と、及び天華との種種の屑末を以て、橋上に散らし、幷に龍の身を蔽ひぬ。

時に佉羅坻なる牟尼の住處は、佛力を以ての故に、更に廣博を增し、八十四億那由他百千[二五]踰闍となりぬ。彼の處、廣がり已るに、大梵天王は、天の金・銀を以て、師子の須彌寶座を化作し、種種の莊嚴・幡華・帳・蓋もて、之を安置したり。

爾の時、一切の諸龍王等、是の語を聞き已り、各佛に白して言はく『世尊、惟願はくは、憐愍して、我等の苦を救ひたまはんを』と。佛の言はく『龍王、汝等應に至心に佛を念ずべし。我れ當に之を救ふべし』と。

爾の時世尊、須彌の頂に在し、長老憍陳如に告げて言はく『憍陳如、諸佛境界・奮迅神通・加被の

【二三】往。麗本挂に作る、今三本に依る。

【二四】優羅伽娑羅栴檀、梵に Uragasāracandana.

【二五】踰闍。由旬なり。

時に天帝釋、佛に白して言はく『若し佛如來、我を憐愍したまはば、是の如く、神通力の作せるところ、及び此の三千大千世界・娑婆刹中の、あらゆる菩薩、大阿羅漢、大梵・魔王、他化樂天、諸帝釋天、乃至は此の娑婆世界のあらゆる天王、龍王・夜叉王、乾闥婆王、阿修羅王、迦婁羅王、緊那羅王、摩睺羅伽王をば、受用したまはんを。復大力福德の衆生、天中の聖人、人中の聖人有つて、皆來りぬ。佛を供養しまつらんための故に、佛を見まつらんための故に、佛を禮拜せん爲の故に、法を聽かんための故に。是の如き等の衆と、此の須彌山とを、若し受用したまはば、我れ當來に於て、大勝樂を增し、大安隱を得ん』と。

爾の時世尊、帝釋天を受け、彼の中に住まり、端坐正念し、熙怡微笑したまひ、笑ひ已つて口中より種種の光――青色・黃色・赤色・白色・紫頗梨色――を出し、此の三千大千佛刹の中の、百億の魔王の宮、百億の帝釋の宮、百億の梵天宮、百億の一切諸天王の宮、百億の阿修羅王の宮、百億の聖人牟尼の住處などをば照し、此の一切の光もて、是の如くに照し已りたまふに、上に說く所の如く、一切の福德大力の魔王、乃至聖人など、一切驚覺して、各各光を尋ね、神通力に乘じ、一念の頃の如きに、此の須彌山の頂に來到したり。

爾の時世尊、神光を現じ已り、帝釋に告げて言はく『天主、是の如き三千大千世界一佛刹の中には、則ち百億の須彌山王有るなり。是の時、一切の諸須彌の中、此の須彌山こそ、最尊最勝たり。何を以ての故にとならば、我れ及び天・人など、一切大集し、此に在りて受用し、諸龍を度すればなり』と。

此の語を說きたまへる時、無量百億の帝釋天等、一切の梵王、皆大に歡喜したり、是の如き如來の神通力の故に。時に四龍王、皆彼の聖人の住處より出づるを得、既に出づるを得已つて、各自方に還りぬ。是の如くして、娑伽羅龍王は、南方大海の岸中に還り、其の本身を復して、大さ須彌の

するが故に』と。

時に寶護龍王、復是の言を作せり『此は四天に非ず。我れ、衣を染め、鬚髮を剃除し、身に袈裟を服し、相好端然、盛德自在にして、諸の天人の、瞻仰する所と爲り、恭敬供養し、合掌圍遶すること、日月を天の星宿の遍く遶るが如くなるを見るに。此の八大聖は、皆悉く顯赫、堅固の照明あり、身の紫金光と三十二相とは、一切を慈悲し、三界の中に於て、供養を受くるを得るなり』と。

爾の時、毘昌伽蘇脂龍王、更に是の如く言へり『眞實の導師をば、我れ親しく見來りぬ。能く救ひ、能く護りたまひて、一切の衆生、能く苦を竭さん。能く此の獄に於て、解脫の樂を與へたまはん。今近く此の須彌山頂に住まりたまふ。是の如き世尊の神通力の故に、此の須彌の頂は、忽に更に廣闊となり、八十四百千踰闍那となれり』と。

爾の時、欲・色の一切の諸天、各如來を供養せんと欲したるが故に、佛の爲に七寶の階橋を造作し、樓閣の梯橙、次第に節級し、乃至上は阿迦膩吒天に到り、各種種不可思議の、天の雜琉璃・雜網を以て校飾したること、猶し寶蓋の如くにして、巧妙なること雙少く、一切の衆生、見て厭足無く、無量百千の種種の珍寶もて、以用て莊嚴し、種種の天衣、種種の瓔珞、種種の傘蓋・繒綵・幢幡、蠡鼓・鐃鈴・花香・伎樂など、是の如き供養、虛空に遍滿したり。

爾の時世尊、帝釋に告げて言はく『天主、是の如き三千大千世界と娑婆刹土との、一切の諸佛、幷に大菩薩摩訶薩、大阿羅漢、大聖仙人、及び福德を樂ふ大力の魔王、種種の色・欲の、天・龍・夜叉・人非人等、此の三千大千刹に於て住り、受用皆訖りぬ。是の如く、帝釋、此の須彌山に、如來世尊、十方の佛刹よりの、諸來菩薩・大阿羅漢、一切の聖人、樂福の魔王、大德諸天、乃至龍・夜叉・羅刹・人及び非人まで、此の須彌山に、皆悉く停住せば、汝諸天等は、當來の世中に、多く勢力を得ん』と。

爾の時、難陀・優波難陀龍王、是の如き言を作せり『此は是れ梵天にして、一切の欲・色〔の衆に〕に圍饒せられて住するなり。一切の天中、最も殊勝と爲し、智慧の岸に到りたまふ。我等を憐愍するが故に、此に來至せるなり。今一切の龍、若し能く、此の苦の獄を出づるを得んと欲すれば、皆禮敬すべし』と。

是の時、〔三〕阿那婆蹋多龍王、是の如き言を作せり『此は梵天に非ずして、乃ち是れ魔王なり。欲界の中に於て、威力自在なり。我等を愍むが故に、妻子眷屬など、皆悉く圍遶す。欲界中の一切衆生、怖畏を脫せんが爲に、故に是の中に來つて、我が龍の厄をば救ふなり』と。

時に地利致色龍王、是の如き言を作せり『此は魔王に非ず、乃ち是れ欲界・他化等の天などの、故に此の中に來り、一切の諸龍をして、解脫せしめんと欲するなり』と。

爾の時、衆中の一切の龍王、皆大聲を發し、是の如き言を作せり『願はくは諸天等、我に解脫を與へ、我に安樂を施し、我をして早く、地獄より出づるを得しめんことを』と。

時に婆伽羅龍王、復是の言を作せり『彼は兜率・化自樂等に非ず、此は是れ天主釋提桓因にして、放つ所の光明は、欲界及び四天下を照し、彼の一切四域の衆生、善法を樂ふを觀ずるなり。汝等一切、慈悲の心を起し、更に瞋を生ずる勿れ。彼の天所に於て、解脫を求乞して、速に此の苦を離れよ』と。

時に善住龍王、是の如き言を作せり『此は帝釋に非ず、乃ち是れ一切の諸色界の天、禪の樂を捨てて、彼より下來し、法雨を雨らして、衆生に樂を與へんと欲するなり。汝諸龍等、一切至心に禮拜して救を乞へ』と。

時に毘昌伽蘇脂龍王、復是の言を作せり『此は色天の、神通力もて來れるには非ず、是れ四天王毘沙門等の、四方を護らんが爲に、各各自ら、眷屬を將ひ來れるなり。罪惡の諸衆生を除かんと欲

〔三〕阿那婆蹋多 Anavatapta, の音寫、また阿耨達ともいふ。

『惟願はくは如來、我が橋上を行きたまはんを』と。須夜摩天も亦、如來の爲に、天の瑠璃を以て、寶橋を化作し、諸種種の多摩羅葉の細末香を散らし、是の如き言を作せり『惟願はくは如來、我が橋上を行きたまはんを』と。 天帝釋[一九]も亦、佛の爲の故に、赤眞珠を以て、寶橋を化作し、天の種種の栴檀の一切の寶末を以て、用つて橋上に散じ、又天僧、七寶の妙網を以て、之を羅覆し、覆し已つて是の如き言を作せり『惟願はくは如來、我が橋上を行きたまはんを』と。是の如く四鎭四大天王も、亦珍琦の天の石藏寶を以て、如來の爲の故に、寶橋を化作し、亦細妙の種種の天衣を持つて、橋上を覆ひ、覆ひ已つて、是の如き言を作せり『惟願はくは如來、我が橋上を[二〇]行きて、須彌山に上りたまはんを』と。

是の時、四大阿修羅王、并に其の眷屬など、如來の爲の故に、其の所出の[二一]摩婆羅寶を以て、寶橋を化作し、天の金銀の細末の屑を持つて、橋上に散らし、散らし已つて、是の如き言を作せり『惟願はくは如來、我が橋上を行きたまはんを』と。

爾の時世尊、彼の一切の梵・釋・四鎭、及び阿修羅・諸天等の爲に、憐愍を以ての故に、一時に八佛如來を化作したまひ、三十二相・八十種好など、殊異有ること無く、八部・四衆・菩薩・聲聞など、圍遶導從したり。

彼の一切の天・阿修羅等、是の如く大に諸の莊嚴を設け已る。時に佛世尊、卽ち寶橋に上り、須彌頂に昇り、或は餘處に起ち、或は餘處に去りたまへり。彼の八如來は、身に大明耀あり、一一の佛身より、皆光明を放ちて、百千億の日月の光、一時に照明するが如くなり。是の如く八佛、身光を放ち已る。

時に諸の龍衆、一切皆、佉羅山の聖人處所に在り、集聚して住したり。諸龍見已り、一切怪んで言はく『此は是れ何處の八大護世か、今來つて須彌山に依止するなる』と。

【一九】天帝釋。日密分には忉利天に作る。

【二〇】行。麗本從に作る、今三本に依る。

【二一】摩婆羅。摩婆羅伽隷 Musāragalva の略、馬腦、又は車渠と譯す。

の中に生じたる罪業は悉く盡きたり』と。復光味に告げたまはく『空觀と心念との故なり』と。
時に光味の言はく『是の如くなり、世尊、如來は清淨の戒を具足したまへり。如來は當に、一切諸龍の爲に、莊嚴を作したまふべきが故に』と。
『復次に光味、我れ是の時に於て、實に諸龍の爲に、不可思議業報の差別をば、廣說せんと欲するが故なり』と。
爾の時、一切の諸欲・色の天、乃至夜叉・鳩槃荼等、虛空の中より、種種の華を雨らし、種種の香、衣服・幢幡、七寶の瓔珞を散じ、種種の伎樂――無量百千億那由他――もて、一時に倶に歌詠・讃歎を作し、妙音聲を出すに、人と非人とは、[一四]僉然恭敬したり。
爾の時世尊、座より起ち、四面を顧視し、北方に向つて、此は何處の山なるやを看たまふに、須彌と接近し、彼の欲色及び色天[と接近したり]。
[一五]爾の時如來、諸の大衆、菩薩・聲聞、天・人・龍神、一切の八部のために、四面圍遶せられ、前後導從せられて、須彌山に趣きたまへり。是の時如來、足を以て山根を歩[一六]躡し、次第に登上せんと欲したまへるに、大梵天等、佛の須彌山頂に昇らんと欲したまふを知り、卽ち如來の爲に、七寶の階橋を化作し、諸の天衣及び華・香・末、種種の校飾を持ち、是の如く作し已り、前んで佛に白して言はく『惟願はくは如來、我が橋上を行きたまはんを』と。[一七]他化樂天も、亦佛の爲の故に、閻浮金を用つて、寶橋を化作し、龍栴檀末を以て、橋上に散し、是の如き言を作せり『惟願はくは如來、我が橋上を行きたまはんを』と。[一八]化自樂天も、亦佛の爲の故に、諸の天金を用つて、寶橋を化作し、種種の牛頭細栴檀の末を橋上に散らし、是の如き言を作せり『惟願はくは如來、我が橋上を行きたまはんを』と。兜率陀天も、亦佛の爲の故に、諸の天銀を以て、寶橋を化作し、諸種種の、時に應じて、微妙の香を出す所の、黑栴檀と名くるものの末を以て、橋上に散じ、是の如き言を作せり

【一四】僉。皆なり。成なり。
【一五】日密分。救龍品第六(卷三十三參照)。
【一六】躡。至るなり、登るなり。
【一七】他化樂。また他化自在といふ。此の天、快樂を爲すに、自ら樂具變現するを要せず、下天の化作せる他の樂事を假つて、自在に遊戲すればなり。
【一八】化自樂。また化樂天といふ。自ら五塵を化して、娯樂するが故なり。

或は種種怨家の爲に來り侵され、或は一切の鬼、或は一切の魅あり、或は復國王あつて、種種怖畏し、或は自家中に、鬪諍口舌あり、或は復他人の、横に來つて瞋怒し、或は死の怖畏、或は惡道中に墮せんと欲するの怖畏など、是の如きの怖畏をば、此の業皆盡し、人天の中に生れしめん。若し復人有り、一たび是の如き四禪地依止念佛三昧を聞き、至心に是の如き念佛三昧を信受せば、大勢力有り、大利益有らん。小小の用心すら、尚ほ是の如くなるを得。何に況んや、至心にして疑惑有ること無きをや』と。

此の三昧の法を說ける時、衆中の八十六頻婆羅那由他百千の、十方より來れる諸天・人等の、過去に曾て此の三昧の、熏修せる所と爲れる者は、皆悉く、上に說く所の如きを獲得したり。復八十四那由他の衆生有つて、苦智忍を得、無量の衆生は此の三昧を得、或は須陀洹より羅漢果に至りぬ。無量の衆生、菩提の心を發したる時、彼の離暗などの五百の魔女、佛の神力を承けて、魔王の宮に在りながら、悉く皆此の念佛三昧を得、悉く本形を捨てて、男子の身を得たり。曾て過去に於て、是の如き念佛三昧を修學したるが故なり。

時に此の五百の諸魔王女、三昧及び男子の身を得已り、心に歡喜を生じ、佛所に往かんと欲し、一切大梵天の身を化作するに、一一の梵王をば無量千億の眷屬、圍遶し、或は無量の帝釋天の身を作すに、亦千億の眷屬有つて圍遶し　各無量種種の音樂を以て、種種莊嚴したり。是の如く化し已つて、魔宮より下り、如來の所に向つて、供養を設け、種種の華鬘・末香・塗香などを佛上に散らし、佛足を頂禮し、右遶三匝して、却いて一面に住まりぬ。

日藏分　昇須彌山頂品第十一

爾の時佛、光味菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、汝今當に知るべし、彼の一切の龍の、惡道

結加趺坐して、諸刹に遍滿せん。是の如き世界をば、能く水もて滿たしめん。十方の塵數をも、皆能く數へ知らん。能く七寶を以て、諸の國界を滿たさん。又復彼の人、一念の頃に於て、悉く能く、生死の業報と過去・現在及び當來の、一切衆生所有の心數とを知るを得ん。又彼の行人、能く一身を以て、種種に、一切の佛身、釋・梵天の身、那羅延の身、摩醯首羅の身、四天王の身、轉輪聖王の身、乃至水火を化作して、虚空に遍ぜん。

『又復彼の人、是の如くに念ぜば、能く一念の中に、一切十方の地、及び虚空をば、種種の華もて滿たし、七寶を充滿せしめ、一切の衆香・傘蓋・幢幡・種種の衣裳、種種の瓔珞もて、一切の虚空をば、皆悉く能く滿たさん。若し復人有り、至心に此の四禪地依止念佛三昧を修習せんに、一一の差別をば、諦に識つて了達せん。

『時に彼の衆生、是の如き無量の惡業をば、悉く盡さん。是の如き無量の福德と精進、種種の三昧、種種の陀羅尼、種種の忍、及び五神通などをば、餘乘の中に於て、速に滿足するを得、流轉の海中より、畢に定んで疾く出でん。五無間と法を謗ると聖を誹るとの、是の法を得ざるをば除く。

『彼の人、應に須らく七七日を經て、此の四禪地依止念佛三昧の、心內の熏修もて、此の法中に於て、常に修習・不捨離を說かんに、一切の罪盡きん。若し專心ならざれば、罪兩分して盡き、平常用心すれば、罪の一分盡きん。是の如き修習には精進の心と純なる信敬の心とを須ひよ。能く是の如くなれば、彼の惡乃ち盡きん。

『若し復人有り、此の四禪地依止念佛三昧をば、或は天の中に說き、或は人中に說かんに、若し彼の天人、信心もて此の如き三昧を聽受し、內に自ら思惟して歡喜を生じなば、是の如きの人、若しは牢獄に在り、五鎖もて身を繫がれ、或は復餘の處にて、辛苦を受けんも、悉く免脫するを得ん。若しは生活を失ひ、或は復財を求め、或は打たれ、或は燒かれ、或は河水に臨み、或は毒藥を被り、

觀じて、皆明了ならしめ、所見の相に隨ひ、青光明を見ん。彼の光相に於て、專精に意を繫け、心亂れしむる無かれ、是の念を作す時、是の呪を誦すべし、

『哆経多　毘覩林婆　毘覩林婆　鬱頭波駄　遮耶毘覩林婆　斯那婆頗　羅斯那婆頭　羅阿㝹那多*
他修阿㝹那多他修復嚧多俱致毘覩林婆毘覩林婆　莎呵

『是の如き一相、前心に在り、獃獃として專ら念じ、亂想を起さされ。然る後、此の陀羅尼呪を誦し、乃至佛身相中の青色を念ぜんに、光を出さん。彼の光出で已りて、行者の頂より入らん。爾の時、心を安んじ、愼で驚怖すること莫れ。自身の中に於て、此の光を見、彼の青色の如くに、此の青光を念ぜよ。自身中の各各の肢節、處處に遍く行き、乃至一切の身中に火然えん。火然え已つて、乃至灰を成ずるを見ん。及び四方の風來り、吹いて散滅せしむと。是の如く念ぜん時、自身に於て、一相有ること無く、惟空の在る有るを見ん。乃至十方も、皆悉く是れ空にして、一色をも見ざらん。是の如く、佛の青色を念ずる力の緣もて、呪を誦持し、此の行を成就せよ。

『善男子、若し復人有り、是の如く念を繫け、心を散亂せず四禪地依止心念陀羅尼を學せんに、彼の衆生の一切の業障、煩惱障、法障、罪業皆盡きん。惟五逆と、正法を破毀すると、聖人を誹謗することを除く。

『若し復人有り、是の如く樂はん者、能く上の如く、念佛三昧を習し、一日一夜のあひだ、口に能く誦持せんに、一切の佛法、一切外道の、十八種の論、智慧勝處、是の如き種種の句義・文章など、悉く皆憶持して、遺忘有ること無けん。又一日夜に、四禪を得、四種の神通、四無量の行、四種の辯才、及び四無色の三摩跋提など、是の如き等の法をば、一切成就し、具足して之を得ん。

『是の如く修せん者、乃至能く、[三]一彈指の頃に、一の佛刹及び無量の刹に到り、又一足を以て、能く是の如く、無量の刹土を動かし、是等の刹を過ぎて、亦能く動搖せしめん。能く一身を以て、

---

*勳力を用ふるなり。

【三】彈指。時の名、僧祇律によれば、二十念を瞬と爲し、二十瞬を一彈指と爲す。

蜜を修行し、常に四攝を行じ、常に佛を見ることを得、常に法を聞き、常に僧を供養し、常に四禪及び五神通を得、常に具足して四梵行を得、生生世世を念じて、常に彼の法と、和合共生し、乃至涅槃をば、未だ曾て捨離せざりき』と。

佛の言はく『善い哉、善い哉、善男子、汝大に衆生を利益せんが爲の故に、是の如く、過去宿の發心因緣を說くことを作せり』と。

爾の時世尊、復光味菩薩に告げて言はく『善男子、諦に聽き、諦に聽け、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、或は男、或は女の、信心有る者有り、三乘及び餘の道中に於て、速に涅槃の道を證し、一切の苦を盡すを得んと願じ、一切を聞いて、心に持在し、一切の身口意の業、清淨なるを得んと欲し、佛法を護らんと欲し、種種の利益――種種の衣食など、一切豐饒、自在殊勝にして、端正大力有り、眷屬强盛、國土富安、職位高く遷つて、多人に奉敬せられ、聰明の智慧ありて、最勝最尊ならんを求め、行住の四儀は、常に乏少する所無く、及び種種の施・戒・坐禪を樂ひ、諸の三昧、乃至無色・一切有頂所有の三昧を得んと欲せん。亦復四梵天の行を樂はん。若し陀羅尼を樂ふの人有り、是の如き種種の衆事を得んことを望まんに、而も彼の惡業、堅固重厚にして、諸業の障礙、煩惱の障礙、乃至清淨の佛剎に生れんと欲するも生ぜざる障礙などあり、是の如きを以ての故に、種種の善願も、心に稱ふを得ざらん。是の如き種種の惡業をして、速に滅盡せしめんと欲すれば、此の衆生は、應に淨く洗浴し、鮮潔の衣を著し、菜食を長齋して、辛臭を噉ふ勿れ。寂靜の處、莊嚴の道場に於て、正念もて結加し、或は行じ、或は坐し、佛の身相を念じて、亂心ならしむる無かれ。更に他の緣の、其の餘の事を念ずる莫かれ。或は一日夜、或は七日夜のあひだ、餘の業を作さず、至心に佛を念ぜんに、乃至佛を見んこと、小念には小を見、大念には大を見ん。乃至無量の念は、佛の色身は、無量無邊にして、彼の佛の身形に、三十二相あるを見ん。一一の相に於て、亦念じ亦

彼の時に佛有り、曼陀羅華香と名けたり。心を佛邊に專らし、遙に救濟を求めたり。

『是の時彼の佛、衆生と及び我等とを、憐愍したまへるが故に、自の座中に於て、佛の境界と大神通力とを現じ、四禪地依止心念陀羅尼を說き、是の如き言を作したまへり「我れ佛力を以て、彼の獄中の二婆羅門をして、此の四禪地依止心念陀羅尼を聞き、聞き已つて歡喜し、至心に憶念せしめん」。是の因緣を以て、其の所有の一切惡業と一切障礙――若しは今生中の惡業の障礙、若しは多生中の諸惡業の障、若しは煩惱障、法障、衆生障、捨施障、智慧障、生活障、壽命未だ盡きざるに横死するの障、意に不生を欲して繫地に牽かるゝ業力の障礙、若しは淸淨佛剎の中に有り、情に欲生を願じて往くを得ざりし違心の障礙など――是の如き一切惡業の障礙と、此の四禪地依止心念陀羅を聞く因緣の故に、喉及び手足の五種の枷鎖とをして、自然に一時に脫落して地に在らしめたり。

『卽ち獄中に於て、陀羅尼力を得、神力を以ての故に、獄を出づるを得、虛空中より、曼陀羅華香佛の所に到り、禮拜供養して、其の壽命を盡して、卽ち山光佛剎に往生するを得たり。彼の佛世尊をば、名けて雲色と曰へり。この雲色佛に從ひ、出家を請求し、旣に出家し已り、生生世世、無量の劫中、常に空の佛剎に生ぜざることを得、恒に佛世に値へること、今の此の剎――娑婆世界三千、大千佛土――の如く、地及び虛空、乃至阿迦膩吒天、人非人など、皆悉く充滿したりき。

『時に彼の佛剎の一切衆生、地及び宮中、乃至阿迦膩吒天も、亦復是の如く、一切の衆生は、惡業及び諸の障礙を具足したり。彼の如來、衆生の爲の故に、此の四禪地依止心念陀羅尼を說きたまへるを以て、身口意の惡、悉く皆消除したり。若し此の陀羅尼の力を聽聞せんに、一切三世の諸罪惡業、悉く滅して餘無けん。又彼の衆生、種種に更に、人忍三昧陀羅尼を得、乃至壽命の、盡きんと欲したる時、此の間に死し已り、願の如く他方の淸淨佛剎に生ぜんと欲したるに、念に應じて卽ち生れ、宿命を得、常に精進を勤め、十善の法を行じ、常に復三惡道中に墮せず、常に能く六波羅

是の時、五百の諸魔女等、更に波旬の爲に、偈を說いて言はく、

『若し衆生有りて、佛に歸せば、彼の人は千億の魔をも畏れざらん、何ぞ況んや生死の流を度り、無爲涅槃の岸に到らんと欲するをや。　若し能く一の香華を以て、持つて三寶――佛法僧――に散じ、堅固勇猛の心を發す有らんに、一切の衆魔は壞する能はざらん。　何ぞ況んや畢定して作佛を求むるをや。　若し精誠に一戒を持し、或は復至心に佛邊に來り、一句微妙の法を聽受する有らんに、卽ち不退の菩提道を發し、決定して一切の衆中に尊たり、佛の金剛不壞身を得、能く一切四魔の衆を摧かん。　父王、但だ看よ、諸龍等は、各種種の香華雲を散ずるを、惟佛世尊のみ能く了知したまふ、是れ魔王の境界に非ず。獨一の導師は世に處して、殊勝難思議を說きたまひ、所作の一切皆吉祥にして、能く衆生の罪業をして除かしめたまふ。　我等が過去の無量の惡も、亦滅して餘有ること無し、至誠專心に佛に歸し已れば、決して阿耨菩提の果をば得ん』と。

爾の時魔王、是の偈を聞き已り、倍大に瞋恚怖畏もて心を煎し、憔悴憂愁して、獨り宮內に坐したり。

是の時、光味菩薩摩訶薩、佛の說法もて、一切の衆生、盡く攀緣を離れ、四梵行を得たるを聞き、佛前に當つて、空より下り、佛所に至り已り、光味菩薩と、其の大衆とは、佛の爲に禮を作し、右遶三匝して合掌し、佛に白して言はく『世尊、如來は彼の四禪地依止心念陀羅尼を說きたまへり、是の陀羅尼呪術の力を以ての故に、我れ過去を憶ふに、二の婆羅門の子有り、欲事を以ての故に、罪應に死すべく、官の爲に收せられ、殺時未だ到らざりき。王有司に勅して牢獄に付し、半月半月に、時に一湌を給し、五縛を身に繫け、兩足と兩足とは、悉く皆[三]桁械し、咽喉は鎖がれて、飢渴堪え難かりき。兼ねて復、死時の將に逼らんとするを畏れ、獄中にて、一心に佛に歸依したりき。

【三】桁械。かせをかけるなり。

魔女答へて言はく『王所說の如し、若し空の法に於て、實際を覺せば、設ひ千萬億の一切の魔軍も、終に須臾も害を爲すを得る能はず。如來は今涅槃の道を開きたまへり。女は彼に往いて、佛に歸依しまつらんと欲するなり』とて、卽ち其の父の爲に偈を說いて言はく、

『相を離れて著せざれば人中にて勝る、如如常住なる天中の尊は、彼岸・智慧の城に到りたまへり、我れ今、往いて彼に歸依せんと欲す。　三世諸佛の法を修學し、一切の苦の衆生を度脫せしめ、善く諸法に於て自在を得たまへり、當來に願はくは、我れ還佛の如くならん』と。

爾の時離暗、是の偈を說き已るに、父王宮中の五百の魔女・姊妹・眷屬など、一切皆菩提の心を發したり。

是の時魔王、其の宮中の五百の諸女、皆佛に歸して、菩提心を發したるを見、益大に瞋忿し、怖畏し憂愁して、卽ち是の念を作せり『我れ今當に大魔王の力、大魔王の威を行じ、自の宮中の魔王坐處に於て、神化を極め盡すべし。彼の聖人牟尼の住處に當り、一切諸龍の和合して集まる處に、大化石を作し、虛空中より、一時に雹を下し、彼の諸龍及び光味仙人を碎き、其をして遠く散ぜしめん。若し彼れ去らば、我が魔王の宮は、乃ち安樂なるべし』と。是の念を作し已り、卽ち空中に大火雹を放ち、雨の如くに下す。

是の時、如來、神通力を以て、彼の火石を變じ、悉く天華と爲したまふに、繽紛亂墜して、佉羅坻に墮し、山の頂上なる聖人住處に滿ちて、悉く皆充遍したり。一切の龍王も、歡喜せざる莫かりき。

是の時魔王、雹の、聖人住所に下るを見、卽ち自ら、五百の女に指示して言はく『諸女、好く看よ、今彼の處所なる、一切の諸龍眷屬大衆の、沙門瞿曇の邊に歸する者をば、我れ已に破碎して、一切塵の如くなり。何ぞ況んや我が宮をば、壞する能はざらん。若し我が宮中に、瞿曇に歸向せんと欲する者有らば、要ず當に其をして、彼の如くにして異ならざらしめん』と、

を發したれば、宿命を念じ已りて、卽ち光明照耀陀羅尼を得たり。餘の諸龍衆の八十那由他も、亦曾て過去の種種の願行をば、悉く修習し來り、一切皆三菩提心を發して、三昧を得たり。

爾の時光味、卽ち自ら聖人の身の、菩薩の形の如くなるを化作し、諸の佛等と、神通力に乘じ、虛空中より如來の所に往きたり。

日藏分〔一〇〕念佛三昧品第十

爾の時、一切の諸龍衆等、光味菩薩の言を信受し、皆悉く至心に佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依したり。是の歸を作したる時、魔王波旬、親しく見、親しく聞き、既に見聞し已りて、大に驚怪・怖畏・不安を生じ、瞋恚憂愁し、遍身に汗を流し、手を擧げて頭を摸り、偈を說いて言はく、『呵呵、看よ、彼甚だ大笑したり、姦僞もて幻惑する釋沙門は、諸龍を誘誑して、皆已に歸せしめ、一切諸衆生を迷〔一一〕忤したり。惑亂の道中に妄に安立し、非なるを實とし、是の我が法は眞なり、是の如き實法をば、若し得ん時は、彼の中の始終をば、應に失せざるべしと言ふ』と。

爾の時、波旬、是の偈を說き已るに、彼の衆の中に、一魔女有り、名けて離暗と爲す。此の魔女は、曾て過去に於て、衆の德本を殖ゑたるが、是の說を作して言はく『沙門瞿曇は、名稱・福德あり。若し衆生有つて、佛名を聞くを得、一心に歸依せんには、一切の諸魔、彼の衆生に於て、惡を加ふる能はず。何ぞ況んや、佛を見、親しく法を聞く人、種種の方便もて、慧解深廣ならんをや。父王、今如來及び、佛道を學する者の邊に於て、惡心を興造せんと欲するも、終に成ずる能はざらん』と。

時に魔王の言はく『沙門瞿曇は、解眞如に達し、智慧廣大なり、空法の中に於て、深く堅固に入り、自ら既に生死の大海を度脫し、又衆生に教へて、皆出離せしめたり』と。

〔一〇〕日密分にはこの品に當る文を缺く。

〔一一〕忤。さからふなり。

已に說き竟る。

『復次に彼の佛・如來・世尊は、無量阿僧祇恒河沙等の諸佛刹の、微塵等の無量無邊の、清淨なる阿耨多羅三藐三菩提の行に住したまへるが故に、六波羅蜜をば、悉く具足して滿したまへり。菩薩摩訶薩は、流轉の生死界を出でたるが故に、大涅槃の智慧の彼岸に到り、四魔を壞せるが故に、三寶の種を紹いで、斷絕せざるが故に、能く法水を以て、諸の衆生を洗ひ、一切の煩惱の垢を、清淨ならしめたるが故に、如來は是の如く永く攀緣を離れ、四梵行を說きたまへり。復如の性、出の相、離の相、及び離我見、一切の法等の無盡・方便を說きたまへり。謂はく五陰と十八界と十二入に於て、實に諦に觀ずるが故に、四大差別・生死等の法、皆悉く滅し盡すを得、方便もて貪・瞋・癡等を離れ、一切煩惱の體性悉く空にして、衆生の界無く、諸の攀緣を離れ、喜無く喜を離れ、行無く行を離れ、物無く物を離れ、想無く想を離れ、諸の障礙無く、處所有る無く、塵無く染無く、暗無く明無く、捉持すべからず、自無く他無く、不來不去、異無く行を離る。乃至一切の陰入界等、智眼の體性、暗に非ず明に非ず、不行不生、法界眞實にして、不滅不壞、如如不生、法界は眞實にして、皆空なり。過去の一切諸法等の中に、悉く皆了達したまへり。是れ眞の攀緣にして、如來從て生じたまへるなり。

『若し菩薩有り、是の法の中に於て、彼岸に到達し、六波羅蜜を、具足充滿せんには、猶し虛空の如く、色を離れ觸を離る。是の如くして、心に無障礙智を得、普く一切の諸見及び習を斷じ、悉く皆除盡せん。是の如くして、一切の煩惱を離るるを得る、是を菩薩摩訶薩、四種梵行の法を觀ずることを離ると名くるなり』と。

是の時、光味、此の法を說き已るに、時に彼の衆中の娑伽羅龍王、毘昌伽蘇脂龍王[八]、須摩呼嚧[九]迦沙、護寶龍王など、是の如き等の龍王、已に過去に於て、菩薩の行中に、福德を修習し、弘誓の願、

【八】毘昌伽蘇脂。卷の首には毘昌伽蘇致に作る。
【九】須摩呼虛迦河、卷首には須呼虛俱叉に作る。

所有の諸の災惡は、魔王の所爲にして佛の作には非ず。餘心を起して佛を誹毀する莫く、我が教誨を受けて菩提を發せ、疑惑を生じて自ら迷沒する勿れ、一一皆前に說けるが如し』と。

(七) 爾の時、一切の大龍王所有の、眷屬男女・大小など、牟尼聖人の處に在り、此の說を聞き已つて、各各一心に、齊しく共に合掌し、是の如きの言を作せり『南無・南無大聖、一切世間衆生の中にあつて勝れ、一切の法を具して自在の岸に到り、能く一切衆生に解脫を與へ、能く一切衆生に安樂を與へ、能く一切衆生に歡喜を與へ、能く一切をして、智慧の彼岸に到らしめ、諸の衆生に於て、慈悲平等に、善法を修して、悉く具足して滿ぜしめ、一切善業の衆生を成就し、善道に安立して、實の法眼を與へ、天・龍の中に於て、上福田と作り、三界の中に於て、最勝最尊、能く世間の一切供養を受けたまふ。我等諸龍は、同じく辛苦を共にし、此の獄中を滿たし、未だ出づることを得る能はず』と。是の如く至心に禮拜歸命して、此の語を說き已るに、一切の龍等、悉く本形を得たり。舊身に復すと雖も、而も猶ほ、彼の山中より、免離して出づることを得る能はざりき。

爾の時、一切の諸龍王等、復光味菩薩に白して言はく『惟願はくは救濟したまはんを。大德の說きたまふ如くんば、彼の聖人は、諸の衆生に於て、惱亂を起さず、常に安樂を施したまふと。此の言は誠實なり、我れ今信受して、疑心有ること無し。若し衆生を愍み、慈悲もて救濟したまはんには、惟願はくは速に來り、我等輩をして、彼の魔獄より出でしめたまはんを』と。

是の時光味、諸衆に告げて言はく『彼の大聖人は、智慧を具足したまふ。牟尼如來は、心常に一切の衆生を憐愍し、諸の善を修習し、諸の惡を捨し、大悲もて普く覆ひ、流轉の中に於て、精勤勇猛に、衆生を接引し、菩提の道に於て、安隱を得しめ、現に因果を見ては、佛眼を成就したまふ。一切の菩薩摩訶薩は、過去久遠より、不瞋の因緣もて、悉く皆慈悲喜捨の四梵行の法を具足す。復次に菩薩摩訶薩は、道行もて因緣の中に生じ、因緣に生じ已つて、種種の惡趣、及び慈等の行、皆

【七】この段と次の段とは、卷三十三、七二一―二頁の文に相當す。

是の語を說ける時、一切の諸天・阿修羅衆、龍及び夜叉・乾闥婆・緊陀羅・摩睺羅伽・人非人等、各種種の衆寶、雜華・塗香・末香を散じ、虛空の中に於て、猶し雨の下るが如くし、以用て供養し、種種に讚歎したり。

爾の時、光味菩薩、諸の大衆の爲に、偈を說いて言はく、

『過去無量僧祇劫に、種種布施して檀那を習ひ、尸羅及び羼提を清淨にし、精進坐禪して般若を學したり。一切の衆生を安樂ならしむるが故に、備に種種の諸苦辛を忍び、宮中六萬の后・妃・嬪をば、棄捨して出家せること屣を脫するが如くなり。獨處六年苦行を修し、日に一麻一米麥を食し、精進して晝夜睡眠せず、身形は唯皮骨の在る有るのみ。菩提樹下に思惟して坐するに、八十萬の衆の天魔來り、四方上下・地及び空の、八十由旬悉く充滿す。是の如き魔軍及び眷屬をば、皆能く破壞して歸降せしめ、無上の勝菩提を成就して、第一義諦の果を證するを得たり。種種を見聞するも怖畏無く、其の心寂靜なること涅槃の如し、常に一切衆生の中に於て、等心に愍念して偏黨無し。眞實の智慧をば具足して滿し、一切の諸天・人を教導するに、一の衆生も邪惡を起す無し、是の如き慈悲は骨髓に徹したり。又一切の衆生類、乃至蟻子及び[五]蜎飛に於ても、惱亂害毒の心を生ぜず、一切衆生の流轉する中、悉く能く其をして解脫を得しめ、又諸有の獄に繫縛されたる、衆生を拔出して安を獲しむ。[六]紲是れ小、小なること犢身の如くなるも、大聖悉く皆往いて救濟す。彼の諸龍等の一切衆も、能く其の惡及び憂愁を却けたり、是の故に大聖哀愍して來る、慈心もて汝を此の獄中より出し、廣く無邊深祕の要を說く、不自在の者をも悉く心に稱ひ、一切歸寂して安隱に住す。彼の聖人の救濟を得たらん者、金翅の諸鳥王をも畏れず、各所止に還り、意を恣にして遊び、本の如く樂を受けて心に異無し。大聖は過去に萬行を修して、一の衆生を惱亂することをも許さず、汝等

【五】蜎。いもむしの貌。
【六】本文に紲是小小如犢身とあり。

向せしむべき』と。即ち方便善巧の音辭を以て、次第に教へて言はく『一切の龍王、我を信ぜんも、我れ實に汝を救濟する能はず。今大聖の一切智人有り、乃ち能く汝に、安隱無畏を施さん。我が讃歎する所の、佉羅坻吒仙人の功德は、是の如く、法を說くや、我が小德の、斯の事を辦ずるごときに非ず。彼の聖人は、過去無量阿僧祇劫に、已に曾つて種種の福德 修習し、一切の難事をば、皆悉く能く捨しつ。所謂象・馬・種種の寶車、妻子・國城・金銀・輦輿、奴婢・衣裳・床榻 敷具など、衆生須たば、意に稱つて之を與へつ。或は復手足・耳鼻・舌身、頭目・筋骨・皮肉・肌膚など、求むるも悋惜無く、速に能く六波羅蜜を滿足し、大慈悲を具し、苦惱の衆生をして、能く解脫を得しむ。諸の衆生をして、安隱を得しめんが爲の故に、乃至地獄の中に處り、衆生を救濟して、心暫くも捨する無く、亦自ら佛道を成ずるを得んが爲ならず、一切惡趣の衆生をして、種種の老病死の苦を脫するを得しめんと欲してなり。

『是の大仙人は、乃往過去無邊劫中に、此等種種の願行を經歷したり。而も是の仙人は、生生世世に、精進を堅固にし、慈悲に勇猛に、衆生を引接して、涅槃の道に安じたり。又彼の佉羅坻吒仙人は、無量の劫より來、種種の福德を、具足圓滿し、乃至 淨飯[三]王家に生れ、摩耶[四]夫人の腹內に託在し、既に出生し已り、手を擧げて唱へて言はく「我れこそは、三界中の最尊最勝なり」と。種種の光を放ちて、能く一切の衆生に安樂を與へたり。光の因緣の故に、無量の天 龍・夜叉、及び阿修羅・人非人等を感動せしめ、一切悉く來つて、共に供養したり。又生れたる時、一一の方面に、各行くこと七步、脚所踏の處には、皆蓮華有つて、其の足を承捧したり。此の脚踏行步の因緣を以て、一切の山・河・地及び大海など、悉く皆濤動したり。是の如きの變は、出生の功德を現はすなり。又釋迦子は、能く我等一切の衆生をして、生老病死を解脫し、寂滅安隱にして、諸の怖畏を離れ、涅槃の城に到らしむ』と。

【三】淨飯。梵に Suddhodana また白淨といふ。迦毘羅國の王にして、釋尊の父なり。
【四】摩耶(Māyā)。釋尊の生母。

する勿れ。若し精進にして、善を樂ふ衆生有り、持戒多聞、禪を修し慧を學せんに、是の如き等の衆には、天主、應當に、須つ所の衣服・飲食・臥具・湯藥を供給し、種種施與して、窮する有ること無からしめよ。我れ虛空星宿の法を說き已る。今此の世界諸地の分中に、各龍王有り、停止して守衞す。婆伽羅龍・婆婁那・德叉迦・寶護・大行・瞿婆羅婆・蘇婆呼・盧俱叉婆・私無俱叉等の、此の八龍王は、海中を護り、能く大海をして、增減有ること無からしめん。阿奴駄致・毘昌伽蘇致・婆婁那・得于問婁叉婆の、此の四龍王は、池中を守護して一切の河を出す、是の故に諸河流注して竭くる無けん。難陀・優波難陀の、此の二龍王は、山中を守護す、是の故に諸山は、叢林鬱茂せん。婆須吉・婆羅囉蓋盧・瞿摩祇利も、亦守護を爲さん。毘梨沙・閻浮伽・赤眼・婆羅婆帝は、小河水に於て、守護を爲さん。悉陀摩奴・阿羅蘇摩・賀盧唱利は、聖人の所及び諸の藥草に於て、護を作さん、堅固・緊輸迦・歡喜は、此の地中に於て、守護を爲さん。最勝光・毘喩婆三婆毘離耶尸棄は、此に火中に於て、護を作さん。動摩都劣・三摸地羼蘭耶・羼賴車は、此に風中に於て、護を作さん。優羅婆羅・阿閑耶・帝羅婆羅は、此に樹中に於て、護を作さん。吁嚧呵・張火・薄脚羅・沙斯は、此に花中に於て、護を作さん。香常・跋陀耶邏婆遮・富婁那迦羅は、此に果中に於て護を作さん。阿毘林婆毘遮婆多吁嚧脂多末羅伽、彼の中の毘首羯磨蘇摩皷師奇和沙月眼の、此の四種は、一切の工巧に、最も守護を爲さん。羼羅睺陀羅・僧伽那斯・阿蘭那・懼無迦など、此の如き四種夜叉は、一切の福德布施等の中に於て、能く爲に護を作さん。金剛眼・師子眼・善見眼・三槊など、此の如き四種を、一切の龍護り、是の如き等、各各護を爲さん」と。』

爾の時、光味菩薩、諸の天・人・龍の中に於て、最上最勝、一切の苦惱の衆生を憐愍す、是の故に、此に於て、諸龍の厄を救ひ、解脫を得せしめたり。

時に光味菩薩、是の思惟を作す『云何がして、當に彼の諸龍等をして、三寶の中に於て、廻心歸

卷の第四十三

日藏分[一]　送使品第九

爾の時、娑伽羅龍王、光味菩薩に白して言はく『大徳は乃ち能く、是の如く、過去宿命劫中の、種種の善業、無量の往事を憶念して、忘失せず、及び虛空星宿の、照明・安施の法用を說いて、悉く皆了達して、一一に遺す無し。三界の中に於て、最尊最勝、智慧第一にして、更に能く過ぐるもの無し。是の故に彼の龍、并に及び我等、是の如き方便もて、此の獄を脫し、苦惱を離るるを得ん。衆生を憐愍し、一切に慈悲あり、功德戒行、婆羅多に及び、心を莊嚴して、一切滿足すればなり』と。

是の時、光味、諸龍に語つて言はく『我は今是れ、佉羅虱吒苦行仙人に非ず、亦復虛空中に於て、星宿を置く能はず。〈我が說くところは、神通力もて知れるなり。汝娑伽羅諸龍王等よ、是の說を作すこと莫れ。我れ實には然る能はざるなり。此の佉羅虱吒仙人の、宿往の因緣は、說くとも尙ほ未だ盡きざるなり』と。

『爾の時、帝釋及び諸の梵天、各佉羅虱吒仙人に向ひ、齊しく共に合掌して、是の如き言を作せり「我等樂うて聞かん、唯願はくは更に說きたまはんを。我等梵天は、諸天中の尊なり、猶し大仙の、聖人中の尊なるが如し。我は諸天中の、梵行有る者なり、若しは種種の神祇・呪術に[二]於て、我れ皆了知して、亦能く他の爲に分別して廣說せん」と。

『時に虱吒仙人の言はく「若し能く是の如くならば、亦一切の衆生を敎化し、悉く之を知らしむべし」と。

『是の時、靑眼帝釋天主、衆の中に在りぬ。虱吒仙人、帝釋に語つて言はく「天主、一切の善法をば、必ず具足せしめん。世に住持して、常に照明ならしめ、善法を修するの人をば、擁護して捨

【一】日密分(卷第三十二)には、之が相當文を缺く。僅に七二一—二頁に亙る十數行の文に相當するもの、この品中に在り、下註するが如し。

【二】於。麗本放に作る、今三本に從ふ。

爾の時、諸龍、佉盧氏山の聖人の住處に在り、光味仙人を、尊重恭敬し、其の龍力を盡して、之を供養したり。

大方等大集經卷第四十二

爲すや、宜しく各宣說すべし」と。
『爾の時、一切の天人・仙人・阿修羅・龍及び緊那羅等、皆悉く合掌して、咸是の言を作せり「今の大仙の如きは、天人間に於て、最も尊重たり。乃至諸龍及び阿修羅の、能く勝る者無く、智慧と慈悲と、最も第一たり。無量劫に於て、忘れず、一切の衆生を憐愍するが故に、福報を獲、誓願滿じ已つて、功德海の如く、能く過去・現在・當來の、一切の諸事を知る。天・人の間に、是の如き智慧の者有ること無し。是の如き法用——日夜の刹那及び迦羅の時、大小の星宿、月の半、月の滿、年の滿の法用をば、更に衆生の、能く是の法を作すもの無く、皆悉く隨喜し、我等を安樂にす。善い哉、大德、衆生を安隱にすることや」と。
『是の時、佉盧虱吒仙人、復是の言を作せり「此の十二月は一年の始終なり、此の如き方便もて、大小の星等、刹那時の法をば、皆已に說き竟んぬ」と。
『又復四天大王をば安置して、須彌山の四方の面所に、各一王を置き、是の諸方の所にあつて、各衆生を領せしむ。北方の天王を、毘沙門と名け、是には其の界內に、多く夜叉有り。南方の天王をば、毘留茶俱と名け、是には其の界內に、鳩槃茶多し。西方の天王をば、毘留博叉と名け、是には其の界內に、多く諸龍有り。東方の天王を、題頭賴吒と名け、是には其の界內に、乾闥婆多し。四方[五六]四維をば、皆悉く擁護し、一切の洲渚、及び諸の城邑には、亦鬼神を置いて、之を守護せしむ」と。
『爾の時、佉盧虱吒仙人、法を說き已るに、諸の天・龍・夜叉、阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽、人非人等、一切の大衆、皆善哉と稱し、歡喜すること無量なりき。
『是の時、天・龍・夜叉・阿修羅など、日夜に佉盧虱吒を供養したり。次に復、後に於て、無量世を過ぎ、更に仙人有つて、伽力伽と名けたるが、世に出現し、復更に別に、諸の星宿を置き、大小の月の法、時節の要略を說きぬ」と。

【五六】四。麗本に無し、三本に依つて加ふ。

は翼に合し、十五日には軫に合し、是に黑月滿す。

「白月は、一日には角に合し、二日には亢に合し、三日には氐に合し、四日には房に合し、五日には心に合し、六日には尾に合し、七日には箕に合し、八日には斗に合し、九日には牛と女とに合し、十日には虛に合し、十一日には危に合し、十二日には室に合し、十三日には辟に合し、十四日には奎に合し、十五日には婁に合し、是に白月滿す。

「七月は婁宿に合して滿じ、晝行は十六時、夜行は十四時。日轉じて南に近き、日午の影、長さ四脚跡なり。室宿夜行し、角は日の前に在り。阿修羅師――名けて太白といふ――が、此の時、事を用ふ。是の七月の時、[四〇]秤量の神、其の月主當す」と。』

『爾の時、佉盧虱吒、天衆に告げて言はく「是の諸月等、各主當有り、汝四種の衆生を救濟すべし。何等をか四と爲す。地上の人・諸龍・夜叉、乃至蝎等を救ふなり。斯の如きの類をば、皆悉く之を救ふ。我れ諸の衆生を安樂にするを以ての故に、星宿を布置して、各分部有り、乃至摸呼羅の時等をも、亦皆具說したれば、其の國土・方面の處に隨ひ、所作の事業、隨順增長せん」と。

『佉盧虱吒、大衆の前に於て、合掌して說いて言はく「是の如く、日月年時と大小星宿とを安置したり。何者をか名けて、六時有りと爲すやとならば、正月二月を[四一]暄暖時と名け、三月四月を[四二]種作時と名け、五月六月を[四三]求降雨時、七月八月を[四四]物欲熟時、九月十月を[四五]寒凍の時、十有一月と十二月とを合して、[四六]大雪の時とす。是く十二月をば、分つて六時と爲す。又大星宿に、其の數八有り、所謂[四七]歲星と[四八]熒惑と[四九]鎭星と[五〇]太白と[五一]辰星と[五二]日と[五三]月と[五四]荷羅睺星[五五]とたり。又小星宿には二十八有り、所謂昴より胃に至る諸宿是なり。我れ是の如き、次第を作して安置し、其の法を說き已る。汝等皆須らく、亦見亦聞すべし。一切の大衆、意に於て云何。我れ置く所の法、其の事是なるや不や。二十八宿及び八大星の行ずる所の諸業をば、汝喜樂するや不や。是と爲すや、非と

【四〇】秤量。十二宮の第七は Tulā（秤宮又は天秤宮 Libra）なり。七月之に當る。

【四一】暄。あたたかなり。暄暖時、梵に Vasanta。

【四二】種作時。梵に Grīṣma,

【四三】求降雨時。梵に Varṣa,

【四四】物欲熟時。梵に Śarad,

【四五】寒凍時。梵に Hemanta。

【四六】大雪時。梵に Śiśira,

【四七】歲星。梵に Bṛhaspati, 木星、火

【四八】熒惑。梵に Aṅgāraka, 火星、

【四九】鎭星。梵に Śanaiścara, 土星、

【五〇】太白。梵に Śukra, 金星、

【五一】辰星。梵に Budha, 水星、

【五二】星。麗本是に作るも、今三本に從ふ。

【五三】日。梵に Āditya,

【五四】月。梵に Soma, 以上を七曜とす。

【五五】荷羅睺。梵に Rāhu, 日月に蝕を生ずるものとせらる。

は軫に合し、六日には角に合し、七日には亢に合し、八日には氐に合し、九日には房に合し、十日には心に合し、十一日には尾に合し、十二日には箕に合し、十三日には斗に合し、十四日には牛に合し、十五日には女に合し、是に白月滿ず。

「五月は女宿に合して滿ず、晝行は十八時、夜行は十二時、日は極めて北に行く。日午の影は、長さ半脚跡、箕宿夜行し、心日の前に在り。是の時、日光は焰熾大盛なり。此の五月の時、師子の神[三八]、其の月を主當す。

「六月の黑月は、一日に虛に合し、二日には危に合し、三日には室に合し、四日には壁に合し、五日には奎に合し、六日には婁に合し、七日には胃に合し、八日には昴に合し、九日には畢に合し、十日には觜に合し、十一日には參に合し、十二日には井に合し、十三日には鬼に合し、十四には柳に合し、十五日には七星に合し、是に黑月滿ず。

「白月の一日には張に合し、二日には翼に合し、三日には軫に合し、四日には角に合し、五日には亢に合し、六日には氐に合し、七日には房に合し、八日には心に合し、九日には尾に合し、十日には箕に合し、十一日には斗に合し、十二日には牛と女とに合し、十三日には虛に合し、十四日には危に合し、十五日には室に合し、是に白月滿ず。

「六月は室宿に合して滿じ、晝行は十七時、夜行は十三日經、日は南に近づきて行く。日午の影は長さ二脚跡なり。女宿夜行し、張日の前に在り、月子の覺と名くるが、此の時、事を用ふ。此の六月の時、天女[三九]の神、其の月を主當す。

「七月の黑月は、一日には壁に合し、二日には奎に合し、三日には婁に合し、四日には胃に合し、五日には昴に合し、六日には畢に合し、七日には觜に合し、八日には參に合し、九日には井に合し、十日には鬼に合し、十一日には柳に合し、十二日には七星に合し、十三日には張に合し、十四日に

【三八】師子。十二宮の第五は Siṁha(師子宮 Leo)なり、五月之に當る。

【三九】天女。十二宮の第六は Kanyā(女宮又は室女宮 Virgo)なり、六月之に當ればなり。

には軫に合し、十一日には角に合し、十二日には亢に合し、十三日には氐に合し、十四日には房に合し、十五日には心に合し、是に白月滿す。

「三月は、心宿に合して滿す、晝行は十六時、夜行は十四時、日の行くこと北に近く。日午の影、長さ四脚跡なり。氐宿夜行し、觜は日の前に在り。日子――名けて佛陀懸多といふが――此の時に事を用ひ、柔軟の業を作す。是の三月の時は、雙鳥の神[三六]、其の月を主當す。

「四月は、黑月の一日は尾に合し、二日には箕に合し、三日には斗に合し、四日には牛に合し、五日には女に合し、六日には虛に合し、七日には危に合し、八日には室に合し、九日には辟に合し、十日には奎に合し、十一日には婁に合し、十二日には胃に合し、十三日には昴に合し、十四日には畢に合し、十五日には觜に合し、是に黑月滿す。

「白月の一日には、參に合し、二日には井に合し、三日には鬼に合し、四日には柳に合し、五日には七星に合し、六日には張に合し、七日には翼に合し、八日には軫に合し、九日には角に合し、十日には亢に合し、十一日には氐に合し、十二日には房に合し、十三日には心に合し、十四日には尾に合し、十五日には箕に合し、是に白月滿す。

「四月は箕宿に合して滿す、晝行は十七時、夜行は十三時、日は北に近きて行く。日午の影、長さ兩脚跡あり、房宿夜行し、日は井宿に隨ふ。是の四月の時は、蟹神[三七]其の月を主當す。

「五月の黑月は、一日には斗に合し、二日には牛に合し、三日には虛に合し、四日には危に合し、五日には室に合し、六日には辟に合し、七日には奎に合し、八日には婁に合し、九日には胃に合し、十日には昴に合し、十一日には畢に合し、十二日には觜に合し、十三日には參に合し、十四日には井に合し、十五日には鬼に合し、是に黑月滿す。

「白月の一日には柳に合し、二日には七星に合し、三日には張に合し、四日には翼に合し、五日に

【三六】 雙鳥。十二宮の第三は Mithuna（男女宮又は雙女宮 Gemini）なり。雙生を意味すれば、雙鳥と云へるか。

【三七】 蟹神。十二宮の第四は Karkaṭa（蟹宮、又は巨蟹宮、gemini）にして、四月之に當ればなり。

「正月は角宿に合して滿じ、晝行十四時、夜行十六時、日は轉じて北に近き、日午の影は、長さ八脚跡、張宿夜行し、婁は日の前に在り。日子熒惑――嚴惡速疾なるが――此の時、事を用ふ。是の正月の時は、持羊[三二]の神、其の月を主當す。

「二月の黑月は、一日には亢に合し、二日には氐に合し、三日には房に合し、四日には心に合し、五日には尾に合し、六日には箕に合し、七日には斗に合し、八日には牛に合し、九日には女に合し、十日には虛に合し、十一日には危に合し、十二日には室に合し、十三日には辟に合し、十四日には奎に合し、十五日には婁に合し、是に黑月滿ず。

「白月の一日には胃に合し、二日には昴に合し、三日には畢に合し、四日には觜に合し、五日には參に合し、六日には井に合し、七日には鬼に合し、八日には柳に合し、九日には星に合し、十日には張に合し、十一日には翼に合し、十二日には軫に合し、十三日には角に合し、十四日には亢に合し、十五日には氐に合し、是に白月滿ずるなり。

「二月は氐宿に合して滿じ、晝行十五時、夜行十五時にして、日は北行に近く。日午の影、長さ六脚跡。角宿夜行し、昴日の前に至り。阿修羅師[三三]、――名けて太白[三四]といふ――此の時に事を用ふ。是の二月の時、持牛[三五]の神、其の月を主當す。

「三月の黑月は、一日には房に合し、二日には心に合し、三日には尾に合し、四日には箕に合し、五日には斗に合し、六日には牛に合し、七日には女に合し、八日には虛に合し、九日には危に合し、十日には室に合し、十一日には辟に合し、十二日には奎に合し、十三日には婁に合し、十四日には胃に合し、十五日には昴に合し、是に黑月滿ず。

「白月は、一日には畢に合し、二日には觜に合し、三日には參に合し、四日には井に合し、五日には鬼に合し、六日には柳に合し、七日には星に合し、八日には張に合し、九日には翼に合し、十日

【三二】持羊。十二宮の第一は Meṣa（羊宮又は白羊宮 Aries）なり。一月之に當れば持羊の神、その月を主當すといふ。

【三三】宿曜經に依れば、十二宮の第三に配せらるる曜は辰星(Mercury 水星)たり。

【三四】太白。Venus 金星なり。十二宮の第二を七曜に配すれば、日は金星位に在ればなり。

【三五】持牛。十二宮の第二は Vṛṣa（牛宮又は金牛宮、Taurus）なり、二月之に當る。

す。

「十二月は、黒月の一日は張に合し、二日は翼に合し、三日は軫に合し、四日は角に合し、五日は亢に合し、六日は氐に合し、七日は房に合し、八日は心に合し、九日は尾に合し、十日は箕に合し、十一日は斗に合し、十二日は牛に合し、十三日は女に合し、十四日は虛に合し、十五日は危に合し、是に黒月滿す。

「白月の一日は室に合し、二日は辟に合し、三日は奎に合し、四日は婁に合し、五日は胃に合し、六日は昴に合し、七日は畢に合し、八日は觜に合し、九日は參に合し、十日は井に合し、十一日には鬼に合し、十二日には柳に合し、十三日には七星に合し、十四日には張に合し、十五日には翼に合し、是に白月滿す。

「十二月は翼宿に合して滿じ、晝行十三時、夜行十七時にして、日は轉じて北に近き、日午の影は十二脚跡あり。七星夜行し、天の師歲星、事を用ふるの時たり。是の十二月は、天魚の神、其の月を主當す。

「正月の黒月は、一日には軫に合し、二日には角に合し、三日には亢に合し、四日には氐に合し、五日には房に合し、六日には心に合し、七日には尾に合し、八日には箕に合し、九日には斗に合し、十日には牛に合し、十一日には女に合し、十二日には虛に合し、十三日には危に合し、十四日には室に合し、十五日には辟に合し、是に黒月滿す。

「白月は、一日には奎に合し、二日には婁に合し、三日には胃に合し、四日には昴に合し、五日には畢に合し、六日には觜に合し、七日には參に合し、八日には井に合し、九日には鬼に合し、十日には柳に合し、十一日には七星に合し、十二日には張に合し、十三日には翼に合し、十四日には軫に合し、十五日には角に合し、是に白月滿するなり。

【三二】天魚。十二宮の第十二は Mīna(魚宮又は雙魚宮)なり。十二月之に當る。

に合し、六日は張に合し、七日は翼に合し、八日は軫に合し、九日は角に合し、十日は亢に合し、十一日には氐に合し、十二日には房に合し、十三日には心に合し、十四日には尾に合し、十五日には箕に合す。是れ黑月の滿なり。

「白月は、一日には斗に合し、二日には牛に合し、三日には女と虛と合し、四日には危と合し、五日には室と合し、六日には辟と合し、七日には奎と合し、八日には婁と合し、九日には胃と合し、十日には昴と合し、十一日には畢と合し、十二日には觜と合し、十三日には參と合し、十四日には井と合し、十五日には鬼と合す。是れ白月の滿なり。

「十月は、鬼宿に合して滿ず。晝は十三時、夜は十七時なり。日午の影は、十脚跡にして、觜宿夜行し、女は日の前に在り。此の時に當り、辰星[二八]事を用ふ。是の十月の時、磨竭[二九]の神、其の月を主當す。

「十一月の黑月の內、一日は柳に合し、二日は七星に合し、三日は張に合し、四日は翼に合し、五日は軫に合し、六日は角に合し、七日は亢に合し、八日は氐に合し、九日は房に合し、十日は心に合し、十一日は尾に合し、十二日は箕に合し、十三日は斗に合し、十四日は牛に合し、十五日は女に合す。是れ黑月の滿なり。

「白月の一日は虛に合し、二日は危に合し、三日は室に合し、四日は辟に合し、五日は奎に合し、六日は婁に合し、七日は胃に合し、八日は昴に合し、九日は畢に合し、十日は觜に合し、十一日は參に合し、十二日は井に合し、十三日は鬼に合し、十四日は柳に合し、十五日は七星に合す、是れ白月の滿なり。

「十一月は七星に合して滿ず。晝は十二時にして、夜は十八時、日午の影は十二脚跡なり。鬼宿夜行し、危は日の前に在り。南轉に近き、辰星事を用ふ。是の十一月は、水器[三〇]の神、其の月を主當

【二八】辰星。梵に部陀 Budha 七曜に配すれば Mercury 水星なり。宿曜經によれば、十二宮の第十を七曜に配すれば、十月は鎭星 Saturn (土星)位にありとす。

【二九】磨竭。十二宮の第十は Makara(磨竭宮 Carpri Cornus)なり、十月之に當るとす。

【三〇】水器の神。十二宮の第十一は Kumbha (瓶宮又は寶瓶宮)なり、十一月之に當ればなり。

しく床輿を造り、及び牛馬を買ふべし。

「胃宿は十四日に事を用ふ。人の吉凶を生じ、善惡を造作し、疾病などの事、上に說き了る如し。[二二] 月は虛空を行きて、宿を周匝し訖り、還更に昴に起る。是の故に日、虛空にして月滿つと言ふ。三十晝夜を、亦月滿つと名く。[二三] 八月の滿は、胃に起り昴に終る、其の月足の如し。夜十五時、晝十五時にして、日午の影は、長さ六脚跡なり。婁宿夜行、房は日の[二三]前に在り。[二四]熒惑日子、是の時、日に隨ふ。是の[二五]八月の時たる、蝎神主當にして、昴宿業を爲すこと、前に已に說き竟んぬ。是の白月の內も、十五日に次で、昴又事を用ふ。月の昴星と合する、是れ八月の滿なり。昴と月と合すること、一日夜にして訖る。其の次には復、轉じて畢宿に合す。九月の初日は、畢、事を用ふる也。

「九月の黑月には、一日は畢に合し、二日は觜に合し、三日は參に合し、四日は井に合し、五日は鬼に合し、六日は柳に合し、七日は星に合し、八日には張に合し、九日には翼に合し、十日には軫に合し、十一日には角に合し、十二日には亢に合し、十三日には氐に合し、十四日には房に合し、十五日には心に合す。是れ黑月の滿なり。

「白月の一日は尾と合し、二日は箕に合し、三日は斗に合し、四日は牛に合し、五日は女に合し、六日は虛に合し、七日は危に合し、八日は室に合し、九日は壁に合し、十日は奎に合し、十一日には婁に合し、十二日には胃に合し、十三日には昴に合し、十四日には畢に合し、十五日には觜に合す。是れ白月の滿なり。九月には觜宿に合して滿ず。晝は十四時、夜は十六時、日午の影は、長さ八脚跡あり。日は南陸に行き、昴宿夜行、尾は日の前に在り。其れ九月の時、[二六]歲星事を用ひ、一切の天の爲に尊敬せられ、諸事を得失すること、皆悉く之に由るなり。是の九月の時は、[二七]射神主當す。

「十月の黑月は、一日は參に合し、二日は井に合し、三日は鬼に合し、四日は柳に合し、五日は星

【二二】 上に云云。本節の初に說けり。

【二三】 八月の滿月には。月昴宿に在るを以て、西域記は宿名により、迦剌底迦(Kārttika)月と名け、八月十六日―九月十五日を之に配したり。宿曜經は之を九月とす。陽曆の十、十一月に當る。

【二三】 前。西を意味す。

【二四】 熒惑(Mara)。火星なり。日に隨ふとは、日の西に在るをいふ。

【二五】 八月。日の運行圈を基として、天の分野を十二に割つて、十二宮を立つ。その第八、Vṛścika (蝎宮又は天蝎宮と譯す)には、日は熒惑位に在り、卽ちScorpio の位なり。日、蝎宮に在るを以て、次句に、蝎神主當すといふなり。

【二六】 歲星。十二宮に七曜を配すれば、九月には、日、歲星位 Jupiter(木星)に在ればなり。

【二七】 射神。九月には日、十二宮の中、Dhanu (弓宮又は人馬宮)に在り、故に射神主當といふ。

けん。治生に有利にして、他人の物を得ん。彼の人、胎に入るには、宜しく心宿と軫宿と畢宿と牛宿等の日に在るべし。亦蓄積多し。亢宿と虚宿との、此の二宿日に、事を作さんに、平にして善悪あること無けん。參宿の日には、事を作すべからず。柳宿と翼宿と斗宿と昴宿との、此の四宿日には、行來安隱なり。柳宿と翼宿と斗宿と昴宿との、此の四宿日には、行來安隱なり。女宿と畢宿と角宿との日に、若し事を作さば、爲に良伴を得ん。箕宿と張宿と胃宿等の日に、事を作さんと欲すれば、障礙有ること無く、爲に人力を得ん。婁宿と心宿と尾宿との、此の三宿日に、知識と結ばんと欲すれば、爲に利益有り。井宿と氐宿と危宿との、此の三宿日には、宜しく要ず小知識の者と結ぶべし、鬼宿と尾宿と室宿との、此の三宿日には、宜しく要ず、知識の大なる者と結ぶべし。

「婁宿は十三日に事を用ふ。其の日に病を得なば、麥の粥もて神を祭ること、二十五日ならば、然る後除愈せん。其の日生るる者、性と爲る躁疾、常に衆生を護つて、物と命とを害せず。若し關津に至らば、須らく自ら防愼すべし。當に醫師と作るべし、善く方藥を解し、能く衆病を療せん。亦復善く歌舞の事を能くせん。心宿の日に、胎に入らん者、障礙有ること無く。角宿と觜宿と女宿と虚宿と井宿と亢宿と危宿との、此の七宿日に、若し事を作せば、平にして善悪無けん。此の星宿の日には、唯賣買する莫れ、宜しく行來及び剃頭すべからず。亦相鬪の處所に至るを得ざれ。昴宿と斗宿と張宿との、此の三宿日には、宜しく怨仇を報ずべし、鬪諍に勝を得べければなり。宜しく輭利を作すべし、[二〇]軟事をば成ずるを得ん。七星宿の日には、事々作すこと牢固なれ、亦利益あらん。張宿と箕宿と胃宿との、此の三宿日には、遠行せんと欲すれば、安隱なり。辟と軫と畢との、此の三宿日には、事を作すに利益あり、亦宜しく密語すべし。參宿と虚宿と亢宿との日には、宜しく惡事を作すべし。鬼宿と尾宿と室宿等の日には、宜しく要ず、諸の小知識と結ぶべし。柳宿と房宿と辟宿等の日には、宜しく要ず、諸の大知識と結ぶべし。衆人の、己を愛護するを得んが爲には、宜

【二〇】軟。麗本は濡に作る、今三本に依る。

を羅ねん。其の人、胎に入るは、必ず氐宿に在り。若し事を作さんには、箕宿と胃宿と張宿の日とは、障礙有ること無く、處處に作すべし。畢宿と軫宿と牛宿との、此の三宿日に、若し事業を作せば、一切皆惡し。井宿の日には、事を作せば乃ち吉、房宿と柳宿と奎宿の日とに、事を造作せば、多く障礙有りて、利益を得ざらん。鬼宿と尾宿と辟宿の日とには、宜しく事業を作すべし、利益を得んが爲に。婁宿と七宿と心宿等の日には、遠行安隱なり。昴宿と斗宿と箕宿等の日に、若し事を作せば、良伴の力を得ん。虛宿と觜宿と角宿等の日には、宜しく以て、要ず小知識の者と結ぶべし。虛宿と參と亢宿等の日には、宜しく以て要ず、大知識の者と結ぶべし。

「辟宿は十一日に事を用ふ。其の日に病を得なば、華及び鹿[18]脯を得て、以て火神を祭らんに、七日を滿ずれば愈えん。其の日に生れんには、其の人智慧あり、聖人の法を樂ひ、衆藝を學んで、種種皆能くせん。歌舞・伎倡も、亦復悉く解せん。又大富を主り、多く金銀有り、穀帛に饒ならん。若し胎に入らんには、宜しく尾宿の日なるべし、昴宿と斗宿との、此の[19]二宿に、衆事を造作せんに、平にして善惡無けん。觜と女と鬼宿との、此の三宿日には、事を爲さば成就せん。心と婁と七星との、此の三宿日には、事を爲さば、障多からん。柳宿と房宿との、此の二宿日には、事を作さんと欲すれば、和合して意の如くならん。軫宿と牛宿と畢宿の日、事を作さんに、自ら良伴に逢遇したらんが如く、張宿と胃宿と箕宿との日は、行來安隱なり。亢宿と虛宿と參宿とには、宜しく要ず小知識の者と結ぶべし。井宿と氐宿と危宿等の日は、宜しく要ず親友と結ぶべし。大吉なればなり。

「奎宿は十二日に事を用ふ。其の日に病を得たらんには、宜しく香華を以て、神祇を祭るべし、二十日を經なば、乃ち除愈せん。其の日に生れん者、柔軟の事を作し、大勢力有り、人に尊重せられん。唯闇裏に於ては、須らく自ら身を護るべし。大富にして饒財、金銀・穀帛など、限量有ること無

【一八】脯。乾肉なり。

【一九】二。麗宋元三本三に作るも今明本によつて二とす。

食無けん。色・欲の間に於ても、亦復乏少ならん。親属に依歸して常に怖畏多からん。若し角宿の日に、胎を受けたらば吉、張宿と胃宿と箕宿の日とに、胎を受けたらば、悪にして多く障礙有るべし。房宿と柳宿と奎宿等の日に、胎に入らば、平にして、善惡有ること無けん。氐宿と井宿と室宿等の日に、胎を受けんに、亦惡にして、離散して合せざらん。亢と危と參宿との、此の三宿日に、事を作さば利益あり、和合有るを得ん。觜宿の日に、事を作さんと欲すれば、一切皆作すを得ん。鬼宿と尾宿と壁宿との、此の三日には、宜しく以て遠行すべし。道路安隱なればなり。婁宿と七星と心宿等の日に、若し事を爲さば、善知識及び良伴を得ん。翼宿と箕宿と昴宿等の日にも、亦宜しく要ず諸親友等と結ぶべし。畢宿と牛宿との、此の二宿日も、亦復大善友と結ぶに宜し。

「危宿は九日に事を用ひ、其の性柔軟なり。其の日に病を得なば、蘇と乳と酪と糜を得て、以て水神を祭らんに、七日にして除愈せん。其の日生れん者、性として瞋忿多く、猛健勇鋭にして、水厄有らん。若し水所に至れば、須らく自ら防愼すべし。亢宿の日に、胎に入らん者吉。婁宿と七星と心宿等の日に、若し事を作せば、平にして善惡無けん。斗宿と昴宿と翼宿との、此の三宿日に、事を作せば惡なり。壁宿と鬼宿と尾宿と參宿との、此の四宿日に事を作さんに、亦惡にして、意の如くなるを得ざらん。室宿と井宿と氐宿の日に、事を作さば、和合して安隱を得ん。七星の宿と房宿と柳宿と奎宿等の日には、遠行安くして吉なり。張宿と箕宿と胃宿等の日に、事を作さんと欲すれば、良伴の力を得ん。角宿と女宿と觜宿と軫宿と畢宿と牛宿との、此の六宿日には、善友と結び及び妻を納るるに宜し。

「室宿は十日に事を用ひ、其の性速疾なり。其の日に病を得なば、種種の華を以て、用つて神を祭るに、三十日にして愈えん。其の日に生れん者、姦僞にして賊と作り、愚癡・妄語もて、衆生を殺害し、心常に惡を作し、父母を畏れざらん。若しは鬪諍盜賊など、是の如き等の處には、横に其の殃

病・大富、多く知識有らん。其の人胎に入るには、張宿に在るを宜しとす。若し危と參と亢宿等に在るの日ならば、平にして善惡無けん。業事を營まんと欲するに、皆悉く成就せん。觜宿と房宿と鬼宿と胃宿との、此の四宿日に、事を作さば不吉なり。畢と女と軫宿との、此の三宿日に、自在を求めんと欲するも、多く障礙有らん。昴宿と牛宿と翼宿等の日に、事を營まんと欲すれば、自在にして意の如くならん。氐宿と井宿と室宿等の日にも、亦宜しく事を作すべし、其れ福德力有らん。角宿と觜宿と虛宿等の日に、若し遠行せば、道路安隱ならん。奎宿と柳宿と房宿と婁宿と七星と心宿との、此の六宿日には、親友と嫁娶の事を結ぶに宜し。

「牛宿は六日に事を用ふ。其の日に生れたる者、その性たる剛毅、心に怖畏無く、猛健にして人に勝れ、能く國土を破し、前むに强敵無く、大富にして饒財あり。若し胎に入るには、翼宿に在るを宜しとす。一切の衆星、障礙を爲さず、皆善友と作る。

「女宿は七日に事を用ふ。其の日に病を得たる者、十二月を經、石蜜及び華もて、山神を祭るに、乃ち除愈を得。其の日に生るゝ者、遠行せば、伴に遇はん。宜しく治生を以て柔軟の事を作すべし。其の人、智有りて、病疾少し。常に世間・國王の供養を得べし。軫宿の日に、胎に入らば、平にして善惡有ること無し。鬼宿と房宿との、此の二宿日は、爲に障礙を爲す。七星宿と心宿と女宿と畢宿との、此の四宿日には、宜しく業事を造すべし。亢宿と危宿と參宿等の日には、作事合せず。虛宿と觜宿とには、乃ち和合を得、意の如く自在ならん。室宿と井宿と心宿等の日には、遠行安隱にして、亦自在を得ん。奎宿と房宿と柳宿等の日に、事を營まんと欲すれば、他人の力を得、亦良友に遇はん。昴宿と張宿と翼宿等の日には、宜しく親友と結ぶべし。

「虛宿は八日に事を用ふ。其の日病を得んに、一年にして乃ち愈えん。應に菉豆・烏豆・小豆・江豆を以て、四種の臛を作り、香華もて神を祭れ。其の日に生れん者、性として瞋貪多く、貧にして衣

亦復好んで草馬の蹋む所と爲らん。草馬の所に至れば、又須らく自ら備ふべし。尾宿の日に、胎に入る者は、柳宿と角宿と危宿と參宿との、此の四宿の日には、惡事を作すに宜し。軫宿と房宿と畢宿と奎宿との、此の四宿日には、諸種の事業を造作すべからず。危宿の日には、惡事を作すを得。斗宿と翼宿と胃宿との、此の三宿日に、惡事を作さんと欲すれども、利益有ること無く、諸の煩惱多し。箕宿と七宿と婁宿との、此の三宿日には、乃ち自在を得、爲に利益有り。角宿と虚宿と觜宿との、此の三宿日には、他人の力を得、自在を獲ん。昴宿と牛宿と張宿との、此の三宿日には、行來安隱なり。室宿と辟宿と井宿と鬼宿と房宿と氐宿との、此の六宿日には、宜しく知識・大小の親友と、婚姻嫁娶を結ぶべし。其の事皆吉なり。

「箕宿は四日に事を用ふ。其の日に病を得なば、應に麻糜・尼倶陀子[一七]を以て、水神を祭らんに、八月にして卽ち愈せん。其の日に生れたる人、善く耕田・行船の行を能くす。其の性精進にして、十善の行業を行じ、多聞にして智慧あり、大名譽有り、大富饒財、常に智人と共に、相隨逐せん。

「七星宿の日及び婁宿の日には、宜しく諸の業を作すべし。角と觜と虚宿との、此の三宿日には、諸事を造作するに、善無く惡無し。氐宿と室宿との、此の二宿日には、事を爲すこと不吉なり。井宿の日に、事を經營せば、舊事を失す。翼宿と昴宿と牛宿等の日に、事を爲さんと欲すれば、自在にして意の如く、能く利益有らん。張宿と胃宿と斗宿等の日に、事を造作せば、他人の力を得、亦利益を爲さん。參宿と亢宿と危宿等の日に、事を作さんと欲するも、亦他の力を得。軫宿と畢宿と女宿等の日に、若し遠行せんと欲すれば、道路安隱なり。奎宿と鬼宿と柳宿と房宿と辟宿との、此の五宿日には、宜しく親友と娶婦の事を結ぶべし。

「斗宿は五日に事を用ひ、柔軟の業を作す。其の日病を得なば、粳穀の華を炒り、蜜を以て之に和し、用つて諸神を祭らんに、七日にして除愈せん。其の日に生るる者は、是れ智慧の人にして、少

【一七】尼倶陀子。尼拘律（ny-agrodha）の果なり。

法を樂ひ福を信ず。其の人、胎に入るは、宜しく井宿の日なるべし。張宿と斗宿と胃宿等の日に、諸事を作さんと欲するに、善惡有ること無し。軫と畢と女宿との、此の三宿日に、事を作さば凶なり。心宿と柳宿と奎宿との、此の三宿日に、事を作さば吉なり。室宿と房宿と鬼宿と辟宿、との、此の四日に事を作さば、安隱にして自在を得ん。箕宿と婁宿との、此の二日には、遠行安隱にして、知識の力を得ん。虚宿と昴宿と張宿と翼宿とに、事を作さんに、利有つて、他人の物を得ん。箕宿と觜宿と角宿と虚宿と亢宿と參宿との、此の六宿日には、要ず親友大小知識と娶婦を結ぶに皆吉なり。

「心宿は、二日に事を用ひ、好んで惡事を作す。其の日に病を得んに、粳米の飯幷に大麥飯・黃石蜜等を以て、帝釋天を祭るに、十三日を經て、然る後除愈せん。其の日に生れたる者、性瞋恚多く、慈心有ること無し。縱ひ戒を持するも、亦復戒を破す。若し他の、淨を行じ・法を行ずるを見なば、宜しく此處に於て、須らく自ら愼儆すべし。生產の所にも、亦須らく身を護るべし。此の心宿の日に、胎に入らば吉。角と虚と觜宿との、此の三宿日に、胎に入らば、不吉なり。昴と牛と翼宿との、此の三宿日には、宜しく諸事を作すべし。辟宿の日に、若し事を作さんに、多く障礙有り。七星と箕と婁との、此の三宿日には、乃ち自在を得て、多く利益有り。尾宿と柳宿と奎宿と危宿と軫宿と畢宿との、此の六宿日には、他人の力を得ん。胃と張と斗宿との、此の三宿日には、宜しく遠く行來すべし、道路安隱なり。室宿と亢宿と危宿と井宿と氐宿と參宿との、此の六宿日には、宜しく親友及び娶婦を結ぶべし。

「尾宿は三日に事を用ひ、剛柔の二事、皆悉く能く作さん。其の日に病を得なば、諸の果根及び果華の氣を取り、以用て神を祭るに、三十日にして愈せん。其の日生れたらん者、大富饒財にして、多く穀麥有らん。其の人は相——神德の人たる——有り。唯生產の處には、須らく自ら防愼すべし。

快利あり。其の日に病を得れば、極惡にして治し難く、華・蜜もて神を祭るに、二十五日にして、乃ち愈を得べし。其の日に生れたる者、善く算計を能くし、大富にして饒財あらん。其の性慳貪にして、能く喜捨せず。又瞋恚多く、心意得難し。若し[一五]特牛及び黃腰の者を見れば、須らく自ら防護すべし。其の人、若し觜宿と箕宿との此の二宿日に在りて、胎に入りたらんには、惡・不善を爲す。張宿と胃宿と柳宿と心宿との、此の四宿日に、事を作さんと欲すれば、善惡有ること無けん。室宿と尾宿と井宿等の日に、事を爲さんと欲すれば、多く障礙有り。參と氐と危宿との、此の三宿日に、營む所有らば、他人の力を得ん。婁宿と箕宿と七星の宿との、此の三宿日には、遠行安隱なり。房と鬼と辟宿との、此の三宿日は、親友と娶婦の事を結ぶに宜し。軫宿と女宿と畢宿と昴宿と牛宿と翼宿と亢宿との、此の七宿日には、但だ行來に宜し。餘は作すべからず。

「氐宿は十五日に事を用ひ、能く諸惡人の、畏敬する所と作る。其の日に病を得なば、華を以て神を祭らんに、十五日を滿ぜば、乃ち除愈を得ん。其の日に生れたる者。威德肅然として、大富饒財ならん。其の性慳貪にして、他の婦女に婬せん。須らく自ら身を治めて、此の事を行ふ勿れ。其の人、胎に入るには、宜しく參宿に在るべし。諸事を作さんと欲せば、宜しく危宿に在るべし。若し七星宿と婁宿と箕宿の日とに、事を成さば成ぜん、善惡有ること無し。若し昴宿の日と牛宿と翼宿とに、事を營めば則ち惡く、多く障礙有り。辟宿と房宿と尾宿との、此の三日には、則ち利益有り。室宿の日には、遠行安隱なり。心と奎と柳宿との、此の三宿日に、事を成さんと欲すれば、他人の力を得ん。張宿と斗宿と胃宿との、此の三宿日は、親友と娶婦の事を結ぶに宜し。

「房宿は白月一日に事を用ひ、能く世間に於て、速疾の事を作さん。其の日に病める者は、靑豆の飯を作し、以て神を祭るに、十日にして除愈せん。其の日に生れたる者、崖岸に墮し、刀兵の厄有らん。此の二事に於て、須らく自ら身を護るべし。治生と販賣の業とに宜し。輭弱[一六]儒雅にして、

【一五】特牛。一つのうし。

【一六】儒。柔なり、和なり。

らん。能く五兵・刀槊・弓箭・鬪輪、[四]羂索を用ひ、能く大賊と作つて、衆生を殺害せん。若し善を修すれば、亦能く戒を持し、喜んで布施を捨し、種種の功德をば、皆悉く能く作さん。其の人行く處には、七歩の内に、蛇敢て前まず。其の日に胎に入らば、諸の賊衆に於て、主と爲るを得ん。又能く戒を持し、喜んで布施を捨せん。尾宿の日に、其れ胎を受けたらんもの、所在の處に、障礙有ること無く、陣に入つて鬪戰するに、能く怨敵に勝たん。井宿と室宿との二宿日に、其れ胎を受けたらんには、生より死に至るまで、常に事を作すに宜し。牛と亢と虛宿との、此の三宿日に、其れ胎を受けたらんに、唯牛宿を除きて、事を作すに宜しからず。其の餘の亢と虛、及び女と觜宿との、此の四宿日には、事を作すに利益あり、自在を得ん。亢と畢と危等の、此の三宿日には、遠行安隱なり。氐宿と參宿と房宿と辟宿との、此の四宿日には、種種の事を作すに、人の氣力を得、又娶嫁に宜しく、要ず親友及び善知識と結ぶべし。箕宿と七星と婁宿と斗宿と張宿と胃宿との、此の六宿日には、造作する有らば、上の如き利益あり。

「角宿は十三日に事を用ひ、惡を爲すに速疾なり。其の日に病める者は、菉豆を去れる皮を生にて擣き神を祭るに、六日にして除愈せん。其の日に生れたる人は、嘲戲・音樂・歌舞・作倡をば、皆悉く能く解し、復能く捨施せん。又色欲多く、亦復知有るの人を愛樂せん。其の人、胎に入るには、畢宿の日に宜し。婁宿と七星と箕宿等の日に、其の人胎に入れば、多く惡事を造作す。辟宿と房宿と鬼宿等の日には、其の人、事を作すに、種種皆吉にして、障礙有ること無し。危宿と氐宿と參宿等の日に、若し事業を作すに、亦自在を得。觜宿と亢宿と虛宿と尾宿との、此の四宿日には、遠行安隱なり。觜宿と柳宿とに、業事を營むに、知識力を得ん。心宿と奎宿と斗宿と昴宿と翼宿と牛宿と張宿との、此の七宿日には、宜しく親友・婚姻等の事を結ぶべし。

「亢宿は十四日に事を用ひ、能く世間に於て、諸の惡業を作さん。其の性疾速にして、業を作すに

【四】羂鞙。大車の縛軛（くびきしばり）の鞙（かは）。

欲事を貪り、復酒を嗜まん。若し衆中に在らば、須らく自ら愼儆なるべし。婁宿と井宿との、此の二宿日に、胎を受けたるもの最も惡し。虛と亢と觜宿との、是の三宿日に、胎を受けたる者、亦惡ければ、宜しく事を作すべからず。昴と軫と牛宿との、此の三宿日にも、亦障礙多し。張宿の日には、乃ち自在を得ん。胃宿と斗宿との、此の二宿日には、求むる所有るも、意の如くなるを得べからず。氐宿の日に、其れ胎を受けたる者、能く障礙を除かん。亢宿と參宿と畢宿と女宿との、此の四宿日には、遠行安隱なり。柳宿と奎宿と鬼宿と心宿と房宿と辟宿との、此の六宿日には、知識と結ばんと欲するも、障礙あつて成ぜじ。

「翼宿は十一日に事を用ふ。四天下に行きて、兩種の業を作す、所謂諂曲と及び柔軟の事となり。其の日に病を得なば、黑・靑豆を煮て、以用て神を祭らんに、十日にして除愈せん。其の日に生れん者、種種に宜し。然も性は愚癡にして、慳貪鄙悋なれば、喜んで捨する能はず、亦能く食せず。五日・六日乃至七日のあひだ、世人の愛樂する所と爲らず。善く須く謹愼して、怨家を防護すべく、宜しく鬪諍すべからず。胃宿の日に、胎に入る者は、多く諸の惡を造らん。危宿と參宿と氐宿と房宿との、此の四宿日には、善惡の二事、並に皆作すを得。房宿の日には、善惡有ること無し。辟宿と鬼宿との、此の二宿日に、胎を受くる有る者は、好んで財物を失ふ。胃宿と婁宿と斗宿との、此の三宿日に、胎を受くる者は、軫と牛と昴宿との、此の三宿日には、事を作すに和合す。若し虛宿と觜宿と亢宿との、此の三宿日に於て事を作さば成ず。三宿の力を得て、遠行安隱ならん。井と室と尾宿との、此の三宿日には、善も無く惡も無し。婁宿と七星と奎宿と柳宿と心宿等の日には、善知識と、嫁娶の事を結ぶに、皆和合するを得ん。

「軫宿は、十二日に事を用ひ、惡の爲に自在にして、速疾なること風の如くならん。其の日に病を得なば、酪を以て神を祭らんに、五日にして除愈せん。其の日に生れたる者は、大富にして饒財あ

【三】儆。戒なり、警なり。

其の日に病む者は、療治すべからず。其の日に生るる者は性として瞋怒多く、慈悲有ること無く、多く愆過を造つて、人に憎嫉せられ、能く善法を破し、常に獵射を好む。辟宿と牛宿との、此の二宿日に、胎に入りたらんには吉。軫宿と昴宿とに胎に入りたらんに凶なり。觜宿と虛宿と亢宿と張宿との、此の四宿日には、宜しく事を作すべからず、多く耗散有ればなり。箕宿と婁宿と房宿等の日には、宜しく衆事を作すべし、好く成就するを得ん。心宿の日と、七星宿の日と、胃宿の日とは、遠行に安隱なり。翼宿と斗宿と女宿等の日には、宜しく讀・學・伎藝を修すべし、成就せん。角宿と斗宿と危宿と尾宿と畢宿との、此の五宿日には、宜しく知識と結ぶべし。氐宿と參宿と井宿と室宿との、此の四日にも、亦復宜しく諸知識と結ぶべし。

「七星は九日に事を用ふ。諸の衆生に於て、溫和柔軟なり。其の日に病む者は、胡麻油を以て粳米の飯に和し、其の先人を祭らんに、八日にして除愈す。其の日に生れたる者は、聰明にして福德あり、常に善事を爲さん。然も彼の人の性たる、微しく妄言を好む。若し其の身を護らんとならば、宜しく妄語を愼むべし。其の人事を作さんに利あり。心宿の日と、奎宿と氐宿との、此の三宿日に、胎を受けたる者は、貧にして、財物に乏少す。參宿と危宿と畢宿等の日に、胎を受けたる者は、凶にして常に惡事を作さん。角宿と女宿との、此の二宿日に、胎を受けたる者も、亦貧にして、好んで惡事を爲さん。翼と胃と斗宿との、此の三宿日に、胎を受けたる者は、事を作すに自在にして、他人の物を得ん。婁宿と張宿と箕宿等の日に、事を作さんと欲すれば、障礙多饒ならん。軫宿と牛宿と昴宿と氐宿との、此の四宿日は、行來安隱にして、事を作さんに和合せん。虛宿と觜宿との、此の二宿日は、其に障礙を爲さん。

「張宿は十日に事を用ふ。柔軟の事を作し、世間を安隱にす。其の日に病む者は、頻婆果と生蘇ともて、神を祭らんに、七日にして[二三]差を得ん。其の日に生るる者、性芳香と衣裳と瓔珞とを好み、

【二三】差は癒なり。

「井宿は六日に事を用ふ。其の悪業の分判するが爲に果決す。其の日病を得れば、粳穀の華を炒りて日天を祭れ、八日にして愈ゆるを得ん。其の日生れし人、及び胎を受けし者は、田作を爲すに宜し、當に大富を得べければなり。又畜生・象・馬・羊等饒からん。辟宿の日に於ては、百事宜しからず。柳宿と房宿との、此の二宿日には、百事を造作するも、多く耗散有らん。氐宿の日には、宜しく衆事を作すべし、意の如く自在ならん。鬼宿と參宿と尾宿等の日には、百事を造すに宜し、求むる所、意に稱はん。心宿と星宿と奎宿等の日には、出でて遠行するに宜し、道路安隱にして、向ふ所和合すべければなり。斗宿と翼宿と奎宿等の日には、朋友と結び、善知識を求むるに宜し。亢宿と畢宿と觜宿と虚宿との、此の四宿日には、井を爲さんに、人の諸障礙を作すもの生ぜん。

「鬼宿は七日に事を用ふ。能く柔軟を爲し、善法を破せず。其の日に病を得れば、黄石蜜を以て、歳星を祭ること、五日ならんに、除愈すべし。其の日生るれば、此の人戒を持し、善事を好樂し、大官位を得て、國師・宰輔となり、常に國王に敎へ、善法もて世を治めしめん。娶妻に至つては、特に和合し難し。慇懃にして人に因らば、然る後成就せん。其の日に生れたる人、室宿と鬼宿と翼宿と婁宿と斗宿等の日に、胎を受けたる者と、在まらんと欲すれば吉なり。畢と角と女宿と、此の三宿日は、其に障礙を爲さん。七星と心宿と奎宿の日とには、作す事成ぜずして、當に財物を失すべし。尾宿の日には、作す事、成ずるを得、房宿の日にも、亦利益多し。辟宿と柳宿との、此の二宿日には、事を爲すも稱はす。張宿の日には、遠行安隱なり。婁宿と箕宿とは、其に障礙を爲さん。軫と牛と昴宿との、此の三宿日には、事を作せば和合し、必ず良伴を得ん。亢宿と觜宿と參宿と虚宿とには、朋友及び善知識を結とに宜し。亢宿と危宿との、此の二宿日には、求むる所の者を得て、多く利益有らん。

「卯宿は八日に事を用ふ。一切の悪業、皆悉く能く作し、世間の中に於て、閻羅王の如くならん。

【二】閻羅。閻摩羅闍（Yamarāja）の略、閻摩といふに同じ。

「觜宿は【一〇】四日に事を用ふ。此の世間に於て、諸の事業を作すに、疾速に自ら成ず。其の日病む者は、豆糜もて月を祭るに、八日にして除愈す。其の日生れたる者は、人となり猛健、大富にして饒財なり。當に婦女の爲に、諸の惡事を見ては、宜しく自ら防護すべし。我が說虛ならず。觜宿に生れたる人にして、若し女宿と婁宿と斗宿と張宿等の日を以て、胎に入りたらんには、惡・不善を爲さん。昴宿と房宿と柳宿との、此の三宿日には、鬪戰するを得ざれ、遠行し、及び官府に向ふを得ざれ。須らく行くべき有るも、應に止めて去ること勿るべし。井宿と氐宿と危宿等の日には、衆惡を造作し、相和順せず、妄言諂曲もて、怨家を殺さんと欲するに、皆成就するを得ん。角宿の日には、事を作さんと欲すれば、剛と柔と並に得ん。參宿の日には、事を作さんに、利益あり、能く自在を致す。亢と虛との二宿には、相和合せず、參星の日には、乃ち利益を得ん。其の日は、服藥・出家・布施、瓔珞・衣服など、並に皆作すを得ん。鬼宿と尾宿と室宿等の日には、遠行するも安隱なり。心宿と奎宿と七星宿の日との此の三宿日に、惡を作さんと欲すれば、惡事成ずるを得。軫宿と胃宿と畢宿と牛宿と箕宿等の日には、親友と結ぶに宜し。好知識と婚嫁の吉事を得、輿・車・床・褥など、皆悉く造るを得ん。

「參宿は五日に事を用ふ。能く諸惡を成じ、業を成さんと欲するも、利益少し。其の日病む者は、生酥の糜を以て、四道を祭るに、十日にして愈するを得。其の日生るゝ人、性は聰明なりと雖も、心に惡を懷き、錢財を求めて、遂に死を致さん。亦主として賊と作り、身命を失ふを致さん。其の日生れたる人、及び胎に入りたる者は、虛宿と心宿と奎宿と翼宿と斗宿と胃宿との、此の六宿日には、多く障礙を爲し、乃至鬼と尾と室宿等の日にも、亦和合せず、一切の諸事、皆作すを得ざらん。亢宿の日には、造作せんと欲すれば、輕事を爲すに宜し。氐宿と危宿と井宿と奎宿との、此の四宿日には、乃ち自在を得。

【一〇】四日。八月黑分の第四日を謂ふ。以下之に準ず。

事を作し、遠く行き、闘撃するを得ざれ。假令急事なるも、亦作すを得ざれ。女と角と觜宿との、此の三宿日も、亦最悪と爲す。翼宿の日には、怨家と闘はんに、其の勝を獲得し、或は剛なるも、或は柔なるも、還和合するを致す。軫宿と牛宿との、此の二宿の日には、伴を求むるも得ず。服薬し、合薬し、出家し、布施し、新に衣服・瓔珞・床鋪、臥具等の物を造らんに、皆成就するを得。參宿と虚宿と亢宿との、此の三宿日には、行來安隱なり。鬼と尾と室宿との、此の三宿日には、他と共に、悪を造り、慈心を離るゝに、種種作すを得、七星宿の日と心宿と房宿と柳宿と辟宿との、此の五宿日には、宜しく婚姻を結ぶべく、宜しく輿・車及び床褥を造るべし。參宿の日には、事を作せば亦吉なり。然も一切に於て、須く怜愍を生ずべし。

「畢星は水性なれば、汝等此の第二宿日に於て、柔軟の事を造すに、悉く和合するを得ん。其の日病む者は、香を以て火を祭ること五日ならば、後愈せん。其の日生るれば、其の人は大富・福德・樂法を得るも、牛宿と奎宿と七星宿の日、及び心宿の日に、胎を受くれば、其の人薄德にして、常に下事を作す。鬼と尾と室宿との、此の三宿日には、一切の事業、皆作すを得ざれ、闘戰するを得ざれ、遠行するを得ざれ、官に詣るを得ざれ。賣買・交易・工巧・作務など、皆作すを得ざれ。亢宿と虚宿との、此の二宿日に、若し好事を作すも、和合を得ず、唯宜しく、闘戰して、勝捷を剋獲すべきのみ。軫宿の日に、事を作して利有り、柔軟を作すに利あつて、障礙有ること無し。觜宿と角宿と女宿等の日には、衆事和合し、作す所成辦し、藥を服するに力を得、若しは捨施せんと欲し、若しは衣服及び瓔珞を造らんに、皆悉く作すを得。井宿と氐宿と危宿等の日には、遠行するも安隱なり。房宿と柳宿と辟宿等の日には、慈心を離れて悪を成さんと欲するに、成すを得。斗宿と箕宿と婁宿と胃宿と室宿と翼宿との、此の六宿日には、宜しく親友と婚[九]娶の知識を結ぶべし。床鋪・輦輿など、皆悉く造るを得。

【九】娶。麗本、聚に作るも今三本に從ふ。

那の數を說かんに、一千六百刹那を一[四]迦羅と名け、六十迦羅を[五]摸呼律多と名け、三十摸呼律多を、一日夜と爲す。

「胃宿は縱惡にして、自在なること、[六]首羅天の如く、能く四方を護りて、皆安隱を得しむ。汝等天人、彼の惡を爲すを見て、嫌怪を生ずる勿れ。刑法を嚴治して、乃ち衆生を護るなり」と。

『一切天の言はく、「是の如く、是の如し、聖人の敎の如し、法令を嚴にして、乃ち衆生を濟へ」と。

[七]「月と胃と合するに、其の日病む者、或は輕く、或は重くして療治すべきこと難し。其の日生るゝ者は、性として瞋惱多く、獷惡剛毅にして、親昵すべきこと難く、大官位有つて、能く衆生に勝る。

[八]亢と虛と參と胃との、此の四宿の日には、入陣鬪戰するを得ざれ、遠く行くべからず、剃頭及び治髮するを得ざれ。畢と牛と軫星との、此の三宿の日には、乃ち鬪戰し、及び遠行・剃頭・洗頭するに宜し。柳と張との宿日には、一切の諸事を造作するを得べし。昴宿と翼宿と斗宿との、此の三宿の日には、財を求むるに得べく、醫藥を服し、持戒・布施するに宜しく、新衣を作り、及び瓔珞を造るに宜し。觜宿と角宿と女宿と七星の宿との、此の四星の日には行來に宜しく、道路安隱なり。氐宿と井宿と危宿との、此の三宿日には、惡を作すに。成ずるを得ん、房宿と柳宿と心宿と婁宿と七星の宿と張宿との、此の六宿日には、輿・車床及び繩床、幷に諸の衣服を造るを得、要ず知識と結ぶべし。

「昴宿は、速疾に種種の業を作す、其の速かなること火の如し。其の日病を得る者、酪飯もて之を祭れば、四日にして除愈す。其の日生るゝ者、常に大富を得。其の日胎に入りたる者は、斗宿と房宿と虛宿と柳宿と室宿との、此の五宿の日には、一切の諸事を造作するに宜しからず。唯大敵と共に鬪戰するを得るのみ。井と氐と翼宿との、此の三宿日には、善惡の事、皆悉く作すを得。畢宿の日にも、亦自在を得。井と氐と角宿との、此の三宿日には、昴宿に生れたる者、此の日の內に於て、

【四】迦羅(Kala)。時と譯す。

【五】摸呼律多(Muhūrta)。(舍)には須臾に譯す。今は一時間三十六に當るべし。西域記卷二に依れば、五摸呼律多を一時とし、六時(晝三時、夜三時)を以て一日一夜とす。

【六】首羅天。摩醯首羅天の略。

【七】月の胃と云云。前に云へるが如く八月黑分の第一日は月胃宿に在り。以下二十八宿を以て日に配して、記日に用ふること、支那曆に於ける十二支の如し。此等の宿に屬するものの運命に就ては卷第二十(四二一四頁以下)にも說けり。參照すべし。

【八】以下胃宿の日に生れたる者に就て云ふならん。昴星の條以下、總て之に準ず。

巻の第四十二

日藏分中[一]　星宿品第八之二

爾の時、殊致阿羅娑仙人、諸天に告げて曰はく『是の佉盧虱吒仙人は、過去世に於て、亦惡業をも造り、罪の因緣の故に、人身を得て、半驢の狀を爲すと雖も、慈力有るを以て、其の罪除滅し、更に最好端正の身を得んこと、猶し帝釋の如くならん。諸龍等に告ぐ、我れ福德の諸因緣を以ての故に、彼の仙人の如く、一切天の爲に、導師と作らんこと、今亦是の如くなり。能く汝等に深實の語言を教へん。諸龍當に知るべし、佉盧虱吒は、釋身に似已んぬ。

『是に天人衆、皆悉く歡悅し、一心に合掌して、是の如き言を作せり「今大聖人、我等の爲に往昔の事をば說きたまふ。何の星宿が、行くこと最も前に在り、何等の食をか食し、何の事業をか作し、虛空を行くに、復幾許の時なる」と。

『是の如く問ひ已るに、仙人答へて言はく「汝等一切、至心に聽受せよ、我れ慈力を以て、還端正なるを得たり。今復憐愍して衆生を安隱にせんため　一年內の事の終始を說き、汝曹をして、盲の目を得たらんが如くならしめん。初日の宿星、乃至月の滿、諸星の所在など、皆悉く具說せん。諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故に。昴星を安置して、衆星の前に在らしむること、汝等諸天は、以て是と爲すや不や」と。

『一切の天の言はく「善い哉・善い哉、我等星宿を經歷して、昴の最尊にして、大威德天の外甥なるを知る。共に六子有つて、虛空を運行す。是の故に昴星をば、先首と爲すべきなり」と。

『佉盧虱吒仙人の言はく「月[二]の諸星に合するは、昴に起り、胃に終る。月の宿を行き訖り、一月將に滿たんとし、八月黑の初には、月合して胃に在り。是の如く次第輪轉して息まず。我れ今復、刹[三]

【一】この品。日密分に缺く。

【二】印度に於ては。月齡の一日—十五日を白分又は白月とし、月齡の十五日—晦日を黑分又は黑月とし、十二ケ月を兩分し、二十四の半月を以て一週年とす。而して二十八宿は記日にも記月にも用ひらるゝこと、支那の干支の如く、之を記月に用ふるには、一年十二回の滿月を標準として、滿月より次の滿月に至る迄を二宿又は三宿に配す。故に宿曜經の如きは、滿月の起るべき時の星宿を以て、月名を定め、秋分の時の星宿を起點として、是より滿月の起るべき時の星宿を以て月名としたり。

【三】刹那(Kṣaṇa)。時の極めて短かきをいふ。

「次に復、[一二五]婁を置いて第六宿と爲す。[一二六]乾闥婆天に屬し、[一二七]姓は阿舍婆なり。婁に三星有り、形馬頭の如し、一日一夜に三十時を行く。婁星に屬する者、大麥飯并に肉を以て、之を祭る。

次に復、[一二八]胃を置いて第七宿と爲す。[一二九]閻摩羅天に屬し、[一三〇]姓は跋伽毘なり。胃に三星有り、形鼎足の如し。一日一夜に三十時を行く。胃宿に屬する者、粳米・烏麻及び野棗もて、用つて之を祭る。右此の七宿は北門に當る。

「二十八宿に五宿有り、四十五時を行く、所謂畢・參・氐・斗・辟等なり。二十八宿の言義、廣多にして、深邃を曉り難く、具に宣ぶべからず。我れ今略說するのみ」と。是の宿を說ける時。同聞の諸天、皆悉く歡喜したり」と。

大方等大集經卷第四十一

【一二〇】辟。梵に Uttara-Prosthapadah or Uttara-Bhadrapada. 世陀帝。〔舍〕に北賢迹宿、また壁に作る。
【一二一】林天、〔宿〕に尼陀羅神、〔摩〕には善神、〔舍〕は米天に作る。
【一二二】陀難闍。〔摩〕に陀閑延、〔宿〕に翟摩多羅、〔舍〕には姓不と云へり。
【一二三】奎。梵に Revati 離婆帝。〔舍〕流灌宿、Pisces 魚星座。
【一二四】阿虱吒拼尼。〔摩〕に八妹氏、〔宿〕に曼荼鼻耶、〔舍〕には妙華に作る。
【一二五】婁。梵に Aśvayujau. or Aśvini. 阿濕尼、〔舍〕に馬師宿。Aries 白羊宮。
【一二六】乾闥婆。〔舍〕に香神天に作る。
【一二七】阿舍婆。〔宿〕に河說耶尼、〔舍〕には馬師に作る。摩登伽經に、姓と云はず。
【一二八】胃。梵に Apabharaṇi or Bharaṇi 婆羅尼。〔舍〕に長息宿、Musca 蠅星座。
【一二九】閻摩羅天。〔宿〕に閻摩神也、〔舍〕には炎天に作る。
【一三〇】跋伽毘、〔摩〕に拔伽、〔宿〕に栗筏婆、〔舍〕には佳に作る。

の如く、一日一夜に、三十時を行く、箕宿に屬する者、尼拘陀皮の汁を取つて、之を取る。

「次に復、[一〇一]斗を置いて第五宿と爲す。[一〇二]火天に屬し、姓は[一〇三]摸伽邏尼。斗に四星有り、人、地を拓くが如くなり。一日一夜の行、四十五時なり。斗宿に屬する者、粳米の華を末とし、蜜に和して之を祭る。

「次に復、[一〇四]牛を置いて第六宿と爲す。[一〇五]梵天に屬し、姓は[一〇六]梵嵐摩なり。其に三星有り、形牛頭の如し、一日一夜に六時を行く。牛宿に屬する者、醍醐の飯を以て、用つて之を祭す。

「次に復、[一〇七]女を置いて第七宿と爲す。[一〇八]毘紐天に屬し、姓は[一〇九]帝利迦遮耶尼なり。女に四星有り、大麥粒の如く、一日一夜に、三十時を行く。女宿に屬する者、鳥肉を以て之を祭る。右此の七宿は、西門に當る。

「次に[一一〇]北方に置く第一のを、名けて[一一一]虚星と爲す。[一一二]帝釋天に屬し、娑婆天の子、姓は[一一三]憍陳如なり。虚に四星有り、其の形鳥の如し。一日一夜に、三十時を行く。虚宿に屬する者は、烏・豆を煮たる汁を用つて之を祭る。

「次に復、[一一四]危を置いて第二宿と爲す。[一一五]多羅拏天に屬し、姓は[一一六]單那尼なり。危に一星有り、婦人の黶の如し。一日一夜に行くこと、十五時なり。危宿に屬する者、粳米の粥を以て、用つて之を祭る。

「次に復、[一一七]室を置いて第三宿と爲す。[一一八]蛇頭天に屬し、蝎天の子、姓は[一一九]闍都迦尼拘なり。室に二星有り、形脚跡の如し。一日一夜に行くこと、三十時なり。室星に屬する者、肉血もて之を祭る。

「次に復、[一二〇]辟を置いて第四宿と爲す。辟は[一二一]林天に屬し、婆婁那の子、姓は[一二二]陀難闍なり。辟に二星有り、形脚跡の如く、一日一夜に四十五時を行く。辟星に屬する者、肉を以て之を祭る。

「次に復、[一二三]奎を置いて第五宿と爲す。富沙天に屬し、姓は[一二四]阿虱吒排尼なり。奎に一星有り、婦女の黶の如し、一日一夜に三十時を行く。奎宿に屬する者、酪を以て之を祭る。

第五十六、並に宿曜經景風の註は、斗・牛・女・虚・危・室・辟の七を北に配したり。僧祇律三四、舍頭諫經、摩登伽經は、上の如く、虚以下の七を北門に當るとす。

【一一一】虚。梵に Sravisthāḥ or Dhanisthā 檀尼吒、〔舍〕に貪財宿。Delphin.

【一一二】帝釋天。〔摩〕に婆藪神、〔舍〕には居鞞天に作る。

【一一三】憍陳如。〔摩〕亦同じ。〔宿〕には婆私瑟耶、〔舍〕には造眼といふ。

【一一四】危。梵に Satabhiṣak 僧祇に不魯具陀尼と云へるものか。〔舍〕に百毒宿。Aquarius. 寳瓶宮。

【一一五】多羅拏。〔宿〕に婆魯那神、〔摩〕には水神、〔舍〕は養育天に作る。

【一一六】單那尼。〔摩〕に單茶延、〔宿〕には丹茶耶、〔舍〕には乘魅とす。

【一一七】室。梵に Purve Proṣṭhapadāḥ or Purva-Bhādrapadā 世陀帝。〔舍〕に前賢迹宿。次の辟と共に P. Rgasus 星座なり。

【一一八】蛇頭天。〔宿〕に阿醯多陀難神、〔摩〕には富單那神、〔舍〕には主人是天と云へり。

【一一九】摩登伽經に闍崗那。闍都迦尼拘、〔宿〕に門耶尼、〔舍〕は生耳に作る。

有り、形人手の如く、一日一夜に、三十時を行く。軫星に屬する者、[七六]粢稗の飯を作して、以て之を祭る。

「次に復、角[七七]を置いて第五宿と爲す。喜樂天[七八]に屬し、姓は質多羅延尼[七九]、乾闥婆の子なり。只一星有り、婦人の黶の如し。一日一夜に、十五時を行く。角に屬する者、諸の華飯を以て、用つて之を祭る。

「次に復、亢[八〇]を置いて第六宿と爲す。摩姤羅天[八一]に屬し、姓は迦栴延尼[八二]。其に一星有り、婦人の黶の如く、一日一夜に、十五時を行く。亢星に屬する者、當に菉豆[八三]を取り、酥蜜[八四]を和して煮、以用て之を祭る。

「次に復、氐[八五]を置いて第七宿と爲す。火天[八六]に屬し、姓は呰吉利多耶尼[八七]。氐に二星有り、形脚跡の如く、一日一夜に、四十五時を行く。氐宿に屬する者、種種の華を取つて食を作り、之を祭る。右此の七宿は、南門に當るなり。

「次に西方[八八]に置く第一の宿をば、其の名を房[八九]と曰ふ。慈天[九〇]に屬し、姓は阿藍婆耶尼[九一]なり。房に四星有り、形瓔珞の如く、一日一夜に、行くこと三十時なり。房宿に屬する者、酒肉もて之を祭る。

「次に復、心[九二]を置いて第二宿と爲す。帝釋天[九三]に屬し、姓は迦羅延那[九四]。心に三星有り、形大麥の如く、一日一夜に行くこと十五時なり。心星に屬する者、粳米の粥を以て、用つて之を祭る。

「次に復、尾[九五]を置いて第三宿と爲す。獵師天[九六]に屬し、姓は迦遮耶尼[九七]なり。尾に七星有り、形蝎尾の如く、一日一夜に、行くこと三十時なり。尾星に屬する者、諸の果・根を以て、食を作して、之を祭る。

「次に復、箕[九八]を置いて第四宿と爲す。水天[九九]に屬し、姓は持叉迦栴延[一〇〇]なり。箕に四星有り、形牛角

と共に、Sagittarius, 射手星座なり。

【九九】水天。〔舍〕には木天に作る。

【一〇〇】持叉迦栴延。〔摩〕に迦栴延、〔宿〕に刺婆耶尼、〔舍〕には財所乘に作る。

【一〇一】斗。梵に Uttara Āṣāḍhā or Uttara Aṣāḍhā. 阿沙荼。〔舍〕に北魚宿。

【一〇二】火天。〔宿〕に毗說神、〔摩〕には凶惡神に作り、〔舍〕には種殖天とす。

【一〇三】摸伽邏尼。〔摩〕に伽羅延、〔宿〕に毘耶羅那、〔舍〕には向所作とす。

【一〇四】牛。梵に Abhijit. 阿毗闍摩。〔舍〕に無容宿。Lyra 天琴星座。

【一〇五】梵天。〔宿〕に風梵摩神とす。

【一〇六】梵嵐摩。〔摩〕に梵氏、〔宿〕に奢拏耶那、〔舍〕に梵所乘とす。

【一〇七】女。梵に Śroṇā or Śravaṇā 宿祇に堅强精進といへるものか。〔舍〕には、沙栴宿、一名耳聽といふ。Aquila 鷲座なり。

【一〇八】毘紐天。〔宿〕に毗藪幻神、〔舍〕には種殖天に作る。

【一〇九】帝利迦遮耶尼、〔摩〕に迦栴延、〔宿〕に目揭連耶那とす。

【一一〇】北方。本經も第二十、

び果を祭る。

「次に復[四六]參を置いて、第四宿と爲す。[四七]日天に屬し、姓は[四八]婆私失絺なり。其の性大惡にして、瞋忿多し。[四九]只一星有つて、婦人の黶の如し。一日一夜に、四十五時を行く。參宿に屬する者、祭には醍醐を用ふるなり。

「次に復、[五〇]井を置いて第五宿と爲す。[五一]日天に屬し、姓は[五二]婆私失絺なり。其に兩星有つて、形脚跡の如く、一日一夜に十五時を行く。井宿に屬する者、粳米の華を以て蜜に和し、之を祭る。

「次に復、[五三]鬼を置いて第六宿と爲す。[五四]歲星天に屬し、歲星の子たり。姓は[五五]炮波那毘、其の性、溫和にして、善法を樂修す。其に三星有りて、猶し諸佛の[五六]胸前の滿相の如くなり。一日一夜に、三十時を行く。鬼星に屬する者も、亦粳米の華を以て、蜜に和して之を祭る。

「次に復、[五七]柳を置いて第七宿と爲す。[五八]蛇天に屬す、卽ち姓は[五九]蛇氏なり。[六〇]只一星有りて、婦女の黶の如くなり。一日一夜に、十五時を行く。柳星に屬する者は、祭るに乳糜を以てす。右此の七宿は、[六一]東門に當るなり。

「次に[六二]南方に置く第一の宿を、名けて[六三]七星と曰ふ。[六四]火天に屬し、姓は[六五]賓伽耶尼なり。其に四星有つて、形河岸の如く、一日一夜に、三十時を行く。七星に屬する者は、宜しく粳米・烏麻を以て粥を作り、之を祭るべし。

「次に復、[六六]張を置いて第二宿と爲す。[六七]福德天に屬し、姓は[六八]瞿曇彌。其の星二有り、形脚跡の如く、一日一夜に、三十時を行く。張宿に屬する者、[六九]毘羅婆果を以て、用つて之を祭る。

「次に復、[七〇]翼を置いて第三宿と爲す。[七一]林天に屬し、姓は[七二]憍陳如なり。其に二星有り、形脚跡の如く、一日一夜に、十五時を行く。翼星に屬する者、靑黑豆の、煮熟したるを用つて、之を祭る。

「次に復、[七三]軫を置いて第四宿と爲す。[七四]沙毘梨帝天に屬し、姓は[七五]迦遮延、蝎仙の子なり。其の星五

第五十六、並に宿曜經、景風の註は奎・婁・胃・昴・畢・嘴・參の七を西に配し、僧祇律三四、舍頭諫經、摩登伽經、並に本經卷第五十一は今の如く、房以下を西に配したり。

【八九】房。梵に Anūrādhāḥ or Anurādhā, 僧祇に不滅といへるものか。〔舍〕に悅可といへるものなるべし。同經には之が敍述を缺く。次の心、尾と共に Scorpis. 蠍星座。

【九〇】慈天。〔宿〕に布密多羅神とし、〔摩〕には親神に作る。

【九一】阿藍婆耶尼。〔摩〕に阿藍婆。〔宿〕に多羅毗耶。

【九二】心。梵に Rohiṇī, Jyeṣṭhaghnī or Jyeṣṭhā 逝多、〔舍〕に尊長宿。

【九三】帝釋天。〔摩〕には天地神。〔舍〕には印帝天に作る。

【九四】迦羅延那〔摩〕に迦栴延、〔宿〕に僧訖利底耶那、〔舍〕には長所乘とす。

【九五】尾。梵に Mūlabarhaṇī or Mūlaḥ, 牟邏。〔舍〕根元宿。

【九六】獵師天。〔宿〕に儞律神、〔摩〕には沙陀神、〔舍〕には泥黎提天に作る。

【九七】迦遮耶尼。〔摩〕に迦栴延、〔宿〕に迦底神。〔舍〕には所乘に作る。

【九八】箕。梵に Pūrvā Āṣāḍhāḥ or Purva-Āṣāḍhā. 阿沙茶。〔舍〕に前魚宿。次の斗

日月・五星有り、晝夜運行して、各常度を守り、天下の爲に、照明を作せるを見たり。我れ了知して、分別識解せんと欲す。暗冥を愍むが故に、劬勞を憚らざるなり。此の賢劫の初には、是の如き事無かりき。汝等一切の諸天・龍神は、我を憐むが故に來る、願はくは星辰・日月の法・用を說かんこと、猶し過去に、安施を豈立し、便宜・善惡・好醜を造作したるが如く、我が所願の如く、具足して之を說かんを」と。

『一切の天言はく「大德仙人、此の事甚深にして、我が境界に非ず。若し一切衆生を憐愍するが爲ならんには、過去時の如く、願はくは速に自ら說きたはんを」と。

『爾の時、佉盧虱吒仙人、一切の天に告げて言はく「初に星宿を置くには、昴を先首と爲し、衆星輪轉して、虛空を運行す。諸の天衆に告ぐ、昴を說いて先と爲すこと、其の事是なるや不や」と。

『爾の時日天、是の言を作す「此の昴宿は、常に虛空を行き、四天下を歷、恒に善事を作して、我等を饒益す。我れ知る、彼の宿は火天に屬するを」と。

『是の時、衆中に一聖人有つて、大威德と名けたり。復是の言を作す「彼の昴宿は、我が妹の子なり。其の星に六形有つて、剃刀の如く、一日一夜に四天下を歷り、三十時を行き、火天に屬し、姓を鞞耶尼とす。彼の宿に屬する者、之を祭るに酪を用ふ」と。

『佉盧虱吒仙人、諸天に語つて言はく「是の如く、是の如し、汝等の言の如し。我れ今昴を以て初宿とは爲す」と。

『復次に畢を置いて、第二宿と爲す。[畢は]水天に屬し、姓は頗羅墮なり。畢には五星有りて、形立叉の如し。一日一夜に四十五時を行く。畢宿に屬する者、祭に鹿肉を用ふ。

復次に觜を置いて、第三宿と爲す。[觜は]月天に屬す、卽ち是れ月の子、姓は毘梨伽耶尼なり。星の數は三有り、形鹿の頭の如くなり。一日一夜に、十五時を行く。觜宿に屬する者は、根及

葉に作る。

【七六】莠。稷に似たる草、實のらずといふを以て、草の莖、葉を交ふるか。

【七七】角。梵に Citrā 質多羅。〔舍〕に彩畫宿。Virgo (Spe-cion.) 乙女星座の一等星。

【七八】喜樂天。〔宿〕に毘室利神、〔舍〕に細滑天に作る。

【七九】質多羅延尼。〔摩〕に質多延、〔宿〕には僧伽羅那、〔舍〕には伊羅所乘に作る。

【八〇】亢。梵に Niṣṭyā or Svāti 私婆帝。〔舍〕に善元宿。Bvotes. 牛飼星座。

【八一】摩姤羅。姤、麗本姤に作る、今三本に從ふ。〔宿〕には風神、〔舍〕には風天に作る。

【八二】迦旃延尼、〔摩〕に赤氏、〔宿〕に蘇那、〔舍〕には善所乘に作る。

【八三】䒽。かりやす、一種の草。

【八四】酥。麗本蘇に作る、今三本に從ふ。

【八五】氐。梵に Viśākhe (or ~khā) 毗舍佉。〔舍〕に善格宿。Libra. 天秤宮なり。

【八六】火天。〔宿〕には因伽陀羅祇尼神、〔舍〕には伊羅天に作る。

【八七】些吉利多耶尼。〔摩〕に桑遮延、〔宿〕には遲怛利、〔舍〕には已彼に作る。

【八八】西方。本經卷第二十、

『夫人之を見て、心に驚き怖畏し、卽便ち委棄して、[三三]屛中に投じたるも、福力を以ての故に、空に處つて墜ちざりき。時に羅刹の婦有り、名けて驢神と曰ふ、兒の不汚なるを見、福子なりと念言し、遂に空中に於て、接取して洗持し、雪山に將往して、乳哺畜養すること、猶し己が子の如く、等しくして異有ること無かりき。長成するに至るに及び、仙藥を服せしめ、天の童子と、日夜共に遊ばしむ。復大天有り、亦來つて此の兒を愛護し、甘果・藥草を飮食せしむるに、身體轉異り、福德莊嚴して、大光照耀したれば、是の如き天衆は、同じく共に稱美して、號して[三四]佉盧虱吒〔隋に驢脣と言ふ〕大仙聖人と爲せり。

『是の因緣を以て、彼の雪山の中、幷に及び餘處に、悉く皆種種の好華、種種の好果、種種の好藥、種種の好香、種種の淸流、種種の和鳥を化生し、行住する所に在つて、並に皆豐盈したり。此の藥果もて資益したる因緣を以て、其の餘の形容の麁なる相は、悉く轉じて身體端正たり。唯脣のみ驢に似たり、是の故に名けて驢脣仙人と爲す。

『是の驢仙人、聖法を學し、六萬年を經て、一脚を翹げ、日夜下さず、倦心有ること無かりき。天、大仙の、是の如き苦行を見たり。時に諸の梵衆、及び帝釋天、幷に餘の上方の、[三五]欲・色界等、和合して悉く來り、禮拜供養し、乃至龍衆・夜叉など、一切雲集し、有らゆる仙聖の、梵行を修する人、皆來つて此の驢聖人の邊に到り、種種に供奉して、讃歎・稱揚すらく「是の如き苦行をば、生れてより來、未だ覩ず」とて、供養を設け已り、合掌して問ひて言はく「大仙聖人は、何等をか求めんと欲する。唯願はくは我と諸天との爲に、之を說かんを。若し我が力にして能はば、卽ち當に相與へて、終に恡惜せざるべし」と。

『爾の時、驢脣、是の語を聞き已り、內心に慶幸なりとし、諸天に答へて言はく「必ず能く我が情の所求に稱はば、今當に略說すべし。我れ宿命を念ずるに、過去の劫時に、虛空中に、諸の列宿・

〔摩〕には鬼神に。〔舍〕は父天に作る。

【六五】 賓伽耶尼。〔摩〕に賓伽羅、〔宿〕に瞿必毗耶那、〔舍〕には邊垂に作る。

【六六】 張。梵に Purva(or va) Phalgunī. 頗求尼。〔舍〕に前德宿とす。

【六七】 福德天。〔宿〕に婆藪神、〔摩〕には善神、〔舍〕は善天に作る。

【六八】 瞿曇彌。〔摩〕に善氏〔宿〕に瞿那律耶、〔舍〕は俱曇に作る。

【六九】 毘羅婆。Bimba. 赤色の果實にして、形林檎に似、鮮明なりと。

【七〇】 翼。梵に Uttara(or ra) Phalgunī. 頗求尼。〔舍〕に北德宿とす。

【七一】 林天。〔宿〕に利耶摩。〔摩〕には婆伽神、〔舍〕には種殖天に作る。

【七二】 憍陳如。〔摩〕に憍尸迦〔宿〕に過咥黎、〔舍〕は十里に作る。

【七三】 軫。梵に Hastah. 僧祇に容帝といふものか。〔舍〕に象宿とす。Corvus 鳥座なり。

【七四】 沙毘梨帝。〔宿〕に毗婆怛利神。〔摩〕には次の角、亢と共に咀吒神に、〔舍〕には臥寐天に作る。

【七五】 迦遮延。〔摩〕に奢摩延、〔宿〕に跋蹉耶那。〔舍〕には迦

をか大星と作し、誰をか小星と爲し、誰をか日月と作し、何日の中、何の星か先に在り、虛空中に於て、復誰か、復三十日を月とし、十二月を年とすることを安置せる。云何が時と爲し、何處に繫屬し、姓は何、字は誰なる。何の善、何の惡かあり、何をか食し、何を施する。若しは是れ晝と爲すや、若しは是れ夜と爲すや、日月星宿は、復若しは行を爲すや。何者をか名けて、月の初・一日と爲し、何者を滿月とする。若しは時節を爲し、若しは行度を爲さば、一一は各幾なる。復若しは停を爲さば、幾許の時が行く。何者か是れ輕、何者か是れ重、何者か是れ合、何物か非合なる。何者か力多く、何物か力少き。云何が名けて、日前後の行とは爲す。上行に幾の影、下行に幾の影かあり、影に幾歩か有るを、名けて轉初轉を爲すとは曰ふ。云何がして月北し、月南する。云何が次第する。大士、汝は諸聖のうち、第一最尊なり、願はくは我れ龍を愍み、具足して解說したまへ。我等聞き已らば、苦を脫して奉行せん』と。

爾の時、殊致羅娑菩薩、諸龍に告げて言はく『大王、過去世時、此の賢劫の初に、一の大城有り、名けて瞻波と曰ふ、彼の中の人民、和合して熾盛なりき。一天子有つて、大三摩多と名け、端正少雙、才智聰名にして、正法もて行化し、常に寂靜を樂み、世の榮に著せず、諸の人民の、宗仰し、恭敬禮拜し、之を侍衛する所と爲る。彼の三摩多、淸淨の慈悲もて、衆生を愍念すること、猶し赤子の如く、愛染を樂はず、常に自ら身を潔くしたり。

『王に夫人有り、多く色欲を貪るも、王旣にして不幸、處として心を遂ぐる無かりき。曾て一時、園苑に遊戲し、獨り林下に在り、止息して自ら娛み、驢の三合群の、根相出現せるを見て、慾心發動したれば、衣を脫ぎて之に就く。驢見て卽ち交はり、遂に胎藏を成じ、月滿ちて子を生むに、頭耳口眼、悉く皆驢に似たり。唯身のみ人に類し、而も復麁澁、驢毛體を被ひ、畜と殊なる無かりき。

註六四參照。

【五七】柳。梵に Āśleṣā 阿舍利。〔舍〕に不觀宿とす。Hydra 怪蛇星。

【五八】蛇天。〔舍〕に醍醐天に作る。

【五九】蛇氏。〔摩〕に龍氏、〔宿〕に曼陀羅祁。〔舍〕に慈氏に作る。

【六〇】只。麗本止に作る、今三本に依る。

【六一】東門。本經卷第二十、第五十六には、角・亢・氐・房・心・尾・箕の七星を以て東方に配したるに、僧祇律三十四、舍頭諫經、摩登伽經など、本卷並に卷第五十一と同じく、昴以下柳に至る七星を東に配したり。宿曜經には何れとも明示せざるも、楊景風の註には、支那に行はれたる天文に依つて、角等を東方に配したり。

【六二】南方。本經卷第二十、第五十六、並に宿曜經景風の註は、井・鬼・柳・星・張・翼・軫の七を南方に配し、僧祇律三四、舍頭諫經、摩登伽經は、本卷並に卷第五十の如く、七星以下の七を南に配したり。

【六三】七星。梵に Maghā 摩伽。〔舍〕に土地宿とす。次の張宿、翼宿と共に Leo. 獅子星座なり。〔宿〕は單に星とす。

【六四】火天。〔宿〕に薄伽神、

坻大山の頂頭、牟尼聖人の處所に到りぬ。

爾の時、彼處なる一切の龍王、五聖人を見て、心に歡喜を生じ、恭敬禮拜して是の如き言を作す『汝等大仙は福德の人なり、智慧・方便もて一切莊嚴し、苦惱の中に於て、已に彼岸に到りぬ。願はくは我を救濟して、惡獄中より出で、解脫を得しめんを。彼の五聖人は、是の如く答へて言へり『我等は汝等を救濟する能はず。所以は何とならば、現に今雪山に、大菩薩有つて殊致羅婆と名け、諸聖人中にて、最大の智慧あり、大に方便をば解す。彼の菩薩能く汝に解脫を與へん。汝一心に求哀勸請すべし』と。

諸龍聞き已り、是の如き異身にして、同じく共に合掌し、遙かに殊致羅婆聖人に向ひ、恭敬禮拜して、皆是の言を唱へつ『大德聖人、願はくは我を救濟し、願はくは我を憐愍したまはんを』と。

爾の時、殊致羅婆菩薩摩訶薩、彼の龍王の、唱救の聲を聞き、卽ち大天緊那羅等、夜叉・羅刹・百千萬人の與に、前後圍遶せられ、神通力を以て、雪山を發ち、空に乘じて往き、佉羅坻山の頂に到る。時に諸龍王、彼の聖人を見、各各恭敬・合掌して禮拜し、一心同聲に、是の如き言を作す『大仙聖人、願はくは我を救濟したまはんを。此の獄中に於て、我に解脫を與へ、我れ自身及び眷屬をして、安隱に家に還り、諸の苦惱を離れしめたまはんを』と。

爾の時、殊致羅婆菩薩、善く方便を解し、世の因緣を知り、諸龍の爲に、星宿の法を說かんと欲したり。『星宿の法は、各度數の和合と時節と有り、合する時は、則ち易く、合せざる時は、則ち難し。時節未だ合せざれば、解脫を得ざるなり。諦に聽け、次第に、我れ當に、汝の爲に、分別解脫すべし。今此の月は、[二八]奢婆拏と名け、星宿を[二九]富那婆藪と名く。富那婆藪は、此れ[三〇]五月に屬す。此の月は復、日天に繫屬す。汝諸龍王、此の星辰と時とは、未だ和合せず』と。

爾の時、娑伽羅龍王、殊致羅婆菩薩に白して言はく『大士、是の星宿は、本誰の說く所なる。誰

星座の一群。

【四四】月大。〔舍〕に善志天とす。

【四五】毘梨伽耶尼。〔摩〕に鹿氏。〔宿〕には婆羅墮闍、〔舍〕に長育とす。

【四六】參。梵に (Bāhū, 又は Ārdrā)。僧祇に婆羅那とあるものか。〔舍〕に生養宿とす。

【四七】日天。〔宿〕に魯達羅神、〔舍〕に音響天とす。

【四八】婆私失絺、〔摩〕に安氏、〔宿〕には、姓盧醯底耶。〔舍〕に最取とす。

【四九】只。麗本止に作る。今三本に從ふ。

【五〇】井。梵に Punarvasū 又は Punarvasuḥ 分婆嗽。〔舍〕に增財宿とす。Gemini or Castor. 雙子星座の第一星。

【五一】日天。〔摩〕には歲星。〔舍〕に過去天とす。

【五二】婆私失絺〔摩〕に安氏、〔宿〕には婆私瑟吒、〔舍〕に材出とす。

【五三】鬼。梵に Tiṣyaḥ 又は Puṣyaḥ 弗施。〔舍〕に熾盛宿とす。Cancer. 巨蟹星。

【五四】歲星天。〔宿〕に蘖利河馺攞底神、〔舍〕には舍天神に作る。

【五五】炮波那毘。〔摩〕に烏波若、〔宿〕は謨闍邪耶、〔舍〕に烏和に作る。

【五六】胸前の滿相。卷第六、

禮拜する者有り、或は他化自在を禮拜する有り、或は大梵天を禮拜する者有りき。

爾の時、娑伽羅龍王、復一切の諸龍王に語つて言はく『汝等、彼の諸天王・人及び非人、聖賢雜類の、沙門瞿曇を禮拜供養して、歸依するを見ざるや』と。

爾の時、諸龍卽ち復、其の餘の仙聖に歸依したり。時に彼の山頂に、[二六]六聖人有り、一を蘇尸摩と名け、第二を那籌と名け、第三を阿收求多と名け、第四を毘梨呵と名け、第五を婆揭攎と名け、第六を殊致阿羅娑(隋に光味と言ふ)と名けたり。彼の一切の龍、或は蘇尸摩の邊に歸して、禮拜を作す者有り、或は那籌に歸依する者有り、或は阿收求多を禮拜する有り、或は毘梨呵を禮拜する者有り、或は婆揭攎に歸依する者有り、或は殊致羅娑に歸依する有りき。彼の一切の龍、皆悉く此の六聖人に歸命して、救濟を請求しつ。

是の六聖人は、五神通を得、悉く各雪山の邊に在つて住したり。彼の五聖人、皆殊致羅娑菩薩摩訶薩大聖人の所に在つて、正法を聽けり。時に殊致羅娑菩薩、亦種種無量の言辭を以て、釋迦如來の神德を讚歎しつ。時に五聖人、悉く一切龍王の哭聲と、救濟を求乞するとを聞き、聞き已つて卽ち起ち、殊致羅娑菩薩摩訶薩に白して言はく『大德、頗し、彼の龍の啼哭・號咷して、求救するの聲を聞くありや不や』と。答へて言はく『已に聞く』と。

『大士、今聖人の處に、一切の諸龍、大懊惱心有り、我等聞知するも、倘ほ往いて救はんと欲す。況んや大德をや。唯願はくは慈悲もて、往いて彼所に至り、一切の龍を救ひ、其に解脫を與へたまはんを』と。時に殊致羅娑大聖人の言はく『汝等往くべし、我れ未だ去るに及ばず。所以は何とならば、此の中の大天龍王・夜叉などの、百千萬の衆、今我に對して坐し、障礙を離るる四梵行の法を問ふ。彼れ心に歡喜して、我が所說を聽かんとすればなり』と。

時に五聖人、彼の殊致羅娑大士を禮し、三匝して遶り已り、神通力を以て、虛空に飛騰し、佉羅

厠とす。

【三四】 佉盧虱吒(Kharoṣṭhi)。

【三五】 欲…等。欲界、色界の諸天をいふ。

【三六】 劬は疲なり。

【三七】 昴。梵に(Kṛttikāḥ)。吉利帝(以下音譯は僧祇律三四に依る)。(舍=舍頭諫經、以下同じ)に名稱宿とす。此等の宿に就ては、本經卷第二十(四二四頁以下)參照。宿曜經の楊景風の註に依れば Taurus (Pleiades) 卽ち牡牛星座の群星に當る。以下星の配當は、右の註記に依つて、その位置を推したるなり。

【三八】 韓耶尼。(摩=摩登伽經以下同じ)には毘舍延、(宿=宿曜經の略、以下同じ)には某尼裴苦、(舍)は居火に作る。

【三九】 畢。梵に(Rohiṇī)。路呵尼。(舍)長育宿とす。Taurus, Hyades. 同じく牡牛星座の群星なり。

【四〇】 水天。(宿)には鉢闍鉢底神、(摩)には梵王、(舍)には有信天に作る。

【四一】 頗羅墮。(摩)には婆羅婆、(宿)は羅曇(舍)は俱曇に作る。

【四二】 又はかんざし(釵)なり。

【四三】 觜。梵に(Invakāḥ or Mṛgaśiras 僧祇律に僧陀那とあるものか。(舍)に鹿首宿とす。次の參宿と共に、Orion

離繋縁とにして、虛空眼品中に說ける如くたり。
爾の時、一切の諸天龍王、悉く皆、佉羅坻山なる、牟尼聖人の處所の中に集會して住しぬ。彼の一切の龍、各自の形を見るに、小にして鋼觜の如く、動かんと欲するも能はず、遊行に望無く、舊體を思念し、細身を懊惱して、彼の中に宛轉し、自在を得ざれば、怖畏して毛竪てり。一切相與に難陀・跋難陀王の邊に向ひ、禮を作して是の如きの言を作せり『大王、我が龍王の國土に、今有る所の蚊虻・蒼蠅・毒虫・糞穢、種種の不淨は、皆是れ瞿曇の所爲なり。是の故に我等皆、宮宅を捨て、此の間に來到して、救濟を求覓す。又小身及び怖畏を離るることを得る能はず。若し能く佛世尊に歸依せば、免脫することを得べし』と。
時に難陀・跋難陀龍王、是の如き言を作す『沙門瞿曇は、諸の方便と種種の幻術と多く、能く一切の娑婆佛刹を內れて、身中に安置す。我が龍家に於ても、亦一切の諸惡を化作し、我をして怖畏し、此に來つて救を求めしむるも、今は沙門、自ら勢力を失ひ、復方便・神通・道術無く、身は今本の如く、舊座の中に坐せり、豈に能く我を救はん。是の如く小身なるも、旣に此の獄を造り、我を安置して、皆去るを得ず。何ぞ能く救濟して、怖畏無からしめん。一切の諸龍は、波旬に繫屬す、欲界に自在なるは、唯魔力有るのみ。今禮拜して、此の難を出でんことを求め、各各家に還つて、安隱に住すべし』と。
爾の時、伊羅婆龍王、復是の言を作せり『汝等諸龍、懊惱を生ずる莫かれ。何を何ての故にとならば、沙門瞿曇は、已に能く魔の眷屬を降伏し、群臣人民を弟子と作して、唯魔王の、其の本心及び其の神力を喪失する在るのみ。云何ぞ當に能く汝等を救濟すべけん』と。
時に諸龍王、伊羅婆の、是の如くに說くを聞き已り、或は四天王を禮拜する者有り、或は天帝釋を禮拜する者有り、或は須夜摩天を禮拜する者有り、或は珊兜率陀を禮拜する有り、或は化樂天を

【二六】六聖人の譯語は。卷三十三の、註四〇以下參照。
【二七】鋼觜、麗本嘴に作るも、今三本に依る。
【二八】奢婆拏(Srāvana)。陽曆七月十六日より八月十五日に至る一ケ月。
【二九】富那婆藪(Punarvasu)(or~vasū)。井宿と譯す。下本卷の東方第五宿參照。
【三〇】五月。二十八宿をば、昴宿より數へ始むるとき、富那婆藪は第五番目に當るの謂にして、所謂五月を示すにあらざるべし。月この宿に在るは、陽曆十二―一月の交に在ればなり。次句に「星辰と時と未だ和合せず」と云へるは、是を示すものなるべし。
【三一】合。麗宋二本、命に作る。今明本に依る。
【三二】騣、麗本鬉に作る、今元明に依る。騣は馬のたてがみなり。
【三三】屛。日密分相當文には

さば、更に餘を念ずる莫かれ、生死の五陰・一切の有中に、導師の身を得ん「ことを念ぜよ」』と。

爾の時、戒依止菩薩摩訶薩、即ち坐處に於て、法順忍を得、坐より起ち、頭面もて禮を作し、佛を遶ること三匝し、即ち身上の無價の寶衣、眞珠・瓔珞を脫いで如來を供養し、布施を[三五]設け已つて、偈を說いて問ふて言はく、

『菩薩は云何が、諸法を修して、一切の悉く皆空なるを達了し、世間は水泡の如くなるを觀察し、能く諸有と無明との縛を盡すや。一切惡見の性は實に非ず、勝れたる無生・順忍の心を得なば、常に菩提道の中に於て行じ、能く衆生をして解脫を得しめん』と。

爾の時世尊、戒依止に答へ、偈を說いて言はく、

『不動なること山の如き四種の心をば、智慧の人乃ち能く有つ、無量億劫に諸の苦を受くるは、一切の諸衆生を愍むが爲なり。佛の說かく、禁戒を堅固に持し、乃至一點の如きをも破らざらんに、一切三世の佛の正法をば、具足圓滿して悉く能く行ぜん』と。

爾の時、八萬四千の魔軍、及び戒依止菩薩の眷屬、戒依止の授記を得たるを聞き已り、心大に歡喜し、即ち佛前に於て、至心に過を悔ひ、一切皆、阿耨多羅三藐三菩提心を發しぬ。此の菩提心をば、名けて三昧順菩提心と爲す。此の心を得已り、歡喜踊躍し、各各衣を脫ぎ、以用て布施し、施し已つて坐せり。

爾の時波旬、其の軍主幷に及び眷屬の、已に佛に歸依したるを見、心に瞋忿・苦惱・不安を生じ、更に大に怖畏して、是の如き言を作せり『我れ今沙門の腹中より出づるを得て、復眷屬を失すること、未だ幾人なるを知らず。此に出づるを得て、佛弟子と作れるもの、幾人の在る有りや。速に城門を閉ぢ、一人を放つて、其をして外に出でしむる莫く、自の魔境界に、安隱に依止せしめん』と。

爾の時世尊、彼の魔の大衆眷屬の爲に、三種の梵行を說きたまへり。所謂衆生攀緣と、法攀緣と、

【三五】設。麗本脫に作る。今三本に依る。

福德は皆明了なりき。

時に戒依止大魔軍主、此の偈を聞き已り、彼の過去の福德因緣を念じて、如來に對して、五體を地に布き、眼中に淚を出し、長跪合掌して、是の如き言を作せり『如來世尊、我れ大に懊悔し、我れ大に慚愧す、大癡人の如く、迷へる如く、醉へる如く、鬼顚の著ける如くなり。我れ過去を念ずるに、一阿僧祇劫を經たるとき、大精進力もて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、六波羅蜜を行じ、聖道を修習して、諸の福德を作し、佛の現在したまへるに値ひて種種に供養し、妙法を聽受して、弘誓の願を發したり。乃至迦葉如來の法中に、一比丘有つて、聲聞法を說き、大乘人有つて、菩薩法を說けり。我れ爾の時、心錯り口惡くして、此の說人をば謗り、「是れ魔の語なり、魔の眷屬なり、大乘人の邊に、小乘の過を說けばなり」と言ひつ。是の如き惡口說の因緣の故に、我れ彼の中にありしも、迦葉如來は、我に記を授けて、阿耨多羅三藐三菩提を得んとしたまはざりき。彼の惡口の罪業の因緣を以て、我れ彼に死して、魔界の中に生れ、是の身を受けしより來、已に五十七億千歲を經つ。世尊、我れ寧ろ更に、六百千年を歷て、地獄の苦を受けんも、終に一念も、阿耨多羅三藐三菩提の心を失せざらん。何ぞ況んや四梵行の念を退せんをや』と。

第一・第二に、是の如く懺悔し、乃至第三にも是の如く懺悔するに、幷に餘の眷屬も、亦復是の如くしたりき。『又過去世に流轉の際中のごとく、是の如く當來の生死界に於ても、及び地獄に在るも、終に暫くも阿耨多羅三藐三菩提心を退せじ』と。

佛、軍主に言はく『善い哉・善い哉、善男子、若し復人有り、大燈を燃さんこと、須彌山の如く、幷に七寶物をば、無量世のあひだ、諸佛に供養せんも、是の福德の聚は、人有り、至心にして慈悲あり、菩提心を發すには如かず。何を以ての故にとならば、是の心を發す者は、乃ち是れ十方の諸佛を供養すればなり。彼の過去の福のごとき、此を最も勝れたりと爲す。汝善男子、今此の罪を盡

皆退き坐し、是の如く法を聽けり。

時に戒依止大魔軍主、眷屬を將領し、閻浮に在つて、地上を遊行したり。

爾の時、如來は衆中に在つて坐し、常身を示現したまひ、安然不動なりき。大魔軍主、見已つて念言すらく『沙門瞿曇は、大身を示現したるに、今本形に復して、摩伽陀國に在り、端坐して異ならず。或は能く我が大魔軍の衆を見んに、怖畏して力を失ひ、神通を復する無けん』と。彼の戒依止大魔軍主、復是の念を作す『沙門瞿曇は、諸の巧慧多し、或は能く我に於て、惡心を生ぜんと欲せん。我今先づ當に瞿曇の所に到り、彼の道術・方便の因緣を看、共に談論を試み、共の詐僞を觀ずべし』と。

時に戒依止大魔軍主、眷屬に圍遶せられ、前んで佛所に至り、如來に對して立ち、偈を說いて言はく、

『未だ能く自身を度脫し、生死海中に出離を得ざるに、何を以て他の衆生類を誑き、「我れ汝を安んじ、涅槃に置く」とは云ふ』と。

爾の時、如來、戒依止大魔軍主に答へ、偈を說いて言はく、

『我れ久しく、流轉の海を超度して、更に諸有の中に生ぜじ、慈悲もて諸の群生を愍念す、是の故に[三一]出の要道を說く。　汝往昔無數劫に於て、已に最勝の菩提心を發し、[三二]然燈佛世尊に値遇して、布施及び持戒を修行したり。　是の如くして過去億千の佛をば、悉く已に恭敬し、曾て供養したれば、當に此の清淨の乘を得べし、我れ今決定して汝に記を授く。　未來に成佛せんこと、還我の如くならんに、云何ぞ乃ち說いて衆生を誑くや、我れ今汝に智慧の眼を施す、前生の行の本末を念ずべし』と。

[三三]時に戒依止魔軍主は、即ち宿命を得て往にし身を識るに、頭陀の苦節もて禪を習せる、業果・

【三一】出。出離なり。

【三二】然燈佛(Dīpaṃkara)。釋迦如來因行の中、第二阿僧祇劫の滿時に、此の佛の出世に値ひ、五華を供養し、髮を布きて踏ましめ、以て未來の記別を受けたりと。

【三三】時に以下。諸本皆偈文の中に在るも、戒依止の詞に非ずして、敍述の文なるべし。

戯笑して是の身を作し、方便を得て、彼の釋子を害せんことを望むなり』と。

魔波旬の言はく『是の如くんば、善く汝速に去つて、彼の龍に聽聞すべし。「何の語言をか說き、何の方便をか作して、彼の沙門瞿曇をして、破壞離散せしむるを得べき」と。若し碎くを得なば、我が境界勝れ、龍宮も亦全からん』と。

時に戒依止大龍軍主、前後に百千萬の衆を導從して、彼の山に往かんと欲し、自家を發ち、空に乘じて進みぬ。

爾の時、世尊は、過去の一切諸願を宣揚し、通達顯示し、究竟して餘無く、一切の聖人、世に現在し、一切牟尼の處所に證を作し、一切衆生の教化畢了し、一切諸佛の眷屬家生、奮迅の境界、皆已に示現し、一切の菩薩摩訶薩衆所得の壽命、一種にして差無く、一切の天龍夜叉、羅刹・人及び非人など、一切諸佛の刹土を見ることを得、光明遍く種種の莊嚴を照し、心に皆歡喜し、十方一切の餘の佛刹中にて、此の刹の光明、最勝巍巍、福德の因緣もて、此の殊勝を得、餘の佛刹中なる、一切の五〔三〕通のもの、皆此の刹に來り、釋迦如來を、供養し禮拜しぬ。

是の時、佛の神力の故に、此の娑婆界、及び十方佛土の一切の衆生、佛身内の、是の如き神通、諸佛の境界、三摩提力に入り、彼の諸衆生、佛身の光の、十方一切諸佛の世界に出過し、普く皆充滿して照曜し、殊特にして能く餘の光を蔽へるを見、自の坐處に於て、是の如き說を作せり『釋迦如來は思議すべからず、未だ曾て聞見したることあらず』と。彼の諸菩薩、是の如く說き已り、各各種種の華香・寶衣・袈裟・瓔珞、種種の音樂を以て如來を供養し、供養し畢つて、無量の百千、右遶禮拜して、悉く皆退き坐しぬ。

時に此の大衆の一切の天龍・夜叉・羅刹・阿修羅・迦婁羅・緊陀羅・摩睺羅伽・鳩槃茶・薜荔多・毘遮舍・富單那・迦吒富單那、乃至一切の人及び非人も、亦種種の供養を設け、前の如く作禮右遶し畢つて、

【三】通。麗本道に作る。今三本に依る。

是の如く、乃至八十四萬の諸海洲中の、一一の海洲に、則ち無量億・那由他・百千の諸龍有り、各宮宅を捨て、救濟の爲の故に、佉羅坻なる大聖の處に來りぬ。

是の如く、[17]欝單羅拘盧洲中なる、鼻瘖比龍王と大遍龍王の、彼の二龍王、各無量億・那由他・百千の眷屬の與に圍遶せられ、救濟を請求するが故に、此の聖人住處に來到しつ。

是の如く、[18]弗婆毘提洲中なる、蘇摩婁叉龍王と波斯目叉龍王との、彼の二龍王も、亦無量億・那由他・百千の諸眷屬の與に圍遶せられて、悉く此に來到して救濟を求めつ。

是の如く、[19]瞿耶尼洲中なる、曷賴多那龍王と瞿波羅婆龍王との、彼の二龍王も、亦無量億・那由他・百千の諸龍眷屬の與に圍遶せられ、前後に隨從して、救濟を求めんが爲の故に、此の大聖人の處に來到したり。

爾の時復、此の四天下の、八萬四千の一切の洲中の、有らゆる諸龍、卵生・胎生・濕生・化生など、是の如き諸龍[20]在生の處なる、龍婦・龍男・龍女・龍子など、救濟の爲の故に、一切悉く此の大聖人・牟尼の處所に來り、到り已るに一切皆、小身を得ること、譬へば銅楮の如くなれば、彼の龍瞋恚して、各是の念を作せり『我等の本身は、須彌山の如くなりしに、今云何ぞ是の如くに細小なる』と。

時に魔波旬、諸龍の、皆來つて此の牟尼の處所に入るに、悉く小身を受くるを見、見已つて波旬、心中に懊惱し、亦瞋恚・怖畏・不安を生じ、其の衆軍及び眷屬に語つて言はく『汝等、此を看よ、一切の諸龍は、我が力を以ての故に、其の宮殿を變じ、一切の蚊虻・毒蠅、及び餘の臭惡なる種種の糞穢を化作し、皆自家を捨てて、大山の聖人の處所に來詣するに、悉く勢力を失して、復自在なる無く、沙門瞿曇を毀壞する能はず』と。

時に戒依止大魔軍主、波旬に白して言はく『大王、愁うる莫く、願くは我が語を聽かんを。是の如く、諸龍の此の身を受くるは、是れ沙門瞿曇の化する所には非ざるなり。龍自ら一處に集會し、

【一七】 欝多羅拘盧(Uttara-kuru)。勝處と譯す。須彌四洲の中の、北の大洲なり。是の二龍、日密分には、無邊と金身と名く。

【一八】 弗婆毘提(Pūrvavideha)勝身と譯す。四洲の中の東の大洲。是の二龍、日密分に月と、婆私吒とす。

【一九】 瞿耶尼(Godhaniya)。牛貨と譯す。四洲の中の西の大洲。是の二龍を、日密分には寶髮と光髮とす。

【二〇】 在生の上に。麗本如の字を置く。今三本に依り、之を省く。

言へり『是れ誰か此の惡物を化作せる』と。復思念すと雖も、誰の爲す「所なるやを」知る莫かりき。

爾の時、一切四天中の諸大龍王、及び其の男女、大小の眷屬など、悉く瞋忿を生じ、卽ち宮殿を出で、須彌下の佉羅坻山に至る。其の山平坦にして、山の頂頭に、大聖人の、先に居住したる所有りき。彼の山の周匝・縱廣、正等にして四萬由旬、一切の莊嚴は、純ら是れ七寶なりき。乃至難陀・優婆難陀龍王も、亦無量百千の眷屬と、自の住宮を捨てて、佉羅坻なる大聖人處に往き、救濟を請求しぬ。彼の龍、身を奮へば、須彌山の如くなるも、[六]旣に彼に到り已るに、其の身皆小にして、猶し銅楮の如くなりき。是の如く知ると雖も、語るを得る能はず、各各自ら說かく『我等往かんと欲するも、動く能はず』と。卽ち大に憂愁し瞋忿して停坐しつ。

爾の時、復[七]娑伽羅龍王有り、亦無量億那由他百千の眷屬と與なりき。是の如く[八]伊羅鉢龍王も、是の如く善住龍王も、是の如く[九]德叉龍王も、是の如く[一〇]阿那婆達多龍王も、是の如く[一一]目眞隣陀龍王も、是の如く海德龍王も、是の如く[一二]婆婁那龍王も、是の如く大德龍王も、是の如く那吒達都龍王も、是の如く[一三]阿鉢羅邏龍王も、是の如く[一四]山德龍王も、是の如く牛頭龍王も、是の如く[一五]阿藍浮龍王も、是の如く伊羅鉢多龍王も、是の如く鬱車伽脾龍王も、是の如く婆羅那鄙龍王も、是の如く斯羅摩羅龍王も、是の如く迦迦吒行龍王も、是の如く稽羅綺龍王も、是の如く水行龍王も、是の如く安闍那殊致龍王も、是の如く迦那迦賓闍那龍王も、是の如く奢倶奢伏綺龍王も、乃至閉眼龍王、乃至[一六]白象腋龍王、乃至天利龍王、乃至天婆婆遮羅龍王、乃至天迦龍王、乃至伊羅口龍王、乃至天眼赤龍王、乃至端正龍王、乃至光行龍王、乃至此の間の閻浮提地の、八十六千の龍大龍王など——時に彼の一切の一一の龍王、各無量百千の眷屬有り——悉く皆、此の聖人の處に來詣して、救濟を請求しつ。

【六】旣。麗本卽に作るも、今三本に據る。
【七】娑伽羅(Sāgaranāgarāja)
【八】伊羅鉢(Elāpatra)。
【九】德叉(Takṣaka)。
【一〇】阿那婆達多(Anavatapta)。
【一一】目眞隣陀(Mucilinda)。
【一二】婆婁那(Varuṇa)、
【一三】阿鉢羅邏(Apalāla)、
【一四】山德(Girika ?)。
【一五】阿藍浮(Aravāḍa ?)。
【一六】白象腋(Hastikaccha)。

屬すれば、其の餘の兵種を、悉く皆統領す。今當に王の爲に勅を約し、速に往いて彼の瞿曇を壞せん』と。

魔波旬の言はく『善い哉・善い哉、智慧の軍主、汝疾く去るべし、彼の龍宮に到り、是の如く切に勅せよ「早く瞿曇と共に相鬪戰せよ」と』。

時に戒依止大魔軍主、王「の所」を辭し畢り、即ち自ら手を擧げ、普く無量百千の軍衆に告げて、是の如き言を唱ふ『汝等宜しく應に速に衣鉀[五]を整ふべし、我れ今彼の龍王の宮に往き、諸の惡龍をして、毒風を興發せしめ、瞿曇の命を害して、破碎せしめんと欲す』と。

是の如く說き已るに、一切の軍衆、悉く動く能はざりき。其の戒依止の軍衆、身既に前むを得ず、眼中より涙出で、身毛皆竪つに及び、合掌して魔波旬に向ひ、說いて言はく『我等今、去るを得る能はず。沙門瞿曇は、姦僞多幻にして、我等の家を知り、我を繫縛し、我が身內の一切をして、火燃し焦沸し熱惱せしむること、猶し湯の煮ゆるが如くなり。我れ今是の如く、力自在ならず、云何ぞ復、力を他に假らんと欲せん』と。

時に魔波旬、倍更懊惱憂愁して樂しまず、戒依止をして、具に上の事を以て、諸の龍に宣告せしむ、『汝當に我が爲に、瞿曇の身を壞すべし』と。時に諸惡龍、將に空を飛ばんと欲するに、去ること能はざりければ、戒依止に語るらく『敬つて來命を奉じ、往いて毀壞せんと欲し、適 此の心を生じたるに、便ち往くを得ざりき』と。

時に戒依止、即ち恐怖を生じ、是の如き念を作せり『若し我れ今、魔の大力を現じ、諸の惡龍をして、心に瞋忿を生ぜしめんに、瞋忿を以ての故に、則ち能く瞿曇の身を破壞せん』と。

時に魔波旬及び戒依止、化して龍宮內に、諸の蚊虻・蠅疽・毒虫・死屍・人糞などを作し、臭處狼藉にして、其の中に充滿せしめたるに、諸龍見已り、自の宮室におて、心甘樂せず、是の念を作して

【五】鉀。甲に同じ。

『我が統領する所の諸の軍衆は、强壯勇健にして實に當り難し、刀輪奮撃して如來に擬せんに、須臾にして身を破し、粉碎せしめん』と。
時に魔波旬、偈を說いて答へて言はく、
『我等諸軍及び眷屬は、久しく已に佛世尊に歸依す、設し自ら往いて惡心を生ぜんと欲せんに、卽ち項邊に〔四〕枷鏁を帶ぶるを見ん』と。
時に戒依止大魔軍主、復偈を說いて言はく
『我れ今多く諸の方便を設け、彼の惡怨家を誘誑し、詐つて親善を現じて知識と作り、便を得て然る後、當に摧滅すべし』と。
時に魔波旬、偈を說き答へて言はく、
『若し我れ毒惡の心を發起し、是の如き方便もて佛を毀せんと欲せんに、卽ち死屍を頭下に繋けられん、是の如き臭惡は看るべきこと難し』と。
時に戒依止大魔軍主、復偈を說いて言はく、
『一切の欲界は魔に屬す、唯天人の佛に信歸する有るのみ、諸の惡毒龍は亦王の領するところ、願はくは勅して速に瞿曇の身を害せんことを』と。
時に魔波旬、復偈を說いて答ふらく、
『若し審に龍の力能有るを知らば、我れ已に荒迷したれば、汝自ら勅せよ、若し實に能く瞿曇を壞せんには、我れ還士を得、本心を復せん』と。
爾の時、戒依止大魔軍主、卽ち自ら念言すらく『世間の摧き難きとは、三種の毒を謂ふ、一に天魔、二に惡龍、三に定を得たる五通の仙人なり。我が今の魔宮は、已に破壞せらる。唯龍境界のみ牢固にして、光明は海中をも照耀し、威力自在にして、眷屬圍遶し、思議すべからず。龍旣に魔に

【四】枷鏁。くびかせとくさり。

卷の第四十一

日藏分　中星宿品第八の一

爾の時、欲界の魔王波旬、悉く一切婆婆國土の有らゆる衆生、及び諸の天宮、合家の眷屬など、佛身の中に在るを見つ。時に魔王波旬、見已つて悲泣し、涕淚横流し、心大に懊惱し、遍身に汗出で、啼哭失聲、稱怨大喚して、或は起り、或は立ち、或は坐し、或は行き、家居に出入し、東西に狂走し、頻申欠呿、怖懼惶惶し、憤歎長歔、喘息麁短にして、眼を合し口を張り舌を吐き身を舐り、背を露にし、胸を現はし、臂を申べ、脚を縮め、頭項を搖動し、手を束めて揩摩し、*種種施爲するも、大苦惱を受けたり。乃至一切の魔の眷屬、心内に愁憂すること、亦復是の如くなりき。

時に魔波旬に一軍主有り、戒依止と名くるが、王の身心、是の如く煎迫するを見、偈を說いて問ふて言はく、

『何の故に愁惱して獨り行住し、唱喚・馳走して顚狂に似、家居に出入して心安んぜざる、是の如き因緣をば、願はくは王の說かんを』と。

時に魔波旬、是の語を聞き已り、倍更懊惱・啼哭・雨淚し、偈を說き、答へて言はく、

『我れ今身體、汗遍流し、心中分裂して、刀もて割くが如く、啼哭して眼中淚血の如きは、瞿曇の變・通を現ずるを覩たるが爲なり。其の形廣大にして邊有ること無く、刹土悉く皆腹内に居す、我れ臣民及び眷屬を失し、境界・宮殿悉く空虛なり。復十方の大衆の來る有つて、此の娑婆界に充滿し、各無邊に大供養を設け、禮拜圍遶し或は往還す。我が自在をして威力無からしめ、伴侶眷屬は彼に歸す、如來是の大神力有り、云何ぞ我が心をして愁へさらしめん』と。

時に戒依止大魔軍主、波旬の爲に、復偈を說いて言はく、

【一】卷三十三に相當文の一部あり。同註四十一參照。

【二】欠呿。欠はあくびするなり、呿、口を開く貌。

【三】揩。こするなり。

*種種云云、本文に種種施爲受た苦惱とあり。

ば、是の如きを、正觀の門に入るとは名く。愛・行・取・入などの生ずる有るをば、智水もて洗除し、悉く淨ならしめんには、同じく共に娑婆國に往詣し、釋師子を恭敬供養すべし』と。

時に諸菩薩摩訶薩、是の如く、阿羅漢の身を化作して、此の偈を說き已り、無量恒河沙等の、神通力を得たる一切の衆生と倶に、共に發引して此の刹に來到し、到り已つて、頭面もて釋迦牟尼如來、幷に其の眷屬を頂禮し、恭敬圍遶して、佛を三匝し已り、齎來する所の種種の寶物、種種の寶衣、種種の袈裟、種種の瓔珞、種種の傘蓋、種種の幢幡、種種の寶華、種種の寶香、種種の音樂・偈讃 歌舞などを出だし、以用て釋迦如來を供養し、供養し畢つて、各自刹に還り、自刹に到り已つて、自の座に坐し、各已が衆の爲に、釋迦如來を稱[一七]揚讃歎して、是の如き言を作せり『釋迦如來は、一切の衆生を憐愍教化し、能く一切の衆生に利益を與へたまふ』と。

是の諸菩薩、各自の衆中に、是の如く稱說するに、彼の衆聞き已つて、悉く皆釋迦如來を讃歎し、既に讃歎し已つて、無量無數阿僧祇の衆生、阿耨多羅三藐三菩提を發したり。或は復、辟支佛乘に於て、發心したる者有り、或は復、聲聞乘中に、發心したる者有り。各各乘中に不退の道を得、種種の陀羅尼忍、種種の善根を得たる有り。亦此の土——娑婆佛刹——の諸衆生等の、釋迦如來の身中に入るを見たり。是の諸衆生、此の不可思議神德の變を見て、無量阿僧祇恒河沙等の衆生、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。其の中に、或は聲聞・辟支佛の心を發したる者有るも、各自の乘に於て、不退轉を得たり。或は轉輪聖王微妙の身を作し、記別を受くることを得たる有りき。

大方等大集經卷第四十

日藏分佛現神通品第七　八四七

【一七】揚。麗本楊に作るも、今三本に依る。

養し畢つて、悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。或は衆生の、辟支佛乘に於て、發願したる者有るも、是の如くして、悉く不退轉の道を得たり。彼の諸衆生、又皆各各、種種の忍、種種の陀羅尼、種種の善根を得、得已つて各本刹に還りつ。或は菩薩有つて、辟支佛の身を化作し、或は復阿羅漢の身を化作し、或は梵天王の身を化作し、或は復帝釋の身を化作し、或は復四天王の身を化作し、或は復那羅延の身を化作し、或は復摩醯首羅を化作し、或は復自在天の身を化作し、或は復星宿天の身を化作し、或は復阿修羅の身を化作し、或は復轉輪聖王を化作したり。是の如く種種の龍身・鬼身など、所在の處、佛刹の中に隨ひ、若しば衆生有つて、阿羅漢の身を樂見し、羅漢を見已り、歡喜して法を受けんに、彼の諸菩薩摩訶薩等、諸の衆生を敎化せんと欲するが爲の故に、卽ち彼の中に於て、羅漢の身を作し、彼の衆生の爲に、種種の法を說くに、彼の諸衆生、大光明及び釋迦佛を見、佛を見るを得已り、心中に愛敬して、大歡喜を生じ、六根を具足し、一切の願を滿し、惡業皆盡き、悉く樂うて生を受けたり。

又彼の菩薩摩訶薩等、佛刹の中に於て、是の如く阿羅漢の身を化作し、說法敎化の大福德聚もて、具足成就の善根力の故に、能く一音を以て、一切の刹に遍じ、諸の言辭を作し、是の如き偈を說かく、

『衆生久しく流轉の中に處り、愚癡にして出要の道を知らず、諸種種の罪業を以ての故に、此の生死苦惱の身を得たり。是の故に應に速に惡心と、邪見・顚倒・諸の煩惱を捨し、早く有流を度つて彼岸に到るべし、云何ぞ汝等、覺知せざる。見難き導師をば、今已に見、得難き人身をば、今已に得、遇ひ難き善友に、今逢値し、聞き難き正法をば、今聞くを得たり。是の故に汝等、應に至心に、速に無上菩提の道を發し、一切生死の獄を出離し、佛の微妙功德の身を證すべし。若し能く永く兩種の邪——所謂斷・常等の二見を離れ、一切行の無我なるを知ら

るを見るを得たり。又諸佛の、各各の刹中たる、自の坐處に於て、諸の衆生の爲に、此の世界なる釋迦如來の一切の功德――大名稱と大智慧力と、福德莊嚴と有り、大精進・大慈悲力を具して、衆生を敎化したまふを說けるに、彼の諸刹中なる無量阿僧祇恒河沙等の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、自の刹中に於て、記別を受くるを得、無量の衆生は、緣覺乘に於て、記別を受くるを得たるを見つ。彼の諸大衆は、亦此の土の一切の衆生、佛身に入り、亦是の如く、記別を受くるを得たると、其の中の衆生、或は樂を受くる有り、或は苦を受くる有り、一切皆現に、釋迦如來の身內に住止するとを見たり。若しは空五濁の佛刹の衆生、如來を見るを得、及び十方無量無數の說法の諸佛――一一の如來には、無量無數の衆生有つて、恭敬圍遶する――を見、見已つて、大愛敬を起し、歡喜の心を生じ、彼の諸衆生の一切の身中なる、有らゆる惡受をば、悉く除捨するを得て、安隱快樂なり。若しは不空の五濁の刹なる者、十地の菩薩摩訶薩等は、衆生を敎化するが故に、何の刹中にも隨つて、佛を見るを得、見已つて信を生じ、信心を得已つて、妙法を聽受しつ。

彼の諸の菩薩、各彼處にて、佛身を化作し、一音聲を以て、一切の刹に滿たしめ、各各異口もて、同じく偈を說いて言はく、

『十方の諸佛は同一の乘にして、善根を成就するが故に、此に來る、佛及び餘の菩薩衆を離れて、更に是の如き大德の人無し。　汝等、一一の諸衆生、速に菩提無上の道を發せ、若し勇猛に精進を勸めずんば、苦海に流轉して、出づる期無けん。　汝等宜しく應に、一切來り、速に我に相逐往し、人中の釋師子を供養して、彼の尊をば頂禮右遶すべし』と。

時に諸の菩薩摩訶薩等、佛身を化作して、此の偈を說き已り、各無量無邊恒河沙數の、神通力を得たる一切衆生と俱に、此に來詣し、釋迦牟尼佛を見、見已つて右遶三匝し、遶り已つて、各齎し來れる種種の寶物、種種の寶衣、種種の音聲、種種の歌舞を持つて、以用て釋迦如來を供養し、供

く、如來の一一の毛孔より出づる所の光明は、處處に皆十方の刹を滿たし、最も殊勝たり。

爾の時、十方の一切諸佛、其の刹中に於て、自在に住したまひ、各大衆の爲に、異口同音に、※我が名を稱讚して、此の偈を說かく、

『汝、觀ぜよ、具足して功德滿ち、彼の一切の諸衆生を憐み、智慧の大力もて、能く拔濟したまふを、釋迦如來は勝中の最たり。　慈悲心、故に此の光を放ち、一切の佛刹、皆充滿す、又是の諸衆生を愍むが故に、其をして悉く身中に現ぜしむ。　一一の佛刹に光明を滿たすに、衆生の見る者、皆歡喜す、發心清淨にして悉く牢固、勝にして無上、實の菩提を得たり。　汝等若し神通を得る有らば、一切宜しく應に急ぎ疾く往きて、恭敬接足し、稽首して禮すべし、釋迦師子は最勝の尊なればなり。　若し未だ神通を得ざる有らば、彼に向つて低頭し、遙に禮拜し、速に菩提眞智の念を起さんに、牟尼正覺の身を見ることを得べし』と。

爾の時、十方一切の諸佛、各其の國に於て、是の如き偈を說きたまへり、慈悲もて諸の衆生を敎化したまふ故に。又如來の過去修行願力・莊嚴、具足して滿てるを以ての故に。彼の諸の佛刹の一一の如來も、亦無量恒河沙等の諸大菩薩摩訶薩衆、幷に大弟子、聲聞比丘など有り、復無量億恒河沙の諸天、及び龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊陀羅・摩睺羅伽等有り、無量の大衆、彼の佛を圍遶し、各神通に乘じて、倶に此の娑婆世界に來詣し、此の刹に到り已つて、如來に向ひ、頭面もて接足し、右遶三匝し、右遶し畢つて、各齎持し來れる一切の有らゆる種種の寶物、種種の寶衣、種種の袈裟、種種の瓔珞、種種の幡蓋、種種の雜華、種種の薰香、種種の塗香、種種の音樂、種種の讚歎、種種の歌舞もて、如來を供養し、供養を設け已つて、其の眷屬と、各所住に還りぬ。

時に諸の衆生、娑婆界なる佛身の中に在る者、皆悉く之を見、見已つて歡喜し、復無量無邊の快樂を受けたり。又諸の衆生、十方の一切諸佛、其の刹土に於て、金剛座に坐し、法を演說したまへ

※我が名、釋迦牟尼佛の名なり。前後の之を案ずるに、佛の言には非されども、誤つて佛の言となせるなるべし。

坐し、亦禪定に入りぬ。復衆生有り、三寶の中に於て、信敬の心を得たるもの、亦復是の如く、禪定に入りぬ。

爾の時、世尊、即ち一切如來境界の日月三昧に入りたまひ、行智廣大にして、悉く能く一切の虚空を遍覆し、能く一切智慧の衆生をして、皆歡喜を生ぜしめたまへり。是の如き三昧は、計量すべからず、覩見すべからず、諸の聲聞、及び辟支佛、乃至十方恒河沙等の、補處の菩薩の、能く知る所に非ずして、唯佛如來のみ、乃ち能く之を得るなり。是を如來境界三昧と名く。

如來、是の如く、三昧に入り已りたまふに、此の娑婆世界・三千大千百億の四天下、百億の須彌山、百億の日月、乃至百億の諸有頂天など、皆悉く影現して、佛身中に入る。是の如く、娑婆世界・一切の佛刹など、佛身に入り已るに、其の中の有らゆる一切の衆生――地獄餓鬼及び畜生、或は天、或は人など、彼の諸衆生、或は身・或は心に、苦受有る者、皆除滅するを得、一切自在にして、悉く歡喜を生じたり。譬へば比丘の、第三禪に入つて、具足の樂を得たらんが如くなり。

爾の時、一切の諸大菩薩、摩訶薩衆の、先づ座中に在つて三昧に入りたる者、皆定より起ち、定より起ち已つて、佛の光明を見、光明を見已るに、自所有の光、尋で滅して現はれず。是の如く聲聞及び佛弟子、乃至一切の諸天人衆の、禪定に入れるもの、各各皆起つに、彼の諸大衆、身心に樂を得たること、譬へば比丘の、第三禪に入りたらんが如くなり。

爾の時、一切無量の衆生、大歡喜を生じ、踊躍無量にして、思議すべからず、未だ曾て見聞せざるところなり。又其の六根は、一切清淨にして、佛身の中に現じ、或は坐し、或は行き、或は住し、或は臥したり。復如來の一一の毛孔より、無量の光を出すを見るに、譬へば十方恒河沙等の日月の光明の如く、亦一切恒河沙等の大摩尼珠の如く、亦恒河沙等の十地の菩薩摩訶薩衆の、一時に普く大焰光明を放つが如くなりき。是の如き光明、悉く能く遍く十方の佛土を照しぬ。是の如

【二六】摩尼(maṇi)。寶、如意など譯す。珠の總名。

する莊嚴の力の故に。過去世に於ける菩薩の行中に、大福德力莊嚴の法を成就具足したるが故に。一切の菩薩行を修して、善根多く增長するが故に。無量の福を具して、佛家に生じ、無上菩提の道に親近するが故に。無上菩提の妙道を畢竟し、宣說すべからざる如來の智力に奮迅し、一切の障礙を遠離して、佛境界中の勝疾の智の故に。佛の智慧と正法の果とに入るが故に。過去無量劫來の、無邊の佛法と境界とを分別して依るが故に。此の地最勝にして、妙法輪を轉じ、一切自在にして、得べき所の身と、是の如き福德とに、罣礙無き故に。淸淨眞實の法を獲得するが故に。修習すべき所、彼岸に到るが故に。未來世の業、已に盡くるを得るが故に。一切衆生の善根に通達し、永く一切煩惱の習を斷つが故に。障礙を離れて佛界中に住す。是の故に、光明悉く能く遍く十方の世界を照らす。大王、是の如く、佛の功德光明の力に隨ふが故に、亦能く一切十方無量無數阿僧祇の佛を覩見するなり』と。

王の言はく『世尊、我れ今、是の如き十方無量無數阿僧祇の佛、幷に諸の菩薩摩訶薩、及び聲聞衆を見んと欲す』と。

時に頻婆娑羅王に隨從せる眷屬に、無量億の諸衆生等有り、異口同音に、復佛に白して言さく『世尊、亦願はくは如來、我等に諸佛の境界と、過去所行の福德莊嚴と、障礙を離るる事とを示現したまはんを。我等見已らんに、歡喜の心を發さん』と。

爾の時、世尊、阿若憍陳如に告げたまはく『汝等大衆――在家と出家の聲聞弟子――は、皆各念を繫け、深く心に思惟し、自の善根力を以て禪定に入るべし。我れ今亦、如來三昧に入らんと欲す』と。

爾の時に當り、此の佛刹中なる天・龍・夜叉、乃至一切の人及び非人に、或は四諦を見たる者有り、或は順忍を得たる者有り、或は三乘に於て、不退を得たる者有り、是の如きの衆生、皆〔一五〕結加して

〔一五〕結加。結跏趺坐の謂。

ず、羅漢の造れるに非ず、辟支佛の造れるに非ず、菩薩の造れるに非ず、如來の造れるにも非ず。是の如く是の如く、眞實に如如なり。漏・無漏の法も、一切皆空なり、和合の法の故に、相離るるに非ざるが故に、異法に非ざるが故に。彌勒菩薩、是の如く當に知るべし』と。

爾の時、金剛力士、是の法を說き已るに、無量衆生の、曾て過去に於て、空を學び來れる者は、一切の惡業をば、悉く皆除き、遠塵離垢し、諸法の中に於て、法眼淨を得、九十二那由他の衆生は、此の法の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生は、亦不退轉の道に住するを得、阿耨多羅三藐三菩提を究竟したりき。

日藏分 [一四] 佛現神通品第七

爾の時、頻婆娑羅王、佛の此の不淨觀の法を說きたまへるに、一切の大衆、各護持せんと欲したるを聞き、踊躍歡喜して、卽ち座より起ち、前んで佛に白して言はく『世尊、是の如き法門は、福德最勝にして、不可思議なり。今此の國土、娑婆世界なる佛刹の中の、無量の諸大菩薩摩訶薩の、成就すべき所の、光明妙色をば、我れ本より來初、未だ曾て見ず、未だ曾て聞かず。世尊、是の菩薩の光は、悉く能く遍く、大千世界を照し、乃至有頂にも亦皆充滿せん。我れ今眼中に、餘色を覩るを得ず、但だ此の娑婆世界佛刹の中に、乃至大小の諸鐵圍山の、悉く光明に滿てるを見るのみ。世尊、是の如き菩薩摩訶薩等、若し阿耨多羅三藐三菩提に近くを得なば、其の光や云何。如來の三昧に入りたまふ所、光明を放つの相復云何。如來の光明をば、我れ見るを得るや不や。彼の光明に緣つて、復其の餘の佛刹なる、種種の妙好・奇特の事を、見るを得るや不や』と。

佛の言はく『是の如く、是の如し、大王、若し菩薩有つて、無上菩提の道を成就せんには、其の光能く、十方の世界を照らさん。何以ての故にとならば、能く如來境界の中に於て、大福德を行

【一四】 卷三十三に、相當文あり。同註二九參照。

ひて言はく『善男子、何者をか虚空の法とは爲す、此れ見るべきや不や。若し見るべからざらんには、此の事云何』と。又復問ひて言はく『何者をか名けて諸法和合とは爲すや』と。金剛力士、彌勒に報へて言はく『[二]實際の岸は不可見なるが故に、此の和合の法も、亦不可見なり』と。

彌勒又問ふらく『善男子、何者か名けて、眞實・虚空・不和合の法とは爲す』と。金剛力士、彌勒に報へて言はく『彼の中に異無し』と。

彌勒又問ふらく『善男子、何者をか名けて、虚空の法とは爲し、何者をか名けて、不和合の法とは爲す』と。金剛力士、彌勒に報へて言はく『不動不生の法界[三]事に入るなり。是の故に異らず』と。

彌勒又問ふらく『善男子、云何が名けて、有爲・無爲、漏・無漏の法とは爲す』と。金剛力士、彌勒に報へて言はく『本の如く眞實、是の如く如如にして、性に異有ること無し。漏・無漏の法は、虚空・和合なり。是の故に異らず』と。

彌勒又問ふらく『善男子、何者をか名けて、眞實如如の漏・無漏の法とは爲す』と。金剛力士、彌勒に報じて言はく『虚空合するが故に、眞實如如なり、是れ漏の法に非ず、無漏の法にも非ず』と。

彌勒又問ふらく『善男子、何者をか名けて、虚空和合の法とは爲す』と。金剛力士、彌勒に報じて言はく『一切の諸法は、障礙を離る、和合の故に、空にして集に非ず、散に非ず。何を以ての故にとならば、體性不失の故なり。而も彼の空中には、物及び空を得べからざるが故に、故に空法とは名く。善男子、一切の法中には、此れ方便なるが故に、當に知るべし、一切如如の體性は、體性本より來、是れ空なるが故に、空なり。是の如き萬法、和合するが故に空なり。想は想を離るるが故に、此の空は想に非ず、非想も亦空なり。何を以ての故にとならば、是の如き一切和合の法は、空にして不可說の故なり。一切諸法の體性、爾るが故なり。此の是の如き法は、沙門の造れるに非

【二】實際。眞如の彼岸なり。

【三】事。理に對す。離因緣の無爲法を理とし、因緣ホの有爲法を事とす。

く地の精氣、充溢の因緣もて、行者、身の中に、色を得、力を得、念を得、喜を得、精進を得、大智慧を得ん』と。

佛の言はく『善い哉、善い哉、汝大檀越、能くぞ是の心を發しつ。眞に是れ佛子なり、佛口より生じ、法より化生したるなり。是の如き食を與へて、彼の身を益する、此の福の因緣もて、速に大乘をば、成就滿足せん』と。

爾の時、衆中に大德天有り、復座より起ち、前んで佛に白して言はく『世尊、若し是の如き法行の比丘、佛弟子等有らんは、彼の諸の檀越、或は種種の金・銀・寶珠、種種の資生、種種の穀米を以て、具足供給せん。若し諸の弟子、佛所說の如き不淨觀の法、乃至寂滅三昧空門もて、是の如く繫念し、初夜より、中・後夜に至るまで、坐臥行立し、是の如く法を念じて、心に外緣無からんには、彼の諸の檀越、爲に寺舍を營み、或は一屋、乃至一樹林を造り、或は復、衣食・坐臥・床鋪、病患の湯藥、種種の資生をば、常に供給して[一〇]足らしめん。彼れ是の如きを得て、乏少無く、己身に安隱を得、憂愁無く、心常に歡喜し、好福田を得、法器を成就せん。是の如く施し已らば、當來の世には、大果報を得、深く心に法を樂ひ、惡道に生ぜず、惡法を造らざらん。我れ是の如く、彼の人を護つて、卽ち慈悲の心を修するを得、是の如き種種勝妙の善根をば、增長して不滅ならしめん』と。

佛の言はく『善い哉、善い哉、大檀越、此は是れ汝等の精進の心なり、大乘の中に於て、速に能く福德の力を增長せしめん』と。

爾の時、衆の中に[一一]金剛力士あり、復佛に白して言さく『世尊、如來は此の大集經を說き已りたまふに、諸の大檀越、幷に眷屬の衆は、各各發心して、佛法を護持し、衆生を利益せんとす。彼の因緣の故に、此の娑婆世界なる佛刹の中には、法母照曜して、光明を增進す』と。

爾の時、彌勒菩薩摩訶薩、未來を利益せんと欲するが爲の故に、卽ち衆中に於て、金剛力士に問

【一〇】足。麗本之に作る、今三本に依る。

【一一】金剛力士。金剛杵を持てる力士、また執金剛といふ。

男、或は女の、能く是の如くに作し、精進の心を勤め、正法の中に於て、守護を好まんには、是の如き法行の富伽羅の故に、常に護り、常に念じ、常に供給足らん。是の如き衆生は、流轉の中に於て、常に尊貴なるを得、眷屬と和合し、常に安樂を受けて、辛苦を經ざらん。乃至速に阿耨多羅三藐三菩提の道を成ぜん。善男子、汝等樂を求めて、苦をば求めず、是の故に應當に、常に精進を勤め、諸の善根を作さん』と。

諸天等の言はく『善い哉、善い哉、我れ今日より、是の如く修習し、是の如く發心す』と。

爾の時、此の娑婆世界に、惡心の諸餓鬼等有り、常に仰いで、一切衆生の精氣・血肉を食噉し、以て生活を爲したり。是の如き鬼等の、無量阿僧祇なるが、同じく佛に白して言さく『世尊、我等惡業罪報の所招により、常に人の肉血精氣を噉つて、以て性命を活したるも、今日發心し、佛法に入りて住し、佛弟子と爲り、更に惡を造らず、惡食を生ぜざらん。若し佛弟子たらんには、佛の今說きたまへるが如き、不淨觀の法もて、常に是の如く修し、是の如く習行し、一種にして異無からん。若し我れ、富伽羅心の、所住の念の如くならざらんには、我が眼をして、黑暗にして常に盲ひしめ、一切の四肢をして、動轉する能はざらしめ、又身中の五根を具足せざらしめよ。我等も亦、富伽羅の如く、此の福德の人、幷に其の施主――寺舍・房室・樹林・園苑を造立し、浴池・衣鉢・飲食・臥具、倚床・湯藥一切の所須[を施する]――を護り、是の如き檀越をも、我等亦護らん』と。

佛の言はく『善い哉、善い哉、善男子、汝好く發心したり、常に當に是の如くにして、放逸ならしむる莫れ』と。

爾の時、牢固地天、座より起ち、是の如き言を作す『世尊、若し佛弟子にして、常に五根を攝して、佛の今說きたまへる不淨觀の法の如きを、是の如く繫念して、至心に行ぜん時には、我等地天、此の行者の爲に、常に地味を出すこと滋潤ならしめ、彼の人、其の中に、壽命を增益せしめん。是

【八】 菀。苑に通ず。

【九】 牢固地天(Pṛthivī)。また堅牢地神ともいふ。地の神たり。

諸の惡事を作さんと欲し、種種の福中に、爲に障礙を作さん。若しは是の如き諸の惡衆生有り、我に歸來して、呪術中に、種種の力を得んと望まんに、是の如き呪の中に、種種の法用、具足して有りと雖も、我等彼の、是の如き衆生に於て、加へず、護らず、其の力を與へず、亦救濟せざらん。

『若しは彼の衆生、意に規求を欲し、如是如是の物を得んことを望まんも、我れ亦與へじ、若しは衆生有り、常に修し常に〔六〕念ずる福德の人に於て、瞋を生じ、惡と種種の障礙とを作さんに、是の如き〔に於ても〕、我等亦、上に說けるが如くならん。

『或は復、今世及び未來中に、能く此の法に依つて、憶念修行し、及び法をば盡さんと欲せんも、常に諸天・龍神、乃至迦吒富單那等の、惡心もて瞋忿し、慈悲有ること無く、當來の妙好の身を樂はず、三途惡道の果報を畏れざる有らん。若しは是の如く、福德を造るの人有つて、阿蘭若を樂ひ、諸の善根を種ゑ、或は塚間、或は復樹下に住し、或は寺舍、或は屍陀林、或は行住の處所に在らんに、福德の人には、悉く上に說ける如くならん。

『天・龍乃至迦吒富單那、*惡見・惡心もて、此の福德の人、此處 住止せんに、或は身心濁らしめ、或は精氣を奪ひ、或は〔七〕彼の行人、檀越を供養せん。我が諸天・龍、乃至迦吒富單那等、慈悲の心を離れ、恩を報ずることを知らず、當來の生に於て、惡道を怖れず、身心を垢濁して、其の精氣を奪はん。唯過去の極重の惡あるを除く、此の惡業中には、護を得べからず。若し我が天龍乃至迦吒富單那等の、應に護を得べきに、護らざれば、現世に則ち、一切三世の諸佛を欺誑すと爲し、流轉の中に於て、羅漢及び辟支佛を見ず、常に我が身をして、福器を成ぜず、涅槃を得ざらしめん』と。

佛の言はく『善い哉、善い哉、善男子、汝能く是の如く、此の心を發したること、亦一切三世の諸佛の、過去世時に、修行したるが如くにして、異る無く、三寶の種を紹ぎ、法幢を竪立し、法母を光照せん。汝等是の如くして、則ち一切三世十方の諸佛を供養することを爲す。汝善男子、或は

〔六〕念。麗本命に作るも、今三本に從ふ。

*本文に天龍……惡見惡心、此福德之人、是處住止、或身心濁、或奪精氣、或被行人、供養檀越一一九云云とあり。

〔七〕彼。麗本は被に作るも、今三本に依る。

是の如き十五濁の中より、一切悉く護らん。

『若しは胎藏・妊娠の女人有つて、是の如き福德人に供養せん時、我等護持し、時として暫くも捨する無けん。設ひ諸の惡人及び惡鬼など、惡を加へんと欲するも、彼の惡心を廻して、悉く歡喜せしめん。是の如く、兒女の在在處處に福德を修せん者、善根を念ぜん者は、他の爲に愛敬せられ、或は餘の衆生、勸めて讃美するを助け、或は復家人、其の名を稱說し、或は呪もて索を結び、衆生を擁護し、或は福德を敎へ、或は捨惡を敎へんに、我等彼の、是の如き衆生をば、十五濁の中より、常に親しく護持し、諸の惡鬼神も、其の便を得ざらん。

『若しは是の如く、福德を修する者有り、或は人・非人なりとも、能く其の語を信じ、敎の如く行ぜんには、是の如き一切を、我等亦護らん。若しは惡人有り、彼の行者・修福の人の中に於て、或は瞋り、或は罵り、或は惡を加へんと欲し、或は障礙を生ぜんに、是の如き等の輩、諸の惡衆生をば我等護らざらん。

『是の惡衆生、十五の濁事に、護を得ずとは、名字云何。十五濁とは、第一に惡患、第二に自在を失し、第三に種種の資生を散失し、第四に、身中の四肢、種種に割截せられ、或は眼、或は耳・口・鼻・手・足を、或は復頭を斫られ、第五に所愛の妻子及び諸の眷屬を失ひ、第六に官位を失ひ、第七に居家を失ひ、第八に諸の怨家の爲に侵され、第九に心常に憂愁し、第十に、剎利を瞋つて、心常に惡を行じ、第十一に、邦邑國城衆生の濁惡なる、第十二に、諸の偸盜來つて、種種の物を失し、第十三に、自家の婦女、恒に相鬪諍し、第十四に、國土に賊盜あり、他國の賊來り、第十五に、短命にして速に死するなり。若し惡衆生、是の如き十五種の事有るも、我等、富伽羅等の言を護らず。

『若しは復人有りて、福業を修すと雖も、善語を受けず、恒に惡瞋を起し、福德を造る者の爲に、

作さん。或は毒中らば護り、或は惡天子、或は內國土、或は外國土に、是の如き賊起らば、我れ爲に護を作さん。

『此の十五種の濁惡の事は、或は比丘、或は比丘尼、或は優婆塞、或は優婆夷、或は餘の信心の男子女人など、或は今現在に、或は復當來に、乃至劫盡きて末法の世時——何をか名けて末法の世時と爲すとならば、謂はく、讀誦の人無く、【四】波羅提木叉に依らずして、道中に行じ、若しは坐禪せずして、則ち三摩提を得る能はず、乃至第四の果を得ず、乃至寂滅三昧を得ざる、是を則ち名けて末法世時と爲す——に、若しは上に說けるが如く、初夜後夜に、曾て睡眠せず、是の經を讀誦し、或は禪定に坐せんに、是の如く住すれば、彼の諸の眷屬、比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷、乃至信心の或は男、或は女など、一切の眷屬の、乃至住する處、或は復聚落・都邑・國城、或は阿蘭若處、或は聚落・主家など、所在の處に隨ひ、此の十五濁有らば、我れ盡く救濟して、爲に擁護を作し、是の諸惡をして、一切悉く除かしめん。

『何の聚落に於ても、福德の人有り、常に住するの處、或は多人住し、或は一人住し、乃至復、一日一夜、福德を修する者有り、乃至一日一夜、所住の處、或は復城邑、或は聚落の家などをば、我れ皆救濟して、爲に護助を作し、其の人をして【五】諸の惡事に逢はしめず、一切の諸檀越家を問ふ無けん。

『或は復剎利、或は婆羅門・毘舍・首陀、或は男、或は女、小男小女などをも、一切救濟して、常に爲に守護し、惡に入らしめじ。

『若しは是の如く福德を修する者有りて、身心に精進し、若しは人有り、供養し禮拜し恭敬して、種種供給し、或は爲に房を造り、或は大寺舍、或は林、或は苑［を造り］、或は衣裳・食飲、須つ所の坐臥の處所を作り、或は復、病患・湯藥・針灸・、種種の醫療［を作す］、是の如き檀越をば、我等

【四】波羅提木叉(Pratimokṣa)。戒の名、別解脫戒と稱す。身口七支の罪を、別々に解脫する義に就て云ふ。また戒本といふ。廣律の中より戒律の條々を拔萃せしものの謂。布薩の日、衆僧の前にて之を讀み、比丘等の犯非を懺悔せしむ。

【五】諸の惡事。麗本は經於惡事に作るも、三本は逢諸惡事となす。今後者に從ふ。

卷の第四十

日藏分　護持品第六[一]

爾の時、一切の諸天大王、幷に其の眷屬、一切の龍王、一切の夜叉王、阿修羅王、迦樓羅王、緊陀羅王、摩睺羅伽王、薜荔多王、毘舍遮王、富單那王、乃至迦吒富單那王などの一切の諸王、各幷に眷屬など、佛を禮拜し、同心に合掌して、是の如き言を作せり『世尊、我等今より、在在處處に、若しは比丘、或は比丘尼、諸の優婆塞及び優婆夷有り、但だ信心の若しは男、若しは女など、能く是の如き念を作し、不淨觀、寂滅三昧と、前に佛の說きたまへる如き、善根の因緣ともて、攝心[二]に住するを得る者有らんに、我等一切の天と、諸の眷屬、乃至淸淨信心の人――或は男、或は女――をば、常に當に救濟すべきこと、猶し導師の如く、彼の身心及び其の眷屬をして、爲に供養を作さしめ、衣食・床鋪・臥具・湯藥、種種の資生所須をば、皆與へ、是の如く具足して、其をして安隱にして、更に一十五種濁惡の事を愁へさらしめん。設ひ復有るも、我等中に於て、常に共に加護せん。

『何者をか名けて十五[三]の濁心とは爲すとならば、所謂或は石を以て擲み、或は杖を以て打ち、或は刀を以て斫り、或は槊を以て貫き、或は毒藥もて中て、或は崖上に擲ち、或は復惡人あり、或は復不信に、或は四大動ぜんに、我れ爲に護を作さん。或は惡心を以て、彼の人好む所の、飲食湯藥を送らんに、我れ爲に護を作さん。貪瞋・嫉妬、兩舌・惡口など、是の如き惡事もて、相加へんと欲せんに、我れ爲に護を作さん。或は惡人有り、濁惡の心を用つて、諸の衣鉢・床臥・鋪具、病患の湯藥を以て、常に檀越と作り、或は他を勸化し、或は自ら舊に親しんで、供養を爲さば、彼の諸惡事をば、我れ爲に護を作さん。或は復怨家、或は復惡鬼などの、是の如き等の惡をも、我れ爲に護を

【一】この品。日密分に相當文を缺く。

【二】攝心。散亂の心を一に攝むるなり。

【三】十五の區別明ならず。下一一〇頁には別に十五濁事あり。

時ならざるに、卽ち生れたる有り、或は他の患有るも、皆能く除却し、悉く安隱ならしめたる事、第三禪の如く、行を修習したらん人、定の樂を得、身心悅豫せること亦復是の如くなりき。

爾の時、一切の天・龍・夜叉・阿修羅・迦樓羅・緊陀羅・摩睺羅伽・薜荔多・毘舍遮・鳩槃陀・富單那・迦吒富單那・人及び非人など、一切の大衆は、同じく是の唱を作しぬ『善い哉、善い哉、佛・婆伽婆、是の如き妙法は、不可思議なり、我等昔より來、未だ曾て聽受せざりき。今如來所轉の法輪の如きは、能く我等一切の惡業の障礙をして、盡く除き、流轉の中に於て、一切の有を度し、甘露の漿を飲み、寂滅の樂を得、一切の衆生を敎化擁護し、五濁を捨して勝智慧を得、佛の境界に入り、三寶を照曜して、斷絕せしめず。如來は今、諸の法雨を降らしたまへり。我等の力に稱ひて、一心に供養せん』と。

是の如く、乃至迦吒富單那等の、種種の諸天は、諸天の種種の音樂を作し、復天上の細末なる金銀を雨らすこと、猶し雨の下るが如く、乃至華香・衣服・繒綵、種種の瓔珞、種種の天鬘などをば、以て如來に散じ、供養の爲の故に、一切の天人など、悉く皆雲集したり。唯坐禪して三昧に入れる者を除く。是の如き衆生は、各生處に於て、有らゆる華香・衣服・瓔珞、金銀の寶鬘などを、佛に供養し已り、歡喜して住しぬ。

大方等大集經卷第三十九

日藏分惡業集品第五

阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生は、菩提の中に於て、亦心不退轉の道に住するを得、八萬四千の諸衆生等は、無量忍を得たり。一切現在の娑婆世界刹中なる衆生は、此の四種の四諦順・空順・無願順・奢摩多悉帝那持等の陀羅尼の義を聞き已り、悉く一切の欲貪、長短の色貪、觸貪・樂貪、色・非色の貪を破壞するを得、又諸の衆生、如實に貪の障礙を見知するを得、法を聽聞し已つて、其の中に不淨觀の善根を得たる者有り、六入の念を得たる者有り、或は普不散心の善根を得たる者有り、或は遍善根を得たる者有り、或は阿那波那の善根を得たる者有り、或は奢摩他を得たる者有り、或は毘婆舍那を得たる者有り、或は初の禪定を得たる者有り、或は中間の禪を得たる者有り、或は乃至四禪を得たる者有り、或は四空定を得たる者有り、或は四諦の順忍を得たる者有り、或は性人地を得たる者有り、或は八法地を得たる者有り、或は小乘に和合する善根を得たる者、或は小乘に和合するに非ざるを得、或は復、一切智知の善根を得たる者有り、或は復、三摩提忍陀羅尼の善根を得たる者有り。

又彼の衆中には、諸の女人有つて、厭離の心生じ、女身には、種種の過窮有つて、極めて鄙惡なるを觀察し、「我れ何を以ての故にか、此の身を受けて、色欲に貪著する」と。是の呵責を作し、法を聞くを以ての故に、一切の婦人、悉く各念を修して、自身を樂はず。其の中、九十一頻婆羅の人中の女人、女人の相を轉じて、男子の身を得、九十九百億の天中の女人と、八萬四千の龍中の女人、八百六十萬の夜叉中の女人、八十四萬の阿修羅中の女人、七萬の迦樓羅中の女人、十二頻婆羅の、緊陀羅中の女人、一千の摩睺羅伽中の女人、九十頻婆羅の餓鬼中の女人、四十二頻婆羅の、毘舍闍中の女人など、是の如き一切の諸女人等は、悉く本根を失ひて、男子を成ずるを得たりき。

其の中に、若し姙娠の婦人有りたらんに、胎藏安隱にして、諸の傷損無く、乃至畜生も、亦復是の如く、其の產生の者も、五根を具足し、男女聰明にして、智慧端正なり。或は藏內にして、未だ

『此の陀羅尼は、大勢力有り、能く大に利益す、慈悲もて、一切の衆生を憐愍し、能く一切の危厄患苦を救ひ、能く一切煩惱の諸結を[三七]除き、能く一切陰入界等を知らしめ、能く一切法の差別を辨じ、能く一切の善巧方便を示し、能く一切に涅槃道の樂を與へ、能く一切諸法の門に入らしめ、能く一切の難を摧き、魔を降伏し、能く一切の邪論・外道を破し、能く一切諸天に歡喜を與へ、能く一切の夜叉をして知足せしめ、能く一切の諸阿修羅を怖れしめ、能く一切の諸阿修羅をして、心に喜悅を生ぜしめ、能く一切の諸緊陀羅をして、歡樂無厭ならしめ、能く一切の摩睺羅伽をして、迴顧するを得ざらしめ、能く一切の刹利をして喜歡し、諸婆羅門をして、信心增廣し、毘舍眷屬及び首陀羅をして、皆大に歡喜踊躍せしめ、無量の多欲なる婦女を、能く少貪ならしめ、姙娠の女人に、安隱を得しめ、持を念ずる者をして、多聞を樂はしめ、定を修習する人をして、阿蘭若を樂ましめ、能く鬪諍と國土の飢荒とを却け、能く死の殃、及び諸の盜賊、非時の風雨・凍[三八]暍、苦辛・麁澁・肥[三九]膩など、是の如き惡觸を却け、法母を照曜し、法幢を竪立し、流轉の中に於て、三寶の種を紹ぎ、諸の繫縛を解き、怖畏の衆生に、能く盡料を生じ、無生智を證せしめ、能く黑暗を破して、大光明を與へ、能く衆生苦惱の重擔を捨せしむ。此の如く奢摩裴多悉帝那持大授記陀羅尼は、能く一切三有の衆生をして、惡業道の中に、流を截つて過ぎ、佛界中に入り、一切の法に於て、自在無礙にして、乃ち十八不共佛法、無爲の彼岸に至り、能く法輪を轉じ、諸の法雨を雨らし、善能く一切の衆生を教化し、悉く涅槃の道に住するを得しむるなり』と。

此の惡業盡陀羅尼の法を說きたまへる時、無量の衆生は、過去の惡業をば、悉く除滅するを得、無量阿僧祇の諸天及び人は、遠塵離垢して、法眼淨を得、無量の衆生は、須陀洹果を得、百千頻婆羅の衆生は、無漏の阿羅漢果を得、七十那由他の衆生は、是の如き奢摩裴多悉帝那持陀羅尼を獲得したり。此の陀羅尼を得已らば、三乘の中に於て、更に退轉せず。無量無數阿僧祇の諸天及び人は、

【三七】除。麗本捨に作る。今三本に從ふ。
【三八】暍。暑氣あたり。
【三九】膩。汙なり、穢なり。

滅す。一切の因緣、相續するが故に見るなり。若し相續を離るれば、則ち見るべからず。是の故に當に知るべし、實には我有ること無しと。而も是の因緣は、亦作者無く、住者有ること無く、起者有ること無く、起たしむる者も無し。是の如き因緣は不可得なるが故に。是の故に無我なり。

『若し無我ならば、我所も亦無し、是の故に、身性には、我と我所と無く、聚無く、散無し、生滅の法なるが故に。一切の諸法も、亦復是の如く、彼の法性の中、亦不可得にして、取無く捨無く、聲聞の作に非ず、亦復辟支佛の作に非ず、菩薩の作に非ず、如來の作に非ず。

『身識の空なるが如く、一切法の空なること、亦復是の如く、體性には我無く、亦我所も無し。彼れ空なるが故に、我れ見るべからず。一切の諸法は、悉く皆我を離れ、亦我所を離れたり。離を以ての故に空なりと。是の觀を作す時、即ち能く無相無願三種の解脫空行の法門を獲得し、空の因緣を證して、能く一切の慳貪・煩惱を斷じ、或は須陀洹果、乃至第四の阿羅漢果を得る有り。智者は是の如く、一一に我の不可得を推尋し、不可得の故に、自ら我無きを知り、諦に我無きを觀じて、疑網の心を離れ、爾の時、身の了了に無我なるを知るなり。

『舍利弗、若し行者有り、能く是の如く觀ぜんには、當に知るべし、是の人は此の無相・無願・解脫の三種の空門を得、諸の天主、釋提桓因の爲に供養せられ、并に其の身を護つて、常に樂を受けしめんこと、猶し帝釋の如くならん。是の如く梵天乃至一切の諸[三六]餘の天王、一切の龍王、一切の夜叉王、一切の迦樓羅王、一切の緊那羅王、一切の摩・羅伽王などの、彼の諸王等、是の如く禮拜し、供養供給して、乏少せしむる無く、常に衞護を加へ、親しく須つ所を奉じ、惡心の衆生、其の便を得ず。若し一切の諸人王の中に在らんも、得る所の禮拜・供養・護身も、亦復是の如くならん。舍利弗、此を奢摩裴多悉帝那持陀羅尼と名け、是れ德華藏如來の、虛空藏菩薩に命じ、送つて此に來至せしむる[所]たり。我れ此の刹に、日藏大集經を說くを以ての故に、彼れ欲を持つて來るなり。

【三六】餘天。麗宋本は、天餘に作るも、今元明二本に依る。

『若し無我ならば、我既に是れ空なり、我所も亦空なり。何を以ての故にとならば、然も體性爾るが故なり。是の故に、眼性には我と我所と無く、積聚有ること無く、合に非ず、散に非ず、即ち生滅するが故に。一切の諸法も、亦復是の如くなり。一切法の性は、取無く捨無く、羅漢の作に非ず、亦復是れ辟支佛の作に非ず、菩薩の作に非ず、如來の作に非ず。眼識の空なるが如く、一切法の空なること、亦復是の如くなり。我を離れんに、我無くして、空なるが故に見ず。是の無相無願三解脱空門の觀察を作さん時、悉く能く、一切の慳貪及び諸の煩惱を除斷すと。是の如く念じ已るに、或は須陀洹果・阿羅漢果を得る有らん。

『眼を觀ずること既に然り、耳鼻舌の中も、亦復是の如くなり。復次に行者、身に我無きを知らば、次に髮を觀じ、一一の毛を析いて、以て百分と爲し、燒いて灰と成し、風をして吹いて散滅せしめよ。是の如く、一髮の體性既に空ならんに、行人の心疑、自然に明了ならん。何を以ての故にとならば、一髮の中に、我有るを見ず、是の如く、皮中・肉中・血中・唾中・涕中・腸中・腦中・骨中・髓中、筋脈・甲爪喘息冷煖、上下の諸風・壽命名字など、皆我有ること無し。直に因緣を以て、共に相和合するが故に、名けて身とは爲すと。是の如く思惟し、至心に觀じ已り、身の觸の因の故に、身識を生じ、識の因緣「の故に」名色、色の因緣「の故に」六入、六入の因緣「の故に」觸、觸の因緣「の故に」受、受の因緣「の故に」愛、愛の因緣「の故に」取、取の因緣の故に有、有の因緣「の故に」生、生の因緣「の故に」老死「の生ずる」を知る。彼の一切の法は、心識に依止す、故に身識を生ずるなり、而も是の身識は、東方より來るに非ず、南西北方、四維上下も、亦復是の如くなり。

『所因の念、身識を生ずれば、彼の念滅せん時、身識は住せず。第二の念中に、亦念に語つて、「汝住せよ、我れ滅せん」と「言は」ず。而も是れ滅の法にして、亦處所無く、聚處を見ず、散處を見ず。是の故に、諸法は、緣合するが故に生じ、緣離するが故に滅し、緣有るが故に生じ、緣無きが故に

定して我有ること無きを知る。此の地界の中をば、分析するも、我無し。彼の地と地相とは、但だ名字有るのみにして、捉持すべからず、我無く主無し。是の如く、次第に水界及び火界を觀察するに、猶し風界の如くなり。是の如く思惟し、旣に思惟し已らば、定んで知る、無我なるを。故に復眼大中の我を疑はざれ。是の故に當に知るべし、眼の四大は、一切無物にして、宣說すべからず、是の故に無我なるを。

『若し復、眼識の因緣の故に、我有りと言ふ者有らは、是の義然らず、何を以ての故にとならば、眼中に我無く、色も亦是の如し、而も和合の中にも、亦復我無し。和合の因緣より、眼識を生ずるも、是の如き識中に、亦復我無く、風中・空中にも、悉く亦我無し。是の如く推覓するに、竟に不可得なり。此の識は但だ是れ、十二因緣の循環流轉のみ、十二因緣を離るれば、識も不可見なり、但だ識に因つて名色を生ずるを、名けて名色と爲し、名色の因緣の故に、六入生じ、六入の因緣の故に、觸生じ、觸の因緣の故に、受生じ、受の因緣の故に、愛生じ、愛の因緣の故に、取生じ、取の因緣の故に有生じ、有の因緣の故に、生生、生の因緣の故に、則ち衰老及び病死有るなり。是の如き等の法は、眼識に因つて生ず。而も是の眼識は、東方より來るに非ず、南・西・北方、四維上下も、亦復是の如くなり。

『所因の念、眼識を生ずれば、是の念亦滅せんに、眼識は住せじ。第二の念中に、亦念に語つて「汝住せよ、我れ滅せん」と「言は」ず。而も是れ滅の法なり。亦復十方面に去至するに非ず、亦復專ら一處に住止せず。是の故に、諸法は因緣の故に生ず、若し因緣を離るれば、則ち生ずるを得ず、因緣に因つて生じ、因緣に因つて滅す。是の如き因緣をば、相續法と名く。是の故に當に知るべし、實には我有ること無くして、是れ因緣のみ。亦作者無く、受者も無く、起者有ること無く、他の起者も無し、是の故に無我なり。

く分別して說くべし。德華藏佛所送の淨陀羅尼欲は、彼の佛・如來、此の土の諸衆生等の、善根薄少にして、諸の煩惱多く、煩惱多きを以ての故に、四倒の心を起し、樂うて我想に著し、我想に著する故に、顚倒迷惑し、生死に流轉して八聖道を失ふが爲に、是の故に彼の佛、此の欲を送り來らしむ。舍利弗、一切の衆生は、實に我有ること無きに、此の土の衆生は、顚倒の心の故に、橫に我想をば生ず。舍利弗、智慧の人は、深く自ら觀察して我有ること無きを知る。是の觀を作す時、則ち四倒を破す。

『舍利弗、云何が智者は、無我を觀ずるとならば、所謂身を觀じて諦に無我を知る。何を以ての故にとならば、和合を以ての故に。復次に眼を觀ぜんに、亦我有ること無し。[三一]何を以ての故にとならば眼識初めて生ずるや、是の如く觀察して、至心に思惟し、或は種種の服飾・衣裳・鋪臥牀蓐を見て、結加趺坐し、坐し已つて念を攝し、一切の六根行を相捨せず、心不捨の故に、是の如く見るべし。而も此の[三二]眼根は、四大合して生じ、筋連りて水滿ちたれば、餘は動かす能はず。若し眼轉ずる時は、但だ是れ風力による、風の故に能く轉ずるなり。而も彼の風性は、虛空に因り、眼中に出入し、左右に廻轉す。[三三]眼淸淨なるが故に、則ち能く明に見るなり。而も彼の虛空の性は、所有無く、依止有ること無く、捉持すべからず、亦說くべからず。若し所有無く、說くべからずば、卽ち是れ無我なり、是の故に虛空は、實に我有ること無く、是の空中の風も、亦復無物なり、無物なるを以ての故に、宣說すべからず、是の故に無我なり。是の風の因緣も、亦眼中に入り、左旋右轉して、淸淨に照了す。彼の風は、幻の[三四]如く、亦捉ふべからず、亦說くべからず、我所を離れ、覓むるも得べからず。

『是の如く、眼中の[三五]地界も、牢固にして尼拘陀子の如し、至心に諦觀し、觀じ已つて拔出し、碎末として塵と爲し、吹いて飛散せしめよ。是の如く推求するに、永に我を見ず。是の如くして、決

【三一】何以故の次には、日密分は直に四大故を缺いて、眼識初生云云に相當する文無し。卷三十三、七一〇頁參照。

【三二】眼根。眼の見る作用(卽ち眼識)の依據なる部分、卽ち視神經に當る。

【三三】眼。麗本根に作る今三本に依る。以下之に傚ふ。

【三四】如。麗本吹に作るも、今三本に從ふ。

【三五】地界。地大の謂なり、先に云へるが如く、眼根は四大によつて生ずとするが故に、地大も存す。

不可思議なり、最大最妙にして、思議すべからず。如來世尊は、無礙の智を得たまひて、明に我等此に、阿耨多羅三藐三菩提中に、敢て歡喜心を發さざる者有るを見たまふ。如來世尊は、諸の衆生を知り、善く諸の根を知り、諸の煩惱を知り、諸の方便を知り、到彼岸を知りたまひ、能く衆生をして、法味を充足せしめ、能く衆生をして、八聖道を見せしめ、能く衆生の苦擔を擔ふことを除き、能く衆生の與に、樂擔を擔はしめたまふ。我れ今一切の天・龍・夜叉・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等、一切合掌して、各各是の如く、心を齊うして唱へて言ふ「在在處處に佛世尊有し、此の四種の無願順忍陀羅尼を說きたまふ處、乃至國王大臣長者、沙門・婆羅門・毘舍等の衆、能く書寫して此の經を置く有らん處、或は復人の、能く讀み、能く誦し、之を講說する者有らんに、是の如き等の處をば、我等衞護して、威神を加助し、求須する所有らば、一切供養し、彼の說法の人を、禮拜供給して、乏少せしめず、衰耗有ること無からしめ、不如意の事、一切の怨家など、便を得る能はず、一切の資生をば、常に具足せしめ、身には病惱無くして、歡喜心を得しめん。法を樂ふ者をも、我れ是の如く護り、彼の人、終に更に惡道に生ぜず、是の因緣を以て、法器を成じ、一切の供養をば、具足して滿すを得んを」と』。

佛の言はく『善い哉・善い哉、諸の大檀越、汝等今、大法を護らんと欲することや。護法に因るが故に、三寶斷ぜず。未來の世に、當に無量の福德果報を得べし』と。

爾の時、長老舍利弗、大衆の中に於て、即ち座より起ち、一心に合掌して前み、佛に白して言はく『世尊、德華藏佛の、虛空藏菩薩摩訶薩を遣はして送りたまへる所の、奢摩斐多悉帝那――惡業の衆生、不信心の者など、彼をして睡眠せしむる陀羅尼欲――をば、我れ及び一切世間の天・人など聞知するを得んと欲す。唯願はくば如來、廣く爲に宣說したまはんを』と。

佛、舍利弗に告げたまはく『諦に聽き、諦に聽き、善く之を思念せよ、我れ當に、汝の爲に、廣

の欲貪、一切の色貪及び非色の貪と、一切の疑慢・調戯、一切の無明を除斷し、又能く無學地に安置す。憍陳如、是を二種の、一切世間不可樂の想と名け、是の如き種種を、具足して無願順陀羅尼の微妙の義を滿ずとは名く。此の陀羅尼には、大勢力有つて、能く欲・色・非色の調慢を除き、能く盡智・無生智を證せしめ、能く一切の黑暗・羅網を裂き、能く一切苦惱の重〔三〇〕擔を捨てしむ。我れ此の大集經を說くを以つての故に、彼の智德峯王如來は、焰德藏菩薩摩訶薩に命じ、手中に此の無願順陀羅尼欲を送り來らしむ。

『憍陳如、是の陀羅尼は、能く一切の諸惡魔等を摧き、能く一切毒害の龍衆に勝れ、諸天は數倍して、倍更歡喜し、夜叉は順奉して、大踊悅を生じ、諸阿修羅は、內心に怖畏し、又能く迦樓羅王を恐懼せしめ、緊那羅王をして、愛樂を生ぜしめ、摩睺羅伽は自然に攝伏し、能く一切邪見の外道を破し、刹利王をして、歡喜心を生ぜしめ、諸の婆羅門は、信心增長し、又毘舍及び首陀羅をして、悉く歡喜を生ぜしめ、能く多欲の女人をして、貪心を止息せしめ、多聞の者をして、進益・受持し、坐禪の行人をして、阿蘭若を樂はしめ、能く一切種種の諸患を除き、能く一切の鬪諍怨家を却け、飢饉と非時の外賊・橫死、惡風・雹雨・暴水・災霜、寒熱の苦辛・麁澁の味觸など、是の如き變怪を、悉く能く消除し、大乘を光讃し、三寶の種を紹ぎ、佛母を照曜し、法幢を竪立し、流轉・怖畏の衆生を安慰す。是を微妙の無願順陀羅尼と名くるなり』と。

是の法を說きたまへる時、無量無數・阿僧祇の衆生は、遠塵離垢して、法眼淨を得、九十八頻婆羅の人は、阿羅漢果を得、八那由他の衆生は、彼の無願順陀羅尼を得、無量無數・阿僧祇の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、不退轉を得、五百八十萬の衆生は、無生法忍を得たり。

爾の時、一切無量の大衆、天・龍・夜叉・羅刹・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・餓鬼・毘舍遮・鳩槃茶・富單那・迦吒富單那・人非人等、異口同音に、俱に稱讃して言はく『善い哉・善い哉、大聖世尊、

【三〇】擔。恐らくは擔の誤か。

『若し種種衆雜の菜茹を得んには、復是の觀を作せ、此は馬[22]髦の如く、或は人髮の如しと。若し[23]蘿蔔[24]薹を得なば、復是の念を作せ、此は人齒の如くなりと。若し肉を得なば、是の如き念を作せ、此は人肉の如くなりと。白[25]石蜜或は黃石蜜、或は[26]蒲桃の飲或は石榴の漿、[27]乳・酪・醍醐、生・熟の蘇等を得んには、是の如き念を作せ、此は人血の如く、或は人膿、或は涕、或は涎・腦髓・唾等の如くなり。是の如き惡露臭處は看難しと。智慧の人、是の食の中に於て、樂想を生ぜず。

『復次に憍陳如、云何が智人は、房舍の中に於て、不樂の想をば生ずるとならば、智者是の如く、諸の堂宇・房廊・屋室、或は樓閣の中に入り、入り已つて思惟し、應に怖畏を生ずべし。我れ今此に入るに、外に四門有つて、大地獄の如く、我が身を焚燒せんと。若し屋樑・椽柱・脊[28]標を見んに、是の如く此の材木の、共に相[29]牚柱するを觀察すること、猶し人身の一切の碎骨の如く、泥と泥壁とを見ること、肉の骸を覆ふが如く、莊嚴を畫けるを見ること、血塗の漫る如く、又種種の床蓐・鋪席を觀ること、猶し人皮の如く、又坐・臥・眠・止の處所を觀ること、或は骨鎖の如く、或は死人の如くなり。是の如く、種種の飲服・湯藥・丸散・煎膏などにも、皆是の想を作し、諸の厭離を起さん。憍陳如、是を智人は一切の食中に、不樂の想を得とは名く。

『是の如く念じ已つて、何の利益をか得るとならば、即ち能く三種の順忍を獲得するなり。何者か三忍なる、謂はく空順忍、無相順忍、無願順忍なり。是の人、是の如く、三忍を得已り、樂うて空想を修せん。空想を修するに因つて、是の空中に住し、一切の法、悉く皆是れ空なるを見、是の空に入り已つて復利益を得、能く生滅の方便・利行と、是の如き陰界の無常・苦・空・無我・不淨なるとを知り、十八界及び十二入、乃至四諦十二因緣などと、一切の法性は、苦・空・無常及び無我なるとを見ん。是の如く念じ已り、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、解脫の相を得ん。

『復次に憍陳如、此の三摩提無學解脫は、是の如く一切世間を利益し、樂想を生ぜず、能善く一切

【二二】髦。かれがみ。
【二三】蘿蔔。だいこん。
【二四】薹。一種の菜。
【二五】石蜜。甘蔗糖の尙ほ精製せざるものを黃石蜜とし、精したるを白石蜜とす。
【二六】蒲桃。葡萄か。
【二七】乳等。牛乳を製熟するに、五の段階あり。初に乳あり、之を沸煮して作りし漿を酪といひ、之を更に煎て酥を得、之に生と熟とあり。酥の上に更に浮べる油の如きを醍醐といふ。味甘美なり。
【二八】標。屋上の横木なり。
【二九】牚。ささへるなり。

斷すべきの法なり、是れ解脫すべき法なるを。

『而も是の覺觀は、妄心に因つて生じ、此の心性は、本無にして今有り、本無にして今有らば、是れ無常の相、破壞すべきの相、無歸依の相、無有物の相、我有ること無き相、實有ること無き相なりと。是の觀を作す時、諸の行の中に於て、心則ち悔を生じ、能く世界不可樂の想を修するなり。

『復次に智者、若し能く深く、是の如き三世を觀ずれば、則ち能く永く、一切の煩惱・十二入等を斷じ、能く正見を淨め、流轉相續の法を斷除し、平直の道を成じ、正聚に攝せらる。是の如き等の方便を作して修する時、決定して能く、須陀洹果乃至阿羅漢果を得ん。憍陳如、是の如きをば、智者諸行の中に於て、不樂の想を得とは名く。是の義を以ての故に、不樂想の方便・攀緣とは名く。

『復次に憍陳如、云何が智者、所著の衣を觀じて、不樂の想を作すとならば、憍陳如、若し智慧の人、衣裳に於て、或は造り、或は縫ひ、或は割き、或は染及び成就し已つて、其の身邊に在り、或は見、或は摩し、或は著け、或は脫ぐを觀じ、是の如くして、此れ人皮の如しと想念し、新色の衣を見ては、血塗の想を作し、諸の惡臭の蟲の居停する所、蚊虻蟻虱の不淨充滿すと。智者見已り、樂心を生ぜず。是の如く、憍陳如、此を智人、衣服の中に於て、不樂の想を得とは名く。

『憍陳如、云何が名けて、智慧の人、食を觀じて、中に不樂の想を得とは爲すとならば、憍陳如、若し行者有り、鉢を執持せん時、是の如き想を作さん、此の皿器は、剝髮の皮の如く、膿血に汚され、不淨の髑髏、爛臭惡むべく、諸の蠅虫、蔽つて其の中に遍滿し、貪すべき者無しと。若し食を見ん時は、應に觀ずべし、是の食は死屍の如く、蟲と穢惡と充滿すと。若し[一七]麨を得なば、是の如きの觀を作せ、此の麨は[一八]糏塵にして、猶し骨末の如しと。若し[一九]麪を得んには、應に是の麪を觀じて、人皮の想を作すべし。是の如く、[二〇]臛を得、或は復漿を得、粥を得、[二一]羹を得んに、是の如く想念せよ、此は膿血或は大小便の如く、或は人脂の如く、或は人腦の如くなりと。

【一七】麨。米麥を熬りて、之をひき、こなとなしたるもの。
【一八】糏、米麥のくづ。
【一九】麪。餠のごときものか。
【二〇】臛。肉のあつもの。
【二一】羹。菜のあつものなるべし、

諸佛の正法を聽聞するを得ず、是の故に苦を生じ、一切の愛欲をば、畢竟じて斷ぜず、流轉の中に於て、自在を得ず、是の故に苦を生じ、彼處に壽終するも、勝趣を得ずして、邪見を生じ、是の如き大苦あり。一切の三惡と煩惱業道と、未だ能く永く斷ぜざれば、斯の如き苦を生じ、一切三惡道中に、未だ度脫を得ざれば、是の如く苦を生ず。何ぞ智有る者、彼の中を樂はん。是を第八の無色の四天と名く。智慧の人、是の事を觀已り、無色天に於て、樂想を生ぜず。故に一切の有の獄を出で、及び一切諸有の中の生を離るるを得。是の如き八種を、和合して觀ずる時、智慧の人、乃ち能く獲得し、心を生ぜずと雖も、常に至心に八正道を修す。憍陳如、此を則ち名けて、一切世間不可樂の想とは爲す。

『復次に憍陳如、世間と言ふは、卽ち名けて行と爲す。云何が智者、行世の中に、樂想を生ぜざる。行に三種有り、何者か是れ三なる。一に身行、二に口行、三に意行なり。云何が身行なるとならば、身行とは謂はく、氣息の入出なり、是を身行と名く。云何が口行なる、口行とは所謂覺觀言說なり、是を口行と名く。云何が意行なる、意行とは、名けて想受と爲す、是を名けて意行と爲す。是をば三行と名け、此の三種の行は、其の相是の如くたり。一切の衆生は、一種の心想あり、智者云何が能く分別して知り、身口意に於て、不樂の想をば生ずるとならば、智者身の出入の氣息を觀じて、九十九の數を取る時、深く息の涼煖和合の方便と、一切の身分の出入の氣息とを觀ず。彼の一切身出入の氣息とは、口・鼻の中のものより、乃ち一切の毛孔道中の氣息の出入に至る。是の人、息を觀じて諦に知る、是の息は、本より生有ること無く、亦滅も有ること無し。若し本より來無にして、今始めて有らんには、是れ無常の[一六]相にして決定の相無きこと、水上の泡の如く、空中の霆の如しと。是の如く觀ずる時、一切行中の、身の行想を得、是の如き相は、何の因緣に從ふやを觀じて、卽ち知る、是の相は覺觀に因り、覺觀の性は、本無にして今有り、是の故に無常なり、是れ

【一六】相。麗本想に作る、今三本に依る。

是の如き種種無量の諸苦あり。何ぞ有智の者、彼處を樂はん。此を第五の、欲界六天受報の處所とは名く。智慧の人、是の事を觀已り、彼の[一二]六天に於て、樂の想を生ぜず。

『復次に憍陳如、云何が名けて、色天の中に、樂想を生ぜざると爲す。智慧の人、彼の[一三]色界の十六住處一切の諸天を觀ずるに、[一四]世の禪を修して、彼に生ずるを得。因既に有爲なれば、是れ有漏の法なり。苦未だ盡きざるが故に、寂滅の心意・快樂、及び種種の其の餘の勝樂を得ず。是の故に苦受あり。又未だ樂の彼岸に到らざるが故に、是の故に此の苦の流轉の中に在つて、出の道を知らず。是の義を以ての故に、三惡趣中より、未だ解脫するを得ず。是の故に苦受あり。何ぞ有智の者、彼處を樂はん。此を第六の、有漏の色天と名く。智慧の人、是の事を觀已り、彼の色天に於て、樂の想を生ぜず。

『復次に憍陳如、智者は、彼の色界の衆生を觀ずるに、是の如く、無漏の禪を修習するが故に、彼の天に住するを得るも、未だ具足して八正道を滿さざるを以て、是の故に苦受あり。八正道を、滿足せんと欲するが爲の故に、精勤方便す、是の故に苦受あり。一切の無學の三摩提地は、心未だ得ざるが故に、苦受を生じ、彼の辟支佛は、諸の陀羅尼に、未だ自在を得ざるが故に、苦受を生じ、諸如來の三昧の境界に於て、未だ自在を得ざるが故に、苦受を生ず。一切衆生の境界は、皆苦なり。是の如く、衆生は色界の中に於て、若し雙頭もて般涅槃に入らんと欲するも、上に說く所の如き、種種の諸苦をば、具足して之を受く。何ぞ智有る者、彼處を樂はん。是を第七の、無漏の色天と名く。智慧の人は、是の事を觀已り、色天の中に於て、樂想を生ぜず。

『復次に憍陳如、云何が名けて、無色天を觀じ、樂想を生ぜざるとは名くる。智慧の人、[一五]無色界の四種の天處を觀じ、能く有漏の三昧を修習するを以ての故に、彼の一切の漏中に生ずるを得、未だ解脫を得ず、是の故に苦を生じ、一切の學地及び無學地も、未だ自在を得ず、是の故に苦を生じ、

【一二】六天。卷三十三、註一六參照。
【一三】色界十六住處。同註一七參照。
【一四】世禪。出世間の禪に對す。同上、註一八、一九參照。
【一五】無色の四天。識無邊處、空無邊處、無所有處、非想非非想處の四天なり。

はん。智慧の人は、是の事を觀已り、餓鬼の中に、樂想を生ぜず。是を第三の、惡業衆生――餓鬼の居處と名く。

『憍陳如、云何が名けて、第四の人間所居の處と爲し、彼處を觀察して、樂の想をば生ぜざる。憍陳如、有智の人、次に人中を觀ずるに、一切皆種種の諸苦有り、所謂生の苦・老の苦・病の苦・死の苦、愛と別離の苦、怨憎と會するの苦、求めて得ざるの苦、[一〇]五盛陰の苦、飢の苦・渇の苦、貪の苦・瞋の苦、妬嫉等の苦、妄言・綺語・兩舌等の苦、惡口・罵詈・誹謗等の苦、寒の苦・熱の苦、惡風・惡雨・疫蝗等の苦、毒惡の禽獸傷害等の苦、惡世・惡王・牢獄等の苦、貧窮・下賤・短命等の苦などなり。既に此の苦を念ずれば、更に重き苦を生じ、苦に緣つて苦を生じ、還苦の因を造り、未來の身に、復苦の報を受け、是の如く輾轉して、無量無邊に、諸の辛苦を受け、窮盡有ること無し。何ぞ有智の者、彼の中を樂はん。是を第四の衆生――人中の居處と名く。智慧の人、此の事を觀已り、人道の中に、不樂の想を生ず。

『憍陳如、云何が名けて、第五の所居――欲天の生處と爲し、彼處を觀察して、不樂の想をば生ずる。憍陳如、有智の人、初の欲界を觀ずるに、六天有り、是の中の衆生、常に欲事を樂ひ、欲愛の所纏たり。受くる所の果報も、差別等しからずして、苦受を生ず。或は復、果報の勝劣不同にして、或は上に、或は下なり。其の下の果報、上の果報を見ては、恥[一一]媿羞慚あり、常に苦受を生ず。或は過去に於て福を修し、來つて今此に生るるを得たるも、果報將に終らんとし、福德盡きん欲すと。是の如く念ずる時、則ち苦受を生ず。或は復種種に爲作する所有り、勤勞辛苦するが故に、苦受を生ず。或は所愛の人、翫弄の物など、分張離散するが故に、苦受を生じ、一切の福德・果報、畢盡して、好處所を見ては、心に愛樂を生ずるも、既に往くことを得ざれば、大苦受を生ず。又業行もて、速かに惡道――畜生餓鬼及び地獄中に墮せんを知り、是の如きを以ての故に、倍大苦受[を生ず。」

【一〇】五盛陰の苦。また五陰盛苦といふ、五陰は身心なり、身心の熾盛生長なるに就ての諸苦なり。以上の諸苦を八苦といふ。

【一一】媿。愧に同じ。

身は窓中の遊塵の如く、復衆生有つて、身は十千由旬の如く、復衆生有つて、壽命は一時頃の如く復衆生有つて、壽命七時頃の如く、復衆生有つて、壽命一劫、乃至百千劫・千萬億劫にして、惡業を以ての故に、彼の中に在つて生れ、善法を樂はず、善根を種ゑず、法行有ること無く、亦智慧も無く、無慚無愧にして、慈悲の心無く、常に苦惱を受けて、大怖畏を生じ、各各互に、相害する心を生じ、一切諸善の法を遠離し、常に不善を行じ、無明黑暗にして、嶮惡の道中に、地獄の業を造り、瞋忿の心を起して、福德を樂はず。是の報熟する時、惡道の中に「生を」受け、下身・下心もて、是の如き處に生じ、常に種種の飢渴・寒熱を受け、乘騎のごとく[六]捶打せられ、重き困乏を負ひ、穿脊の破を領し、蚊虻毒蟲、競ふて相噉食す。是の如き苦惱は、無量無邊ならん。何ぞ有智の人、彼處を樂はん。智慧の人は、是の事を觀已り、畜生の中に、樂の想をば生ぜず。是を第二の惡業衆生――畜生住處と名く。

『云何が名けて、第三の所居――餓鬼生處と爲し、彼處を觀察して、不樂の想を生ずる。憍陳如、餓鬼の中には、身に差別有り、或は餓鬼の、身長一尺なる有り、或は餓鬼の、身量は人の如き有り、或は身の千[七]踰闍那の如くなる有り、或は復鬼の、身雪山の如くなる有り。彼の諸餓鬼、裸形にして衣無く、被髮を自ら纒ひ、黑瘦羸瘠し、唯皮もて骨を裹み、肉血都て無く、身體焦燋なること、猶し枯樹の如く、恒に飢渴に苦しみて、食・飲を思念するも、常に得る能はず、口内に火然え、焰外に出で、心常に瞋忿して、慈悲有ること無く、熱悶[八]憧惶し、涼を求むるも得ず。

『又飢渴の爲に逼切せられ、[九]銷銅の汁を飲み、燒鐵丸、及び諸の熱くして惡臭あり爛れたる膿血、熱屎・熱尿、熱粥・熱漿、及び諸の熱風、或は復熱雨を食し、一切の草木・江海・河池、樹葉華果など、所食の物を、求覓すること甚だ難く、恒に得る能はず。設ひ復之を得んも、或は千年、或は千百年を經。是の如き壽命のあひだ、常に苦惱を受け、行住坐臥、黑暗無明なり。何ぞ有智の人、彼を樂

【六】捶。むちうつなり。
【七】踰闍那（Yojana）。由旬に同じ。
【八】憧惶。懼るるなり。
【九】銷。とけるなり。

子有り、以て眷屬と爲し、周匝圍遶す。彼の中に生不樂の想を觀察するなり。云何が名けて、八大地獄とは爲すとならば、一を[四]一死一活地獄と名け、二を黑繩地獄と名け、三を[五]衆合地獄と名け、四を叫喚地獄と名け、五を大叫喚地獄と名け、六を熱地獄と名け、七を大熱地獄と名け、八を阿鼻地獄と名く。

『若し過去・未來及び現在世に、諸の衆生有らんに、自の身口意もて、諸の惡業を造るが故に、彼の大地獄中に生じ、無量の劫を經て、備に種種百千の苦惱を受けん。彼の地獄の中に、設ひ妙色を覩るも、心の逼切を以て、樂想を生ぜず。見の因緣に、樂想無きを以ての故に、復大苦を生じ、是の如く轉轉して、一地獄より一地獄に至り、苦中の極苦は、堪忍すべからず、言說すべからず。若しは、耳に聲を聞き、及び鼻もて香を嗅ぎ、舌に其の味を嘗め、身中に觸を覺ゆるも、心緣の諸法も、亦復是の如く、彼の一切の心は、不愛不樂にして、曾て歡喜せず、一切好ましからず、一も意とすべき無く、身には常に火然え、熱鐵丸を食し、融銅の汁を飮まん。有らゆる觸處、悉く皆是れ火にして、忍耐すべからず、極大の苦を受く。彼の諸衆生は、其の惡業、未だ畢盡せざるを以ての故に、是の如くにして死せず、乃至一切、未だ果報を受けず。亦彼の中に生じ、次に復人中［に生れ］、身口意の行もて、惡業を造るが故に、亦彼の中に［生を］受く。

『憍陳如、世間の衆生は、多く樂を樂み、辛苦を樂まず。彼の地獄の中に、誰にても樂うて入らんと欲する、此を最初の惡業——地獄の衆生所住の處と名く。智慧の人は、是の事を觀じ已りて、不樂の想を生ずるなり。

『憍陳如、何者をか名けて、第二の所居——畜生の生處とは爲し、彼を觀察し已つて、不樂の想をば生ずる。憍陳如、畜生の中には、身に差別有り。或は衆生有つて、其の身の大さ、一毛を折いて、以て百分と爲したらん如く、一分許の如く、是の如き不可思議微細の身なる有り。復衆生有つて、

【四】一死一活。日密分には等活に作る。
【五】衆合。同に衆同に作る。

卷の第三十九

日藏分　[一]惡業集品第五

爾の時世尊、憍陳如に告げたまはく『善男子、彼の智德峯王如來は、此の世界の五濁の衆生、及び天・人を、愍みたまへるが故に、彼の焰德藏菩薩摩訶薩に命じて、此の欲を送り來らしむ、諸の衆生を、安樂ならしめんと欲するが爲の故なり』と。

時に憍陳如、重ねて佛に白して言さく『世尊、是の如く是の如し、惟願はくは如來、一切世間不可樂の想と食不淨の想とを、廣演分別したまはんを。若し佛、不可樂の想と食不淨の想とを宣說したまはんに、衆生の聞かん者、能く貪欲を捨して、諸味に著せざらん。世尊、若し衆生有り、能く諸の欲及び飲食の中に於て、皆怖畏を生ぜんには、此の二事に於て、厭離の心を生じ、苦切呵責して、應に清淨を俟すべし。當に知るべし、是の人、流轉の河を越えて、速に彼岸に到り、能く諸有の繫縛を解脫するを得んを』と。

佛の言はく『憍陳如、汝所說の如き、一切世間不可樂の想、食不淨等は、諸の天・人及び餘の大衆に對して、智德峯王如來の無願順陀羅尼――焰德藏菩薩摩訶薩の所送――の如くなり。汝至心に受けよ』と。憍陳如の言はく『唯然り世尊、我れ今諦に聽かん』と。

佛の憍陳如に語りたまはく『云何が名けて、一切世間不可樂の想とは爲す』と。[二]憍陳如の言はく『世間には凡そ二種有り、一には衆生世間、二には器世間なり。云何が名けて、衆生世間とは爲すとならば、所謂五趣の衆生――天・人・餓鬼・畜生・地獄なり、此を五趣の衆生世間と名く。器世間とは、欲界の中に二十處、色界に十六處、無色に四有り、此の四十種をば、器世界衆生の住處なり。

『欲界の中に二十處有りとは、第一には謂はく、[三]八大地獄なり。一一の地獄の四面に、各十六の隔

【一】卷三十三（大集部第二、七〇六頁以下）參照。

【二】次の說。日密分によれば、佛の說きたまふ所なり。

【三】八大地獄の一一に就ては、大集部第二・七〇六頁の註參照。

は樂膿の想、或は青瘀の想、或は樂種種蟲噉食の想、或は樂臭の想、或は樂骸骨離散等の想を說くなり』と。

爾の時、阿若憍陳如、重ねて佛に白して言さく『世尊、云何が名けて、一切世間不可樂の想と爲し、云何が復、一切世間の食不淨の想とは名くる』と。『憍陳如、汝今應に是の如きの事を問ふべからず。何を以ての故にとならば、我が此の刹中には、別に方便有つて、涅槃の道と及び四果の法とを得しむ。彼の刹の衆生は、根性不同、信心の行別なり、方便力も別にして、涅槃の道をば得。國界旣に殊なれば、其の相名も異なる。憍陳如、若し我れ具に是の如き法を說かんには、唯無生忍を得たる菩薩摩訶薩の、能く此を信受するを除き、其の餘の衆生、聞かば卽ち迷沒せん』と。

時に憍陳如、復佛に白して言さく『世尊、唯願はくは憐愍して、諸菩薩の能く信解せん者の爲に、分別宣說したまはんを。世尊、此の諸衆生、若し一切世間不可樂の想、及び食中の不淨の想等を宣說したまふを聞かんに、是の如き二種の相を聽聞し已らば、能く種種上妙の善根を生じ、能く無明の種種の障礙を破せん。一切の衆生は、愛と入と和合し、癡見纏縛して、揭頭羅の如く、流轉の中に於て、處處に生を受け、流轉の中に、處處に行を造る。又過去際の諸流轉の中は、知見すべからず、是の因緣を以て、生死を樂ふ。是の故に生死には、始・終有ること無し。何を以ての故にとならば、一切の衆生は、流轉の中に在りて是の如き、食不樂の想を聞かず。食の因緣を以て、貪欲を增長すればなり。又此の法門を聞かざるが故に、是の故に[四三]五處に流轉して生を受け、困苦疲極す。如來世尊は、大慈大悲もて、無量の世中に、常に衆生を念じたまふ。唯願はくは如來、憐愍の故に、此の具足滿無願陀羅尼を說きたまはんを』と。

大方等大集經卷第三十八

【四三】五處。五趣の謂なり。

住し、心に不退轉を得。

『復次に行者、是の如く思念す「我が今の此の心は、幾許の因緣和合して、處處・覺觀・攀緣・取捨を共生する、是の如き身心は、樂受有るが故に、或は妄想の住なり。我れ彼の身心に於て、寂滅を樂ふ」と。又是の如く念ず「若し我れ因緣和合の故に生じたらんには、骨瑣に緣るが故に、身心安樂にして樂し已れば還滅せん」と。若し彼の行人、眼識乃至意識を生ぜんに、生及び住・滅の方便因緣も、亦皆寂滅ならん。是の如き念を作す、此を則ち名けて、第三の勝心と名け、現に法を見て樂み、必定不退にして、涅槃の道を得ん。是の因緣を以て、四果を得るに及ぶこと、久しからず、難からざらん。

『復次に行者、是の如きの念を作す「若し我が此の身は、一切の法界にして、方便に通達し、淸淨の體性あり、亦體性寂滅方便の住に非ず」と。復是の如く念ず「我が一切の心相は、寂滅方便の住なり、又一切の心相は、覺觀の[四一]相滅したる、寂靜心の住なり」と。此を則ち名けて、第四の勝心と爲し、現に法を見て樂む。是の如くして、必定して涅槃の道を得ん。身に未だ證せずと雖も、證せんと欲すれば難からざらん。

『憍陳如、是の如き四種最勝の徇心、和合して現ぜん時、卽ち明に八十四百千の、三摩提門を見るを得、是の行を見已れば、阿那含果を得、乃至阿羅漢を得ん。爾の時又、二種の解脫を得、大勢力有り、大神通を具し、諸の天・人の爲に、禮拜供養せられん。憍陳如、一切の衆生は、實に一の乘・一の行・一の貪・一の念・一の欲・一の解・一の信に非ず。是の故に如來は、種種の句・偈・名字、種種の法門を宣說するなり。是の義を以ての故に、如來は十種の神力を具足す。

『憍陳如、一切の衆生は、種種顚倒の想を具有す、是の故に如來は、衆生顚倒の想を淨めん爲の故に、無常の想、或は樂苦の想、或は無我の想、或は樂死の想、或は[四二]膖脹の想、或は樂爛の想、或

【四一】相。麗本想に作るも、今三本に依る。

【四二】膖脹以下。前註一四以下參照。

已つて、歡喜心を得、歡喜の因緣もて、八正道を得、八正道に因つて、能く一切の煩惱・愛結を斷じ、須陀洹乃至阿羅漢果を得ん。善男子、汝の自の刹中の、[四〇]勝炎佛土の、聲聞の人若しは富伽羅・阿羅漢は、是の如き法の不淨の因緣を觀じて、卽ち道果を得るなり』と。

是の不淨解脫の法を說きたまへる時、無量無數無邊の衆生は、四諦如法順忍を證得し、乃至無量無邊の衆生は如實の果を得たりき。

爾の時世尊、復阿若憍陳如に告げて言はく『善男子、若し一切の衆生、共に同一心にて、其の四眞諦、一念を以て證得すべくんば、如來は應に、一切衆生の爲に、一行・一法・一事を演說すべく、亦應に八萬の法聚有るべからず。因緣の差別の異るに隨逐し、若しは一人の證せん時、一切の衆生も、亦應に同じく證すべく、若しは一人の斷ぜん時、一切の衆生も、亦應に同じく斷ずべく、應に別に聲聞・三乘有るべからず、應に別に菩薩の十地有るべからず。何を以ての故にとならば、煩惱同じきが故に、斷ずる時と證する處との處所、是れ同じければなり。是の故に衆生は、應に種種の因緣を以て調伏すべく、一緣及び一事を以てすべからず。

『憍陳如、若し一切の衆生にして、覺觀未だ盡きざれば、是の如き時中には、一切の有法に、大瘡・大莿など、種種生ずる有らん。種種生ずる中に、法有りて、種種の相・種種の色・種種の心を增長せん。時に彼の行者、是の如く思念す「若し自心に、樂心もて相を取らんと欲すれば、此の骨瑣の、心の和合より生ずるを觀ぜよ」と。彼の念の因緣もて、此の初心を作し、次第に思惟せん。是の如くせば必ず定んで涅槃の道を得、果の證も難からざらん。又此の身の樂を得る因緣を見ん、不退轉の故に。

『復次に行者、是の如き念を作さん「何の因緣の故に、心は和合の生なる」と。彼の因緣の故に、方便を樂說す、能く是を知れば、此を則ち名けて第二の勝心と爲す。現に法を見て樂しみ、必定に

【四〇】勝炎。日密分には光明佛土とす。

『時に彼の行者、若し心中に、是の如き相を樂う有らば、當に念心を捨すべし。此の相もて貪染を淸淨にし、自ら無明の汚心を除く、智慧もて斷ずる故に。行者、是の如く白骨を觀ずる時、此の骨相を念じ、乃至寂滅の因緣の故に、是の如く觀察する有つて、卽ち一切の身中より、煖の出づるを見ん。此の是の如き相をば、奢摩他と〔三九〕名け、具足して滿すを得れば、此を則ち名けて、煖相の善根とは爲す。行者爾の時、過去の福德善根に緣り、今此の修を作し、心に淸淨を行じ、見智燈の如く、內心に自ら知る。

『復次に行者、身の四行を觀じ、瑣骨より乃ち微塵に至るまで、洞徹明了なること、自の額中に、燈炎を覩るが如く、一切の色及び自心、幷に心數法を見、盡く分別して知ること、譬へば窓中の日光明照なるが如く、微塵迴轉して、暫時も停る無く、一切の有爲は、譬へば塵性の如くなりと。是の如き念を作し、乃ち世間の一切の有法に至るまで無我なるを見、寂滅の實智を見ん。行者爾の時、頂善根を得、是を頂法と名く。

『復次に行者、頂法を得已らば、更に自ら身を觀じ、或は火の出づるを見、或は火の然るを見、或は大光の、十方面を滿すを見、初禪地より、乃ち四禪の善根所生に至るまで、是の如き色陰は、微妙の四大なり。彼の行者の身も、亦是の如く、所見の身色を得、禪樂を滿すること、天に異らず。時に彼の行人、更に心裏より、復日光を出し、十方の處處には、日輪皆悉く遍滿するを見、是の相を見已つて、心念を生ぜざらん。是の時空三昧の中に入ることを得ん。復頂上に、種種の色出で、猶し傘蓋の如くなるを見ん。此を頂相の功德善根と名く。

『復次に行者、緣相を取らざれば、四諦の順忍あらん。爾の時、彼の中に、四諦の證を得ん。善男子、此を聲聞の、不淨の正念を修習する因緣とは名く。不淨正念の因緣成じ已れば、奢摩他を得る、是を白骨燈光觀相と名く。復彼の中に、是の如き相生ずれば、亦是の相を見、是の相を見

【三九】名。麗本若に作る、今三本に依る。

『復次に行者、一切の色、及び骨瑣の、猶し珂貝の如く、垢を離れ筋連るを觀じ、骨瑣を見已るに、時に彼の行人、心定んで不動ならん。若し心不動ならば、行住坐臥に、常に一緣に係けん。是の如く念ずれば、奢摩他調柔修習と名く。

『時に彼の行人、復更に內外に、空を觀察し、內外の空を念じて、三昧に入るを得、一切の色は、悉く皆青相なるを觀じ、此の骨瑣を念ずるに、亦青色を作す。諸の骨瑣の、青色を作すを見已るに、時に彼の行人、復是の念を作さん「誰か此の色及び骨瑣の青きを作し、誰か造り、誰か安んずる」と。琉璃及び頗梨色にも、此の思惟分別の想を作し已り、更に是の如く念ぜん「此の青色は、心の因緣によつて見る、是れ虛妄の見のみ、是れ實の見には非ず」と。是の如く念じ已り、法は緣に從ふを知つて、精勤修習せんに、諸の世間に於て、常に衆生の爲に、禮拜供養せられん』と。

佛、憍陳如に告げたまはく『此の無願順陀羅尼の義は、不樂の想を除き、及び食中の諸顚倒の想を除く。此は是れ彼の智德峯王如來の、炎德藏菩薩摩訶薩を遣して、送り來る所の欲なり』と。[三六]

爾の時座中に、菩薩摩訶薩有り、[三七]正念智と名くるが、佛に白して言さく『世尊、若し諸の聲聞、不淨の相と及び奢摩他を修せんに、相を成ずるを得已らば、何等の相か有る』と。佛の言はく『善男子、若し貪欲の結を破壞せんが爲には、不淨の念を修し、心を眉間に係け、自ら己身は、三百の碎骨なるを觀ぜよ。是の如き相の出と、及び不淨の念とにより、是の時中に、彼の行人の身、亦熱し亦動ぜん。此を初相と名く。是の相を得已り、乃至常に彼の是の如きの相を觀じ、自己身の澁觸等の相と、及び他身と亦復是の如くなるとを見るをば、第二相と名く。又彼の行者、不亂の心を修し、一切悉く、亦皆不淨なるを觀ずるを、第三相と名く。是の人能く、苦・集の盡く淨なるを觀ずるを、奢摩他と名く。行者の身中に、是の如き相の出づれば、煖法を得、溫き乳汁の、身心に灌[三八]注するが如し。此を則ち名けて、不動の心相と爲す。

【三六】　こゝまで、日密分には缺けたり。
【三七】　正念智。日密分には善覺と名く。
【三八】　注。麗本は澍に作る。今三本に從ふ。

能く諸苦を生ず」と。
『復次に行者、取を念ぜず、一心に專ら修し、乃至「我が身の骨瑣雪白にして、色は珂貝の如く、悉く皆筋連す」と。骨瑣を見已るに、是の時、若しは眼中に、內外の色を見、或は復、彼の一切皆空なり、但だ骨瑣連り、色白くして貝の如く、不增不減なるを見ん。時に彼の行者、是の如く念じ已り、心を失せざる、此を奢摩他と名く。
『復次に行者、若しは是の如く學せん「此れ我が頭骨なり、齒骨なり、項骨なり、乃至此は是れ我が脚指の骨なり」と。是の如く念ずれば、坐して禪を得ず。何を以ての故にとならば、奢摩他・毘婆舍那兩種の念有るを以ての故に、心に禪を得ざるなり。
『時に彼の行者、念を攝し中を緣じて、心不動に住すれば、歡喜快樂し、速に疾く修を得ん。若しは獨り一毘婆舍那を念じ、心正しく住せんには、應當に速に疾く、彼の骨瑣を念じ、專ら思惟を係くべし。此の行者若し明ならば、更に好んで骨相の塵を成じ、磨滅し、分散し、隨逐するの因緣を觀察すべし。是の觀を作さば、此を毘婆舍那順忍の覺と名く。若し一切の骨、垢を離れて色白く、碎末とせば塵と爲つて、心と和合すと。是の如く思惟するを、生順忍覺と名く。
『若し彼の行者、一切の色は、垢を離れて潔白、及び骨は塵を成ずるを觀ずれば、我の和合と心識の去來とを離る。是の如く觀ずれば、此を無我盡順忍覺と名く。若しは一切の色は、識の境界と爲り、眼中に來るは、離垢淨白なると、及び骨の塵となりと。是の如き念を作せば、彼は說くべからず、捉持すべからず、亦停住せず。是の如き念せば、此を奢摩他順忍覺と名く。
『是の如き行人、此の順忍覺を得る因緣の故に、三世中の現在未來に於て、一切の貪欲、悉く皆除滅し、及び三有を盡し、三界の中に於て、三垢の縛を脫し、即ち三解脫門に入るを得んと。是の如く念じ已らば、須陀洹果を得ん。乃至是の如く一相を念ぜば、阿羅漢果を得ん。

爾の時憍陳如、復佛に白して言はく『世尊、唯願はくは如來、我が爲に彼の智徳峯王佛の、炎徳藏菩薩摩訶薩を遣はして、送る所の無願順陀羅尼を說きたまはんを』と。佛の言はく『是の如く是の如し、憍陳如、至心に諦に聽け、當に汝の爲に說くべし。諸の衆生有り、世間に處在しては、欲を愛樂し、晝夜に味を貪り、出道を知らず、知らざるが故に、流轉の身に、大苦惱を受く。是の人應當に無願解脫の法門を觀じて、是の如く念ずべし「欲の欲・色の欲、及び無色の欲、觸欲・解欲など是の如き等の欲は覺觀に因つて生じ、諸行の因緣和合するが故に有るなり」と。復次に行者、更に是の如く念ぜよ「是の如き諸行は、作者有ること無く、受者有ること無く、風の造作に因るが故に有り。我が身・口・意の行も、亦復是の如く風に因つて生ず。是の風に因るが故に、身增長するを得、是の風に因るが故に、口增長するを得」と。復是の念を作せ「若し身口意は、風に因つて造らるれば、我れ當に身を碎いて、微塵の如くならしむべし」と。是の如く念じ已り、諦に自ら觀察せよ、「我が此の身中の入出の氣息は、卽ち彼の風に同じ。諦に一切の身の諸毛孔を觀ずるに、風の因緣に從ふが故に、生死有るを」。復一切の不淨の物――肉血髮爪[三四]――は、風に因るが故に成ずるを觀じ、復是の身の命終の時、是の屍には更に風息の入出する無きを觀じ、復是の念を作せ、「我が身口の行は、風に因緣す、若し風無ければ、身口の業も無し」。是の故に爾の時、空三昧を得て、增長修習し、修習に因るが故に、一切有の本、葉薄く華萎れ、乃至漸漸に能く、貪欲及び解脫を斷ず」と。是の觀を作し已り、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、或は阿耨多羅三藐三菩提心を發す有らん。

[三五]『復次に行者、若しは心亂れん時、應に是の如く、彼の欲の因緣を觀じ、種種の色を念じ、乃至天を念ずべし。是を以て心散ぜん。時に彼の行者、更に是の如く念ずべし、「若し我れ一切の諸生處の中に、欲未だ斷ぜざるが故に、此の心更に生ず、譬へば樹を伐つて、根を去らず、唯枝榦を却くるも、根を除かざるが故に、其の樹更に生ぜんが如し。愛も亦是の如し。愛の入、未だ斷ぜざらば、

【三四】 爪。前註三二を見よ。

【三五】 日密分には。以下、正念智菩薩との問答に至るまで、相當文を缺く。

の、自の身中に於て、復更に思惟すらく「一切の外色は、風力の所壞なり」と。是の觀を作す時、此の內外に於て、一切の諸色を、見ず念ぜざる、此を則ち名けて、第二空門とは爲す。復次に行者、是の如き念を作さん「我れ今一切の內外諸色の相貌を見ざるは、皆是れ空の力なり、我れ今定んで、一切諸法の、去相有ること無く、來相有ること無きを知る」と。是の觀を作す時、一切の覺觀、悉く皆永く斷ずる、此を則ち名けて、第三空門とは爲す。

『復次に行者、是の如き念を作さん「識は大罪を爲す」と。復是の識を觀じて、是れ一切覺觀の因緣なるを知り、「我れ當に心意識の行を遠離[三三]すべし。何を以ての故にとならば、若し集の法有らば、當に知るべし、定んで滅せんを。一切の有法は體眞實に非ず、一切の有法は、性是れ寂滅なればなり」と。是を則ち名けて、第四空門と爲す。是の觀を作す時、須陀洹果、乃至阿羅漢果を得、或は法順忍を獲得する者有り、或は菩提の證を獲得する者有り。

『復次に行者、若し覺觀は是れ滅の相なるを觀ずれば、卽ち滅定を得る、此を則ち名けて、不共凡夫空順陀羅尼と爲す。是の陀羅尼は、無量の一切功德を成就し、大力勢有り、大利益有り、永く無量の諸大苦惱を斷じ、善能く一切の欲貪、一切の色貪、乃至一切の想非想の貪を除斷し、能く一切煩惱の苦擔を捨す。此は卽ち是れ彼の山王如來・香象菩薩摩訶薩の所送たり。我れ此の大集經を說くを以ての故に、彼の佛、此の陀羅尼欲を送りたり』と。

　此の法を說きたまへる時、九十二萬百千の衆生は、須陀洹果を得、六百萬の諸衆生等は、煩惱を生ぜず、無漏道を得て、慧心解脫し、九十那由他百千の衆生は、初學の中に於て、此の空順陀羅尼を得、八百萬の諸衆生等、辟支佛を得、智定の心を證し、六十六頻婆羅の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生は、亦不退轉道に住するを得たりき。一切の大衆、皆讚ふらく「善い哉」と。天は雜華を雨らし、幷に香末を散じぬ。

【三三】遠。寬本、違に作る、今三本に依る。

に因るが故に、則ち觸を生じ、觸に因つて樂を生じ、樂に因つて苦を生じ、苦の因緣の故に、生死の苦惱、是に從つて生ずるなり。憍陳如、四毒蛇の如きは、四の因緣を以て、能く衆生を毒す、所謂・見毒・嚙毒・嚙毒・觸毒なり。是の如く、一切の欲を念ずる衆生も、亦復是の如く、見の因緣有り、聞の因緣有り、念の因緣有り、觸の因緣有り、是の四緣を以て、諸の衆生をして、一切諸善の根本を遠離し、生死の中に於て、大苦惱を受けしむるなり』と。

佛、憍陳如に告げたまはく『云何が觸欲の解脫とは爲すとならば、若し彼の行者、是の如き念を作さん「何の方便を以てか、觸欲を離るるを得る」と。復是の念を作さん「若し我れ能く、骨瑣[三一]を觀ぜんに、貪欲を遠離せん」と。是を則ち名けて、最勝の方便とは爲す。是の思惟を作さん「色は即ち是れ四大の所造、四大の所造は即ち是れ無常にして、性牢固なること無し。破壞離散するもの、皮肉、髮爪[三二]、膿血筋骨なり。智者は終に、是の身の中に於て、淨好の相を生ぜず」と。是の觀を作し已らんに、若しは晝、若しは夜、悉く一切十方の、淸淨にして猶し珂貝の如くなるを見、是の事を見已つて、即時に一切世間の、樂むべからざる想を獲得せん。是の如く、行者復是の念を作さん「我が此の生死は、煩惱鼓の作すところ、我れ此の想に於て、若し樂うて修せば、則ち能く一切の煩惱・生老病死を斷除せん」と。是の如く行者、一切の骨に於て正しく覺觀し已り、一心正念にして、不失不動なる、此を奢摩他と名く。是の如く、次第に正しく頭骨乃至足骨を觀じ、一心正念、不失不動なる、此を毘婆舍那とは名く。

『復是の念を作さん「何の方便以てか、生死を破するを得る」と。是の思惟を作さん「口鼻和合の入出の風を觀ずる方便の故に、生死の鼓を破せん」と。是の如く、行者自ら身骨は、猶し碎末の、風の爲に吹かるるが如しと觀じ、自身の中に於て、骨想皆盡き、身の相を見ず。是の如く觀ずる時、身相を遠離して、空相を生じ、內の法を見ざる、此を則ち名けて、第一空門とは爲す。『復次に行者

【三一】骨瑣觀(asthi samjñā)。屍の血肉已に盡きて、白骨のみ、狼藉たるを觀ずるなり。

【三二】爪、麗本抓に作る。今三本に從ふ。

て、樂想を生ぜず、無相三摩提解脱門を得、無所有處三昧を得、燮頭を得て結を滅し、若し聞く有らん者は、能く煩惱を薄くし、七返常に人・天の身を受け、人天の中に於て、能く聖道を得、貪欲の爲に染汚せられず、諸天・世人に、常に恭敬せらる』と。

佛の憍陳如に告げたまはく『諦に聽き諦に聽け、精勤して心を用ひ、疲懈を生ずる莫かれ。汝所聞の此の日眼蓮華陀羅尼は、是れ一切聲聞・辟支佛の心行の境界にはあらず。何を以ての故にとならば、此の陀羅尼は、乃ち[三〇]是れ清淨なる十八不共佛法の力より生ずればなり。憍陳如、若し我れ今、百千萬劫のあひだ、此の日眼蓮華陀羅尼を說くも、終に盡すべからず、亦聞く者――一切の天・人――をして、心に迷悶を生ぜしめん。此の陀羅尼は、唯佛のみ能く說き唯佛のみ能く聽きたまふ。何を以ての故にとならば、此の陀羅尼は、無量の義有りて、知り難く覺り難ければなり。日眼蓮華陀羅尼の如く、自餘の三方の、※無盡根陀羅尼と智依止陀羅尼と惡唖眠衆生陀羅尼とも、亦復是の如くなり』と。

憍陳如の佛に白して言さく『世尊、唯願はくは、彼の南方山王如來香象菩薩の所遣たる、容順陀羅尼を說きたまはんを』と。佛の言はく『是の如く是の如し、至心に諦に聽け、當に汝の爲に說くべし。憍陳如、若し衆生有り、觸欲の因緣もて、惛醉迷亂せんに、解脫醒覺の處を知らず、生死に流轉し、無量劫に於て、三惡道に在り、諸苦惱の、堪忍すべからざるをば受けん。菩薩摩訶薩は、大慈悲心もて、諸衆生の、是の如き等の無量の苦惱を受くるを見、大精進を起して諸道を修行し、道を修行し已つて、阿耨多羅三藐三菩提を得、阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、苦を出づるの道を說くなり。若し衆生有り、能く至心に聽き、如說に順行せば、即ち苦を脫するを得、須陀洹果乃至阿羅漢果を得ん』と。

佛、阿若憍陳如に告げたまはく『云何が觸欲なるとならば、若し衆生有つて、欲事に和合し、和合

【三〇】是。麗本至に作る、今三本に依る。
※無盡根陀羅尼（四〇頁及び六七頁參照）。
智慧依止陀羅尼（四八頁及び七〇頁參照）。
惡唖能衆生陀羅尼（六〇及び七三頁參照）。

の如き一切の諸見を斷じ、能く一切の五陰・十二入・十八界等を知り、能く受くる者をして、涅槃の樂を得しめ、能く衆魔を壞し、惡龍を調伏し、能く一切の諸天及び諸の夜叉をして、皆歡喜を得しめ、能く阿修羅及び迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽を怖れしめ、能く一切の惡邪外道を壞し、能く一切の刹利・婆羅門・毘舍・首陀羅を悦ばしめ、能く一切多貪の婦女をして、少欲を念ぜしめ、能く多聞の人をして、心に歡喜を生ぜしめ、能く坐禪の人をして、阿蘭若を樂はしめ、能く一切の諸惡重病を療し、能く一切の鬪諍・飢饉・疾疫・凶衰及び諸の横死を卻け、能く外賊・惡風雨・惡水・瀑河、非時の寒熱、種種の苦辛、鹹澁惡味を除き、能く法母を光らし、法幢を建立し、三寶の種を紹いで斷絕せざらしめ、又能く生死流轉の恐怖の衆生を安慰し、其をして快樂せしめ、能く盡智を生じ、無生智を證せしめ、能く無明を裂き、諸の闇聚を破り、能く苦擔を捨して、涅槃に入らしむ』と。

佛此の四諦順陀羅尼忍を說きたまへる時、無量無邊・阿僧祇の衆生、諸の天及び人には、塵を遠け垢を離れ、諸法の中に於て、法眼淨を得、九十六億那由他の衆生は、諸の煩惱を捨して、心に解脫を得、八十億百千那由他の衆生は、此の四諦順陀羅尼を得、無量無數阿僧祇の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、亦復不退轉の道を得、四萬二千の衆生は無生法忍を得、一切の天・龍・夜叉・羅刹・阿修羅・迦樓羅・乾闥婆・緊陀羅・摩睺羅伽、薜荔多・鳩槃茶・毘舍遮・人非人等、皆悉く讚へて言はく『善い哉、善い哉、無上世尊、言音微妙にして思議すべからず、最勝にして量りがたく稱說すべからず、慧眼無き者も、爲に智光を出し、苦擔の衆生は、能く爲に除卻し、流轉の海に於て、大船筏と作る。是の如き、善巧・無礙智の說をば、誰か聞く有らん者、樂うて阿耨多羅三藐三菩提心を發さざらん』と。[二七]

[二八]爾の時、長老阿若憍陳如、佛に白して言さく『世尊、云何が名けて、[二九]日眼蓮華陀羅尼とは爲す。日行藏菩薩摩訶薩の宣說する如く、智者にして受持・讀誦・書寫すれば、大利益を得、三界の獄に於

【二七】「密分」分別說欲品第四の一終る、卷第三十二。
【二八】同上、第四の二。卷第三十三。
【二九】日眼蓮華陀羅尼、同に日眼の字無し。

れ前の時、空處を遠離し、空處を離れ已つて、亦識處を離れたるが如く、識處を離れ已つて、無想處を修せん」と。是の人、爾の時、無想を得已り、一法をも縁ぜず、即ち無想三摩跋提に住するを得ん、此を則ち名けて、共凡夫人三摩跋提と爲す。

若し識處は即ち是れ瘡・痍[二四]・苦惱の法にして、病の如く、癰の如しと觀じ、「我れ識[二五]想を觀ずることを遠離したるが如く、次に無想を觀ぜん。無想と言ふは、即ち是れ我無く、我・我所の想無く、清淨の大般涅槃を觀念するなり」と。是の觀を作す時、即ち須陀洹果、斯陀含果、阿那含果を得、乃至阿羅漢果を得る、此を則ち名けて、不共凡夫四諦順陀羅尼の第七解脱門と爲す。

『復次に行者、若し能く無想處は、即ち是れ細想なるを觀ずる有りて、「我れ是の無想處を遠離したるが如く、非有想非無想を觀ずること、亦復是の如くならん」と。此を則ち名けて、共凡夫人如實陀羅尼と爲す。若し非想非非想處は、即ち是れ大苦なり、是の處は斷ずべく、解脱するを得べしと觀ぜんに、是の觀を作す時、彼の人即ち須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得、乃至阿羅漢果を得る、此を則ち名けて、不共凡夫四諦順陀羅尼の第八解脱門と爲す。

『憍陳如、此の陀羅尼は、是の如き等の、不可思議の種種の利益有り、又能く一切の貪欲、一切の色貪、一切の非色の貪を除斷し、凡夫位を離れて、聖人の法を得しめ、永く一切三惡道の因を斷ち、當來世に於て、更に地獄・畜生及び餓鬼を受けず、是を四諦順陀羅尼と名く。汝今當に知るべし、此は則ち彼の瞻波迦華色如來の所遣、日行藏菩薩の齎持する所の欲なり。我れ今此に在つて大集經を說く、是の故に彼の佛、此の欲を送り來る。此の陀羅尼は、能く一切の諸結・煩惱を斷ち、又能く永く一切の結恨、諸の增上慢及び我慢等、一切の嫉妬を盡し、能く世間の一切の家業、一切の戲笑を却け、能く一切の我見、一切の疑見、及び[二六]婆羅多觸を斷じ、能く一切の常見・斷見・壽命見・逋沙見・富伽羅見・作見・知見、一切の色見、乃至觸見、一切の生見、一切の四大見を斷じ、能く是

【二四】痍、傷なり。
【二五】想、麗本は相に作る。今三本に依る。
【二六】婆羅多。

『復次に行者、若し我の清淨不濁なるを觀ずれば、即ち是れ空處、空は即ち我心なり。若し能く永く一切の煩惱を斷ずれば、即ち是れ淨心なり。若し能く八直の正道を修習すれば、是を淨心と名く。是の如き學を作せば、即ち能く須陀洹果を獲得し、乃至阿羅漢果を證得せん。此を則ち名けて、不共凡夫四諦順陀羅尼の第四解脫門と爲す。

『復次に行者、若し色相は即ち分別の相、分別の相は即ち是れ瞋の相、瞋恚の相は即ち生死の相なるを觀ぜんと欲する有りて「我れ今生死の相を斷ぜんが爲の故に、心相の空なるを觀ず」とする、此を則ち名けて、共凡夫人の四諦順陀羅尼と爲す。行者若し我を觀ずるに、即ち是れ寂靜、我れ今亦、未だ覺觀を斷ぜず。若し我及び我我所を觀ずるに、虛空を觀ずる如し。我・我所は即ち是れ苦なり、苦の從生する所を、即ち名けて集と爲す。是の如き苦・集は是れ斷ずべきの法なりとする、是を名けて滅と爲し、苦・集・滅を觀ずる、是を名けて道と爲し、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得、乃至阿羅漢果を獲得する、此を則ち名けて、不共凡夫四諦順陀羅尼の第五解脫門と爲す。

『復次に行者、是の如き念をす「何を以ての故に、我れ今已に、此の虛空の相を觀じたる。夫れ虛空は、即ち是れ我、我は虛空を遠離したる觀者のごとし」と。次に識處を觀ずるに、虛空の觀の如く、識の觀も亦爾り、虛空處の無量無邊なるが如く、識も亦是の如く、無量無邊なりとする、此を則ち名けて、共凡夫人四諦順陀羅尼と爲す。

『行者若し識を念ずれば、名けて想と爲し、亦覺觀と名く。識は即ち是れ苦、苦の所從を知る、之を名けて集と爲す、苦集は斷ずべしとする、是を名けて滅と爲し、苦集滅を觀ずる、是を名けて道と爲し、須陀洹果・斯陀含・阿那含・阿羅漢果を得る、此を則ち名けて、不共凡夫四諦順陀羅尼の第六解脫門と爲す。

『復次に行者、若しは即ち是れ覺觀にして、刺の身に入れるが如く、癰の如く病の如しと觀じ、「我

佛憍陳如に告げたまはく『云何が名けて、共凡夫人四諦順陀羅尼とは爲すとならば、若し人有り、能く是の如きの念を作さん「我れ覺觀に隨つて、是の如き色を觀じ、是の如き我を觀ず、我が心は卽ち色、色は卽ち我が心なり。若し我れ一切の色相を遠離せば、虛空の相を觀ぜん」と。是の人、爾の時、虛空の相を修して、卽ち無量の空處三昧に入らん。此を則ち名けて、共凡夫四諦順陀羅尼の義とは爲す。

『若し人有り、能く是の如き念を作さん「色は卽ち是れ空なり、我れ此の色の因緣、空なるを以ての故に、虛空を見ることを得。何者の境界か、是れ虛空の相なる。虛空の性は、無障礙に名け、是れ風の住處なり。是の如く風は是れ四大、我が色も亦爾なり、是れ四大の攝なり。中の二法は、差別有ること無し。心も亦是の如く、猶し虛空の如し」と。復是の念を作さん「此の四大は、何を以て體と爲す。一切の諸法は、性自ら空寂なり、自他等の性も、亦皆空寂なり。夫れ虛空は卽ち無所有なり、不生不滅にして、處無く家無し」と。是の觀を作す時、念を諸佛に係けんに、既に念を係け已るや、虛空中に、無量の佛有るを見、一心に念じ已つて、阿那含果を得る、此を則ち名けて、不共凡夫四諦順陀羅尼の第二解脫門とは爲す。

『復次に行者、是の如き念を作さん「何者の境界か、是れ虛空の相なる、復何の因緣もて名けて、我相とは爲す」と。行者自ら念ずらく「虛空と言ふは、卽ち是れ我なり、卽ち是れ淨我、卽ち是れ我心なり。我は色無く、虛空の無邊なるが如し。我も亦是の如くなり」と。此を則ち名けて、共凡夫人如實陀羅尼と爲す。若し能く一切法の、空にして我と我所と無きを觀ずる有つて、「空處は卽ち是れ無我、色も亦無我なり。若しは、如來を觀ずるは卽ち是れ我なり。我れ佛を見已り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得、乃至一切有漏の法盡きて、阿羅漢果を得」と言はば、此を則ち名けて、不共凡夫四諦順陀羅尼の第三解脫門と名く。

ん。復是の念を作せ「是等の諸佛は、從來する所無く、去るに所至無し、唯我が心の作なり。三界の中に於て、是の身の因緣は、唯是れ心の作なり、我れ覺觀に隨ひ、多を欲すれば多を見、少を欲すれば、少を見る。諸佛如來、卽ち是れ我が心なり、何を以ての故にとならば、心に隨つて見るが故なり。心は卽ち我が身なり、卽ち是れ虛空なり。我れ覺觀に因つて、無量の佛を見る、我れ覺心を以て、佛を見 佛を知る、心は心を見ず、心は心を知らず、我れ法界を觀ずるに、性として牢固なる無く、一切の諸法は、皆覺觀の因緣より生ず。是の故に、法性は卽ち是れ虛空、虛空の性は、亦復是れ空なり。我れ是の心に因つて、種種の色――青黃赤白――と、一切の雜色、及び虛空とを見、種種に示現して、神變を作し已り、見る所風の如くにして、眞實有ること無く、但妄想の心は、色に依止す」と。是を則ち名けて、共凡夫人順四諦陀羅尼と名く』と。

佛憍陳如に言はく『何者をか名けて、不共凡夫四諦順陀羅尼とか爲すとならば、若し人有り、能く是の如きの念を作さん「此の虛空は捉持すべからず、覺觀有ること無く、宣說すべからず。心も亦是の如く、猶し虛空の如く、捉持すべからず、宣說すべからず。是の如き二種は、皆悉く虛妄・憂愁・惱亂にして、猶し火燒・虛誑・鬪諍の如くなり。我れ今是の空色等、一切の諸念・亂想・覺觀を捨離せん」と。是の如く虛空色等、虛妄の覺觀、一切の心を捨し已るに、心復生ぜず、諸の念を離るゝが故に、心に寂滅を得、寂滅を得るが故に、更に復生ぜず。何を以ての故にとならば、心の緣滅するが故に、是の心便ち滅し、身心釋悅して、悉く皆捨離し、捨離を以ての故に、身に安隱を得、覺觀を捨するが故に、口に言語を離れ、心一緣に安じて滅定を修習せん。是の人、爾の時一日一夜、是の如き寂滅三昧に入るに、意の如く自在に無量億百千萬歲を經、是の三昧に於て、堪忍不散ならん。滅定より起つて、有漏法及び其の壽命を捨し、涅槃に入る。是を無漏の不共凡夫四諦順陀羅尼の第一解脫門とは名くるなり』と。

皆青色及び頗梨色と見て、馳散せざらしめよ。是の觀を作し已らば、次に水想を作し、亦青色及び頗梨等の一切の諸色を見、皆水なりと見て、更に餘の想無かれ。唯大地は四指許の如しと見、餘は皆水と爲せ。彼の人、是の四指の地を見已るに、便ち增減無く、復其の念を作さん「我れ今當に、足指を以て、此の大地を動かし、動轉せしむること、隨意久近ならしめん」と。若し少分動かしめんと欲すれば、卽ち所念に隨はん。是の如く動かし已り、乃至能く諸山・大地・大海・江河をして、一切動くに隨つて大音聲を出さしめ、其の聲遠く徹して、餘方に聞えん。

『復諸の水に種種の色有るを觀ぜんに、或は優鉢羅華・拘物頭華・鉢頭摩華・分陀利華など、是の如き種種の一切の諸華、皆念に隨つて見ん。復虛空を觀じて、皆地の想を作し、其の地上に、行住坐臥、俯仰屈伸せよ。復一切の土石・諸山など、種種の色を作し、事形細軟なること、兜羅綿の如く、其の山上に、迴轉去來・經行・宴坐すと觀ぜよ。

彼の人、爾の時、是の如き等の諸の外觀を作し已り、悉く皆放捨して、還更に攝念せん。

『復自ら身を觀じて、輕微の想を作し、更に增修習して、其をして成就し、兜羅綿の如く、風に隨つて飄散せしめ、是の觀を作し已つて虛空中に、行住坐臥せん。是の人復、火光三昧に入り、身に種種妙色の光明——青黃赤白及び頗梨色——を現じ、又復炎摩迦定に入り、身の上下より、互に水火を出し、乃至地中に、出沒することを觀じ、鳥の如く空に處るも、諸の障礙無く、日月の威力のごとく、大光明有り、能く手を以て摩し、怖畏を生せず、又復身上に、梵天に到らん。是の如き等を作し、神變を現じ已り、復所樂に隨つて、是の如きの念を作せ「其の身內に於て、或は青・或は黃・或は赤・或は白、或は復紫及び頗梨を見ん」と。復是の念——我れ當に云何がして、諸佛を見るを得ん——を作さんに、其の方所に隨ひ、悉く皆覩見せん。彼の人、爾の時、若し小を見んと欲すれば、念に隨つて卽ち見、若し大を見んと欲すれば、復念に隨つて見、乃至虛空に充塞遍滿せ

住するやを熟察すべし。知り已らば、即ち常を觀じて不捨を念ぜん。一切の外色、敗壞すること斯のごとし、自ら我が身を換ること、亦應に定の如くなるべし。青瘀・臭處・膖脹より始め、終白骨の支離消散するに至り、心常に專念し、他をして緣ぜしむる勿れ。若しは住、若しは行、若しは坐、若しは臥に、觀行を勤ーし、滑利流通し、晝夜相續して、馳散せしめず、閉目開目するも、恒に分明ならしめ。少より多に至り、內外洞徹せよ。是の如く展轉して、乃ち山河・草木・叢林・人畜等の物に至るまで、皆骨相を作すこと、亦復是の如くし、四威儀に於て、常に自身の骨具等の事を見、未だ曾て捨離せざれ。是の如くして心住すれば、不動なること山の如く、一緣の中に於て、常に定で亂無く、不淨の念等、悉く具足して滿ちん。彼の人、爾の時、此の身中に於て、是の觀を作し已るに、乃至命終まで、染心を起さず、現在時に於て、能く貪欲を離るゝも、他世には未だ能はず。是の人若し願虛空陀羅尼を得なば、即ち能く骨を觀じて、離散の相を作さん。是の如く念じ已るに、四方に俱時に皆風をして起り、此の骨身を吹かしめ、皆悉く磨散して、微塵の如くならしめん。是の如く自身の風の因緣の故に、皆塵と作し已り、一切の諸色・一切の大地も、亦各風の因緣力を以ての故に、散ずること微塵の如くならん。是の如く作し已れば、身及び萬物は、悉く皆風に隨ひ、塵飛消散して、都て見る所無きこと、猶し虛空の如く、諸の言說を離れん。是の如く觀じ已れば、虛空の相を得、一切の物を見るに、青琉璃の如くならん。數數修習して、是の如き等の念を馳散せざらしめよ。

『是の如く觀じ已らば、復虛空を觀じて、黃色を作し、心に係けて憶想し、亦成就せしめて、分散の意無からしめよ。是の如く觀じ已らば、復赤色の想を觀じ、赤色を念ぜよ、赤色を觀じ已らば、復白色の想を作し、白色を念ぜよ。白色を觀じ已らば、復紫色を觀じ、紫色成じ已らば、頗梨色を觀ぜよ。虛空の中に於て、是の如き念を作し、是の如く、萬法の色、及び地等の一切の諸物をも、

の故にとならば、自心に佛を作し、自心に見るが故なり、心は即ち我が身にあり、身は即ち虚空なり。我れ覺觀に因るが故に、無量無邊の諸佛を見る、我れ覺心を以て、佛を見・佛を知る。[一一]心は心もて知るべきに非ず、心は心もて見るべきに非ず。心相を見る者は、則ち斷ずべからず。我れ法界の性は、牢實無きを觀ず、念に隨つて生ずるが故に」と。是の故に一切の有らゆる性相、及び心の覺觀は、即ち是れ虚空なり、虚空の性も、亦復有に非ず。若し能く是の如く、彼の空を見なば、已に過去に於て、菩提心を發したらん。彼の人、三昧を修習せるの因緣もて、即ち諸佛現に其の前に住するを得ん。是の人、若し聲聞を求むるの心を發したらんに、即ち一切の無相三昧を得、既に修習し已らば、復無著清淨の智心を得、無明を遠離し、亦復隨順空忍を獲得し、久しからずして四果の證を得ん。彼の人若し空は即ち是れ空なるを見なば、爾の時、即ち身心の寂靜を得、寂靜を得已らば、是を則ち名けて空解脫門と爲す。是の門に入り已り、阿羅漢果を取るを得んと欲すれば、則ち難からずと爲し・是を第五の修習空寂・滅諸攀緣・斷煩惱道の眞實法門とは名く』と。

爾の時世尊、此の法を說き已りたまふに、彼の大衆中に、九十九百萬億の諸天及び人有つて、[一二]奢摩他順忍を得、八萬四千人は空順忍を得、是の如き六萬の天・人は、空[一三]三摩提解脫の法門を得、二萬の衆生は、[一四]皆諸佛現在三昧を得、無量の衆生は、須陀洹果を得、八十四百千の比丘は[一五]無漏道を得たりき。

爾の時佛、憍陳如に告げたまはく『若し復人有り、自ら頭骨を觀じ、心若し停らず、及び樂まざれば、是れ未だ調伏せられざるなり。既に未調伏なれば、亦復解脫を得る能はず。彼の人、爾の時、應當に更に屍陀林所に詣り、死人を觀察すべし。或は[一六]青瘀・[一七]膖脹・[一八]血塗を見、或は[一九]膿流れて處處[二〇]淹漬し、皮肉爛潰して、筋脈相交はり、禽獸往來し、爭つて共に[二一]啖食するを見、或は白骨の、其の色珂の如く、[二二]髏頷差移し、手足分[二三]散するを見、是の相を見已り、當に心の何處に樂

【一一】心云云。本文に、非心心知、非心心見とあり。日密分相當文に、心不見心、心不知心とす。
【一二】奢摩他順忍。日密分に修定忍とす。
【一三】空三摩提云云。同に空三昧解脫門とす。
【一四】諸佛現在三昧。同に現見諸佛三昧とす。
【一五】無漏道。同に阿羅漢とす。
【一六】青瘀(Vinilaka)。風に吹かれ日に曝されて、死屍の色變ずるをいふ。
【一七】膖脹(Vyādhmātaka)。死屍の膨脹するをいふ。
【一八】血塗(Vilohitaka)。屍破壞して、血肉地に塗るをいふ。
【一九】膿爛(ViPūyaka)。
【二〇】淹漬。ひたすなり。
【二一】啖食(Vikhāditaka)。啖はするなり。
【二二】髏、髑髏なり。
【二三】分散(Vikṣiptaka)。

骨を觀じ、骨は末の如くにして、風の爲に吹かると見、是の事を見已つて、能く深く色の實性を觀察せんに、是の人は、爾の時、一切の色は、悉く皆空寂なるを見、乃至一切の諸相を見ず、唯虚空を見、但だ虚空を念ぜん。彼の虚空に於て、數數修習し、十方の色は、一切皆空にして、淨琉璃の如くなるを見、中に於て復、無量の諸佛を見、乃至十方も亦復是の如くならん。佛身を見已り、又如來の三十二相・八十種好を見、乃至十方に悉く、諸佛の、色身具足して、光照圓圍、尼倶陀樹の如くなるを見ん。彼の人、過去に、若し曾て涅槃の道を習學して、善根有らば、即ち是の念を作さん「我れ當に佛に問ひまつるべし、是の如き虚空は、誰の所造なる。久近に當に滅すべきや」と。是の念を作し已り、即便ち佛に問はん。爾の時如來、即ち爲に宣說せん「夫れ虚空は、但だ名字有るのみにして、作者有ること無し、當に何の所滅たるべき。虚空と言ふは、覺觀有ること無く、物無く數無く、相貌有ること無く、出無く滅無し。一切の法相も亦不可得なり。能想・所想も亦皆是れ無し」と。是を了知し已り、諸想の縛に於て、悉く皆解脫し、即便ち阿那含果を獲得し、能く一切貪欲の心を斷ぜん。唯有色の愛と無色の愛との結、及び掉と慢と諸の無明と在り。

『彼の人、爾の時、佛身を見已り、是の如き念を作す「我れ今當に如來の身相・長短・廣狹を知るべし」と。是の念を作し已り、所在の處・十方の空中に、悉く如來有るを見ん。彼の人、爾の時、少を觀ずるを得んと欲すれば、即便ち少を見、多を觀ぜんと欲すれば、意に隨つて多を見、無量無邊も亦復是の如くなり。

『復次に彼の人、更に是の念を作さん「是の如き諸佛は、何より來れる」と、復是の念を作さん「是の如き如來は、從來する所無く、去るに所至無し」と。彼の人、爾の時、諸佛の去來有るを見ずして、又是の念を作さん「三界に身心を受くるは、但だ虚假なり、是の因緣を以て、我れ覺觀に隨ひ、多を欲すれば多を見、少を欲すれば少を見る。諸佛如來は、即ち是れ我が心なり。何を以て

【一〇】尼倶陀（Nyagrodha）。無節又は縱廣樹と譯す。此の樹、端直にして節無く、圓滿にして愛すべしといふ。

※掉心をして高擧せしめ、安靜せしめざる煩惱。對本なり。

ず。是の如く念じ已つて、數數思惟し、心常に信念して妄失せざれば、此を心順行道、初斷欲の法門と名く。

『是の人復、彼の骨を念ずる中、心の三摩跋帝を、眉間の棗許の如き處に住せしめ、是の如く念じ已つて、數數思惟し、心住して失はざらしめんに、彼の人、爾の時、心に寂靜を得、氣息出でず入らず、惡相を見ず、惡事を見ず、樂はず念ぜず、乃至一法をも緣ぜざる、是を則ち名けて奢摩他と爲し、心寂靜と名け、此を煩惱順行道、第二斷欲の法門と名く。

『云何が身の寂靜なるとならば、是の人、是の如く念ずるが故に、身中出入の息をして定まつて、不入不出ならしむ。彼の智慧の人、波囉婆佛陀にして、身心寂滅なるを樂う。是の如く念ずるが故に、心速に奢摩他に順ず、此を第三の寂滅攀緣斷煩惱道の法門と名く。

『是の人、復頭骨頂中の一小棗の如き處を念じ、是の如く、數數念じ已つて、彼の中の空なるを見、是の如く、數數空を念じて、彼の頂骨をば一沙塵の如しと見、是の如く第二第三にも、骨末を見る。此の法に依れば、一切の頭骨は、皆塵末の如くなるを用て、彼の骨末の、風の爲に吹かるゝを見る。是の如く、一切の身骨、皆悉く末の如く、風の爲に吹かるゝを見る。是の如く身骨を見ず、乃至虛空を見れば、彼の中の身心は、波囉婆三跋帝なり、是を第四の順奢摩他寂滅攀緣・斷煩惱道の法門とは名くるなり』と。

爾の時、長老阿若憍陳如、佛に白して言さく『世尊、虛空の想は、是れ有爲の相なるや不や』と。佛の言はく『是の如し、善男子、虛空の如は、是れ有爲の相たり』と。時に憍陳如、復佛に白して言さく『若し虛空の相は是れ有爲ならば、是れ自相と爲すや、他相と爲すや』と。佛の言はく『憍陳如、若し能く一切の法界及び有爲界を觀察する、是を自相と名く。何を以ての故にとならば、若し能く色の寂靜を觀察すれば、當に知るべし、彼の人は、能く如來を見ん。所以は何ん。若し人、

せず、常に眞實を語つて、無義語に非ず、無惡語に非ず、慈悲の心もて語る。我れ今當に、諸欲の罪過を説くべし、汝等應當に一心に受持すべし、既に受持し已らば、三惡道に於て、速に解脱を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得べし』と。

爾の時、一切の娑婆世界の三千大千の一切の大衆と、諸の來衆等、同聲に發言すらく『唯願はくは如來、欲の過を宣説したまはんと。我等聞き已り、佛所説の如く、至心に受持せん』と。

佛の言はく『憍陳如、諦に聽き諦に聽け。四種の因縁より、衆生は欲を生ず。何者か四と爲すとならば、色の貪、長短赤白等の貪、觸の貪、樂の貪、歌舞・種種の莊嚴・瓔珞・服飾を樂ふの貪なり。何者か色の貪なるとならば、色とは[九]四大の和合に名くるも、生滅不住にして、我無く衆生無きなり。是の如く四大には我無く衆生無きも、一切の凡夫は、無明の顛倒もて横に色中に於て、覺觀を生じ、此は是れ男、此は是れ女、此は好く此は惡し、此は樂ふべく、此は樂ふべからずと。欲の火、心に入れば、猶し鬼の著し、男の女身を見て相に執し、長短黑白に取著するが如くなり。是の因縁を以て、未生の欲をば、能く生ぜしめ、已生の欲をば、能く增長せしむ。是の人是の如く、欲を念ずること轉多くして、常に捨離せざれば、一切の善根は、悉く皆滅少し、復諸の善知識を愛樂せず、能善く身・口・意の業を護らず、一切の罪と共に和合し、一切の諸欲の過患を見ず。見ざるを以ての故に、命終しては、即ち三惡道の中に入り、或は地獄に在り、或は畜生に在り、或は餓鬼に在り、彼の惡道に於て、無量世中に、諸の大苦を受くる、皆貪欲に由るなり。貪欲の因縁により、欲をして增長せしむ。

『諸の智有る者は、女色を觀察しては、不淨の想を念じ、女身所有の髮毛・皮肉・筋血を念ぜず、但だ白骨を念じて、專心に捨せざるなり。女人の身の如く、男子の身も亦是の如く、近身を見るが如く、遠身も亦是の如く、他身の如く自身も亦是の如く　但だ白骨を念じて、髮毛・皮肉　筋血を念ぜ

【九】四大。地水火風の四をいふ。この四は一切の色法に遍通すれば大と名くと。

「是の人、是の如く、欲の過患を知り、欲事の中に於て、大怖畏を生じ、身大に戰動し、法を愛し、法を樂ひ、法の欲を學し、鬚髮を剃除し、身に法服を被、正法を求め、法の自在を求め、正法の中に於て、清淨の心を生じ、法の道中に於て、法の救濟を行ぜん。是の如く樂はば、彼の人臨終に正念を獲得せん。法を念ずるを以つての故に、法の氣味を樂ふが故に、法の果報を樂ふが故に、十方の佛、大衆の中に在つて、法要を宣說し、衆生を教化するを見、旣に法を聞き已つて、歡喜心を得、心に歡喜する故に、數數諸佛の色身を見るを得ん。是の人死し已つて、三惡道を離れ、有佛の刹に生れ、常に善人と遊止し、共に倶に能く、布施・忍辱・精進を行じ、禪定を樂ひ、五通を修習して、涅槃の道を樂ひ、大慈悲心もて衆生を教化し、能く諸佛の瓔珞莊嚴功德の身を得、過去の有らゆる煩惱及び習をば、悉く皆盡滅せん。彼の諸衆生、是の如き莊嚴の身心を得ては、譬へば、香篋に種種の衣を盛るに、衣服皆香しく、而も彼の香華、*稱兩を失せず、其の色を損せざるが如く、是の如く憍陳如、若し衆生有り、樂法の因緣もて、命終の時に臨み、諸佛を見るを得、佛を見る緣に因つて、歡喜心を得、心歡喜するが故に、有佛の刹に生れ、善衆生と共に、其の事業を同じくし、亦復是の如くして、自ら善根を增し、種種瓔珞莊嚴の身心を得て、久しからずして、阿耨多羅三藐三菩提の覺を得、而も彼の善は滅せざらん。是の故に憍陳如、若し善男子・善女人有らんに、自らの利益を見、他の利益を見、彼此の利益を見ては、常に應に善友に親近し、善友の法を學し、常に善友の、欲法・種種の過患を呵責するを聞くべし。是の如く聞き已り、乃至阿耨多羅三藐三菩提の道を得ん。

「憍陳如、言ふ所の善友とは、謂はく諸佛・菩薩・辟支佛・阿羅漢なり。又善友とは、即ち我が身是なり。何を以つての故にとならば、我れ今出世して、衆生を憐愍し、一切の苦惱を斷除することを爲さんと欲して、能く諸欲の一切過患を說きつ。是の故に大衆、應に我が語を受くべし、我れ妄語

※稱兩、分量の謂、稱ははかるなり、兩は目方の一單位、

伽羅の生死を行くなり。云何が愛と名け、云何が富伽羅と名け、何の故にか如來は、此の二種、生死を行くとは說きたまふや』と。佛の憍陳如に告げたまはく『善い哉・善い哉、快く斯の問をば發したり。憍陳如、汝は一切衆生を憐愍するが爲の故に、是を作し、一切衆生に樂を與へんと欲するが故に、是の如きの問を作せり。是の如き問は、是れ時を知るの問なり。憍陳如、至心に諦に聽け、我れ今當に說くべし』と。憍陳如の言はく『是の如く是の如し、佛所說の如く、我れ當に受持すべし』と。

爾の時世尊、憍陳如に告げたまはく『愛に三種有り、所謂欲愛・色愛・無色愛なり。復三種有り、所謂有の愛と[四]離有の愛と法の愛となり。憍陳如、何者か欲愛なる。欲とは放逸に名け、放逸の因緣は則ち貪の觸を生じ、觸の因緣を以て、則ち樂の想を生ず。是の如き等の法には、衆生樂著す。欲心發動すれば、火の所燒の如し。欲の因緣の故に、樂うて十惡を造り、十善を捨離す。是の因緣を以て、地獄・畜生・餓鬼に墮し、貧窮・夜叉の中に生れる。欲の因緣の故に、生死の中に於て、五陰の身を受けて、種種の苦を具し、是の苦を受くと雖も、怖畏を生ぜず、心に慚愧無く、修善を樂はず、流轉の中に於て、人身を得難く、設ひ人身を得るも、欲の因緣を以て、身・口不淨にして、無量の諸重惡業乃至五無間の業を造作し、是の因緣を以て、復生死に於て、三惡道の中に、大重苦を受けん。一切の受苦は皆欲心に因る。欲集の因緣は、猶し糞猪の、繫縛せらるる如く、三惡道に趣いて、諸の苦惱を受く。是の故に如來は、貪欲を斷ぜんが爲めに、正法を宣說して、欲法を呵責す。若し衆生有つて、是の如く欲を呵責するを聞くを得已らば、能く如實に諸欲の不淨なるを觀ぜんこと、毒生果の如く、大火聚の如く、坑に滿てる毒藥の如く、甁に滿てる糞の如く、利刀の如く、賊の如く、[五]旃陀羅[六]加絺那の如く、熱鐵丸の如く、大雹雨の如く、惡[七]毘嵐婆風の如く、惡毒蛇の如く、惡野澤の如く、羅刹洲の如く、跋陀伽都の如く、種種の糞掃の聚の如く、[八]尸陀林の如し』と。

【四】離有の愛。有（生死の果報）を離れんとする愛なり。日密分には斷愛とす。

【五】旃陀羅(Caṇḍāla)。印度に於ける最下卑の種族にして、漁獵、守獄、屠殺などを業と爲す。他種姓の最も卑しむ所なり。

【六】加絺那(Khaṭika)。煮狗人、斷獄官など譯す。

【七】毘嵐婆（Vairambhaka)。迅猛風と譯す。この風至る所、悉く皆散壞すと云ふ。劫災の時、この風吹いて、世界を壞すと。

【八】尸陀林また尸多婆那(Śītavana)。尸多は寒と譯し、婆那は林と譯す。死尸を棄つる所をいふ。

巻の第三十八

日藏分[一]　定品第四

爾の時世尊、四の使菩薩及び其の眷屬の諸菩薩等に告げたまはく『善男子、汝若し樂うて此の娑婆世界に住せんとならば、各各意に隨つて、修學する所の、自の福德善根、三昧陀羅尼、三摩提、三摩跋提に入れ』と。時に四菩薩及び其の眷屬、即便各各意に隨つて定に入り、禪定に入り已つて、身より光明を出すに、菩薩の光、大炬火の如くなる有り、菩薩の光、乃至百千萬の日月の光の如くなる有り。

爾の時、大德憍陳如、佛の神力を承け、是の如きの念を作す『我れ今如來に一義を問ひまつらんと欲す。如來是に因つて、或は當に[二]是の如き四陀羅尼の、文字及び義を分別・廣說したまふべし。如來若し說きたまはば、此の娑婆世界の十方の衆、若し聞くを得ん者、疑網の心を壞し、一切の法に於て大光明を得、速に四果を得て、未だ須陀洹を得ざるもの、速かに須陀洹を得、未だ斯陀含を得ざるもの、斯陀含を得、未だ阿那含を得ざるもの、阿那含を得、未だ阿羅漢を得ざるもの、阿羅漢を得、三惡道を過ぎて人・天の身を得、一切悉く純善の法を得ん』と。是の念を作し已り、即ち座より起ち、合掌して佛に向ひ、默然として住したり。

爾の時佛、阿若憍陳如に告げたまはく『汝は將に我に義を問はんと欲せざるや』と。憍陳如、佛に白して言はく『是の如し世尊、我れ實に問ひまつらんと欲す、願はくは佛、聽許したまひて、我が意の如くに說きたまはんを』と。佛、憍陳如に告げたまはく『汝の意に隨つて問へ、我れ當に廣說して、汝の心をして喜ばしめ、一切の天・人、此の語を聞き已らば、皆歡喜を生ぜしむべし』と。

爾の時憍陳如、佛に白して言はく『世尊、佛經中に說きたまふ如くんば、二種有り、愛及び[三]富

【一】日密分。分別品第四(卷第三十二、六九三頁以下)參照。

【二】是。麗本は來に作るも今三本に依る。

【三】富伽羅(Pudgala)。士夫と譯す。

餘の業を行せず、此の陀羅尼の義を說かんに、一切の天人、能く知る者有ること無く、乃至十地の菩薩も亦知る能はず、唯諸佛を除く。此の陀羅尼は是の如く甚深にして、是の如くに大力あり、能く大利益を與へ、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を滿足し、又能く大慈大悲を滿足して、衆生を敎化す。是の故に目連、汝當に此の陀羅尼を受持讀誦し、大衆中に於て、廣く人の爲めに說くべし。若し此の陀羅尼を聞く者有らば、大利益を得、多瞋の衆生の、未來世に、應に惡を受くべき者も、皆悉く滅盡して、果報を受けず、能く生死の、諸過惡多きを知り、大善根を修し、大福德を取り、大善知識に親近して、供給供養し、是の故に速に不退の阿耨多羅三藐三菩提を得ん。目連、此の陀羅尼は、能く法燈を然じて、三寶の種を紹ぐなり」と。

大方等大集經卷第三十七

喜を生ぜん』と。

爾の時、虛空藏菩薩、卽ち一切の惡心の衆生は歡喜心を生じ・不信の衆生は悉く皆惛睡する陀羅尼を說かく

『怛絰他　浮呼鼻利呵　浮浮羅　㖿邏囉浮　一邏　婆呵　呵籌　伽籌　伽伽那叉　奢摩奢摩　蜜多囉蜜多羅　斫迦邏　跋帝帝隸　婆伽囉帝隸　豆利哆呬寐　呬利呼跋醯　那羅闍齋　夜婆那蜜低黎　綺底蜜低梨　婆利蜜低梨　始佉蜜低黎　摩都囉蜜低黎　佉伽蜜低黎　薩都闍蜜低黎　薩婆羯摩蜜低黎　摩那跋利哆蜜低黎　陀毗澡婆囉蜜低黎　莎和呵

此の持を說き已るに、一切の惡龍各所住に還り、悉く皆睡眠す。唯忍を得て不退轉の者を除く。乃至惡夜叉、惡阿修羅、惡迦樓羅、惡緊那羅、惡〔一七〕卑離多、惡毘舍闍、惡富單那、惡迦吒富單那など、彼の一切の衆、各所住に還り、皆悉く睡眠す、唯忍を得て不退轉の者を除く。若し復人有り、惡心麁獷にして慈悲有ること無く、彼此の懷恨をば常に捨離せず、當來に惡道に墮せんを怖れず、五無間を造り、正法を誹謗し、聖人を毀呰し、樂うて不善を行ぜんも、彼の惡衆生、此の呪を聞き已らば、悉く皆惛睡す。信心有る者は慈悲の心と不鬪諍の心とを得、不濁亂の心を得、法緣を念ずるの心を得、當來の世に三惡道に墮せんことを畏れ、三寶を恭敬するの心を得、念法の心・念寂滅の心を得。一切の衆生、此の陀羅尼を聞き已らば、卽ち是の如き等の心に住するを得るなり』と。

爾の時、虛空藏菩薩、佛に白して言はく『世尊、我れ此に來らんと欲するや、彼の華德藏佛、我を護らんが爲の故に、此の陀羅尼をば說きたまへり』と。

爾の時釋迦牟尼佛、長老目乾連に告げて言はく『汝此の陀羅尼を受持すべし。目連、如來・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の出世せんこと甚だ難く、此の陀羅尼を聞かんこと、亦復倍難し。所以は何となれば、此の陀羅尼は、限齊無き四梵行より生じたればなり。目乾連、如來は百千劫にも、

【一七】卑離多。薜荔多に同じ。

ざらしめ、能く坐禪の人をして阿蘭若を樂はしめ、能く一切の患難を除き、一切の闘諍・飢饉・疾疫を除き、能く内外の[一五]姦宄を除き、能く非時の寒・熱・風雨・暴水、苦辛・枯澁・悪觸等の事を除いて、能く法母を光顯し、佛法を建立し、三寶の種を紹いで斷絶せざらしめ、生死の中に於て大安慰を作し、能く盡智を生じ、能く無生智を證し、能く無明の暗聚、一切の苦擔を壞す。此を奢摩[一六]斐多悉致陀羅尼と名く』と。

爾の時、虚空藏菩薩、卽ち佛前に於て、奢摩斐多悉致那利大授記陀羅尼を說かく

『怛絰他　摩那叉　阿婆叉　羅伽婆叉　闍羅叉　末摩那叉　阿婆叉　曼陀叉　那荼叉　那荼囉休　鼻薩那吒　佉伽那吒　阿吒那吒　拘那吒　鉢利鳩薩那吒　那荼那利　富利迦那吒　欝怛羅那吒　迦毘那吒　軍闍那吒　蘇目伽那吒　遮婆茂囉那吒　佉伽凡鉗婆囉那吒　富沙迦囉那吒　系婆欝盧達囉那吒　三摩羅耶那吒　失囉鳩三　憍怛吒　怛羅　摩姤佉囉婆　提斎叉　婆帝囉竪　豆婆那摩羅竪　婆呵呵那否智　脩低囉闍婆　阿摩囉闍竪　摩呼囉伽闍羅　阿彌牟婆囉　阿彌拏叉　阿婆阿唎伽彌拏叉　嚏沙嚏婆都豆佉寫　涉波呵

此の呪を說き已り、佛に白して言はく『世尊、此の陀羅尼は、大勢力有り、大利益有れば、彼の德華藏佛、我をして送り來らしむるなり』と。爾の時釋迦牟尼佛、讃へて言はく『善い哉・善い哉』と。及び一切の大衆も皆讃へて『善い哉』と。坐禪の者のみ除く。

爾の時佛、虚空藏菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、我れ今此の坐を起たずして、廣く大衆の爲に、此の陀羅尼を說き、文句及び義を不增不減ならしめん。善男子、汝の彼より來るや、德華藏佛、汝を護　んが爲の故に、陀羅尼を說き、悪心の者をして歡喜の心を生ぜしめ、諸の不信の者、悉く皆惛睡せしめたり。此の陀羅尼は、德華藏佛の、久しく修せる所の四無量の行より生じたるなり。汝今當に一切衆生の爲に、此に宣說すべし。若し此の陀羅尼を聞く有らば、一切の悪人、皆歡

【一五】宄。よこしまなり。外にて盜をなすを姦、内にて盜するを宄といふと。
【一六】斐多。麗・宋本は斐籍多に作る、今元・明本に依る。

ば、是れ則ち能く三惡道を壞せん。　如來に一の香華を供養するも、無量の世に無上の果を受け、無量の世中、身具足し、亦無上の眞智慧を得ん。　若し能く一たび是の總持を聞かんも、即ち能く諸の煩惱を摧滅し、一切の人天に供養せられ、無生及び盡智を獲得せん。　德華藏佛は功德共したまふ、彼の佛、我をして來つて問訊せしむ』と。

〔三〕爾の時、虛空藏菩薩、釋迦牟尼佛に白して言はく『北方に此を去ること八十恒河沙世界なるに、彼に佛刹有つて、一切香上と名け、五濁を具足し、佛を德華藏如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、今現在に說法したまふ。彼の佛我をして欲を送り、幷に釋迦牟尼佛を問訊せしむ。如來は此に、衆の魔及び龍の眷屬を降伏し、最勝無礙にして、妙法輪を轉じたまふ。但だ此の刹中の諸の惡衆生、佛の法輪に於て、順行せざる者あり、是の故に彼の德華藏佛、此の日藏法行壞龍境界炎品・一切衆生惡業盡陀羅尼欲――所謂奢摩斐多悉致那利陀羅尼を說くなり。此の陀羅尼は能く衆生をして、大勢力を得、大利益を得、大安隱を得しめ、能く一切の病苦を除き、能く一切の煩惱・一切の陰入界を壞し、能く一切を知るの法を差別し、能く一切の方便を示し、能く涅槃の道を清淨にし、能く一切の衆生をして、心に歡喜を生ぜしめ、能く一切の法門に入るに障礙有ること無く、能く正法を以て外道を降伏して、佛法に住せしめ、能く一切魔王の境界を壞す。此の陀羅尼は、大力用有り、善く一切の諸魔・外道を攝して、勢力を失はしめ、能く諸天をして大歡喜を生ぜしめ、能く夜叉をして心に知足を生ぜしめ、能く阿修羅を怖れしめ、能く金翅鳥を壞し、能く〔四〕緊陀羅をして大歡喜を生ぜしめ、能く摩睺羅伽をして、敢て廻顧せざらしめ、能く外道をして、默然として對ふるなからしめ、能く刹利をして心に歡喜を生ぜしめ、能く婆羅門をして、信じて佛法に入らしめ、能く毘舍・首陀羅等をして、皆大に歡喜せしめ、能く女人をして多欲を樂はざらしめ、能く壞孕の女人をして、産生安隱ならしめ、能く多聞の人をして、心に念を失は

〔三〕以下。卷末に至るまで、日密分には、相當文を缺く。

〔四〕緊陀羅。緊那羅に同じ。

即ち佛前に於て、智慧依止陀羅尼を說かく

『怛經他　佉伽波利移提　伽㘉婆叉西伽跋梨　鼻也鉢囉婆伽叉　叉婆踰岐鉢底呵梨　奢摩那四迦　㳷　三摩迷伽闍師　阿叉夜那低　叉婆跋移　彌䭾那闍師　婆摩娜闍師　婆摩伽邏闍師　阿地呵　奢夜闍師　鼻跡囉婆闍師　西叉闍師西彌夜闍婆闍師婆利囉翟㕸夜闍師　婆利羅翟㕸夜阿䘸綺婆　那鳩世　薩檀拘帝　私婆檀那梯　毘哆鉢囉鼻利低　嘔波羯囉磨那梯　阿那比地夜跋羅佡　鉢羅　帝羯迷那　三迦太夜世　薩盧遮那婆迷拘嚧太梨　迦摩薩世　阿世奢佉岐　那夜軍闍　鼻地夜跋　泥　羯羅那跋泥　欝遮跋泥　三迷摩迦梨　奢利夜跋泥　摸伽闍師　呵利拘那婆　那夜那目佡　婆囉叉拘梨　那羅延夆樹梨　因陀羅婆薩泥　烏阿　阿婆阿　阿阿何[illegible]婆阿婆囉　阿婆囉　阿羅　薩彌伽　豆佉彌提曜　涅槃醯　莎和呵

此の呪を說き已り、是の如きの言を作す『此は是れ智德峯王佛所說の陀羅尼なり』と。

三　爾の時、釋迦牟尼佛、長老舍利弗に告げて言はく『汝此の智慧依止陀羅尼を受持すべし。所以は何となれば、佛の世出は難く、此の陀羅尼を聞かんこと、亦復倍難し。舍利弗、若しは佛如來、及び佛弟子・大阿羅漢など、百劫の中に於て、此の四天下の微塵等の數を知るを得べけんも、此の智依止陀羅尼の德は、百千劫のあひだ說くとも、盡す能はず。此の陀羅尼は、此の如くに甚深なり、是の故に應に、受持讀誦して、此の衆中に於て、廣く人の爲に說くべし。若し衆生有り、能く聽受すれば、彼の人、所有の下中上の欲、欲有の因緣所生の煩惱、及び色・無色有の因緣所生の煩惱など、皆悉く微薄となり、復能く恒河沙劫の生死の苦、五無間業を𠛬け、及び女人に於て舊所造の業など、皆悉く除滅し、乃至漏盡きて涅槃の道を得しめん』と。

爾の時、虛空藏菩薩摩訶薩、合掌して佛に向ひ、偈を說いて言はく

『如來は眞實に法界を知りて、魔・衆生に正眞の道を示したまふ、若し眞實に信心を生ずる有ら

【三】　日密分には、この段と次の段と存するのみ。

諸惡衆生は、障礙未だ盡きず、佛の法輪に於て、順行せざる者あり。是の故に彼の佛、此の日藏法行壞龍境界炎品・一切衆生惡業盡陀羅尼欲――所謂無願順陀羅尼を說きたまふ。此の陀羅尼は大勢力有り、大利益有りて、能く一切の欲貪、色・無色の貪、一切の慢・增上慢・我慢等を盡すこと、前の所說の如く、能く一切無明の暗聚を裂き、能く一切の苦擔を捨す』と。

爾の時、炎德藏菩薩、卽ち所送の無願順陀羅尼を說かく

怛經他　舍摩那舍婆　阿婆叉舍婆　斫芻舍婆　輸嚧哆囉舍婆　伽拏舍婆　覗婆舍婆　迦耶舍婆　摩耶舍婆　叉婆毘陀　斫芻畢利波鼻叉婆　輸盧哆囉阿婆叉婆　伽拏帝闍叉婆　什婆婆喩叉婆　迦耶羯羅摩叉婆　摩那烏闍叉婆　阿盧迦若那叉婆　毘闍僧羯摩叉婆　唵句囉呿伽叉婆　婆摩嘍畢也鼻耶叉婆　舍摩迦闍叉婆　叉耶囉婆叉婆　羯哆鼻耶婆叉婆　耶耶耶　泥那都那　阿婆泥那都那　那耶波夷那都那　伊沙伊婆都度呿嚧莎呵

此の呪を說き已り、佛に白して言はく『世尊、是れ無願順陀羅尼なり、是れ彼の智德峯王如來の送る所なり』と。爾の時、釋迦牟尼佛及び一切の娑婆世界の諸大集の衆、皆讃ふらく『善い哉・善い哉』と。唯定に在るを除く。

爾の時、釋迦牟尼佛、炎德藏菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、我れ今此の座を起たずして、大衆中に於て、廣く一切衆生の爲に、此の無願順陀羅尼を說き、文字句義を不生不滅ならしめん。善男子、汝の彼より來るや、智德峯王佛は、汝を護らん爲の故に、智慧依止陀羅尼を說きたり。汝今當に一切衆生の爲に、此に於て宣說すべし。若し衆生有つて此の法を說き已らんに、所有の上中下の結と、欲有の因緣所生の煩惱とは、悉く皆微薄となり、復能く恒河沙劫の生死の苦を除却し、一切の惡業も亦皆除滅し、一切の善根、具足圓滿すべし』と。

爾の時、炎德藏菩薩、佛に白して言はく『世尊、是の如く是の如し。我れ今當に說くべし』とて、

――我が身を護らんための故に』と。

爾の時、釋迦牟尼佛、長老憍陳如に告げたまはく『汝此の無盡根陀羅尼を受持讀誦すべし。憍陳如、佛の出世は難く、此の陀羅尼を聞かんこと、亦復倍難し。善男子、若しは佛・如來、或は佛弟子・大阿羅漢等、百千劫に於て、一切衆生三世の心と心數の法とを數知するを得べけんも、此の陀羅尼の德は、百千劫のあひだ說くとも、其の邊を盡す能はず。是を以つての故に、憍陳如、當に此の無盡根陀羅尼を受持し、四衆の中に於て、聞くが如く廣說すべし。若し衆生有つて、此の法を聞くを得なば、能く惡業を盡し、乃至四無礙・不壞の辯才を得て能く常に樂說し、三界の中に於て最勝の身を得ん』と。

爾の時、炎德藏菩薩摩訶薩、合掌して釋迦牟尼佛に向ひ、偈を以て讚へて曰はく

『[八]六道は煩惱・苦の所[九]漂なり、佛智は船の如く自他を度す、六根の迷ふ所をば魔[一〇]羂縛す、佛の出世は難く、實道を說きたまふことも難し。

智人は能く[一一]六種の家を捨つ、佛は世の親と爲つて儉法を除きたまふ、六神通と諸の三昧とを得て、諸佛・大聖は實語者たり。

能く衆生流轉の縛を解きたまふ、我等信心もて、佛を聞きて讚ふ、世の親は我をして此の刹に來らしむ、唯願はくば世尊、我が說を聽きたまへ』と。

爾の時、炎德藏菩薩摩訶薩、佛に白して言はく『世尊、西方に四十二恒河沙等の佛刹を過ぎて、佛世界有り、堅固幢と名け、佛を智德峯王如來と號し、十號具足して、今現在に說法したまふ。彼の佛如來、我をして欲を說き、幷に釋迦牟尼佛の、安隱に住したまふや不や、起居輕利なるや不や、弟子衆等、多患無きや不や、樂うて法を聽くや不や、若しは法を聽き已つて、能く如說に行じ、堅固に住するや不や、阿蘭若行を樂うや不やを問訊せしめたまふ。如來は、此に衆の魔及び龍の眷屬を破壞し、正法を光顯したまふことを最勝にして礙無く、妙法輪を轉じたまふ。但だ此の世界の、

【八】六道。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六趣は、衆生輪廻の道途なれば六道といふ。六趣ともいふ。
【九】漂。三本に依る。麗本は剽に作る。
【一〇】羂。わなにす。
【一一】六種の家。六道なるべし。

の諸大集の衆、皆大に歡喜し、同じ讃ふらく『善い哉』と。空靜處にあつて禪定に入れるを除く。

爾の時、釋迦牟尼佛、香象菩薩に語つて言はく『善男子、我れ今此の座を起たず、大衆中に於て、廣く衆生の爲に、此の空順忍陀羅尼を說き、文字及び義を不增不滅ならしめん。善男子、汝の此に來らんと欲するや、彼の山王佛、汝を護らんが爲の故に、無量根陀羅尼を說きつ。汝之を說くべし、何を以ての故にとならば、能く一切の心受行を却くるが故に、平等の一切智智を得るが故に、四魔の境界壞するが故に、法母と三寶の性と、斷ぜざるが故に』と。

爾の時香象菩薩、佛に白して言はく『世尊、我れ今當に說くべし』とて、卽ち佛前に於て、持ち來る所の無盡根大授記陀羅尼を說かく、

『怛經他　捺囉娜毘夜也　式叉毘夜也　徙寐履帝毘夜也　鉢囉河拏毘夜也　矣履地毘夜也　因地利毘夜也　囉斫毘夜也　薅騰伽毘夜也　三摩地毘夜也　陀維尼毘夜也　羼帝毘夜也　毘梨耶毘夜也　闍娜毘夜也　鉢邏若阿霤必也毘夜也　阿納社毘夜也　摩伽夜也　遏鼻娘毘夜也　鉢囉帝三陛爹毘夜也　步寐毘夜也毘經耶毘夜也　摩訶旃怛梨毘夜也　摩訶迦霤那毘夜也　摩訶牟帝多毘夜也　摩呼卑叉毘夜也　必利洟鼻毘夜也　薩捶毘夜也　達摩毘夜也　答摸毘夜也　阿盧迦毘夜也　鉢囉帝婆娜毘夜也　鉢囉帝輸盧得迦毘夜也　伽㗊那毘夜也　摩霤須毘夜也　鉢囉帝多三姹波爹毘夜也　輸娜多毘夜也　阿尼蜜多毘夜也　捺鉢囉尼系多毘夜也　侯嘍須毘夜也　瞿沙毘夜也　緊柘那毘夜也　阿鼻三麼夜毘夜也　阿怒娜　阿奴娜　阿婆呵者者　者遮囉　者遮囉毘姹　柘陛斫芻者遮毘姹　毘夜也毘姹　察夜毘姹　阿麼毘夜也毘姹　阿三姹阿遮囉毘姹　塢哆陀毘姹　阿迦舍毘姹　騾鉢舍麿毘姹　阿那婆婆毘姹　阿呵呵毘姹　阿囉婆囉毘姹　優婆舍麼毘姹　薩利維毘姹　娑波呵

此の呪を說き已り、佛に白して言はく「世尊、此は是れ山王如來所說の、無盡根授記陀羅尼なり

らんが如し。是の如き一沙を一佛刹と爲し、是の數を過ぎ已り、南方に佛世界有りて、袈裟幢と名け、五濁を具足し、佛を山帝釋王如來と號し、十號具足して、今現在に說法したまふ。彼の佛如來、我をして欲を送り、幷に釋迦牟尼佛の、少病少惱にして、常に安樂なるや不や、弟子の衆等、多患なる無きや不や、樂ふて法を聽くや不や、旣に法を聞き已り、如說に行ずるや不や、阿蘭若を樂ふや不や、坐禪を樂ふや不やを問訊せしめたまふ。佛は此の刹に於て、魔王及び諸の惡龍を破壞し、正法を光顯し、無障礙淸淨の法輪を轉じたまふ。但だ此の佛刹には、諸の惡衆生の、障礙未だ盡きず、法輪を受けざる者あり、是等の爲の故に、彼の山王如來は、我をして此の日藏法行壞龍境界炎品・一切衆生惡業盡陀羅尼欲の、空願忍陀羅尼と名くるを送らしむ。此の陀羅尼は、大勢力有り、大利益有り、能く一切の欲貪を却け、能く一切の色・非色の貪を盡し、能く一切の慢・增上慢を盡すこと、上に說く所の如く、乃至能く苦の擔を捨つ』と。

爾の時、香象菩薩、卽ち所送の空願忍陀羅尼を說かく

『怛經他　頭摩帝頭摩帝　惡蹄頭摩帝　鉢囉婆婆頭摩帝　薩婆迦舍頭摩帝　阿謌却伽培謌娜却伽　碎朱叉劫伽　阿婆摸訶劫伽　阿那涅也劫伽　毘耶佛履帝却伽　僧迄嘍者却伽　阿泥蜜却伽　盧者那却伽　尸棄却伽　毘底寐劫伽　郁㗅蜜却伽　嗚囉却伽　惡鼓却伽　耶婆蜜娜却伽　尤嘍跋却伽　耶婆毘娘那却伽　斫㗅陀姤却伽　耶婆蜜娜毘娘那陀姤却伽　必利波陛陀姤却伽　耶婆毘娘娜陀姤却伽　鞞埵履悉蜜駐跋薩他娜却伽　耶婆阿瑟吒達奢阿謌尼迦佛陀達摩却伽　獨佉劫伽　耶婆摩訶劫伽　毘婆娑娜毘鼓娑　阿那娜娜　阿陛娜娜　三姹陀斯娜娜　薩婆迦囉囉娜娜　薩婆僧薩他娜毘羅跋娜娜　阿緊柘若娜娜　叉婆叉婆　伊犁伊邏　伊犁伊羅　寐利蘇波呵

此の呪を說き已り、佛に白して言はく『世尊、此の陀羅尼は、是れ彼の山王如來の所送なり』と。

爾の時、釋迦牟尼佛、心に大に歡喜し、讃へて言はく『善い哉・善い哉』と。幷に及び一切娑婆世界

訶夠跋祇㝹帝　訶夠嚧伽曷囉捨彌　訶夠達㝹徙蜜帝　訶夠婆憂波陀那　若茹若　毘祇樹堅　毘者祇若若　婆羅末伽若若　嚧婆棠夠　婆囉伽　獨𦣱沙呵

此の呪を說き已り、佛に白して言はく『世尊、彼の瞻波迦華色佛は、我を護らん爲の故に、此の陀羅尼をば說きたまへり』と。

爾の時、釋迦牟尼佛、長老[五]耶舍に告げたまはく『汝此の日眼蓮華陀羅尼を持すべし。何を以ての故にとならば、佛の出世は難く、此の陀羅尼を聞かんこと、亦復甚だ難し。若し佛・如來及び弟子衆、或は阿羅漢、須彌山王、及び大海は、其の德說くべけんも、此の日眼蓮華陀羅尼は、一劫若しは百千の劫にも、其の德をば說くべきに非ず。此の陀羅尼は、是の如く甚深なり、汝當に一心に受持讀誦し、四衆の中に於て、廣く之を宣說すべし。彼の娑婆世界の一切衆生は、此の呪を聞き已つて、一切の欲貪、色・無色の貪をば、悉く皆除滅し、乃至能く漏盡智を得、涅槃の樂を證得せん』と。

爾の時、香象菩薩、復偈を以て讃ふらく

『惟佛のみ菩提樹に坐し、能く衆の魔及び眷屬を壞し、獨り無上の勝菩提を得て、一切衆生の類を證知せしめたまふ。　佛は勝光を放つて、外道を蔽ひたまふこと、日の能く諸の[六]螢火を映すが如し、法母と三寶の種とは常住なり、聖の集まるは、諸の衆生を度せんが爲なり。　善法と及び菩提とを求め、佛を供養せんが爲の故に、同じく此に集まる。　唯佛は甘露もて衆生を洗ひたまふ、菩提の勝行を演說したまふが故に。　能く衆生を度して、更に生ぜず、漏を盡し・[七]惡を盡し・煩惱を盡し、衆生を寂滅の城に安置したまふ。　唯佛は世に於て妙藥の如くなり。　能く衆生の諸憂愁を除かんとて、彼の佛、使もて陀羅尼を送り、幷に復、牟尼の月、多聞・智海・慈悲の行を問訊したまふ』と。

此の偈を說き已り、佛に白して言はく『世尊、譬へば城の方に由旬にして、沙其の中に滿てる有

【五】耶舍（Yaśas）。名聞・名稱など譯す。毘舍離城の長者の子。

【六】螢。麗・宋は熒に作る、今・元・明二本に依る。

【七】惡。麗本思に作る、今三本に依る。

隸　鞞綴嫩揭邏薩鞞綴嫩揭邏訶波履婆隸　怛履甚那揭羅薩怛履甚那揭羅訶波履婆隸　憂波陀那揭邏薩憂波陀那揭邏訶波履婆隸　婆婆揭邏薩婆婆揭邏訶波履婆隸　闍帝揭邏薩闍帝揭邏訶波履婆隸　社囉摩囉嫩揭邏薩社囉摩囉嫩揭邏訶波履婆隸　獨佉删多跋揭邏薩獨佉删多跋揭邏訶波履婆隸　阿囉波囉彌陛社揭邏薩阿囉波囉彌陛社揭邏訶波履婆隸　阿跋彌鞞婆娑寫　阿跋囉摸跋婆娑卸鞞也　毘尼跋娑　阿利耶易囉捨彌　薩鞞伽彌帝沙訶

此の呪を說き已り、佛に白して言はく『世尊、此の四諦頭忍陀羅尼は、是れ彼の瞻波迦華色佛の所送たり』と。爾の時、釋迦牟尼佛、此の呪を聞き已り、讃へて言はく『善哉・善哉』と。乃至一切の娑婆世界なる諸佛刹中の十方の來衆、及び此の刹の衆も、亦『善哉』と稱へたり――入定の者を除く。

爾の時、釋迦牟尼佛、日行藏菩薩に告げて言はく『善男子、我れ今此の座を起たずして、大衆中に於て、廣く衆生の爲に、此の四諦頭忍陀羅尼を說くに、文字及び義、不增不減ならん。善男子、汝の此に來らんと欲するや、彼の瞻波迦華色佛、汝の身を護つて怖畏せさらしめん爲の故に、身受行陀羅尼を說き、乃至涅槃道日眼蓮華陀羅尼を說けり。汝今當に一切衆生の爲に、此に於て宣說すべし』と。

爾の時、日行藏菩薩、卽ち佛前に於て、持ち來れる所の日眼蓮華陀羅尼を說かく

一袒經他　徙阿摩帝　毘盧迦蜜帝　喹隸　羇殞奚利師　漚制　蘇樓漚制　佛地毘佛地　摩訶佛地　欝奴摩提　欝奴摩爹　鉢斯氐𥌓達膩　阿羅伽度蘆婆　阿囉伽度蘆婆　鉢斯氐𥌓達膩　頻豆頻豆蜜底　質吒質吒鉢斯底薜達膩　遊勒羇　栴陀羅提　呵呵質㭗　訶殞膩弭　訶殞迦蜜鞞祇　訶殞富嫩曷囉婆　曷囉殞　訶殞衔芻　三摩帝　訶鄉毘蜜地　訶須夜奇離　訶殞毘三蜜揭離　訶殞三摩爹囉社鞞　訶殞鞞蜜殞曷囉誓　訶殞阹贼　訶殞者帝　訶殞達蜜曷囉誓　訶殞𢱢呼曷囉誓

受せざれば、是等の為の故に、彼の瞻波迦華色佛、此の日藏法行境龍境、炎品・一切衆生惡業盡陀羅尼欲の、四諦順忍陀羅尼と名くるを說きたまふ。此の陀羅尼には、大勢力有り、大利益有つて、能く一切の欲貪・色無色貪、一切の慢・增上慢・我慢等を盡すこと、上に說く所の如し。此の四諦順忍陀羅尼は、能く一切の魔王の勢力を壞し、能く諸天をして、心に歡喜を生ぜしめ、能く阿修羅・迦樓羅をして、大怖畏を生ぜしめ、能く緊陀羅をして、心に歡喜を生ぜしめ、能く摩睺羅伽をして、怖畏の心を生ぜしめ、能く外道を壞し、刹利の所に於て、能く知足を與へ、能く婆羅門を攝して、佛法に入らしめ、能く毘舍をして大信心を生ぜしめ、能く首陀羅をして歡喜心を生ぜしめ、能く女人をして諸の貪欲を離れしめ、能く智人をして歡喜心を生ぜしめ、坐禪の人をして阿蘭若を樂はしめ、能く一切種種の惡事、及び諸の鬪諍・飢饉・疫病・夭横の者を却け、能く外賊・非時の寒熱・惡風雨・惡獸・瀑水・苦辛・枯澁・諸の惡觸等を除き、能く法幢を建立し、佛法を光顯し、法母をして久住せしめ、佛種を滅せず、能く生死流轉の衆生をして安慰し、能く盡智を生じ、能く無生智を覺し、能く一切無明の暗聚を裂き、能く一切の苦擔を捨て、能く一切の苦海を乾かすなり』と。

爾の時、日行藏菩薩、卽ち上の如き四諦順忍陀羅尼を說きたまはく、

『嗚絰咃　婆荷婆野波履婆隸　婆醯婆訶波履婆隸　必利洟仳必利洟鼻波履婆隸　阿捭阿跛波履婆隸　低誓低社波履波隸　末隸末邏波履波隸　却偈却伽波履婆隸　阿盧翅阿盧迦波履婆隸　薩他迷薩他麼波履婆隸　曷維誓曷維社波履婆隸　徙隸徙邏波履婆隸　伽迷伽麼波履婆隸　阿㨒婆波履婆隸　羅麼羅麼　羅謎羅麼　曷囉斫曷維邏　阿囉維阿囉維麼　毘躡婆攘娜復須　伽邏彌復須　揭邏磨波履婆隸　斫芻揭邏醯斫芻揭邏訶波履婆隸　輸嚧怛囉揭邏醯輸嚧怛囉揭邏訶波履婆隸　伽維娜揭邏醯伽羅娜揭邏訶波履波隸　什婆揭邏醯什婆揭邏訶波履婆隸　迦耶揭邏醯迦耶揭邏訶波履婆隸　麼那揭邏醯麼娜揭邏訶波履婆隸　䫂跛曷利捨揭邏醯䫂跛曷利捨揭邏訶波履婆

巻の第三十七

日藏分　菩薩使品第三[一]

爾の時、頻婆娑羅王、未だ曾て見ざる無量阿僧祇の、梵天、帝釋天、那羅延天、四天下の轉輪聖王などを見、見已つて心に大に歡喜し、坐より起ち、一面に在つて立てり。爾の時四の使菩薩摩訶薩、及びその眷屬、合掌して釋迦牟尼佛に向へり。時に日行藏菩薩、瞻波迦の華鬘を以て釋迦牟尼佛上に散じ、讃歎して曰はく

[二]『諸足の中に於て最も殊勝なり、諸の惡見に大光明を施し、能く出世の平等行を說き、正道を行ずる者に法印を施したまふ。毒龍及び四魔を摧滅し、世の煩惱を解きたまふこと、佛を勝と爲す、[三]堅く法幢を竪てて解脫を施し、大法炬を以て衆闇を滅したまふ。善友に親近して定を修習せしめ、衆生を愍むが故に福田を說きたまふ、佛法僧寶は甚だ得難く、人身と信心とも亦復難し。人身を得と雖も善友[を得んこと]難く、善友を得る者は煩惱を壞し、[四]衆生の惡智は煩惱の羂なり、速に能く煩惱の網を滅せん爲なり。衆生は煩惱の河に沒するを、佛は大船の如くに、能く拔濟したまふ。我等諸佛の使は欲を說き、如來佛の法藏に隨喜す』と。

爾の時、日行藏菩薩、釋迦牟尼佛に白して言はく『世尊、東方に無量恒河沙の佛刹を過ぎ、彼に世界有り、無盡德と名け、佛を瞻波迦華色如來應供・正遍知と號し、現在說法したまふ。彼の佛如來は、我をして欲を送り、幷に釋迦牟尼佛の、少病小惱にして、多患無きや不や、弟子・眷屬の身力・樂しきや不や、常に安隱なるや不や、樂ふて法を聽くや不や、佛の所說を聞いて、教の如く行ずるや不や、阿蘭若を樂ふや不やを問訊せしむ。世尊は此に於て、衆魔を破壞し、獨り衆聖に超えて、無礙微妙の法輪を轉じたまふ。但だ此の五濁の諸惡衆生は、障礙未だ盡きず、佛の法輪に於て、信

【一】日密分。分別說欲品第三（大集部第二、三〇六頁）參照。

【二】諸足。諸の二足四足等の人獸の謂。

【三】堅竪。麗本は竪堅に作る、今三本に從ふ。

【四】以下の二句。前後の諸句と連絡せず。日密分には缺く。

龍境界炎品を聽かんと欲す――一切衆生の諸惡業を除かんが爲の故に。惟願はくは世尊、我の彼に往かんを聽したまへ』と。佛の言はく『善男子、往かんと欲すれば意に隨て、應當に一心に、以て彼の國に遊ぶべし。汝等皆變じて轉輪聖王と作り、七寶成就し、千子具足して、其の身を莊嚴すること、轉輪王の法の如くすべし』と。

卽時に、八十千萬の菩薩摩訶薩、虛空藏菩薩と、德華藏佛を恭敬・圍遶し、遶ること三匝し已つて、虛空に上昇したるに、是の諸菩薩摩訶薩衆は、各自轉輪王の身を化作して、七寶の成就、千子の具足、象兵・馬兵・車兵・步兵など、是の如き種種の莊嚴をば、輪王の法の如くし、卽ち彼より發ち、一念の頃に、娑婆世界に至り、閻浮提金の末を以て、娑婆世界の佛及び菩薩・聲聞・大衆に散ぜるに、是の如き金末、皆悉く娑婆世界に遍滿したり。復龍栴檀香の末を以て、以て之を散じ、復眞珠を以て、亦以て之を散じ、復眞珠・金・瓔珞の具を以て、亦以て之を散じ、復頸珠を以て、用て之を散じ、復種種の瓔珞・種種の衣服を以て、以て之を散じ、復種種の幢幡寶蓋を以て、亦以て之を散じたり。[三七]是れ諸菩薩摩訶薩衆の、皆釋迦牟尼・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀を供養せん爲なり。彼の諸菩薩摩訶薩衆は、是の供養を作し已り、恭敬圍遶し、娑婆世界を右遶し、遶ること三匝し已つて、此の四天下中の、摩伽陀國なる釋迦牟尼佛の所に來至し、到り已つて恭敬禮拜し、佛を遶ること三匝して、却いて一面に住しぬ。

大方等大集經卷第三十六

【三七】是、麗本は其に作るも、今三本に從ふ。

ん』と。

佛の言はく『善男子、是の如きの事無し、誰か四無量心を成就する〔三六〕有らんに、能く惡を加へん。假使百千の諸魔眷屬なりとも、亦障礙する無けん。善男子、汝往昔に於て、無量劫來、常に四無量心を修行したり、汝怖畏する莫かれ。善男子、我に陀羅尼の、四無量梵行の中より生じ、能く諸の惡乃至惡夢を滅する有り。汝此の陀羅尼を受持すべし。若し多瞋の衆生有らんも、此の呪を聞かば、皆慈心を生ぜん。若し生ぜずんば、或は便ち惛睡せん』と。

爾の時世尊、卽ち呪を說いて曰はく

『怛絰他　呼呼鼻利呵　浮浮囉　哂羅囉婆　邏婆呵　呵籌　伽籌　伽伽那叉　奢摩奢摩　蜜多囉　蜜多囉　斫迦囉　跋帝帝隸　娑伽囉帝隸　豆利哆吲絲　吲黎呵跋醯　那邏闍睶　夜婆那蜜低黎　綺底蜜低黎　婆利蜜低黎　始佉蜜低黎　摩郁囉蜜低黎　佉伽蜜低黎　薩都闍蜜低黎　薩婆羯摩蜜低黎　摩那跋利哆蜜低黎　陀貶濕婆囉蜜低黎　莎和呵

『善男子、此の陀羅尼をば、一切の惡及び諸惡夢を滅するものと名く。其れ誦持する有らんには、應に瞻蔔の油を以て、之を呪すること七遍、用て兩手に塗り、及び用て面に塗らんに、諸の惡心の人、之を覩見せば、皆歡喜を生じ、乃至惡龍・夜叉・迦吒富單那等、乃至千萬の諸魔眷屬も、惡心を起さじ。呪んや惡事を加へんをや。假使四天下に滿つる諸惡衆生なりとも、一合の水を呪し、以て之を散ぜんに、彼の衆生をして、皆信心を生ぜしめ、乃至一念の惡をも起さざらしめん。若し濁水有り、四大海に滿たんも、一合の水を取り、此の呪を以て之を呪し、彼の大海に投ぜんに、能く濁水をして、悉く變じて澄清ならしめん。善男子、汝此の陀羅尼を持して、娑婆界に往くべし』と。

爾の時、無量阿僧祇の菩薩摩訶薩、異口同聲に、是の如き言を作す『我等も今、渴仰して大德世尊釋迦牟尼佛を見まつり、禮拜・供養・尊重・讃歎せんと欲し、亦彼の大衆の集會を觀、日藏法門壞

〔三六〕有。麗本は是に作るも、今三本に依る。

爾の時、虚空藏菩薩摩訶薩、佛に白して言はく『世尊、若し衆生有つて、生死を怖畏し、涅槃を欣樂し、一心に稱名して、德華藏佛を禮拜・供養し、幷に此の陀羅尼を誦して、希有心を生ぜんには、彼の諸衆生、善根を增長し、大利益を獲ん』と。

爾の時、德華藏佛、虚空藏菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、是の如く是の如し、汝の所說の如し。善男子、我れ往昔に菩提を修したる時、勤めて方便を求め、是の如き願を作したり「我れ阿耨多羅三藐三菩提を得たらん時、十方諸佛の國土に、其の中の衆生、樂うて布施乃至智慧を行じ、若しは能く至心に、我が名號を稱へて、禮拜供養する有らんに、彼の衆生をして、天・人・阿修羅等の、能く害を加ふる者有ること無く、亦能く六波羅蜜を修行するを障礙する者有ること無く、又能く無量の善根を增益せしめん――唯過去に極惡の業を造りたらん者を除く。若し此の願にして成らざらば、我れ誓つて等正覺を成ずることを取らじ」と。善男子、「若し、婦人にして、子を欲求する者有り、若しは復多子有るを願はざる者あり、若しは懷妊して、難產を怖畏する有らんに、彼の諸人等、應當に至心に我が名號を稱へて、禮拜供養すべし。若しは人・非人の、能く便を得る無く、亦惡呪毒藥の、能く身心をして、逼迫の苦を受けしむる無けん。乃至一念なりとも、惡を加ふる者あらば、我れ誓つて阿耨多羅三藐三菩提を取らじ」と。善男子、我れ往昔に於て、菩提を求めたる時、是の如き願を作して、一切の衆生を覆護・利益したりき。是の故に衆生、應當に至心に、我が名號を稱し、禮拜供養すべし、一切の諸惡、皆悉く除滅せんこと、決定して疑無し――唯過去の極重惡業のため、現に報を受くる者をば除く』と。

爾の時、虚空藏菩薩、佛に白して言はく『希有なり世尊、不可思議なり。我れ今娑婆世界に往き、釋迦牟尼佛を見まつらんと欲す。但彼の衆生、弊惡にして嫉妬し、慈悲の心無く、報恩を知らず、言常に麁獷、多く邪見を行じて、我を惱ます無からんや。我れ今彼に往かんも、或は利益無け

鼻薩那吒　佉伽那吒　阿吒那吒　拘那吒　鉢利鳩薩那吒　那荼那吒　富利迦那吒　爵怛羅那吒　迦毘那吒　軍闍那吒　蘇目伽那吒　遮婆茂婆羅那吒　佉伽凡鉗婆囉那吒　富沙迦囉那吒　系婆爵盧達囉那吒　三摩羅耶那吒　失囉鳩三　憍怛吒　怛羅　摩妬佉囉婆　提畜叉　婆帝囉竪　豆婆那摩囉竪　婆呵那否智　脩低囉闍婆　阿摩囉闍婆　摩呼囉伽闍羅　阿爾拏婆囉　阿爾拏叉　阿婆呵摩㖿伽爾拏叉　啤沙啤婆都豆佉烏　婆和呵

[三四]爾の時世尊、此の陀羅尼を說きたまへる時、彼の大衆中の六萬億の人、柔順忍を得、復六十[三五]頻婆羅の人、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得たり。

『善男子、汝我が此の陀羅尼を持し、娑婆世界に往き、我が辭の如くに曰へ「北方に此を去ること八十恒河沙の佛刹――是の數を過ぎ已つて、佛世界有り、普上香と名け、亦五濁を具す。彼の中に佛有り、德華藏如來・應供・正遍知と號し、現在說法したまへるが、問訊したまふらく、釋迦牟尼佛は少病少惱にして、氣力安きや不や、諸の弟子衆、樂んで法を聽き、如說に行ずるや不や。能く四魔・諸惡龍を摧くや不や。佛の轉法輪に、障礙無きや不やと。善男子、彼の釋迦牟尼佛の所――日藏法門を說き、能く魔王・龍王の境界を壞し、惡業を除滅したまふ――に於て此の奢摩斐多悉致大授記陀羅尼を說け。此の陀羅尼をして、大勢力大利益有らしめ、能く衆生をして、安隱快樂にして、諸の煩惱を滅し、乃至苦擔を棄捨せしめんと欲すればなり」』と。

爾の時、德華藏佛、諸の弟子衆と、咸共に讚へて言はく、『善哉・善哉、希有なり世尊、希有たり世尊、如來の智慧は、一切の法中に、障無く礙無し。我等昔より已來、初より未だ是の如き甚深の大陀羅尼――能く衆生に安隱快樂を與ふる――を聽くを得ざりき。此の陀羅尼を聽き已つて、悉く勇猛を發し、讀誦受持せん。何を以ての故にとならば、此の陀羅尼には、是の如き無量無邊の大功德有るが故に』と。

【三四】以下。卷末に至る迄の文、日密分には之を缺く。

【三五】頻婆羅（Vimvara）、數の名、十兆に當る。

し、摩陀那果に裹みて、天廟中に置かば、卽ち非時の風雨・寒熱・種種の災惡を除き、日月星宿、還常度に依らん。

『善男子、我れ過去に於て、菩提を修しける時、衆生をして、所在に安隱ならしめんと欲し、若し虛妄・憶想・倒見の衆生を見たらんには、我れ爾の時に於て、彼の爲に此の陀羅尼呪を說けるに、彼の諸衆生、此の呪を聞き已つて、虛妄・顚倒をば、皆悉く捨離し、十善業を修し、善願を起して、婬欲薄少となりき。善男子、我れ過去に於て、方便力を以て、衆生を敎化し、六波羅蜜に住せしめ、亦自らも具に六波羅蜜を行じ、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得たり。善男子、此の陀羅尼は、能く衆生に、是の如き大力を與へ、大利益を與へ、能く一切諸病の苦惱を除き、能く懷妊の婦人及び胎藏を護り、能く一切煩惱の諸結を壞し、能く四大・五陰・十二入・十八界を知らしめ、方便の道を示し、能く安隱・快樂の涅槃を覺し、能く衆生の信心をして淸淨ならしめ、能く諸法差別の法門に入り、諸の外道を攝し、魔の境界を壞せしむ。

『善男子、此の陀羅尼の力は、能く一切の諸天をして歡喜せしめ、夜叉・惡鬼をして心に知足を生ぜしめ、諸の阿修羅をして、極めて大に怖畏せしめて、迦樓羅・緊陀羅等も、亦皆歡喜せしめ、摩睺羅伽をして、反顧する能はざらしめ、邪論を摧伏し、能く刹利・婆羅門・毘舍・首陀をして、信心歡喜せしめ、能く女人をして婬欲を薄少ならしめ、多聞の者に於て、其の念力を益し、禪定を修する者に、阿蘭若を樂ましめ、能く一切の盜賊・鬪諍、飢饉・疫病、旱澇・寒熱、痟重・惡觸を却け、是の如き等の事、皆悉く除滅し、法母を增長し、佛法を流布し、三寶を斷ぜず、生死の畏を除き、無明の聚を破り、苦擔を棄捨して、能く盡智及び無生智を得しむ』と。

爾の時世尊、卽ち呪を說いて曰はく

『怛經他、摩那叉　阿婆叉　羅伽婆叉　闍羅叉　末磨那叉　阿婆叉　曼陀叉　那荼叉　那荼羅休

【三】摩陀那(Madana)。醉果と譯す。此の果を食すれば、人醉ふが故に此の名あり。藥に用ひらるといふ。

能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、在生の處に在つて、終に菩提の心を忘失せず、速に菩薩の三昧を成就するを得しめん。若し辟支佛心を生ずれば、現に順忍を得、未來世に辟支佛を成ぜん。若し聲聞心を發さば、四諦の順忍を得、三惡に墮せずして、人・天の中に生ぜん。

『善男子、我れ過去に於て、菩薩の行を行じたる時、無量の方便を以て、衆生を教化し、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたり。善男子、此の陀羅尼は是の如く大力にして大利益有り。善男子、[二八]若し諸の衆生、重き癩病に遇はば、應に此の陀羅尼を以て、師子の乳を呪し、病者に與へて服せしめんに、一切の諸病、悉く皆除愈すべし。若し師子の乳を得る能はずんば、死屍を祭れる邊の食を取り、此の陀羅尼を以て之を呪し、病者に與へて服せしめんに、一切の諸病、亦悉く除愈すべし。若し此の食無ければ、應に塵の棄てたるを取つて藥とし、此の陀羅尼を持つて之を呪し、病者に與へて服せしめんに、一切の諸病、亦除愈するを得べし。

[二九]『善男子、我れ過去に於て、菩薩の行を行じける時、是の如く、勤めて方便を求め、衆生を教化し、乃至阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたり。若し諸樹の、華果無き者を見ては、我れ時に即ち此の呪を以て、用つて雨水を呪し、樹根に澆灌するに、彼の樹の華果、即ち滋茂するを得、乃至蒲桃、種々の穀草、皆茂盛ならしめたり。若し天の雨ること無からんには、溝瀆中の諸不淨の汁を取り、龜甲中に安じ、呪を以て之を呪し、瞻婆迦樹葉を以て、此の龜甲を裹み、龍池の中に置かんに、即時に大雨あらん。若し天、多雨にして、苗實を損敗せんには、當に[三〇]阿闍迦羅蛇頭中の珠を取り、呪を以て之を呪し、龍泉の中に置かんに、雨即便ち止まん。若し非時の[三一]黑風・大寒・大熱あり、日月星宿の、其の常度を失し、年節の四時に、變異災怪あらんとき、應に衆生を愍み、七日七夜のあひだ梵行を淨修し、身體を澡浴し、乳糜を服食し、若しは但だ菜を食し、一心專念して、更に異想無く、七日七夜のあひだ、此の陀羅尼を諷誦・受持すべし。復此の陀羅尼呪を以て、淨[三二]葵菜を呪

【二八】以下。卷三十二、六九〇頁參照。
【二九】この段と次の一段。日密分は文簡なり。
【三〇】阿闍迦羅云云。日密分には求二蟒蛇皮一云云とす。
【三一】黑。惡の謂なるべし。
【三二】葵。菜の一種。

休息する無く、諸佛を供養し、如說に修行せんとして彼の佛に諮問すらく、「何等の陀羅尼呪か、能く[二三]胎藏及び母身を護りて、安隱なるを得しめ、諸の惡龍・夜叉・羅刹・阿修羅・迦樓羅・緊陀羅・摩睺羅伽、鳩槃陀・裨黎多・毘舍闍・富單那・迦吒富單那・[二四]烏摩羅・[二五]阿跋思摩羅、或は一日瘧乃至四日[瘧]或は毒藥・惡呪、或は惡藥を行じ、能く身心をして苦に逼迫せしむる者——是の諸惡をして悉く便を得ざらしめ、或は母胎に在り、乃至出胎して乳哺長養し、種種に飮食する者より、其の精氣を[二六]吸ひて身心濁亂せしむるをば、悉く便を得ざらしめ、彼の衆生をして、安隱に胎に住し、乃至乳哺長養して、身心不濁に、無病長命にして智慧を增益し、乃至能く十善業道を行じ、樂うて布施を行じ、樂うて禁戒を持し、未來三惡道の苦を怖畏せしめん。何等の陀羅尼か、能く是の如くならしむるを得るや。唯願はくは大慈、我が爲に宣說したまはんを。我れ聞くを得已らば、當來世に衆生を敎化せん」と。

『爾の時彼の佛、卽ち我が爲に、[二七]奢摩裴多悉致蔓多羅、大受記陀羅尼を說きたまへり。我れ此の呪を聞きて受持し、流布すること無量億劫なり。常に此の呪を以て、衆生を化導し、六波羅蜜を修行し、精進を牢固にするを得しめつ。復此の呪を以て、諸の母人を護り、及び胎藏を護り、若しは天・若しは烏摩羅・阿跋娑摩囉・人非人等をして、彼の婦人及び胎藏に於て、能く彼の四大を不調に、心身を濁亂せざらしめ、人の精氣を奪ふ惡呪・惡藥、乃至阿修羅、及び餘の世間の胎藏を壞する者にも、亦便を得ざらしめ、胎藏を安隱にし、產生を無難にし、諸根滿足して身體淸淨、顏貌端正にして、智慧を具足し念力を失せず、大力諸天の百千萬億と、及び諸の眷屬の無量無數と、常に隨つて衞護し、能く彼をして、宿命の智慧を得、惡道を怖畏して慈悲心を生じ、樂うて布施・持戒・忍辱・精進・禪定を行じ、善知識を樂んで、易く聖智を得、能く苦を盡して智慧を具足し、空寂の處を樂んで、諸の煩惱を滅し、天・龍・夜叉・諸鬼神等、供養供給し、生死を厭惡して涅槃を志求し、乃至

【二三】胎藏。月密分によれば、胎に處る者の謂。
【二四】烏摩羅。同に受多羅に作る。
【二五】阿跋思摩羅。同に阿備摩羅に作る。卷三十二、註三〇參照。
【二六】吸。三本に依る。麗本及に作る。
【二七】奢摩裴多はSamāhitaなるべし。禪定の一種、等引と譯す。悉致はSiddhiなるべし、成就と譯す。蔓多羅はMantraで眞言、祕密語など譯す。

「若し十方一切の刹中に、菩薩摩訶薩有つて、億百千劫のあひだ、菩薩行を行じ、一生補處、乃至十八不共の法を得逮し、自ら具足して無障礙智を得、他の教に隨はざらんと欲せんに、彼の諸の菩薩、悉く應に娑婆世界に來集し、自の善根を以て、種種の三昧に入り、此の世界の大地をして大利益を得しめ、[一九]諸の衆生をして念力を失はざらしめ、布施・持戒・忍辱・精進もて大智慧を得、亦他方の清淨佛土の如くに、諸の功德を具せんを」と。

『今此の娑婆世界に、亦十方の諸大菩薩摩訶薩有り、悉く來つて集會す。彼の菩薩衆は、娑婆世界に於て、自分の力に隨ひ、各三昧に入り、身邊より光明を放ちて、或は大燈の如く、或は百千萬億無量無邊の日月の光明の如し。彼の諸菩薩摩訶薩は、皆彼の娑婆界に大集會す、是の因緣を以て、大光明有るなり。彼の十方の佛刹なる諸菩薩衆の、未だ彼に至らざる者は、三昧より起ちて南方に趣き、娑婆世界に往きて、釋迦牟尼佛及び諸の大衆を見んと欲し、一切の惡業を破壞する陀羅尼門を聞かんと欲し、[二〇]結加趺坐して、各各奮迅・遊戲の諸深禪定に入る。善男子、汝今彼の娑婆世界に往くべし。

『善男子、彼の中の衆生は、短命多病にして、智慧少く善根少く福德少く、三惡道に於て、心に怖畏する無く、資生乏少にして、貪愛の欲多く、不淨の行を行じ、無慚無愧にして、樂うて十惡を行ず。是の如き衆生は、此の身を捨し已つて惡道に隨し、復惡夜叉の中、[二一]迦吒富單那の中、乃至阿迦富單那の中に生るゝ有り、既に彼に生れ已つて、地の精氣及び種種の穀・華果・草木一切の味を收め、其の食する者有らば、身力減損す。彼の諸惡鬼、勢力を增益し、常に人を伺ひて便ち胎に住し胎より出で、其の生長に隨ひ、乃至命を奪ふ、是の故に、彼の諸衆生は、多病短命にして念慧の力無く、未來三惡道の苦を畏れず、乃至樂んで十不善の業を行じ、惡道に墮す。

『善男子、我れ過去に於て菩薩[二二]行を行じたる時、是の如きの願を作し――牢固・勇猛に、勤めて

【一九】諸の衆生をして。同には、釋迦牟尼佛の所念に非ずして、單なる敍述とす。

【二〇】結加趺坐。全跏趺坐ともいふ。左の趾を右の股の上におき、右の趾を左の趺の上におく坐結なり。

【二一】迦吒富單那云云。日當分相當文には作二十六惡鬼、乃至惡迦那富單那一に作る。

【二二】行。麗・宋本に無し、元・明本に依つて加ふ。

佛に白して言はく『世尊、智德峯王如來の問訊すらく、世尊は少病・少惱にして、起居輕利に、氣力安きや不や、正法輪を轉じたまひて、障礙無きや不や』と。是の語を作し已り、却いて一面に住せり。

爾の時、北方に、此の娑婆世界を去ること、八十恒河沙の佛刹に、是の數を過ぎ已つて、佛世界有り、[一五]普上香と名け、五濁充滿す。彼の國に佛有り、[一六]德華藏如來・應供・正遍知と號し、現在に說法したまふ。彼の佛の衆中に、菩薩摩訶薩有り、[一七]虛空藏と名け、會に在つて法を聽けり。爾の時、虛空藏菩薩摩訶薩、虛空を仰觀し、虛空中に、無量無邊・阿僧祇の菩薩摩訶薩の、北方より來つて南方に往詣するを見、復南方に大光明有るを見、此の事を見已つて、卽ち佛に白して言はく『世尊、我れ始めに定より起ち、會に在つて法を聽き、虛空中に、無量無邊阿僧祇の菩薩摩訶薩、北方より來つて南方に往詣するを見、復南方に大光明有るを見つ。何の因緣を以て、是の如きの事有るや』と。

爾の時、德華藏佛、虛空藏菩薩に告げて言はく『善男子、此より南方に、八十恒河沙の佛刹を過ぎて、佛世界有り、名けて娑婆と曰ふ、亦我が刹の如く、五濁充滿す。彼の中に佛有り、釋迦牟尼如來・應供・正遍知と號し、今現に世に在して、諸の衆生の爲に、三乘の法を說きたまふ。法母をして久しく世に住せしめんと欲するが故に、三寶の種をして、斷絕せざらしめんための故に、大法幢を建てて、魔網を壞せんための故に。十方の諸佛は、皆彼の國に集まり、寶幢陀羅尼を說き、說き已つて各本土に還りたまふ。釋迦牟尼佛は、諸の菩薩摩訶薩・大聲聞衆の爲に、大集會を作し、四無礙を以て、三解脫門を說きたまふに、彼の佛土中の地及び虛空には、大衆充滿す。如來は師子座に處つて、大光明を放ち、深妙の法——清淨の梵行及び四攝、日藏法門、壞龍境界炎品、除衆生不善惡業陀羅尼門——を說きたまふに、一切樂聞し、厭足有ること無し。「彼の佛」[一八]常に是の念を作す。

[一五] 普上香。日密分に普光身と名く。

[一六] 德華藏。同に德華密と名く。

[一七] 虛空藏。同に虛空密といふ。

[一八] 常に以下。日密分相當文によれば、釋迦牟尼佛の所念なり。

へ、寂滅力を與ふ。若し衆生有り、一心に聽受し、如說に修行せんに、一切の如來・一切の菩薩・一切の辟支佛・一切の阿羅漢は、悉く皆加護し、乃至天王・人王も、亦常に護念し、敬愛・禮拜・供養・供給せん。彼の人終に臨んで、過去に曾て誦念せる所の十方の諸佛を見、皆悉く手を授けて、是の如き言を作さん「善男子、我れ今汝を將て淨佛土に生れしめん、汝我が國に生れんに、速に十地に住せん」と。彼の人、佛を見て大歡喜を得、大歡喜の故に、命終して淨佛國土に生れ、既に彼に生れ已つて、十地に住するを得、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ん。善男子、此の智慧依止大陀羅尼には、是の如き力有りて、能く惡業を淨め、淨心を成就し、涅槃道を證せしむ』と。

爾の時、智德峯王佛、炎藏菩薩に告げて言はく『善男子、此の陀羅尼を持して、彼の娑婆世界に往詣し、釋迦牟尼佛の所に至り、我が辭の如く曰へ「智德峯王佛は、世尊を問訊せしむ」と。炎藏菩薩摩訶薩の言はく『唯然り、教を受けまつらむ』と。

爾の時、彼の衆中の無量無邊阿僧祇の菩薩摩訶薩は、異口同聲に、是の如き言を作せり『我等今樂うて、彼の娑婆世界の釋迦牟尼佛を見て、禮拜供養し、及び大衆を見、日藏壞龍境界の、能く諸の惡業を盡す諸陀羅尼門を聽受せんと欲す。我等昔より來初、未だ曾て彼の娑婆界に往きたることあらず。今定より起つて、彼の土に往かんと欲す。惟願はくは世尊、我等の往かんを聽したまはんを』と。爾の時、智德峯王如來、衆の菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、往かんと欲すれば意に隨ひ、應當に心を攝し、以て彼の國に遊べ。汝等各自ら身を變じ、那羅延の如くに、具足莊嚴すべし』と。

時に炎藏菩薩、諸の菩薩摩訶薩衆と與に、一切皆、那羅延の身を作して、莊嚴・示現し、佛足を頂禮し、右遶三匝し、即ち彼より發ちて、一念の頃の如きに、娑婆界四天下中の、摩訶陀國なる釋迦牟尼佛の所に至り、到り已つて〔一四〕閻浮金の末を以て、佛の上に散じ、既に供養し已つて頂禮し

【一四】閻浮金。閻浮(樹)の下なる河(那提又は檀)より出づる金の略。

陀羅尼力を以ての故に、當來世に、無量の惡報悉く滅して餘無けん。彼の諸衆生は、是の如き諸惡業を滅せんが爲の故に、應當に此の陀羅尼門を書寫すべし。復應に七佛の形像を造作し、釋迦牟尼佛の法の中に於て、寺舍を建立し、法行の比丘を供養・供給すべし。亦當に數數[二]八戒齋を受け、勤行精進し、正法を樂聽し、如說に修行すべし。是の諸衆生は、三寶の中に於て、決定の信を得、歡喜心を生ずる因緣の故に、能く無量百千萬億那由他劫のあひだ、在在處處に、應に受くべき惡道、種種の諸苦を滅せん。現在世に於ては、諸の病苦多く、身形を受くること殘、資生減失し、眷屬離散し、人の奴僕と爲り、諸の[三]撾打・惡口の麁獷なるを受け、自在を得ず、人の爲に誹謗せらる。已に是の如き種種の苦を受くるが故に、過去の惡業、皆悉く滅無せん。是の如く、善男子、此の智慧依止授記大陀羅尼は、諸の衆生に於て、大勢力有り、我れ今更に說かん』と。

爾の時、世尊、即ち呪を說いて曰はく

『怛經他、佉伽波利脖提　伽唎陂叉西伽跋利鼻陀鉢囉婆伽叉叉婆蹄岐鉢底呵黎　奢摩那四迦涕　三摩迷伽闍師阿叉夜那低　叉婆跋移　爾馱那闍師　婆摩娜闍師　婆摩伽邏闍師　阿地呵奢夜闍師　鼻鉢囉婆闍師　西叉闍師　西爾夜闍婆闍師　婆利羅羅吒夜闍師　婆利羅羅吒夜阿阿弾綺婆那鳩世　薩檀拘帝　私婆檀那梯　毘哆鉢囉鼻利低　嘔波擅囉摩娜梯　阿那叱地夜跋羅企　鉢羅帝羯迷那　三迦太夜世　薩盧遮那婆迷　拘嚧太黎　迦摩薩世　阿世奢佉岐　那夜軍闍　鼻地夜跋泥　羯羅那跋泥　欝遮跋泥　三迷摩迦黎　奢利夜跋泥　摸伽闍師　呵利拘那婆　那夜那目企　婆囉叉拘黎那邏　延拏樹黎　因陀羅婆薩泥　烏阿　阿婆阿　阿阿　何羅婆阿　婆囉　阿婆囉

何羅薩彌伽　豆佉爾提羅　涅槃醯莎和呵

『善男子、此の大受記陀羅尼は、大功德有り、大勢力有り、大利益有つて、能く一切の惡業を盡し、一切の衆生を憐愍・救護し、悉く能く諸罪の垢穢を洗除し、身心光潔ならしめ、能く念力を與

【二】八戒齋。八關齋又八戒といふ。關は禁なり。この八禁戒を以て齋法を助成すれば八戒齋といふ。殺生・不與取・非梵行・虛誑語・飲諸酒・塗飾鬘舞歌觀聽・眠坐高廣嚴麗床上、食非時食の八種の非法を離るるを八戒とす。或は塗飾香鬘と舞歌觀聽とを二に分けて、食非時食を數へず。この八戒は、在家の男女一日一夜受持する所なり、六齋日、十齋日など云ふは、この八戒を受持する日をいふ。

【三】撾。うつなり。

彼の衆生等は、三塗を出づと雖も、已に清淨業の因緣無きが故に、釋迦如來の本願力の故に、還復彼の娑婆界に生ず。若し諸の衆生にして、過去所有の信根乃至慧根あり、曾て布施乃至智慧を修し、曾て願行を修して、流轉を樂はず、涅槃の道を學し、淨く梵行を修したる、是の如きの人等、〔一〇〕彼の世界に生ず。惡業の衆生は、醜陋の身を得、諸根缺減して、其の心闇鈍、衣服飲食・臥具湯藥・資生など乏少し、壽命短促、癡にして無智、睡眠安からず、善根薄く福德少く、諸〔一一〕適意の事、心に從はず、復悲心無く、樂んで惡行を行じ、樂んで安見に著し、樂んで惡論を習し、樂んで惡願を起し、樂んで惡法を受けて正法を信ぜず、諸の病苦多く、散亂の心多く、多く惡事を樂んで、三惡の業を造り、虛妄に憶想して、吉に非ざるを吉と爲し、心に忍を樂はずして、其の心麁獷に、常に樂んで十不善業を修習し、三寶を誹謗して三惡道に趣くなり。

『善男子、彼の佛刹中の是の如き衆生も、此の智慧依止受記陀羅尼を聞き、至心に一たび聽かば、彼の諸衆生も、厭離の心を生じて、三惡道を度らん。復衆生有り、曾て信根乃至慧根を修し、亦曾て六波羅蜜を修習し、流轉を樂はずして、梵行を淨修したらんもの、若し此の陀羅尼を聞くを得已らば、壽命を增益し、身に病苦少く、智慧增益し、資財損ずる無く、善根海を長じ、善知識を增し、乃至一切の善業を增益して、皆悉く成就し、正見を成就し、十種の善・三の善根を具足し、樂うて三たび自ら歸し、樂うて諸願を起し、阿蘭若の、三寶を光顯せんことを樂はん。

『復此の智慧依止大受記陀羅尼に於て、至心に聽受し、專精に修習し、讀誦受持し、乃至七日七夜のあいだ、憶念して捨せざれば、是の如き無量の功德を成就す。五無間と、正法を誹謗すると、賢聖を毀呰すると、四重の禁を犯すとを除く。是の如き衆生は、惡趣に墮し、彼に命終して、此の娑婆世界に來生し、彼の業の氣習未だ盡きざるを以ての故に、未來世に於て、應に惡報を受くべし。此の智慧依止大受記陀羅尼を聞くを得るに由つて、現在の身に、勝妙の果報を得る能はずと雖も、

〔一〇〕彼の世界云云。日密分には、弊惡の國土に生ぜずとす(六八八六頁)。
〔一一〕適意の事。同に吉事尠少とす。

く散滅せん。過去の五有の身・口・意の業、有中に生じて受くる不愛の果、所在の生處に、善根を修することを障ゆる四の衰惡、所愛の財を、求めて得る能はざること、舊に親愛する所、悉く皆離散せんこと、樂はざる所の事、悉く和合せんこと、身に諸苦を受け、心に濁亂多からんこと、一切の善根を修習せんことを樂はざること、一切の諸不善法に樂著せんこと、是の如き等の業、悉く滅して餘無けん。善男子、若し一たび此の陀羅尼を聞き、一心に聽受して、七日七夜專精に修習する有らんに、上に說く所の如き諸の惡罪業は、皆消滅するを得ん、五無間と、正法を誹謗すると、聖人を毀呰すると、*四重の禁を犯すとを除く。此の四種の人は、陀羅尼の力を失し、畢定して罪を受けん。

『若し復人有り、是の四罪無く、樂うて善根を修し、檀波羅蜜を修行して種種に布施せんに、是の人則ち、一切の諸佛・菩薩衆・聲聞・緣覺の爲に加護せられ、聖の加「護」を以ての故に、無盡の物を得ん。亦持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を樂ひ、一切の天・人・惡修羅等、沮壞する能はず、常に一切の天王・人王の爲に、見ては恭敬・供養・禮拜せられ、聞いては歡喜し、心に常に憶念し、讚歎守護せられ、命終の時に臨んでは、十方の、曾て念じたる所の佛を見るを得、皆來つて手を授け、是の如きの言を作さん「善男子、我れ今汝を將て、我が世界に向ひ、汝をして十地の位中に安住せしめん」と。彼の人、佛を見て心大に歡喜し、歡喜を以ての故に淸淨有佛の國中に生れ、速に十地に住するを得ん。此の人久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。善男子、此の智慧依止受記大陀羅尼には、是の如き大力有り、大利益有り。

『善男子、彼の娑婆世界には、諸の衆生有りて、涅槃の道に到らず。何を以ての故にとならば、五無間を造り、正法を誹謗し、聖人を毀呰し、四重の禁を犯せばなり。是の如き衆生の、十方の淨土に容れざる所、皆彼の國に生ずればなり。是の諸衆生は三惡道の長夜に於て、種種の諸苦を受く。

※四重の禁、卷三十二、註一七參照。

や不や』と。炎德藏菩薩の言はく『是の如し、世尊、實に聖說の如くなり』と。

爾の時、智德峯王佛、復炎德藏菩薩に告げて言はく『善男子、汝彼の沙婆世界の四天下中、亢旱の處に往き、七日の中に、化して象頭・馬頭の大龍王の身を作し、舊住の龍をして、心に怖畏を生じ、本處に安んぜずして、悉く虛空に騰り、七日の中に大甘雨を澍がしむるや』と。炎德藏菩薩の言はく『世尊、實に聖說の如し』と。佛の言はく『善男子、汝是の如き諸惡龍の中に於て、尙ほ怖畏せず。又汝は過去に、弘誓の願を發し、在在處處に衆生を利益せんとしたるに、何の故にか、今忽ち怖畏を生ずる。汝我が使を受けて、驚怖を生ずる莫かれ』と。

爾の時、智德峯王佛、炎德藏菩薩に告げて言はく『善男子、我れ復汝に智慧依止の大受記陀羅尼を敎へん。汝持して彼に往かんに、怖畏無きを得ん』と。爾の時、炎德藏菩薩、佛に白して言はく『世尊、譬へば智人の、伏藏の上に坐し、手を以て土を把るに、忽ち一寶を得、得已つて歡喜し、復更に重ねて把り、是の如くにして、漸漸に寶を得ること、轉多からんが如く、我も亦是の如く、重ねて如來に問ひまつり、如來無價の法寶を得んことを望む。是の寶を得已つて、諸の衆生を敎化せんと欲するが爲の故に。若し如來の、大法印を開きたまふを蒙らんに、法印の力・如來の力を以ての故に、則ち能く一切の衆生を敎化す［るを得］ればなり』と。

爾の時、智德峯王佛、卽ち呪を說いて曰はく

『怛絰他、珊提囉那奢摩　三摸他那奢摩　阿歧闍那奢摩　䔖淩楞伽奢摩　僧途伽奢摩　拔馱那奢摩　三摩毘沙摩奢摩　婆多那奢摩　三摩羯嵐摩奢摩　遏毘馱奢摩　耶婆闍羅摩羅婆奢摩　耶婆薩婆摩奴闍奢摩　耶婆薩婆怛利陀都　三斯羯利哆奢摩　阿羅波羅奢摩

佛の言はく『善男子、此の智慧依止受記陀羅尼をば、彼の土の衆生、若し聞く有らんに、皆能く下中上の結を輕薄ならしめん。色・無色の有にも、亦復是の如く、恒河沙等の劫の生死の過惡、皆悉

【九】象頭云云。日本分に象龍・馬龍・大金翅鳥龍とす。

すべし。此の陀羅尼は、大勢力有り大利益有りて、能く一切の欲貪・色貪・無色貪を盡し、能く一切の我慢・慢慢・上增慢[六]を盡し、能く一切無明の闇聚を破し、能く一切の諸苦・重擔を捨し、乃至能く盡智・無生智を得、阿耨多羅三藐三菩提を得しむ』と。

時に彼の世尊、呪を說いて曰はく

『怛經他、舍那舍婆　奢摩那舍婆　阿婆叉舍婆　斫芻舍婆　輸嚧哆羅舍婆　伽拏舍婆　什婆舍婆　迦耶舍婆　摩那舍婆　叉婆毘陀　斫芻畢利淡鼻叉婆　輸嚧哆囉阿婆叉婆　伽囉拏帝闍叉婆　視婆婆喻叉婆　迦耶殯囉摩叉婆　摩那烏闍叉婆　阿盧迦若那叉婆　毘闍僧羯摩叉婆　唵句囉呿伽叉婆　婆摩嘍畢也鼻耶叉婆　舍摩迦闍叉婆　叉耶囉婆叉婆　殯哆鼻耶婆叉婆　那都那　泥那都那　阿婆泥那都那　那耶波那夷那都那　伊沙伊婆都庋呿嗚　莎呵

『善男子、汝此の無願順陀羅尼を持し、彼の娑婆世界に往つて、我が辭の如くに曰ふべし「智德峯王如來は、釋迦牟尼佛の、起居輕利にして、氣力安樂なるや不や、正法輪を轉じたまふに、障礙無きや不や、彼の惡衆生は、樂うて所說の日藏法行壞龍境界炎品を聽くや不やを問訊せしむ」と』。

爾の時、炎德藏菩薩、智德峯王佛に白して言はく『世尊、我れ今已に此の陀羅尼を受持す。今娑婆世界に往かんと欲すと雖も、怖畏を懷く、何を以ての故にとならば、我れ親しく佛より、彼の佛の世界は、五濁熾盛にして、彼の諸衆生は、衆苦逼迫し、貪欲・瞋恚・愚癡・邪見あり、女色に貪著し、須臾の間に、能く阿鼻地獄の惡業を成すと聞く。是の義を以ての故に我れ甚だ怖畏するなり』と。

爾の時、智德峯王佛、炎德藏菩薩に告げて言はく『善男子、汝は、彼の娑婆世界の[七]四天下中を[八]飛ぶこと二十一日にして、化して金翅鳥王と作り、彼の大海六十四萬億の諸龍は、汝の形を見るが故に、皆怖畏を生じ、是の因緣を以て、三歸依を受け、乃至阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむる

【六】增上慢。日密分には憍慢を舉ぐ。

【七】四天下中…金翅鳥王。日密分には、二界中間二十一日大金翅鳥云云とす。

【八】飛。三本は非に作る。

卷の第三十六

日藏分　陀羅尼品第二之二

爾の時西方に、此の佛刹を去ること、四十二恒河沙等の諸佛の國土に、是の數を過ぎ已つて、佛の世界有り、堅固幢と名く。其の國に佛有り、智德峯王如來・應供・正遍知と號し、五濁の世に於て、諸の四衆・眷屬の與に圍遶せられて、說法を爲したまへり。時に彼の衆中に菩薩摩訶薩有り、(四)炎德藏と名け、大衆の中に在つて、佛の說法を聽き、虛空を仰觀して、無量無數・阿僧祇の菩薩摩訶薩衆、西方より來つて東方に往くを見、復東方に大光明有るを見、是の事を覩已り、即ち智德峯王佛に白して言はく『世尊、何の因緣を以て、是の如きの事有るや』と。

爾の時、智德峯王佛、炎德藏菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、東方に、此を去る四十二恒河沙等の諸佛世界なるに、世界有り、名けて娑婆と曰ひ、佛を釋迦牟尼如來・應供・正遍知と號し、現に五濁に處り、無量無邊の衆生の爲に、三乘の法を說きたまふ。法母と三寶の種とを久住せしめんと欲するが故に、法行を斷ぜざらんための故に、魔界を破せんための故に、佛の法幢を建立せんと欲するが爲の故なり。十方の一切如來等、皆悉く彼の娑婆世界に至り、共に寶幢陀羅尼を說き、說き已つて、各本刹に還る。今釋迦牟尼佛も、復菩薩摩訶薩、及び聲聞衆の爲に、更に大集會せしめ、四無礙智を以て、三解脫門・清淨の梵行を說きたまふに、娑婆世界の地及び虛空は、皆悉く充滿す。是の諸の大衆は、皆悉く釋迦如來所說の法門を樂聞して、心に厭足無し』と。

爾の時、智德峯王佛、炎德藏菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、汝我が語を持つて、娑婆世界に往き、釋迦牟尼佛を問訊すべし。彼の佛は今日藏法行・壞龍境界——名けて炎品と曰ふ——を說きて、能く一切衆生の惡業を盡したまふ。善男子、我に(五)陀羅尼欲有りて、無願順と名く。汝往送

【一】卷三十二、日密分中四方菩薩集品第二之二（大集部二、二九八頁以下）參照。
【二】堅固幢。同に堅幢といふ。
【三】智德峯王。同に高貴德王とす。
【四】炎德藏。同に光密功德といふ。
【五】陀羅尼……名く。日密分には所謂斷業陀羅尼、隨二無願定一とす。

ぜしむ。流轉の中に於て大に怖畏し、現に無量の大障礙を見るも、悉く能く諸の煩惱を傾動し、疾く無上の勝菩提を證せしむ。一切の衆生は壞する能はざるも、若し此の陀羅尼を聞く有り、速に能く受持して常に憶念すれば、是の如き諸功德を具足せん』と。

爾の時、香象菩薩、山帝釋王佛に白して言はく『我れ已に此の無盡根受記陀羅尼を持し竟り、今彼の娑婆世界に往かんと欲す』と。是の時衆中に、無量阿僧祇の菩薩摩訶薩有り、無垢三昧より起ち、異口同音に、佛に白して言はく『世尊、我等今、渴仰して釋迦牟尼佛及び大集の衆を見、禮拜供養せんと欲す。我れ昔より來、未だ曾て日藏の法門を聞くを得ざりき。唯願はくは、我れ彼の世界に往かんをば聽したまはんを』と。爾の時世尊、諸の菩薩に告げて言はく『善男子、汝の意に隨つて去れ。咸一心にして、【四二】帝釋の像——身色・形貌・長短・威儀・勢力・自在など——を作して、彼の世界に往くべし』と。

爾の時、香象菩薩及び無量阿僧祇の菩薩、咸共に一心となり、悉く皆帝釋王の身を作し、形貌・色像・長短・威儀・勢力・自在など、皆異有ること無く、此の化を作し已り、三たび山帝釋王佛を禮し、右遶三匝し、遶り已つて彼の界より沒し、一念の頃の如きに、即ち娑婆世界に到り、此の刹に入り已つて、諸の香雲を放ち、種種の末香——所謂牛頭栴檀香、【四三】龍身固牢香、多摩羅葉香、沈水香、多伽羅香、【四四】隨六時變異香を雨らし、釋迦牟尼佛を供養せんが爲の故に、香雲を放ち已つて、次第に漸く釋迦牟尼佛の所に向ひ、佛所に到り已つて、帝釋の身を以て佛足を頂禮し、右遶三匝して、却いて一面に立てり。爾の時に當り、釋迦如來は、猶ほ頻婆娑羅王と共に、法行を宣說したまひけり。

大方等大集經卷第三十五

【四三】龍身固牢香、Uragasāra-candana か。

【四四】隨六時變異香、Kālānusāri candana なるべし。

毘夜也　闍㖿毘夜也　鉢邏若阿霤必也毘夜也　阿叔社毘夜也　摩伽毘摩也　遏鼻娘毘夜也　鉢囉帝三陛㚷毘夜也　步䔢毘夜也　坒縟啝毘夜也　摩訶梅怛利毘夜也　摩訶迦霤那毘夜也　摩訶牟帝多毘夜也　摩呼卑叉毘夜也　必利淚薩捶毘夜也　薩捶毘夜也　達摩毘夜也　答摸毘夜也　阿盧迦毘夜也　鉢囉帝婆㖿毘夜也　鉢囉帝輸盧得迦毘夜也　伽伽那毘夜也　摩霤須毘夜也　鉢囉帝多三姹波㚷毘夜也　輸㖿多毘夜也　阿尼蜜多毘夜也　撿鉢囉尼系毘夜也　侯嘍須毘夜也　囉沙毘夜也緊柘那毘夜也　阿鼻三摩夜毘夜也　阿怒㖿　阿怒　撿婆呵者　者遮囉　者遮囉毘姹　柘陛訶翎者遮囉毘姹　毘夜也毘姹　察夜毘姹　阿鋻毘夜也毘姹　阿三姹陀遮囉毘姹　搗畛陀毘姹　阿迦舍毘姹　鞞鉢舍摩毘姹　阿那婆娑毘姹　呵呵呵毘姹　阿囉波囉毘姹　優波舍摩毘姹　薩利羅毘姹　莎波呵

『善男子、此の無盡根大受記陀羅尼は、大威德有り、大勢力有り、能く大に一切衆生を利益し、衆生を攝護し、衆生を憐愍し、衆生を洗除して寂滅を得しむ。男子、此の陀羅尼を持つて、娑婆世界に往詣し、我が所言の如く、釋迦牟尼佛を問訊せよ』と。

爾の時山帝釋王佛、此の陀羅尼を說き已りたまふに、一切の大衆、皆大に歡喜し、讃へて言はく『不可思議なり、大不可思議なり、離障第一の智慧を見るを得たることや。此の大受記陀羅尼を說けば、一切衆生所有の、小罪・中罪・大罪・最大罪、輕重の業障、牢固にして捨し難きもの、能く善根の與に障礙を作すものなどをば、此の陀羅尼は、速に能く除き盡し、無漏道を得しむ』と。

爾の時、香象菩薩、大歡喜を生じ、偈を說いて言はく

『此の無盡根陀羅尼は、最勝第一にして、過ぐる者無し、能く衆生の諸惡業を盡し、亦一切罪の駛河を斷ず。生死流轉の自の所作をば、悉く能く遠離して餘有ること無し、福德中の因緣を以ての故に、一切の苦より解脫するを得、能く生死三有の海を竭して、速に清淨有佛の國に生

すべし。彼の世界に往かんも、應に怖畏すべからじ。
『善男子、釋迦牟尼佛の、本誓願したまふ所は、若し衆生有り、五逆を造作し、方等經を謗り、聖人を毀呰して、波羅夷[四二]を犯さんに、是の如きの人、清淨佛刹に容れざる者をば、皆我が國に生れしめ、我れ當に教化すべしとなり。是の因緣を以て、諸の惡衆生は、悉く其の國に集まるなり。善男子、若し彼の世界の、諸の惡衆生、此の無盡根大受記陀羅尼を聞き、能く七年のあひだ常に慈心・不動心・憐愍心・平等心を行じ、兩舌を遠離し、惡口せず、妄語せず、綺語せず、是の如くにして、晝夜に常に諸佛を念じ、當に淨洗浴すること、晝三たび夜三たび、衣服を整へ、右膝を地に著け、十指の掌を合して、十方の佛前に對し、無盡根大受記陀羅尼を念じ、一心に誦すれば、彼の人七年を經已るに、有らゆる諸難極重の罪業など、皆滅して餘無けん。若し女人有り、自在を求めんと欲せんに、能く七月に、晝三たび夜三たび、前の如く此の無盡根大受記陀羅尼を念じ、一心に誦すれば、是の如きの女人、所生の處に隨ひ、大自在を得、流轉の中に於て、更に復女人の身を受けず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん、唯自ら願せんをば除く。若し女人有り、好夫主を求め、好種姓を求め、大自在を求め、男女を用ひざることを求め、或は多く男女有るを願はば、應當に澡浴清淨にして、淨潔衣を著け、獨閑靜に處つて、晝三たび夜三たび、右膝著地、合掌向佛して、一心に此の無盡根大受記陀羅尼を誦念せば、心の願樂するところに隨ひ、皆意に稱ふを得、求むる所の男女の多少皆得て、端正聰明にして、疑難あること無けん。善男子、此の無盡根大受記陀羅尼は、是の如き大力、是の如き大利益あり、汝生死より已來、未だ曾て聞かざりしなり』と。

爾の時世尊、即ち呪を說いて曰はく

『哆姪他、捨囉娜毘夜也　式叉毘夜也　徙寠履帝毘夜也　鉢囉河娜毘夜也　奔履地毘夜也　因地利夜毘夜也　婆斯毘夜也　攝滕伽毘夜也　三摩地毘夜也　陀羅尼毘夜也　羼帝毘夜也　比梨耶

【四二】波羅夷。卷三十四、註三十六參照。

一念の瞋心をも起さじ。瞋心を離れ已れば、一切の天王、一切の人王、禮拜供養し、乃至速に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

『是の菩薩、[38]毘梨耶波羅蜜を學行せん時、無患の身を得て、大力を成就し、壯健にして智慧あり、精進勇猛にして、能く四攝――布施・愛語・利益・同事――を行じて、衆生を教化せん。四攝を具し已れば、一切の天王・龍王・夜叉王・阿修羅王・迦樓羅王・緊那羅王・摩睺羅伽王・人王など、合掌燒香して、恭敬禮拜し、是の人の名聞流布し、常に一切人天の爲に愛念せられ、樂うて之を見んと欲し、常に擁護せんと欲し、乃至速に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

『是の菩薩、若し[39]禪波羅蜜を學せん時、聖人の加の故に、四禪と四空との三摩跋提、乃至千萬の三摩提門・陀羅尼門、忍門を得、常に一切諸佛の爲に念ぜられ、常に一切の天王・人王の爲に、擁護・愛念・恭敬・拜禮せられ、乃至速に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

『彼の菩薩、若し[40]般若波羅蜜を學せん時、常に諸の佛・菩薩・阿羅漢・辟支佛の爲に擁護せられ、心に安隱を得、憒閙を遠離し、勝法を得、心心數を念じ、聖人の智慧の根を得ることを成就し、具足して一切の法中に入り、所作已に辦じて、疑網の河を度り、一切の結に於て、疑礙を生ぜず、一切の天・人・阿修羅も、壞する能はざる所、常に天・人・八部の爲に、供養・恭敬・愛念・守護せられ、名を聞き、形を見ては、皆歡喜を生じ、樂うて親近せんと欲し、若しは自ら供養し、若しは人に敎へて供養せしめん。此の人臨終に、十方の佛を見、一切の諸佛、皆悉く手を授け、讃へて言はん「善い哉・善い哉、大丈夫、善來、汝を將て、我が清淨の佛刹に往向し、汝をして十地の位中に住するを得しめん」と。是の人、聞き已つて歡喜の心を得、心歡喜するが故に、命終せば即ち佛の淨土に生るゝを得、生れ已つて速に十地に住するを得、久しからずして即ち阿耨多羅三藐三菩提を證せん。善男子、此の無盡砭大受記陀羅尼には、是の如き大力と是の如き大利益と有り、汝當に[41]受行

【三八】毘梨耶（Virya）。譯、精進。

【三九】禪（Dhyāna）。

【四〇】般若（Prajñā）。智慧と譯す。

【四一】受行。信受奉行の謂。

常に樂んで一切の善根を修行せん。

『若し[三五]檀波羅蜜を行ぜん時は、十方の諸佛・一切の菩薩・辟支佛・大阿羅漢など、皆神力を以て加護せん。是の人、聖の加[護]を得るが故に、財寶に多饒なれば、以用て布施するに、窮盡すべからず。乃至能く頭目髓腦をも捨し、嫉妬を遠離して平等心を得、一切の田に於て、心に優劣無く、亦復我れ能く施を行じ、彼を受者と爲すと見じ。是の施を作す時、一切の天龍鬼神・阿修羅・夜叉・乾闥婆等も、障を爲す能はず。唯三種を除く。所謂五逆と、正法を誹謗すると、聖人を毀呰するとなり。此の三種の罪は、一切聖人の神力も、加へざるが故に障礙有り。

『若し[三六]尸婆羅蜜を行ぜん時、常に精進を勤め、忍辱の中に住し、歡喜の心を得、隨順の心を得、衆生を憐愍すること、猶し一子の如く、亦己身の如く、常に一切聖人の爲に讃歎せられ、常に諸天・梵釋・四王・龍神・夜叉・人非人等、刹利波羅門毘舍首陀などの爲に、禮拜供養せられて、聖力の加[護]を得、心自ら高からず、亦他をし毀せず、亦復多く衣食を積んで、支身を趣得することを樂はず、心に憂惱無く、一日夜の六時に於て自ら省み、臥しては安隱を覺えて、多くの惱患無く、衣食豐饒なり。一切の衆生に、慈悲あつて捨せず、心の所念に隨つて、皆悉く空ならず。命終の時に臨んで、諸佛を見るを得、一切の諸佛、皆讃歎して言はん「善い哉・善い哉、大丈夫、善能く戒を持すること、清淨にして破らず。善來、汝を將つて清淨の佛刹に往詣し、汝をして十地の住中に住するを得しめん」と。彼の人、佛を見て清淨の心を得、歡喜の心を得ん。心歡喜する故に、身を捨すれば則ち淨國に往生するを得、速に十地を得、久しからずして卽ち阿耨多羅三藐三菩提を得ん。乃至一念も、此の無盡根受記陀羅尼を聞かんに、是の如き利益を得るなり。

『是の菩薩、若し[三七]羼提波羅蜜を學行せん時は、一切の聖人の神通力加はつて、法忍を得しめ、衆生を見ず、彼を見ず、此を見ず。若し人有り、來つて其の手足を截り、其の耳鼻を割かんも、乃至

【三五】檀波羅蜜(Dāna-pāramitā)。施度と譯す。

【三六】尸は尸羅(Śīla)。戒と譯す。

【三七】羼提(Kṣānti)。譯、忍辱。

或は帝釋の身と作つて衆生を教化し、復餘の刹に於て、或は那羅延の身と作つて衆生を教化し、復餘の刹に於て、或は天の身と作つて衆生を教化し、復餘の刹に於て、或は龍王の身と作つて衆生を教化し、復餘の刹に於て、阿修羅王の身と作つて衆生を教化し、復餘の刹に於て、或は大醫王の身と作つて衆生を教化し、復餘の刹に於て、或は刹利の身と作つて衆生を教化し、復餘の刹に於て、或は婆羅門の身と作つて衆生を教化し、復餘の刹に於て、或は聲聞の身を現じて衆生を教化し、復餘の刹に於て、或は大臣の身を作して衆生を教化し、復餘の刹に於て、辟支佛の身を作して衆生を教化し、是の如き無量の刹中に、種種の色身を以て、現に衆生を化して佛事を作したるに、云何ぞ方に言ふ「我れ今怖畏す」と。

『善男子、怖畏を生ずる勿れ、今汝の爲に[三二]無盡根大受記持心法の行、一切智壞四魔の行、三寶久住の行、壞一切毒龍境界の行、盡一切衆生惡業の行、大慈教化衆生の行、大悲淳至入三惡道救拔衆生の行、於一切衆生作歡喜心の行、斷一切衆生惡見・惡愛・惡願・惡乘の行、解脫一切衆生地獄の行、斷一切女身・得丈夫身の行、說一切法陰無有盡の行、斷一切衆生慳嫉の行、得一切三昧神通無盡の行、攝一切衆生・安置菩提道の行、捨聲聞辟支佛乘の行を說き、乃至得無上最勝涅槃の行を說かん。

『善男子、若し衆生有り、此の無盡根授記の法行を聞き、信樂を生ぜんに、彼の人所有の無量の生死、[三三]恒沙の業障・衆生障・法障・煩惱障の、能く一切の善根を障へ、未だ受けず、未だ盡きず、未だ吐かざる者、是の如き等の業、皆悉く滅盡して、罪報を受けず、惡處に生ぜざらん。唯三事を除く。何者をか三と爲す、一に五[三四]無間と、二に正法を謗ると、三に聖人を謗るとなり。此の三種の罪は、必らず定んで報を受くればなり。善男子、若し衆生有り、乃至一念も、此の無盡根受記陀羅尼と聞き、能く至心に聽き信受し憶念して尊重を生ずれば、彼の人所有の恒沙の罪業も、果報を受けず、

【三二】無盡根云云。日密分には大法・行法り一切の智慧とす。

【三三】恒沙の業障云云。日密分は只三障に作る。業障・煩惱障は業・煩惱が障となるもの、衆生障・法障は、衆生に取り、法に對して障となるものなるべし。

【三四】無間　無間地獄に墮つる因の義。五無間業の略、五逆罪に等し。

『哆経他　頭摩帝頭摩帝　𠼝踦頭摩帝　鉢囉娑婆頭摩帝　薩婆迦頭摩帝　阿鞞却伽搭鞞娜却伽　碎朱却伽　阿婆摸訶却伽　阿娜涅也却伽　毘耶佛履帝却伽　僧迃嘍者却伽　阿泥㕇却佉　盧者那却伽　尸棄却伽　毘底寐囉却伽　郁㒺麼却伽　塢囉却伽　𠼝鼓却伽　耶婆麼那却伽　尤㗚跋却伽　耶婆毘娘那却伽　斫㒺陀姤却伽　耶婆麼娜毘娘那陀姤却伽　必利涘陛陀姤却伽　耶婆毘娘娜陀姤却伽　軓捶履悉寧駐跛薩他娜却伽　耶婆阿𤸫吒達寧阿鞞尼迦佛陀達摩却伽　獨佉却伽　𠼝婆㔩勒伽却伽　毘婆哪毘踦婆　阿那娜娜　阿陛娜娜　三姹陀斫娜娜　薩婆迦囉娜娜囉　薩婆僧薩他哪毘瞿跛娜娜　阿緊若柘娜娜　叉婆叉婆　伊犁伊儸　伊犁伊羅　寐利莎波訶

『善男子、是を〔三〇〕順空陀羅尼と名く。汝持つて娑婆世界に往き、衆生を教化し、釋迦牟尼佛を問訊すべし』と。爾の時香象菩薩、是の如き言を作す『我れ已に此の陀羅尼を受持して、大勢力を得、大利益を得つ。今彼に往かんと欲す。唯一事有り、心に怖畏を生ず。何を以ての故にとならば、我れ親しく、佛より彼の土の衆生、諸の悪貪多く、乃至女人の諂詐弊悪にして、久しく禪を修せしめて五神通を得たる智慧の人も、一念の頃に神通及び諸の功徳を退失し、大地獄に墮つるを聞く。故に我れ今怖を生ずるなり』と。

爾の時、山帝釋王佛、香象菩薩に告げて言はく『善男子、譬へば雪山は、十三の因緣を以て、虚空の中に、清淨の風有らしめ、冷風を以ての故に、熱惱皆除き、一切の河水も悉く皆清涼なるが如し。善男子、是の如く、久しく無生忍を學せる智慧の菩薩も、十三の因緣を以て身心を防護し、煩惱を生ぜず、六根に熱無く、無明河の爲に漂流せられず。智慧の人は、能く愚人の爲に、衆生等の法無きを說き、癡の縛を離れ、五陰の重擔を除かしむ。善男子、汝も十三種の因緣を以て、久しく無生忍を學しつ。何の故にか、我れ今怖畏すとは言ふ。汝は餘の界に於て、或は梵天の身と作つて衆生を教化し、復餘の剎に於て、或は〔三一〕摩醯首羅の身と作つて衆生を教化し、復餘の剎に於て、

〔三〇〕順空。日密分には隨空三昧に作る。

〔三一〕摩醯首羅(maheśvara)。大自在天と譯す。

已りたらんが如きに、佛世界有り、袈裟幢と名け、五濁を具足し、佛を[二六]山帝釋王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し・今現在に說法したまふ。彼の衆中に菩薩摩訶薩有り、名けて[二七]香象と曰ふが、仰いで虛空を觀じ、無量無邊阿僧祇菩薩衆の、南方より來つて、北方に往詣するを見、又北方に大光明有るを見、此の事を見已り、山帝釋王佛に問ふて言はく『何の因緣を以て、諸の菩薩等、南方より來つて北に往詣するや』と。

爾の時、山帝釋王佛、香象菩薩に告げて言はく『善男子、北方に、一由旬の城に、沙を其の中に滿たし、是より北行して、一沙を一世界と爲し「たらん如き數を」過ぎ、是の數を過ぎ已つて、佛刹土有り、名けて娑婆と曰ひ、五濁を具足す、佛有り釋迦牟尼と號し、今現在に於て、無量の大衆の爲に、方便力を以つて、三乘の論議法門を廣說したまふ、衆生を敎化せん爲の故に、法母をして常住ならしめん爲の故に、三寶の性を斷絕せざらんための故に、法行を增長せんための故に、魔の境界を壞せんための故に、法幢を建立せんための故に。十方の諸佛、已に彼の刹に於て、寶幢陀羅尼を說き竟り、各本土に還りたまへり。今釋迦牟尼佛も、復諸の菩薩摩訶薩・大聲聞衆の爲に、妙法を宣說したまふに、娑婆世界の地及び虛空には、大衆充滿して、間に空處無く、佛說を樂聞す。何を以つての故にとならば、彼の佛如來所說の法要は、言辭美妙なること、猶し甘露の如く、一切の聽者、心に疲厭無ければなり。

『善男子、汝能く彼の娑婆世界に往き、法を聽受するや不や。我れ今亦、彼の佛に欲を與へ、幷に[二八]隨順空忍陀羅尼を說かんと欲す。此の陀羅尼は、大勢力有りて、能く大に利益し、能く一切の欲貪、一切の色貪、一切の無色貪を盡し、能く一切の[二九]我慢・大慢・增上慢を盡し、能く盡智を生じ、能く無生智を覺し、能く一切の無明の闇障を裂き、能く一切の苦擔をば除く』と。

爾の時世尊、呪を說いて曰はく

【二六】山帝釋王。日密分に山王とのみ云ふ。

【二七】香象。同に香象王とす。

【二八】隨順空忍陀羅尼門。日密分には隨順空門とす。

【二九】我慢等。日密分には憍慢・慢慢・我慢に作る。

佛に白して言はく『世尊如來の功德・智慧・辯才は不可思議なり、大不可思議なり、最大不可思議なり、我等昔より來、未だ曾て是の如き、壞欲の大陀羅尼を聞くを得ざりき』と。此の語を說ける時、衆中の八萬四千の天女は、至心に聽受して、大信心を生じ、恭敬供養し、卽ち女身を轉じて、男子の身を得、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉を得たり。

爾の時、瞻波迦華色佛、瞻波迦の花鬘を捉り、日行藏菩薩摩訶薩に告げて言はく『善男子、此の華鬘、幷に日眼陀羅尼・四諦順忍陀羅尼を持つて、彼の世界に往き、釋迦牟尼佛を供養せよ。此の陀羅尼は、大勢力有ること、猶し電光の如く、速に能く一切の欲事を破壞し、能く大に利益し、能く一切の欲貪を盡し、乃至能く一切の苦擔を除く。汝持ち去つて、釋迦牟尼佛を問訊すべし』と。時に日行藏菩薩、彼の佛の所に於て、默然として之を受けたり。爾の時、衆中に八萬の菩薩有り、俱に佛に白して言はく『世尊、我等皆、彼の娑婆世界に往き、釋迦牟尼佛及び大集の衆を見、禮拜供養して、妙法を聽受せんとす』と。佛の言はく『善男子、汝の意に隨つて去れ。咸一心に梵天の像――形色・長短・威儀・服飾など――を作して、彼の世界に往くべし』と。

爾の時、日行藏菩薩及び無量百千那由他の諸菩薩等、皆大梵天の像を作し、形色・長短・威儀・服飾等、異有ること無く、此の化を作し已り、佛足を頂禮し、右遶三匝し、遶り已つて復禮し、禮し已つて彼の世界より沒し、一念の頃の如きに卽ち娑婆世界に至る。初め娑婆世界に入るや、卽ち瞻波迦華を以て、釋迦牟尼佛に散じ、積んで膝に至らしめ、是の如くして漸く行きて、佛所に往詣し、佛所に到り已つて佛足を頂禮し、却いて一面に立てり。爾の時に當り、釋迦如來は、猶ほ頻婆娑羅王の爲に、法行を宣說したまへり。

爾の時南方に、此の娑婆世界を去ること、譬へば城の方に一由旬なる有り、沙を其の中に滿し、復一人の、大神力を具せる有り、擔負して行き、一世界を盡しては乃ち一沙を下し、是の數を過ぎ

く、乃至大般涅槃を證するを得、終に更に女人の身を受けざらん――衆生を化せんとて、自ら願ふて身を受けんをば除く。

『善男子、若し此の蓮華陀羅尼を誦すること七遍、諸の藥草を呪して用つて鼓・貝に塗り、若しは打ち若しは吹かんに、其の音聲所至の處に隨ひ、一切の呪咀、一切の厭蠱、一切の毒藥、一切の符書、一切の羂縛・婬欲・煩惱など、能く害を爲さじ。善男子、我れ今此の大力日眼蓮華陀羅尼を說かん』

とて、即ち呪を說いて曰はく

『多經他　徙陀麼帝　毘盧迦麼帝　啞隸、羈須矣利師　遝制　蘇樓遝制　佛地毘佛地摩訶佛地
爵奴摩提　爵奴摩爹、鉢斫底篩達膩　阿羅伽摩盧婆　阿囉伽度盧婆　鉢斫底篩達膩　頻豆頻豆
麼底　質吒質吒鉢斫底篩達膩　弥勒羈旃陀羅提　呵呵質梛、訶須膩弭　訶須迦麼䫂祇、訶須富
那曷囉婆妥　曷囉杉、須訶須衍三蜀　摩帝　訶須毘麼須佛地　訶須夜奇離　訶須毘三麼掏離
訶須三姹爹囉社稗　訶須䫂麼須曷囉誓　訶須呼喊麼訶須者者帝　訶須達麼曷囉誓　訶須捕呼曷
囉誓　訶須跋社麼帝　訶須囉伽曷囉捨彌　訶哆達麼徒蜜帝　訶須薩婆優波陀娜　若茄若　毘社
樹堅　毘者社若若　婆羅末伽若若　啰沙寀須　婆囉伽　獨鼓沙波訶

『善男子、此の日眼蓮華陀羅尼は、能く一切の欲河を乾かし、能く一切の苦海を出でて彼岸に到らしむ。汝當に至心に此の陀羅尼を持して、彼の世界に至り、我より聞くが如くに、彼に至つて之を說け。何を以ての故にとならば、彼の佛の世界には、百千萬種種の魔事・呪藥・蠱道有り、能く衆生所有の善法を壞すればなり。汝等若し此の陀羅尼を誦せんに、一切魔王の內外の眷屬所作の、種種無量の惡事、及び上妙の五欲など、侵惱する能はざればなり。何ぞ況んや餘人鄙陋の穢欲は、能く害を爲さんや』と。

爾の時、日行藏菩薩、無量千億那由他の諸菩薩等、及び無量の百千那由他の諸天及び人の與に、

切菩薩の爲に、[一九]受を離るる不共の行、法に相處無き行、調伏の地行、解脱の行、[二〇]有海の岸に到るの行、三寶の性を久しく住せしめて、盡きざるの行、大慈大悲の行、一切智解脱の行、四種の魔を壞し、外道を降すの行、盡智無生智の行、一切の作業と一切の壽命・陰とを盡すの行を說かん。善男子、今汝の爲に、[二一]日眼蓮華陀羅尼を說かん、此の陀羅尼は、能く衆生をして、生死・三有の牢獄を厭離し、無相三昧、解脱の門、[二二]蘇息の處を得、無相の[二三]三摩跋提を得、[二四]最後一念の身・智を捨てて涅槃に入らしむ。

『善男子、若し人有り、能く一心に、此の日眼蓮華陀羅尼を聽受せんには、是の人所有の、一切の貪欲及び諸の煩惱など、皆悉く微薄となり、捨身の後、[二五]七返天に生れて宿命智を得、欲の爲に染せられずして聖道を得、一切の諸天、皆樂んで供養し、天上の壽盡くれば、復七返人中に生るるを得、欲界に處ると雖も、欲の爲に染せられず、即ち人中に於て聖果を成ずるを得て、常に一切の爲に、供養・禮拜せられん。善男子、若し此の陀羅尼を聞くを得、乃至七遍一心に善く聽く者有らば、此の人命終して七返天に生れ、五通を獲得して、諸天の師と爲り、一切の諸天、皆悉く禮拜・恭敬・供養し、天上の壽盡きては、復七返人に生れ、五神通を得て、人中の聖師と爲り、一切の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅等、皆悉く供養せん。

『善男子、若し人有り、能く天衆中に於て、七遍此の蓮華陀羅尼を宣說せんに、一切の諸天及び天女等、能く一心に聽き、皆五欲を離れ、樂うて禪定を修せん。若し人有り、能く國王の所、或は刹利・婆羅門・毘舍・首陀等の衆中に於て、七遍此の陀羅尼を宣說せんに、是の如き等の衆の、能善く聞かんもの、即ち出家するを得ん。若し女人有り、此の呪を聞き、一心に善く聽き、七日七夜のあひだ、餘事を念せず、專心に誦持する有らんに、此の身を捨し已りて、女身を轉ずるを得、所生の處に隨つて、能く貪等の一切の煩惱を薄くし、阿耨多羅三藐三菩提に於て、退轉する有ること無

【一九】 この二行は。日密分には不共の行と無想の行とす。
【二〇】 有海。煩惱の海なり。この行を日密分には分別生死を分別するの行とす。
【二一】 日眼蓮華陀羅尼。日密分には單に蓮華陀羅尼とす。
【二二】 蘇息の處。阿羅漢、辟支佛の、四智究竟して得る灰身滅智の涅槃。
【二三】 三摩跋提 (Samāpatti)。玄應に依れば、定に入らんとする時をいふ。
【二四】 最後云云。生死界の最後の謂、今は阿羅漢をいふ。
【二五】 七返云云。七返天に生れ、更に七返人界に生れて、聖道成就する者は、預流即ち須陀洹の聖者にして、修惑を斷ぜざる者に就ていへるなり。利根の者は、一生にして直に羅漢果を證す。

怖畏するなり』と。

時に瞻波迦花色佛、此の語を聞き已り、日行藏菩薩に告げて言はく『善男子、汝は今自身の爲に、力を得て自身安樂なるにはあらず。當に一切衆生を利益せん爲の故に、彼に往きて宣說すべし』と。

爾の時、瞻波迦花色佛、日行藏菩薩に告げて言はく『善男子、彼の娑婆世界たる釋迦牟尼佛の大集の衆中に、一優婆塞有り、名けて[一七]毘摩羅詰と名く、是れ汝が身にあらずや』と。時に日行藏菩薩、默然として答へず。爾の時世尊、復更に問うて言はく『善男子、何の故にか默然たる』と。是の如く三たび問ひたまへるに、然る後乃ち答へて、是の如き言を作す『是の如く是の如し。我れ彼の刹に於て、諸の衆生を教化せんと欲するが爲に、故に毘摩羅詰と名く。彼の諸衆生、皆謂へらく、「我は是れ優婆塞毘摩羅詰なり」と。世尊、我れ無量阿僧祇の諸佛刹中に於て、衆生を化せん爲に、種種の身を作せり、或は餘の刹利に於て、梵王の身と作り、或は帝釋と作り、或は炎摩・兜率・化樂・他化自在天王等の身を作し、復餘の刹に於て、或は龍王・阿修羅王・迦樓羅王・緊那羅王・摩睺羅伽王など、是の如き等の身と作り、復餘の刹に於て、或は聲聞 辟支佛の身と作り、或は人王・刹利等の身、婆羅門の身・長者の身・女人の身・童男の身・童女の身と作り、復餘の刹に於て、或は畜生の身・餓鬼の身・地獄の身と作りぬ。此の刹中に、八十百千の諸菩薩等有り、同じく禪定を[一八]修し行住坐臥に、未だ曾つて捨離せず。是等の菩薩、我が娑婆世界に往かんと欲するを見て、皆隨從せんことを樂ひ、釋迦牟尼佛及び大集の衆を見て、禮拜・供養せんと欲し、幷に法を聽かんと欲す。而も諸の菩薩、初行の者有り、其の心未だ定まらず。而も彼の世界には、諸の惡事多しと。是等の菩薩、或は貪樂を生じ、彼處に於て、惡知識に近き、心に顚倒を生ぜんを恐れ、我れ甚だ怖畏するなり』と。

爾の時、瞻波迦華色佛、日行藏菩薩に告げて言はく『善男子、怖るる勿れ畏るる勿れ。今汝等一

【一七】毘摩羅詰。卷三十一、註四六、參照。

【一八】修。麗本並に三本皆樂に作る。今、宮內省本に依る。

醯㝹波陀那揭邏訶波履婆隸　婆娑揭邏醯婆娑揭邏訶波履婆隸　闍帝揭邏醯闍帝揭邏訶波履婆隸　杜囉摩囉娜揭邏醯　杜囉摩囉娜揭邏訶波履婆隸　獨佉珊多跛揭邏醯獨佉珊多跛揭邏訶波履婆隸　阿囉波邏踰陛杜揭邏醯阿囉波囉踰陛杜揭邏訶波履婆隸　阿跛須裨婆須寫　阿跛囉摸跛塵婆卸裨也　毘尼跛阿利　彌也曷囉捨　薩裨伽羯帝莎波訶

『善男子、此の日藏法行・壞龍境界焰品・盡一切衆生惡業陀羅尼・欲四諦順忍をば、汝持つて娑婆世界に往き、釋迦牟尼佛を問訊して、是の如き言を作すべし「東方に無量恒河沙の佛刹を過ぎて、彼に世界有り、無盡德と名け、佛を瞻波迦華色［一四］多陀阿伽度［一五］阿羅訶［一六］三藐三佛陀と號し、今現在に法を說きたまふ。彼の佛如來は、我をして欲を送り、幷に釋迦牟尼佛を問訊せしめて、少病・少惱にして氣力安樂なるや、及び諸の弟子、悉く安隱なるや不や」と。彼の釋迦牟尼佛は、已に能く一切の魔王の境界、一切龍王の境界を破壞し、獨衆聖に超えて、妙法輪を轉じたまふ。但彼の五濁の諸惡衆生は、障礙未だ盡きず、此等の爲の故に、我れ今此の日藏行法壞龍境界焰品一切衆生惡業盡陀羅尼欲を說くなり。此の四諦順忍陀羅尼は、大威德有り、若し人有り、能く受持讀誦せんに、大勢力を得ん』と。

爾の時、日藏行菩薩摩訶薩、是の如き言を作せり『我れ已に此の陀羅尼を受持して、大勢力を得たり、能く彼の國に向つて、具足して宣說せん。但だ彼の世界に、諸の惡事有るを、我れ甚だ怖畏す。何を以つての故にとならば、我れ向に親しく佛口の所說を聞くに、彼の土の衆生、諸の貪欲多きこと、生盲の人の如く、諸の女人等、諸の姦諂多く、人を誑惑し、實には端正ならざるに、自ら端正なりと言ひ、實には大愚癡なるに、智慧の相を現じ、能く衆生をして、貪著に迷沒し、乃至久しく禪定を修して五神通を得、諸の智慧の人も、一念の頃に於て、諸女人の惑亂する所と爲り、是等の神通・智慧・一切の善根を退失し、大地獄に墮つと。彼の諸衆生、是の如き事有り、故に我れ

［一四］多陀阿伽度（Tathāgata）。如來と譯す。
［一五］阿羅訶（Arhat）。應供と譯す。
［一六］三藐三佛陀（Samyag-sam Buddha）。正遍知と譯す。

法常住藏不可思議法門は、能く一切の惡見を斷ち、能く一切の自在を得、能く魔王の境界、及び魔の伴黨を破し、能く魔事及び他の境界を破し、悉く能く一切の外道を降し、能く一切の諸惡毒龍を怖れしめ、能く一切の諸天をして歡喜せしめ、能く善夜叉をして、皆安隱なるを得しめ、能く諸の惡阿修羅・迦樓羅を怖れしめ、能く緊那羅をして、心に歡喜を生ぜしめ、能く摩睺羅伽をして、大怖畏を生ぜしめ、能く刹利をして大信心を生ぜしめ、能く婆羅門を攝して佛法に住せしめ、能く毘舍をして大信心を生ぜしめ、能く首陀羅をして、歡喜心を生ぜしめ、能く一切婦人の貪欲を斷じ、多聞の人をして、大歡喜を生ぜしめ、坐禪の人をして、心に安隱を得しめ、能く一切種種の惡事、及び諸の鬪諍を却け、能く飢饉及び夭・横の死を除き、能く外賊・惡風雨・惡獸・瀑水・非時の寒熱・枯澁・苦辛・惡草等の物を除き、能く法母をして、常住不斷ならしめ、能く三寶を建て、佛の法滅せんと欲するや、大怖畏のことを生じて能く滅せざらしめ、怖畏の衆生に、能く無畏を施し、能く盡智を生じて無生智を覺し、能く一切無明の闇障を破し、能く一切生死の苦擔をば除く』と。

爾の時世尊、即ち呪を說いて曰はく

『嗚經咃、婆尒婆野波履婆隸　婆醯闍訶波履婆隷　必利淚伹必利淚鼻波履婆隸　阿抻訶跋波履婆隸　低誓低社波履波隸　末隸末邏波履婆隷　却偈却伽波履婆隷　阿盧翅阿盧迦波履波隷　薩他迷薩他麼波履婆隷　曷羅誓曷羅社波履婆隸　徒隸徒邏波履婆隸　伽迷伽麼波履婆隸　阿捕婆阿蒱婆波履波隸　羅麼羅羅麼　羅謎羅麼　曷羅斫曷羅邏何囉羅何囉羅麼　貹踏婆攘娜復須伽邏彌復須揭邏磨波履婆隸　斫芻揭邏醯斫芻揭邏訶波履婆隸　輸嚧咀囉揭邏醯輸嚧咀囉揭邏訶波履婆隸　伽羅娜揭邏醯伽羅娜揭邏訶波履婆隸　什婆揭邏醯什婆揭邏訶波履婆隸　迦耶揭邏醯迦耶揭邏訶波履婆隸　麼娜揭羅麼那揭邏訶波履婆隸　馺跋曷利捨揭邏醯馺跋曷利捨揭邏訶波履婆隸　碑須娜揭邏醯碑須娜揭邏訶波履婆隸　相履䟦那揭邏醯相履䟦那揭邏訶波履婆隸　憂波陀那揭邏

ること、猶ほ酔人の、自ら覺知せざるが如く、種種の臭穢あるに、自ら清淨なりと謂ひ、兩舌・惡口して、實語を遠離し、常に婬欲を樂んで非梵行を行じ、實には大愚癡なるに、智慧の相を現じ、心大に慳貪なるに、能く施相を現じ、心に諂曲を懷きて、虚幻不實なるに、質直の相を現じ、他の善事に於て、心に妬忌を生ずるも、口言には讃善し、心に瞋嫉を懷くも、慈忍の相を現じ、常に破壞を樂むも、和合の相を現じ、邪見偏に多きも正見の相を現ずるなり。彼の土の衆生にも、禪定を得、[七]身通[八]を獲るもの有り、或は具足して五通を得る有り、或は久しく四禪定を修する者有り。是の如き智慧の丈夫も、諸の女人の惑亂する所と爲り、心染著に隨ひ、欲の所使と爲ること、猶ほし僮僕の如く、一念の頃に、是等の諸妙功徳を退失して、當に惡道に墮すべし。諸の女人の惡因縁を以ての故に、是の如きの罪を得るなり。

『善男子、彼の佛世界には、是の如き等の種種の諸惡有るも、汝今頗し能く彼の國に往くあるや不や。我れ欲を與へんと欲す。善男子、彼の釋迦牟尼佛は日藏法行壞龍境界熖品盡一切衆生惡業陀羅尼をば説きたまふ。我れ今欲を説かん、所謂四諦順忍陀羅尼なり、汝持つて去るべし。此の陀羅尼は、大勢力有り、大利益有りて、能く一切の[九]欲の貪・色・無色の貪を除き、能く[一〇]我慢・大慢・增上慢を除き、能く一切不淨の資生を除き、能く一切の惡・貪、種種の戲笑、及び諸の歌舞の、利益無き事を除き、能く一切の我見、一切の邊見、一切の疑、一切の[一一]戒取、一切の常見、一切の斷見、一切の衆生見、一切の障礙見、一切の[一二]逋沙見、一切の[一三]富伽羅見、一切の作者見、一切の受者見、一切の色見、一切の聲見、一切の香味觸見、一切の四大見、一切の生見、一切の滅見、一切の法見をば除く。此の四諦順忍は、能く如實に色陰乃至識陰を知り、能く十二入・十八界を知り、知り已つて能く捨す。此の陀羅尼は、能く諸法を照し、悉く能く現に諸の涅槃の道を見せしむ。何を以ての故にとならば、彼の界の衆生は、甚だ大愚癡にして、生盲の人の如くなるも、此の四諦順忍一切

【七】身通。飛行自在の通力、神足通ともいふ。
【八】五通。先の身通に、天眼、天耳、他心、宿命の四通を加へたるもの。
【九】欲は欲界。色・無色は色界無色界の謂なり。
【一〇】我慢等。七慢參照。
【一一】戒取。卷三十一、註四二、參照。
【一二】逋沙(Puruṣa)。士夫と譯す。
【一三】富伽羅(Pudgala)。人又は衆生と譯す。此等の見、卷二十六、八不正見參照。

竟り、各本土に還る。今釋迦牟尼佛、復彼の界に於て、諸の菩薩摩訶薩、大阿羅漢・一切の大衆の爲に、三乘・四無礙智・四梵天行及び四攝の法を演說したまへるに、娑婆世界の地及び虛空に、大衆充滿し、咸皆渴仰して、佛說を樂聞す。何を以ての故にとならば、彼の佛如來所說の妙法は、猶し甘露の如く、一切の聽者、心に厭足する無ければなり。

「又彼の佛の本願の因緣を以て、十方諸刹の諸菩薩衆は、皆其の土に集まる。彼の諸菩薩、或は百劫修行の者、乃至一生にして補處する者有り、十八不共法の中に於て、自ら能く修習し、他に由らずして悟れる者有り、自在を得ること無礙にして、智慧方便の具足せる者有り。是の諸の菩薩、已に彼に集まり已り、一切皆坐し、自の善根・方便力を以ての故に、三昧に入り、三昧に入り已つて、身より光明を放つに、菩薩の光、一燈の如くなる者有り、山上の烽火の如くなる者有り、一日・十日・百日・千日の光の如くなる者有り、無量千萬日の光明の如くなる者有り。彼の菩薩の力を以ての故に、大集の所に於て、遍く三千大千世界を覆へり。彼の娑婆世界をして福德もて莊嚴し、四大の滋味もて、地の轉增勝し、衆生受用しては、身力を增益し、四念處を得、大精進を得、慳貪を遠離し、能く布施を行じ、淨佛刹の諸衆生等の如くならしめんと欲したるが爲なり。是の因緣を以て、諸の菩薩衆は、各各端坐し、自の善根力を以て、諸の三昧に入りて大光明を放てり。

「復十方の諸佛刹中なる菩薩・摩訶薩の、未だ來集せざる者は、禪定より起つて、大光明を見、亦娑婆世界に往詣し、釋迦牟尼佛及び大集の衆を見ん、恭敬禮拜して、妙法を聽受せんと欲す。日藏法行壞龍境界焰品一切衆生惡業盡陀羅尼を聞かんと欲するが故に。諸の菩薩等、彼處に集まらんと欲して、自の善根力を以て種種の三昧に入る。汝も今亦、禪定より起ちて、彼の世界に詣るべし。善男子、彼の佛世界の衆生等は、種種の惡有り、諸の渴愛多く、諸の煩惱の爲に繫縛せらるること、猶し鬪猪の、樂んで不淨に處るが如く、諸の女人等、身體醜陋なるに、自ら端正なりと謂ふ

【六】四梵天行。四種の梵天に生ずる行業、卽ち慈悲喜捨の四無量心なり。

巻の第三十五

日藏分[一] 陀羅尼品第二之一

爾の時世尊、頻婆娑羅王と共に、是の法を說きたまへる時、東方、無量無邊恒河沙等の諸佛の國土を過ぎて、佛世界有り、名けて[二]無盡德といひ、佛を[三]瞻波迦華色王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、今現在に、妙法を說いて衆生を敎化したまへり、彼に菩薩有りて[四]日行藏と名けたるが、仰いで虛空を觀、無量無邊阿僧祇の菩薩摩訶薩衆の、東方より來りて西方に往趣するを見たり。復西方に、大光明有り、是等の菩薩、光を尋ねて去るを見たり。

爾の時、日行藏菩薩、此の事を見已り、即ち坐より起ち、佛足を頂禮し、恭敬合掌して、佛に白して言さく『世尊、我れ空中に、無量無邊・恒河沙等の諸菩薩衆の、東方より來つて、西方に往向するを見、復西方に大光明有るを見つ。何の因緣を以て、此の大光有り、諸の菩薩等、光を尋ねて去る』と。

爾の時、瞻波迦花色佛、日行藏菩薩に告げて言はく『善男子、西方に無量無邊恒河沙等の諸佛世界を過ぎて、彼に世界有り、娑婆と名け、五滓を具足す、其の國に佛有す、釋迦牟尼如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と名く。彼の世界に於て、大集を召集し、方便力を以て、廣く三乘を說き、法門を論議し、衆生を敎化したまふ。法母をして、久住せしめんが爲の故に、三寶をして斷絕せざらしめん爲の故に、法行をして常住せしめん爲の故に、魔王をして勢力を失はしめん爲の故に、法幢を建立せん爲の故に、正法をして久住せしめん爲の故に。是の因緣を以て諸の菩薩等、彼の世界に集まる。十方の諸佛、已に彼處に於て、[五]寶幢陀羅尼を說き

【一】日密分。四方菩薩集品（卷三十一）參照。
【二】無盡德。日密分には無量とす。
【三】瞻波迦華色。同に五功德とす。
【四】日行藏。同に日密に作る。
【五】寶幢。日密分に寶髻とす。

而も駈遣せずんば、彼の刹利等も、是れ三世諸佛の正法の中に、大罪人と爲す。是の如き刹利・婆羅門等、若し彼の惡比丘を駈擯せざらんには、復更に功德・種種の布施を修して、此の罪を免れんと欲すと雖も、終に滅する能はず、要必ず當に阿鼻地獄に墮すべし。是の故に大王、若し自ら利し他を利するを得んと欲する有らば、彼の破戒の人の所に於て、應に擁護すべからず。何を以ての故にとならば、若し彼の惡比丘を供養する有らんには、人・天の善根を失し、三寶の種を斷じて、諸の惡趣に墮すればなり。若し刹利・婆羅門等、行法の比丘を擁護し、彼の惡比丘をして、與共に同住和合して、衣服・飲食を受用せしめざれば、是の刹利等は、布施し、餘の功德を修せずと雖も、卽ち是れ三世諸佛の大檀越にして、能く三世諸佛の正法を持するもの、是の人命終せば、他方の淨佛國土に生れ、久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の故に大王、汝等刹利・婆羅門等は、應當に行法の比丘を擁護し供養し供給すべし。乃至法の滅せんと欲する時、有らゆる如法の比丘をば、應當に擁護し供養し供給すべし。是の因緣を以て、能く三寶をして、久しく住して滅せざらしめん。若し如法の比丘を擁護せざれば、我が法卽ち滅せん。若し法にして世に在らば、能く人天の、惡道に充滿するをして減少せしめん』と。

王の言はく『世尊、何等の人か有りて、[四五]知事と爲り、僧物を守護し、如法の比丘を供養し供給するに堪ゆるや』と。佛の言はく『大王、二種の人有りて、僧事を持し、僧物を守護するに堪ゆ、何者か二と爲すとならば、一には八解脫を具する阿羅漢の人、二には須陀洹等の三果の學人なり。此の二種の人、僧事を知り、衆僧を供養するに堪ゆ。諸の餘の比丘は、或は戒具足せず、心平等ならされば、是の人をして知僧事と爲らしめされ』と。

大方等大集經卷第三十四

【四五】知事(Karmadāna)。羯磨陀那の譯。寺中の事務を司る役。維那、悅衆など稱せらる。

ばなり』と。

佛の言はく『大王、當來世の諸國土の中に於て、信心の刹利・婆羅門・毘舍・首陀有り、如法の比丘に、供給・供養する因緣の爲の故に、若しは伽藍靜處を造り、或は阿蘭若處に、房堂を起立して、如法の比丘に施與し、或は田宅・園林・奴婢・種種の所須・資生の雜物、乃至湯藥を捨せんに、是の如き供養の因緣を以ての故に、彼の諸の施主は、當來世に、或は刹利・婆羅門・大姓等の家、[四〇]六欲の諸天乃至[四一]有頂に生れ、或は他方の淨佛世界に生れ、佛に値ひて法を聞き、久しからずして、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。若し復人有り、我が法中に於て、福德・涅槃の道を求めんが爲の故には、應當に如法の比丘を供養・供給すべし』と。

爾の時、頻婆娑羅王、佛に白して言さく『世尊、是の諸比丘は、破戒の初相を犯すと雖も、然も未だ僧物を盜まず、是の如きの人、云何ぞ如法の比丘と、同じく共に[四二]止住し、飮食・衣服等を和合して受用するを得ざる』と。佛の言はく『大王、我れ今汝に問はん、汝の意に隨つて答へよ。若し王の眷屬・大臣・宰相など、王の國法を犯して種種の罪を造るも、唯死す合らず、刑流の者有らん。是の如きの人、王若し會を設け、歌舞作樂して大集せん時、會に在るを得、次で同じく飮食を受け、共に歡樂するや不や』と。王、佛に白して言はく『世尊、是の如きの人は、尙ほ見んことをも欲せず、何に況んや會所に在り、同じく歡樂を受くるを得んをや』と。

爾の時佛、王に告げて言はく『大王、若し[四三]富伽羅有り、具に諸惡を造り、三惡趣を、[四四]免離する能はざらんに、是の如きの人、他より田宅・園林・象馬・車牛・資生の具を受けなば、此の如きの人は、佛弟子には非ず、沙門に非ず、釋子に非ず、三世の佛法中に於て、是れ大罪人なり。行法の比丘と、乃至和合して、少時も共に住し、同じく衣服・臥具・飮食・湯藥を受くるを得じ。若し刹利・婆羅門・毘舍・首陀、及び聚落の主等有り、破戒の人、持法の比丘と同住し、共に衣服等の物を受くるを見て、

【四〇】六欲天は。欲界にある六種の天、四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化天なり。

【四一】有頂。色界の第四、色究竟天、又は無色界の第四、非想天をいふ。

【四二】止住。麗本住止同に作る。今三本に依る。

【四三】富伽羅(Pudgala)。補特伽羅の略。人、又は衆生と譯す。

【四四】免。麗本勉に作る。今三本に依る。

む因縁の故に、國主・刹利・婆羅門・毘舍・首陀、乃至若しは男・若しは女の一切の施主等、所須を捨すと雖も、空にして所得無く、人・天の路を失して、惡道の中に墮せん。是の故に大王、汝等當に知るべし、彼の破戒の人、慚愧有ること無く、劫盜の心を以て、彼の僧物を取り、以て己が有と爲すを。是の如法の比丘は、其の住處に隨ひ、若しは林中に在り、或は伽藍に在るも、應に共に住すべからず、應に慈愍を生じ、方便示教して、遣して衆より出でしむべし、語つて言へ、「長老、汝等應に此に住まるべからず」と。是の如く三たび諫めて、是の破戒の人、若し去らば善し。若し衆を出でざるも、如法の比丘は、瞋・罵するを得ず、應に國王・刹利・婆羅門・毘舍・首陀、及び勢力有る者に告げて言へ、「此に比丘有り、如法に行ぜず、恒に相擾亂し、我等をして、心を安んじ道を行ぜしめず。惟願はくは撿挍して、侵惱せしむる勿れ」と。而らば彼の國王・刹利、乃至聚落の主等、應當に之を治し、[三九]駈逐して出でしめん。若し彼の刹利王等、彼の破戒比丘の、飲食・財物を取り、驅遣せざらんも、如法の比丘は、亦應に瞋るべからず、住處及び資生等を貪る莫く、默然として捨去し、更に餘處の無難の所を求めよ。若しは山林の窟中、或は阿蘭若地に在るも、其の靜處に隨ひ、彼に就て住せよ』と。

頻婆娑羅王、此の語を聞き已り、悲啼號泣し、佛に白して言さく『世尊、刹利・婆羅門・毘舍・首陀、乃至聚落の主など、衣食・資財の爲の故に、彼の破戒の比丘を護り、共に勢力を與へ、此の如法の比丘をして、其の住處を捨てしめんに、是の因縁を以て、當來の世に、大地獄に墮ち、無量の苦を受け、三惡道に輪迴往反して、免出するを得難く、未來世に、無量無邊・恒河沙等の諸佛、世に出現し、大慈悲を具して、生死の中に入り、苦の衆生を度する有らんも、彼等國王・刹利・婆羅門、及び聚落の主などをして、惡趣の報を捨てて、人天の身を得しむる能はざらん。何を以ての故にとならば、如法の比丘の語を受けざるが故に、又は供給・供養せざるが故に、是の如き等の大罪果の報を受くれ

【三九】 駈。驅に同じ。

きこと難し。何となれば、是の破戒の初相とは、所謂樂うて三寶・和尙・阿闍梨を供養せず、亦四聖種の法を信重せず、修習せず、又三十七助道の法を修行せざる、是を破戒の初相と名くればなり。心に利養を貪り、慚愧有ること無く、諸の俗人と、以て親友と爲り、己が德を稱讚し、以て自ら貢高し、輕蔑誹謗して、他人を毀呰し、心に正法の言を樂說せず、唯好談・無益の語を意び、專ら魔業を行じて、衆僧を惱亂し、他が一語を說けば、十語もて加へ報じ、縱心蕩逸にして、終に相下らざること、猶し惡狗の如く、復飛鳥の、衆聲亂鳴して、唯勝を求めんと欲するにも似たり。復出家して、衆中に處在すと雖も、諂曲虛僞にして、專ら刺毒を行じ、又商人の、種種の物を持つて道に在り、行いて彼の惡賊に逢はんが如し。是の破戒の人は、沙門中の賊たり。又獼猴の、糞もて身に塗り已り、人に[三四]搪突するに似たり。衆の中に在つて、猶し[三五]俱蘭吒華の、無色・無香なるが如く、心に和合せず、恒に諍訟の言を出し、常に利養・名聞等の事を貪り、樂うて惡比丘及び諸の俗人を、以て伴侶と爲して共に談語す。是の諸比丘、乃至未だ衆僧の田宅・園林・奴婢・象馬・駝騾・牛驢を盜まず。是の如き等の物、了知すべきこと難し。是を破戒の初相と名く。若し是の如き等の物を盜めば、是を破戒の等相と名く。是の相出で已れば、比丘の法を失す、是れ[三六]波羅夷にして、沙門に非ず、如法の衆僧と、同じく共に止住するを得ず、應當に[三七]擯出すべし』と。

佛、大王に告ぐらく『是の持戒の比丘は、寧ろ栴陀羅と同じく共に止住せんとも、破戒の人と同じく共に居止せざれ。樹の枯朽しては、火内より起り、根本既に燒くれば、枝葉も亦盡くるが如く、破戒の比丘も、亦復是の如くなり。破戒の火を以て、諸の功德を燒き、善根・果報、悉く盡きて餘無く、未來世に、三惡道に墮ち、遠く慈悲を捨てて魔業を行ぜんこと、譬へば廁[三八]溷の、淨と爲すべからざるが如く、諸の賢聖を謗り、三寶の種を斷ち、法海乾竭して、正法の城を壞し、施主を誑惑して清衆を惱亂し、如法の比丘僧、和合せん時も、違諍して隨はざらん。彼の破戒比丘、僧物を盜

【三四】搪。突くなり。
【三五】俱蘭吒。また拘蘭茶に作る。玄應に依れば、紅色華と譯すといふ。
【三六】波羅夷(Pārājika)。棄・退沒・不共住・斷頭・無餘など譯し、六聚罪の第一にして極惡罪なり。此の罪を犯せば、道を失して僧中に共住するを得ず、永く佛法の外に捨てられ、遂に阿鼻獄に墮すといふ。
【三七】擯出。また擯遣、驅擯ともいふ。犯戒の比丘に對して、之を折伏する爲に本處を擯出するなり。七種七羯法の一。
【三八】溷。かはやなり。

頻婆娑羅王、佛に白して言さく『世尊、我れ今問ひまつる所有らんと欲す。惟願はくは聽許したまへ』と。佛の言はく『大王、汝の意に隨つて問へ』と。王、佛に白して言さく『世尊、若し破戒の比丘有り、如法の衆僧と和合して共に住せんに、彼の上妙の衣食・臥具、資生の所須、乃至湯藥を受くるや不や』と。

佛の言はく『大王、我れ今汝に問はん、汝意に隨つて答へよ。王の國中の、群臣・百官・乃至親屬の如き是の如きの人――若しは一・若しは二、乃至衆多――王の國法を犯し、其の重罪とす合きに、王時に瞋怒して、方に刑戮せんと欲せん。王、爾の時に、大會を設け、歌舞作樂し、歡樂して集まらん時、是の犯罪の人、會に在り、次で食を同じくし、歌舞歡娛して、樂を作すを得るや不や』と。王佛に白して言はく『是の如きの人は、會に在るを得ず、乃至我と相見えしめず。何ぞ況んや、共に集會歡樂を受けんをや』と。

佛の言はく『大王、是の如く是の如し。若し比丘有り、戒を破り罪を犯し、實には沙門に非ずして、自ら是れ沙門なりと言ひ、實には梵行するに非ずして、我れ梵行すと言はんに、是の如きの人は、猶ほ盲人の如く、生死の中に於て、流轉退沒せん。大王、是の如きの人は、三世の諸佛の法中に於て、具に禁戒を犯す。是の因緣を以て、諸佛如來の、棄捨する所たり、佛の弟子に非ずして、是れ魔の眷屬たり、常に惡道に趣き、僧の數より墮せず、如法の僧中に在りて行住坐臥し、同じく房舍・臥具・資生の諸物を受くるを得ず、乃至糠粃をも亦受くるを得ず。何ぞ況んや、衆僧の上妙の供具、資生の所須を受くるを得ん。是の如きの人は、佛法の外にあり、衆の棄捨する所たり』と。

頻婆娑羅王、佛に白して言はく『世尊、是の破戒の比丘は、如法の衆僧と、和合して共に住し、同じく種種の衣食・臥具・湯藥等の物を受くるを得ざらんには、世尊、是の破戒の人、何等の行類・相貌有つて、知るを得べきや』と。佛の言はく『大王、是の破戒の相、初にまだ現れざる時、了知すべ

一切の衆生に於て、慈悲の心を起し、憐愍覆護せん。大王、是の如き僧中に、劫奪する者有らば、大罪報を獲ん。守護饒益せば、大功德を得ん。

『復次に大王、其の所在の、若しは僧伽藍、或は阿蘭若處なるに隨ひ、五比丘有つて、其の中に止住し、戒を持して破らず、清淨に具足し、乃至小罪の中にも、大怖畏を生じ、佛の修多羅中に說く所の定行の如く、若しは自ら讀誦し、他に敎へて讀誦せしめ、他を誹謗せず、他の過を說かず、己が長を稱せずして、謙下自卑し、憍慢嫉妬の心を生ぜず、慈悲もて一切衆生を憐愍し、解脫の道を求め、生死の海を出でんに、是の如き衆僧、若しは伽藍、或は阿蘭若處に在らば、鐘を鳴らして僧を集め、和合して常住僧物乃至湯藥を受用せよ。若し復人有り、如法に供養せば、大功德を獲、劫奪侵陵せば、大罪報を得ん。大王、是の五比丘は、精進して戒を持し、慚愧具足し、小罪の中に於て大怖畏を生じ、頭陀の法を行じ、四聖種に住せん。是の如き衆僧所有の福德は、猶ほ大海のごとくなり、卽ち是れ世尊の天・人・阿修羅中の、最上の福田にして、能く一切衆生をして、諸の苦惱を離れ、涅槃を得しめん。何ぞ況んや十人・二十・三十、乃至百千なるをや。若し信心の刹利・婆羅門・毘舍・首陀有り、供養の爲の故に、鐘を鳴らして僧を集めんに、是の僧の集まらん時、其の中に、或は非法の比丘――若しは多く・若しは少く――有り、如法の比丘と共に、同處に集るに、是の衆中に、乃至五比丘の――持戒清淨にして、慚愧を具足し、小罪の中に於て、恒に怖畏を生じ、終に毀犯せざる――有り、是の如き衆僧、大に精進を修し、世間の有らゆる諸事を棄捨し、惟出世涅槃の道を希ひ、所有の功德は無量無邊ならば、是れ大福田にして、應に世間・天人の供養を受くべし。是の故に大王、汝等應に好く擁護して、如法に安置し、須つ所を供給して、乏少せしむる勿るべし。若し非法の人有り、相欺陵し、輕心もて毀辱せんと欲せんも、汝好く護持して、是等をして之を侵擾せしむる勿れ』と。

らんに、具に種種の所須を捨して、彼の行法の比丘に施し、若し非法の惡人有つて、侵奪欺陵せんに、若し復人有り、方便もて敎化し、侵奪せざらしめずして、語つて言はん「汝等今若し敎に隨はずんば、當に汝の罪を治すべし」と。如し彼の惡人、其の敎誨に隨ひ、彼の欺心を止め、復持法の比丘所受の信施を侵奪せざらんに、是の刹利乃至聚落の主等、得る所の福德は、甚だ多く甚だ多し』と。

王復佛に白して言さく『世尊、若し乃至一比丘有り、能く如法に住するに所有の諸物をば、若し惡人有り、欺陵侵奪せんに、我等刹利及び婆羅門、乃至聚落の主等、如法に治せざれば、當に大罪を獲べし。是の一比丘、所有の資生をば、彼の非法の惡人、侵奪する有らんも、我等刹利、乃至聚落の主等、如法に擁護し、彼の人をして、侵奪欺陵せしめじ。乃至如法に之を治して、大功德を獲べし』と。

佛の言はく『大王、汝所說の如くならず。所以は何となれば、我が法中に諸の比丘有り、假令如法にして、一人より始めて乃至四人ならんも、我れ彼の田宅・園林・象馬・車乘・奴婢等の[三〇]常住僧物を受くるを聽さず。若し五人に滿たば、乃ち受くるを得べし。若し僧伽藍の中、或は阿蘭若處に在つて、持法の比丘、中に在つて止住せば、鐘を鳴らして僧を集め、和合[三一]布薩・[三二]羯磨等の事をなし、房舍・床榻・臥具・湯藥をば、同じく共に受用せよ。乃至百千の衆僧、一の伽藍、若しは阿蘭若處に在らば、鐘を鳴らして僧を集め、和合布薩し、房舍・臥具・衣服・藥湯を、同心に受用して、貪著せず、亦繫念せざれ。其驎陀鳥の、諸肉に貪著し、食盡くれば乃ち止め、終に[三三]中に捨せさるが如くせざれ。持法の比丘は、則ち是の如くならず。初中後夜に、睡眠を減省し、精進誦經し、坐禪修道し、生死に背捨して涅槃の路に向はん。是の如き比丘は、他の短を稱せず、己が長を說かず、謙下卑遜して、自ら憍高ならず、衣食に知足し、頭陀・精進して、放逸を行ぜず、係念思惟して心馳散せず、

【三〇】常住僧物。上に云へる田宅などは、永く一處に定住して分判すべきものにあらざれば常住僧物といふ。

【三一】布薩(Poṣadha)。又、逋沙他など寫し、淨住、長養等譯す。出家は半月每に僧を集め戒經を說き、比丘をして淨く戒中に住し、能く善法を長養せしむるなり。この日、犯す所の罪をば他に向つて懺悔するなり。

【三二】羯磨(Karma)。布薩等を行ふ作法なり。

【三三】中。中途の謂。

思議すべからず、何ぞ況んや一切の、是の福を具する者を毀壞せんをや』と。
佛の言はく『大王、我が現在の如く、及び未來世乃至法の盡きん[時]、其の中間に、若しは信心の善男子・善女人有り、倶に是の如き資生の所須、田宅・園林・象馬・奴婢、衣服臥具、湯藥等の物を捨して、行法の比丘に施與せんに、若し非法の比丘、及び諸の愚人など、彼の施す所を奪ひ、是の刹利・婆羅門・毘舍・首陀、聚落の主等、此の非法の惡人を見るも、如法に治せずんば、大重罪を獲んこと、復彼に過ぎん』と。

爾の時、頻婆娑羅王、佛に白して言さく『世尊、是の如き國王は、國を治せんこと、甚だ難く甚だ難し。何を以ての故にとならば、彼の放逸の王等は、如法に治せず、是の非法の惡人、是の如き罪を獲るなり。若し國王及び刹利等有り、放逸ならざる故に、是等持法の比丘を擁護せん。若しは信心の檀越有りて、彼の須つ所を施し、若しは非法の惡人有つて、侵奪欺陵せんに、當に如法に治すべき者、幾許の福をか得る』と。

佛の言はく『大王、上に說く所の如く、福を具する諸人、若しは復人の、大勢力有るも、獄中に禁閉せられて、具に飢渴・無量の苦惱を受くる有らんに、若し一人有り、大力を具足して、前者に勝れたるもの、彼を獄中より出だし、爾所の諸人を、悉く解脫せしめ、百年を經るあひだ、四事もて供養し、衣・食・湯藥・種種の須つ所をば、備足せざる無けん』と。佛、大王に言はく『彼の有力の人、得る所の福德は、思議すべからず、稱計すべからず、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり』と。佛、大王に言はく『彼の刹利 婆羅門・毘舍・首陀、及び聚落の主等、今現在の如く、及び未來世、乃至法の住せんとき、是の諸人等、如法に彼の非法の比丘、及び愚癡の人を治するが故に、得る所の福德は、復彼に過ぎん。

『若し復人有り、今現在及び未來世、乃至法の滅せんと欲する時に、若しは信心の善男子・善女人有

【三九】四事。次に掲ぐる衣・食等なり。

爾の時佛、頻婆娑羅王に告げて言はく『大王、汝等諸王、及び刹利・婆羅門・毘舍・首陀、聚落の主等、今現在の如く、及び未來世乃至法の住せん[時]、是の時中に有らゆる持法の比丘をば、汝等に付囑す、應に好く擁護すべし。若し信心の善男子・善女人有り、行法の比丘を供養せん爲の故に、或は種種の資生の雜物を捨せんに、汝好く擁護し、非法の比丘、及び諸の惡人をして、欺奪・侵陵せしむる勿れ。若し惡人有りて、如法の比丘所受の信施を欺奪せんに、汝等應當に法の如く之を治すべし』と。

王、佛に白して言さく『世尊、若し國王有り、彼の非法の比丘、及び諸の愚人など、彼の行法比丘所受の信施を奪ふを見、如法に治せざれば、當に幾許の罪報をか得べき。乃至刹利・婆羅門・毘舍・首陀、聚落の主等、此の非法の比丘、及び諸の愚人の、行法の比丘所受の信施を侵奪するを見んに、當に幾許の罪報をか得べき』と。佛、大王に告げたまはく『我れ今汝に問はん、汝意に隨つて答へよ。諸佛如來所有の功德、一切の聲聞及び辟支佛所有の福德を除き、若し一人の、是の如き等の大福德の聚を、具足成就する有らんに、是の人の福德は、是れ多しと爲すや不や』と。王の言はく『世尊、是の如く、是の如し。是の人の福德は、甚だ多く甚だ多し』と。佛の言はく『大王、彼の一人所德の福德の如く、是の如く、一切衆生各皆、是等の功德を備足せんに、若し惡人有り、彼の一切の、福德有る人の所に於て、其の手足耳鼻を割き、生きながら其の眼を挑らんに、是の如き惡人は、幾許の罪をか得ん』と。

王は此の語を聞き、悲泣哽咽して、自ら勝ゆる能はざりき。佛の言はく『大王、何を以てか答へざる』と。時に王、聞き已り、猶ほ復悲泣し、佛に白して言はく『世尊、是の如き愚人、獲る所の罪報は、無量無邊・阿僧祇にして稱計すべからず、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。世尊、若し一人の、上福を具する者の、手足耳鼻を毀壞し、生きながら其の眼を挑らんに、其の罪大多にして、

鬼中に生れ、曠野・無水の處に居在し、生れて便ち眼無く、又手足無く、四方の熱風、來つて其の身に觸れ、形體[二七]楚毒にして、猶し劍もて切れるが如く、宛轉して地に在り、大苦惱を受け、脂・髓・膏など流れて、猶し熱[二八]熬に居るがごとく、魂神迷亂して、大惡聲を出し、具に是の如き百千種の苦を受けて、無量の歲を經ん。然る後、命終して大海の中に生じ、肉團身を受けん。其の形長大なること、百由旬を滿たさん。然も彼の罪人所居の處は、其の身の外面一由旬に於て、中に熱水の狀融銅のごときを滿し、無量百千歲を經るあひだ、是の如き等の種種の苦惱を受けんこと、地獄中の如く、等しくして差別無けん。

『彼より命終して、閻浮提の曠野の澤中に、忽然として化生し、形肉團の如く、猶し大山の如くならん。四方の熱風、來つて其の身を燒き、飛禽・走獸など、競ひ來つて之を食せん。無量歲を經て、爾乃命終して、還地獄に墮し、復無量百千萬歲を經るあひだ、備に衆の苦を受け、然る後、命終して餓鬼中に生じ、乃至肉團の身[を受け]、無量百千歲を經るあひだ、往反・輪廻し、具に衆苦を受けん。其の罪漸く薄くなりて、出でゝ人と爲るを得、無佛の國・五濁の刹中に生れ、生るゝに從つて盲ひ、諸根具せず、身形醜惡にして、人憙見せざらん』と。

佛、頻婆娑羅王に告げて言はく『大王、是の如き罪人は、當來の世に、是の如き等の大惡報を獲ん。所以は何とならば、是れ持法の比丘は、如法に行ずるが故に、信心有る者、種種の資財を、具足施與するに、彼の惡比丘・愚癡の人等は、奪つて自ら用ふるが故に、是の如き諸の惡果報をば獲るなり』と。

爾の時、頻婆娑羅王、此の語を聞き已り、悲泣雨淚し、佛に白して言はく『世尊、我れ今、寧ろ地獄等の身を受けんも、終に是の人身を受くるを欲せず。何を以ての故にとならば、此の人等、是の罪を造るを以ての故に、是の如き大苦果報を獲ればなり』と。

【二七】楚毒。つらいくるしみ。
【二八】熬、乾かしいること。

の比丘を供養せん爲の故に、種種の諸物を捨して、其の須つ所を給せん。若し破戒の比丘、及び愚癡の人有り、彼の持法の比丘の、是の如き種種所受の諸物を奪はんに、彼の信心の人、方便もて持戒の比丘を擁護し、終に彼をして、侵奪・欺陵せしめざらん』と。

頻婆娑羅王、是の語を說き已るに、佛の言はく『大王、善い哉・善い哉、快く是の語を說けり。大王、當來の世に、若しは刹利・婆羅門・毘舍・首陀有り、行法の比丘を供養せん爲の故に、或は田宅・園林・奴婢・象馬、衣服・臥具・飲食・藥湯、資生の所須を捨せん。若しは刹利・婆羅門・毘舍・首陀有り、不信を以ての故に、他の所施を奪はんに、彼の愚人は、現身の中に於て、二十種の大惡果報を得ん。何者か二十なるとならば、一に諸天・善神、皆悉く遠離せん、二に大惡名有り、十方に流布せん、三に眷屬知識、違背乖離せん、四に怨憎・惡人と、同じく共に聚會せん、五に所有の資財、悉く皆散失せん、六に心狂ひ癡亂して、恒に躁擾多からん、七に諸根具せざらん、八に睡臥不安ならん、九に恒常に飢渴せん、十に所食の物、猶ほ毒藥の如くならん、十一に所愛の人、悉く皆離別せん、十二に事を共にするの人、常に鬪諍多からん、十三に父母・兄弟・妻子・奴婢など、其の言を信ぜざらん、十四に有らゆる隱密・覆匿の事をば、知識・親友など、共に相顯露にせん、十五に所有の財物、[二六]五家に分散せん、十六に常に重病に遇ひ、人の瞻視する無けん、十八に資生の須つ所、常に意に稱はざらん、十八に形體枯悴せん、十九に久しく勤苦を受け、免離するを得難からん、二十に常に糞穢に處り、乃至命終せん。

『大王、是の愚癡の人、現身の中に於て、是の如き等の二十種の、諸惡果報を得、命終の後、阿鼻地獄に墮して、一劫のあひだ苦を受け、飢しては鐵丸を食し、渴しては融銅を飲み、熱鐵鉗を用つて、以て衣服と爲し、行住坐臥に受くる所の物、皆是れ火聚、六方より熾焰更に相通徹せん。

『彼の諸の罪人は、阿鼻地獄に於て、具に是の如き種種等の苦を受け、彼より命終して末伽車駄餓

【二六】五家云云。日害分相當文には水火侵奪とあり。五家は五大の謂なるべし。本卷註二三參照。

報を受けん』と。

爾の時、頻婆娑羅王、佛に白して言はく『世尊、若しは善男子・善女人、若しは刹利・婆羅門等、如法の比丘を供養せんと欲するが故に、彼の田宅・園林・種種の諸物・資生の所須を捨せんに、是の破戒の者、他の所受を奪ひ、唯自ら己に供し、是の因縁を以て、是の如き等の大惡果報を獲とならば、若し在家の人、彼の持戒・行法の比丘の、是の如き布施・種種の資生を奪ひ、而も自ら用ひんに、是の諸人等、幾許の罪をか得る』と。佛大王に言はく『須く此れ幾の罪報を得るやを問はざれ』と。

王復、佛に白さく『若し未來世に、刹利等有り、種種の諸物を以て、持法の比丘に施與せんに、是の因縁を以て、諸の比丘等、多く資生有らん。是の刹利・婆羅門・毘舍・首陀など、佛法及び因果を信ぜざるが故に、又罪をも畏れざらん。是の如き人輩、奪つて用ひんに、幾許の罪をか得ん』と。佛の言はく『大王、是の諸人等は、他の施を奪ふが故に、當に無量の大惡果報を得べし。若し我れ具說せば、重ねて彼の罪を增さん。所以は何とならば、是の刹利・婆羅門・毘舍・首陀など、淨心もて彼の行法比丘に、種種の諸物を施し、是の比丘等、多く資生有り。是の如き愚人は、猶ほ彼の癡驢のごとし。不信を以ての故に、他の所受の種種の施物を奪ひ、自ら己に供す。是の因縁を以ての故に、當に大罪を得べし。彼の人若し我の、惡業の差別・種種の果報を說くを聞きつゝ、誹謗して信ぜざらんに、是の如き愚人は、二種の罪を得ん、一は他の所施を奪へる「罪」と、二に我が所說をば、誹謗して信ぜざる「罪」となり』と。

頻婆娑羅王、復佛に白して言さく『世尊唯願はくは之を說きたまへ、唯願はくは之を說きたまはんを。當來の世に、若しは刹利・婆羅門・毘舍・首陀などの、四種姓中に於て、佛法を信じ、深く因果を識り、罪を怖畏する有らんに、佛所說の初中後の、善くして義味甚深なるを聞き、清淨の梵行を純備具足せん。是の如きの人、聞き已つて能く信じ、如法に修行して、諸の功德を作さん。復行法

精進を求めず、用て佛法僧を見聞せざるが故に。是の因縁を以て、佛世に値はざるなり。彼の惡比丘は、當來の世に於て、是の如き等の、大惡果報を得べし』と。

爾の時、大德伽耶迦葉、此の語を聞き已り、悲泣雨涙して、佛に白して言はく『世尊、我れ佛所說の義を解する如くんば、寧ろ地獄に處つて、具に衆の苦を受けんも、終に此の破戒の身を受けざらん。所以は何となならば、此の身を得て復出家すと雖も、衣食の爲の故に、具に禁戒を犯し、他の淨施を受けて、是の如き等の種種の苦惱を獲ればなり』と。

佛、迦葉に言はく『是の如く、是の如し。汝所說の如し。寧ろ地獄に處つて、種種の苦を受けんも、人身を受けて、是の如き等の破戒の罪業を起さざれ。何を以ての故にとならば、地獄の罪、畢らば、更に新なるを造らざるが故なり。業盡き已れば、便ち苦の報に於て、解脫を得ん。迦葉、諸身の中にて、人身は得難し、人身を得已るも、佛の出世に値はんこと、復是よりも難し、佛の出世に値ふも、出家受戒せんこと、是れ最も難しと爲す。所以は何とならば、戒を受くるを得已つて、如法に修行すれば、能く苦の際を盡し、諸の漏の結を斷じて、解脫を得ればなり。是の淨信心の善男子・善女人の、若しは刹利・婆羅門・毘舍・首陀など、淨行持戒の比丘を供養せんと欲し――其の具足せる福德善根を以ての故に、或は家宅・園林・靜室・奴婢・象馬・牛羊等の物、種種資生を捨し、以て常住僧業と爲さん――彼の比丘をして、身心安隱に、善根を集せしめんための故に――とせんも、是の愚癡の比丘は、淨戒を毀犯し、諸の善根を捨し、淨念を遠離して、專ら非法を爲さば、彼の善男子等は、供養せざらん。是の因縁を以て、衣服・臥具・資生の所須は、皆充足せず、便ち是の念を作さん「我れ大智人は、彼れ施す所の諸物を受くべきに堪ゆ」と。或は檀越豪强の勢力を假り、他の如法の比丘所受の諸物を奪ひ、唯自ら身に供して、以て私用と爲し、「是れ已が有なり、此れ[二五]僧物には非ず」と言はん。彼の愚癡の人、是の罪を造るが故に、當來世に於て、是の如き等の諸惡果

【二五】僧物。衆僧共有の物件なり。施者の意志に依り、一結界中の、現前の衆僧に屬する現前僧物と、四方の僧に屬する四方僧物の別あり。

をして、供給・供養して、其の須つ所を施し、諸の功徳を修し、三乘の中に於て解脱を得しめんと欲するが故に。[二二]若し未來世に、善男子・善女人の、信心清淨なる有らんに、如法に修行する諸比丘を、供養せんと欲するが故に、或は家宅・園林・田地・奴婢、乃至資生の種種の所須を施さん。

『爾の時、若し破戒の比丘有り、他より捨する所の、乃至一華・一果をも受けんに、是の惡比丘は、愚癡を以ての故に、他の淨心の施する所の諸物を受くれば、大惡報を獲、現在世には、四の惡報を得ん。何等をか四と爲す、一に惡名遠く聞えて十方に流布し、二に父母・師長・兄弟・眷屬、奴婢・親戚など、皆悉く離散し、三に大重病を得て、糞穢中に臥し、惡報の相現れ、痛苦して死し、四に衣鉢坐具、所有の資財など、[二三]悉く五家の爲に分散せらる、是を四種の惡報と名づく、未來世に復、四種の大惡果報を獲ん。何等をか四と爲す、一に身壞命終して、大地獄に墮し、二に地獄中に於て、久しく[二四]衆苦を受け、地獄に[命]終し已つて、復畜生・餓鬼道中に生れ、無手足の報を受け、曠野・無水の處に居在し、百千萬歲を經て、具に辛苦を受け、三に彼より命終して、毒蛇中に生れ、無眼の報を得、無量歲を經て、唯土を食し、四に彼に命終して、人中に生るゝを得んも、五濁の世に墮し、諸佛に値はず、彼の世中に、人身を得と雖も、常に眼目無く、亦手足も無く、曠野に住在して、唯世間所棄の穢食を食し、恒に充足せず、人と同じく共に止住するを得ず、彼より命終して、復地獄に墮し、三惡道に於て、免出するを得難からん。

『何を以ての故にとならば、彼の善男子・善女人は、淨心もて、田舍・園林・衣服・湯藥・種種の諸物を捨施するは、唯如法の比丘を供養せんと欲するなり。然るを破戒の者、他の所施を受けて、唯身に供せんと欲し、如法持戒の比丘に與へざればなり。是の因緣を以て、是の如き罪を獲るなり。

又破戒の者、久しく生死に處り、具に諸の苦を受け、人身を得と雖も、佛世に値はず。所以は何となれば、諸佛如來は、思議すべからず、値遇すべきこと難し。彼の破戒の者、法母を斷滅して、

【二二】若。麗・宋二本は是に作る。今元・明本に依る、

【二三】「悉く云云。日藏分相當文には或爲火燒、惡賊所劫とあり、五家は地水火風空の五大の謂なるべし。

【二四】衆。麗本の三本勤に作る。今明本に依る。

菩薩、及び聲聞衆と、皆悉く之を受けん。

『若し未來世に、善男子善女人有り、三寶を供養せん爲の故に、能く是の如き種種の諸物を捨し、講讀の論堂・經行の禪室を建立し、其の所須を給せんに、我れ悉く知見して、隨喜を生じ、諸の菩薩及び聲聞衆と、同じく共に受用せん。何を以ての故にとならば、是等をして大果報を得しめ、三惡道に於て、遠離を得しめん爲の故に、其の欲する所に隨ひ、三乘の中に於て、不退轉を得、乃至各三乘に於て、般涅槃せしめんための故に。

『又善男子善女人は、是の如き等の、種種の諸物を以て供養せる因緣の故に、未來世に於て、當に二利を得べし。何等をか二と爲すとならば、一に法利、二に財利にして、その所生の處に隨ひ、資財具足せん。[二〇]宿習の因緣の故に、是の諸物に、慳悋を生ぜず、悉く能く捨施せん。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を供養せんと欲したるが爲の故に。其の住處に隨ひ、或は山林・樹下・[二一]阿蘭若處・憒鬧の聲無く、坐禪・係念すべきに堪ふるの處に在るに、塔寺・房堂・靜室を建立し、彼の所須に隨ひ、皆能く給施せん。是の比丘等、彼の施を受け已り、如法に行ずるが故に、天・龍・夜叉など、其の所在に隨ひ、皆悉く擁護せん』と。

爾の時佛、諸の比丘に告げて言はく『汝等當に知るべし、十方の諸佛は、已に曾て、此の娑婆世界に於て、深き禪定に入り、大神通を現じ、魔王及び諸龍等を破壞し、衆生を慈愍したまふが故に、妙法を演說したまひ——三寶をして久しく世間に住せしめん爲に——各此の土に於て、佛事を作し已つて、本國に歸還したまへり。爾の時、恒河沙等の如き諸佛世界の、無量無邊・阿僧祇の菩薩摩訶薩は、我を見て禮拜供養せんと欲したり——正法を聽聞し、及び受持せんための故に。復虛空目修多羅・四無礙の法を說くを聞かんが爲に、各他方より、此の刹に來集す——慈悲もて諸衆生を憐愍するが故に。禪定に入り、大威力を現はし、魔王及び諸の龍等を破壞したり。此の土の諸の衆生輩

【二〇】宿習。宿世に修習したるの謂。

【二一】阿蘭若(araṇya)。閑靜、遠離處など譯す。人里離れたる處。

は、大善根力もて、三昧に入り、此の光明を放ち、遍く三千大千世界を照し、又彼の十方の諸佛如來も、會て此の刹に於て、佛事を作し已り、本國に還つて、今共に加護して、此の諸菩薩摩訶薩等をして、禪定に入り、神通力を現ぜしめたまふ。現在及び未來世に、三寶をして、久しく住まつて斷絶せざらしめんが爲の故に。是の菩薩の神通・光明の因緣力を以ての故に、諸の天・龍・夜叉・羅刹・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の、未だ信ぜざる者をして信ぜしめ、已に信ぜる者をして、增長せしめ、正法の中に於て、大精進を發し、如法に修行すること、自在無礙にして、不退轉を得、乃至涅槃の正道を修學し、具足して滿たさしめんための故に。是の諸の菩薩、所住の處に隨ひ、當來の世には、是の中に應に塔・寺を起立し、法堂を造作し、[一四]舍利・經法・形像を安置し、種種の七寶を以て、供養を修すべし、所謂[一五]金・銀・琉璃・車渠・馬瑙・頗梨・眞珠・珂貝・璧玉、及び上の繒綵、種種の衣服・床[一六]榻臥具、種種の幡蓋・袈裟・法服、種種の瓔珞・華香・末香・塗香・燒香などなり。また諸の音樂を作して、禮拜供養せん。生死に恐怖せる衆生をして、涅槃の道を求め、功德を修せしめん爲の故に』と。

爾の時世尊、是の如き言を作したまふ、『未來世に於て、若しは善男子・善女人有り、三寶の所に於て、是の如く[一七]布施せんに、我れ悉く之を受くべし、彼の衆生をして、三乘の中に於て、其の所樂に隨ひ、不退轉を得しめん。若し復人有り、供養の爲の故に、或は一の舍、一の[一八]僧伽藍を造り、[一九]經行の處として園林を布施し、衣服・飮食・臥具・床褥、種種の湯藥もて、之に供養せん。或は講讀の論堂・經行の禪室を建立し、中に於て奴婢・田宅・象馬・車乘・陀驢・牛羊、種種の諸物・衣服臥具、及び諸の湯藥・資生の所須を布施し、持法の比丘をして、身心安隱に、坐禪・修道・講讀・論義し、如法に修行して、具足莊嚴し、勝自在を得しむる有らん、涅槃の道の故に、佛法をして久しく世に住せしめんと欲するがための故に。是の如き等の、種種の諸物を捨せんに、我れ爾の時に於て、諸の

【一四】舍利(Śarīra)。總じて死屍に名くれども、今は佛の身骨なり。これ戒定慧の熏習によつて成ずる所なりとせらる。
【一五】金(Suvarṇa)、銀(Rūpya)、琉璃(Vaidūrya 青色の寶石)、車渠(Musāragalba 海中の大貝なりと云はる)、馬瑙(Aśmagarbha 玄應によれば赤色寶なりと)、頗梨(Sphaṭika 水精)、眞珠(Rohitamukta 赤眞珠卽ち珊瑚)。珂は美石、貝は貝殼の美なるもの。
【一六】榻、細長いこしかけ。
【一七】布施、Dāna の譯、財事を布與惠施するなり。
【一八】僧伽藍 Saṃghārāma 衆園と譯す、衆僧の住する園林なり。
【一九】經行、一定の地を旋繞・往來すること。

し、勝忍陀羅尼、諸の深三昧に入りぬ。

是の諸菩薩、或は[一]百大劫を經る中、菩薩行を修したる有り、無生法忍乃至十地を得、十八不共・四無所畏等の諸功德法を具足修習したる有りて、各勝忍陀羅尼・諸深三昧の因緣力を以ての故に、大光明を放てり。其の中に、或は光有つて、燈炬・野火の明の如くなる有り、釋梵・諸天・大梵王の光の如くなる有り、又一日の光、二・三・四・五など、是の如く轉倍し、乃至百千萬億の日光の如くなるあり。此の諸の光明は、遍く三千大千世界を照すに、其の中の衆生、斯の光に遇ふもの、身心安樂にして、皆大に歡喜せること、人の熱に悶えたるが、淸涼の池に入りたらんが如くなりき。是の光能く、衆生の三惡道の苦、飢渴・寒熱・種種の諸病、及び貪瞋癡・邪見等の患を除き、乃至能く三界獄中の、有らゆる恐怖厄難の衆生をして、苦際を盡さしめたり。

此の時、此の刹の諸衆生等、光の力を蒙るが故に、咸共に深心もて、佛・法・僧寶をば、恭敬・供養し、尊重讃歎して、諸惡を厭捨し、勤めて善法を修したり。是の諸光、乃至遍く十方を照すに從ひ、恒河沙等の如き諸佛世界、淨穢等の刹、有佛・無佛のところを普照せること、猶し重夜幽闇の中に、忽ち百千萬億の日光、俱時普照したるが如くなりき。此及び他方の恒河沙の刹土をば、光明の遍照せること、亦復是の如くなりき。

爾の時、十方恒河沙等の諸佛世界に、諸の菩薩摩訶薩等有り、佛の神力を承け、一念の頃に於て此の刹に來至し、各一面に在つて、結加趺坐しぬ。是の諸菩薩は、或は百千の大劫を經て、菩薩行を修したる有り、或は乃至[二]十地を具足したる有りて、皆悉く十八不共法・四無畏等の諸功德を修習し、各善根福德力を以ての故に、深三昧に入つて、大光明を放ち、遍く三千大千世界を照すに、其の中の有らゆる魔王・龍王乃至人天などの、諸の光明に、皆悉く現れざりき。

爾の時世尊、諸の聲聞・[三]四衆等の衆に告げたまはく『汝今應に知るべし、此の諸菩薩摩訶薩等

【一】百大劫。菩薩の修行は三阿僧祇、百大劫に亘るものとせらる。

【二】十地。菩薩修行の階梯を、十信・十住・十行・十廻向・十地・妙覺・等覺の七科に分つ中の第五位にして、是に歡喜地、離垢地、發光地、焔慧地、極難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地の十階あり。

【三】四衆。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ。四衆といふ。

爲に不淨の法を說き、繫縛を斷じて、七菩提分を滿さしめん。我れ嫉妬の心無し、憐愍の故に說を爲す、菩薩此の法を聞かんに、菩提心を捨てざらん。十方一切の佛も、已に曾て此の刹に住し、晝夜常に加護して、佛法をして久住せしむ。汝等諸菩薩も、此の刹の衆生を愍み、常に歡喜の忍を生じて、我が法をして久しく住まらしめよ。我れ聲聞法を說くに、貪欲の心を斷ち、五陰と諸入と、及び十八界との空なると、十三の奢摩他、及び毘婆舍那を示さんが爲なり。能く斷ち難き愛を斷たば、是の人清淨を得、頓に無漏の行と、聲聞の四眞諦とを說くは、衆生を憐愍するが故なり、法をして久しく住まらしめん爲なり。此の四諦の法を說くは、生死の海を度らしめんためなり。復諸菩薩に告ぐ、汝等疑を生ずる莫れ、佛當に汝等の爲に、廣く菩薩の行を說くべし』と。

爾の時、此の娑婆世界中の、あらゆる衆生――佛の會に在る者――是の如き念を作せり『如來は今、聲聞法を說き、菩薩道を說かざらんと欲したまふなり』と。十方世界の諸來菩薩は、復是の念を作せり『如來は慈愍もて、我等をして、此の世界に於て、諸の禪行を修せしめんと欲したまふ。三寶の種をして、斷絕せざらしめんための故に。此の刹中の、あらゆる天・龍・夜叉・羅刹・乾闥婆・阿修羅、乃至人非人など、未信の者をして信ぜしめ、已信の者をして、增進せしめんための故に。一切の衆生をして、悉く安樂を受け、諸の疑悔を捨てゝ、涅槃の八正道を滿足せしめんと欲したまふ故に。此の佛刹をして、大福德有り、衆の善法を具足・熏修せしめんための故に』と。

十方世界の、あらゆる衆生は、是の如き念を作す『娑婆の佛刹は、福德吉處なり、我れ今彼の佛刹中の、諸菩薩等を、恭敬・尊重・供養・禮拜せん』と。各是の念を作す『我れ今應當に、此の世界に於て、結加趺坐し、各各種種の勝忍陀羅尼門、及び諸の三昧に入り、大光明を放つべし。諸の衆生を利益し、安樂ならしめんための故に』と。是の念を作し已り、即ち此の刹に於て、加趺して坐

爾の時衆中に、一の大梵天王有り、名けて[五]功德蓮華光と曰へり。已に昔日に於て、無量無邊の諸佛を供養し、諸の佛所に於て、諸の善根を[六]植え、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉を得、心を[七]緣法に繫け、善く慈愍を修したるが、卽ち坐より起ち、合掌向佛して、偈を說いて言はく

『大聖の神通力は、能く速に諸刹に遍じ、心の所礙無きが如く、光もて十方の國を照らしたまふ。巧に奢摩他、盡智及び方便、阿那波那の念、及び四無量等を說きたまふ。佛は三界の中に於て、生死の際を已に捨し、淨慧悉く滿足して、人・天・修羅に勝れたまふ。已に愛の縛を離れ、疑を度して彼岸に到り、諸の菩薩は、現に佛の法を證し、衆生は心亂るゝが故に、生死の河に墮在し、盲の見る所無きが如く、常に苦の沒する所と爲り、善知識を遠離し、清淨の法を聞かず、生死の中に輪迴し、諸の結の爲に縛せらるゝを了知したまふ。佛は生死の海を度つて、慈悲の故に法を說きたまふは、煩惱の衆生、生死の羅網を斷たんが爲なり。愛は煩惱の本たり、諸の衆生染著す、[八]能仁は巧に分別して、生死の際を盡さしめたまふ。癡愛の因緣を以て、諸の功德をば修せず、若し能く之を斷たば、六根皆寂滅なり。大慈牟尼王は、悲心もて說法を爲したまふ、聞き已るに癡愛を除き、甘露の涅槃を獲るなり』と。

爾の時佛、功德蓮華光大梵王に告げ、偈を說いて言はく

『過去に諸の度を修し、今亦是の如くに行じて、聲聞乘及び辟支佛地を樂はず。復諸の衆生有りて、數瞋恚の心を起し、及び二乘等を念ずる、是を則ち障礙と爲す。是の諸障を以ての故に、佛法を退失し、是の障を起さざる者、佛法滿足するを得。[九]四生の衆生有り、俱に此の刹に來至す、唯愛欲の身に非ず、盡く不淨を念ずるものに非ず。是の中の大智人は、能く菩提道を行ず。已に嘗て久しく、定・忍・總持等を修習し、能く諸根を守護し、正念もて加趺して坐せり。自の境界に安住せよ、佛は當に汝の爲に說くべし。五[一〇]欲を樂ふ衆生には、

【五】功德蓮華光。日藏分には蓮華光功德大梵とあり。
【六】植。麗本殖に作る、今三本に從ふ。
【七】緣法の慈。三緣の中の法緣の慈をいふ。
【八】能仁。釋迦牟尼(Sakyamuni)の譯。
【九】四生。胎、卵、濕、化の四種の生れ方。
【一〇】欲。麗本、衆に作る、今三本に依る。

卷の第三十四

隋天竺三藏　那連提耶舍譯

日藏分　[一]護持正法品第一

是の如く我れ聞く、一時[二]婆伽婆、王舍城[三]迦蘭陀竹園に在し、大菩薩――其の數無量にして稱計すべからざる――の與に、前後圍遶せられ、及び餘の十方諸佛世界の無量無數・不可思議・阿僧祇の、諸大菩薩・聲聞の衆――地及び虛空に、皆悉く遍滿し、倶に來つて集會せる――に前後圍遶せられたまひ、復十方無量世界の帝釋天王、梵天王、四大天王、諸大龍王、夜叉王、乾闥婆王、阿修羅王、迦樓羅王、緊那羅王、摩睺羅伽王など、是の如き等の無量無數・不可稱計なるが、倶に來つて集會し、復欲界・色界の天龍・夜叉・羅刹・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等有り、皆悉く一心に如來を瞻仰したり。

爾の時世尊、諸の大衆の爲に、虛空目[四]阿那波那甘露の法門、四無量を說き已り、默然として坐したまへり。娑婆世界の、地及び虛空の、一切の大衆も、亦皆默然として合掌し、佛に向つて、唯如來甘露の法雨を悕がひ、厭足する無きこと、猶し重病のもの、良醫に遭はんことを思ふが如く、大闇に在るもの、光明を見んことを思ひ、大河に溺れたるもの、彼岸に登らんを思ふが如く、急難に遭へるもの、依護を思求するが如く、是の如く、娑婆佛刹の地及び虛空に遍滿せる、諸大菩薩及び諸聲聞、釋・梵天王・摩睺羅伽王、乃至人非人等も、合掌して默然と、如來法王を瞻仰しまつること、亦復是の如くなりき。

【一】卷三十一。日密分、護法品參照。

【二】婆伽婆 Bhagavat また薄伽梵とも寫す。佛十號の一、世尊と譯す。佛地論に六義、大論に四義を出せり。

【三】迦蘭陀竹園、(Kar..ndaka) 長者の所有なりし竹林にて、王舍城と上茅城との間に在り。佛に上つて僧園となす。これ僧園の初、所謂竹林精舍なり。

【四】阿那波那 (Anāpāna)。出入息を數へて、心を鎭むる觀法、數息觀といふ。

月藏分別刊に就て

大方等大集經六十卷の中、月藏分(卷四六――五六)は、矢吹博士が、その飜譯を擔當されてゐる。然るに月藏分の次には、尚ほ須彌藏分と十方菩薩品との四卷がある。大集部第一、第二に、卷一から卷三三までを出したので、順序から云へば、大集部第三には、日藏分と、月藏分の一部を載すべきである。

然し經の內容から云ふと、日藏分と月藏分との間に、直接の連絡が無く、說話の次第も存するわけでは無いから、便宜上月藏分のみを別出して大集部第四とし、日藏分の次に最後の二品を加へて、大集部第三とした。一の纒つた月藏分を、二分して、大集部第三、第四に載錄するの、却つて讀者に不便なるを思つたからである。(編輯者記)

のが黠とは云何」との問に對して、佛が五十法を以て答へ、一一の法に、皆校計を云ふところから五十校計と名が付いたので、一一の法中に皆百八を數へて居る。即ち始に百八の癡を盡し、次には百八の欲を盡し、乃至百八の眞を得、百八の盡力を證するまで、五十を數へて居る。この百八の數へ方が本經獨得のもので、摩訶止觀五下には、百八の數へ方、三種の中の一に擧げて居る。即ち眼乃至意の六根が、對境を緣ずる時、好・中・平等の三の場合ありとし、その各に染と淨とがあるので、六根にはそれぞれ六の場合が有つて、三十六を成す。之が過・現・未の三世に配せられて、こゝに百八といふ數が成立することになる。經の本文には、明に三世の事は言つて居ないが、第六の意根の場合に於て、心・意・識の三を擧げて居る（それが他の場合では好・中・平等の三に相當する）。而して心・意・識はまた三世に配せられる（婆沙論七二）こともあるから、單に意と云はずして心と識とを加へた所に、暗に三世に配する趣が見得られる。これは獨り意根に就てのみならず、他の五根の場合も亦然るべきであつて、以て百八を成すのである（止觀補行五之五）。

ところが、この百八を數へる五十の場合、即ち癡・疑・顚倒・欲・墮・愛・栽・識・因緣著・種などの如く、五十の一一の場合の區別或はその意義などが、甚だ不明瞭であり、百八の校計することに急にして、一一に就て說くところ殆んど無い。只大集經の初の方に於けるが如く、數へんが爲に數へるといふ樣式が、明白にあらはれて居る。僧就がこの二卷の經を十方菩薩品と改題して、大集經中に編入したのも、恐らく、かゝる內容に依據してのことであらう。

昭和六年七月十二日

譯者　蓮澤成淳識

山に於ける說法である。聲聞品第一では、功德天が佛に對して、云何がして菩薩は禪波羅蜜の本業を修學し、乃至は無上正覺を成ずるやを尋ねると、佛は先づ聲聞相應の、數息觀を始めとして、諸種の觀法を說かれ、若し國中に、是の如き禪相應の福田の住する有らんには、十種の利益のあるべきことを述べられる。

菩薩本業品第二では、佛が續いて、聲聞と共ならざる菩薩獨特の禪波羅蜜の本業滿足の次第をば、諸種の觀法によつて示される。

非時風雨品に於ては、地藏菩薩が功德天に、釋迦牟尼佛の德を具したまひて、供養すべきを說くと、功德天が、その本生として、因陀羅幢相王佛の所に於ける發願の物語をする。次で地藏菩薩の勸めに依り、佛が功德天の爲に、水風摩尼宮大陀羅を說かれ、次で地藏菩薩が磨刀大陀羅尼を述べると、佛がその陀羅尼の種種な功德力を示される(卷五七)。

陀羅尼品第四、佛が功德天と共に、因陀羅幢相佛の所に發願したまへる物語から始まつて、功德天が、今此の四天下の、諸惡毒龍の災害を除きたまはんことを乞ふと、佛が須彌藏龍仙菩薩に向つて、この諸龍の惡業をば、云何して除くべきやを尋ねられる。須彌藏が頻申三昧の力と、陀羅尼の力とに因つて、かの龍の貪瞋、乃至非時の風雨を伏すべきを述べる。次で善住龍王、難陀・婆難陀龍王、摩那蘇婆帝龍王、乾闥婆仙、地藏並に無盡意或は文殊・彌勒の諸菩薩が、龍の災害・天地の災厄、乃至は身心の諸疾を除愈し得べき呪を說き、諸の大龍が無上の大乘心を起し、力に隨つて佛を供養する。

時に會中の無垢威德と名くる帝釋、問に應じて、佛が諸龍の世間・衆生の資財を壞する因緣を說かれ、觀世音菩薩が、偈を以て、菩提心を發すべきを勸め、最後に付囑がある(卷五八)。

十方菩薩品(卷五九—六〇)、宋元明三本では、佛說明度五十校計經二卷として別行し、後漢天竺「又は安息」三藏法師安世高譯とあり、麗藏のみは那連提耶舍の譯に歸して居るが、開元錄等は既に耶舍の譯出に非ずして、世高の譯たるべきを言ひ、譯出の文句から察するも、他の耶舍譯とは、甚だしく相違して居るので、高世高の譯とすべきであらう。經は王舍城法淸淨處に於ける說法であつて、十方の菩薩が佛に問ふて「何の故に諸行の因緣に不同があるや」を尋ねると、「五根及び意識を校計するを、一切法の本と爲して、十方の佛智を得る」ことを答へられる。問ふ「云何が具足して道を行ずる」と。答へて「常に根識を守り、校計を修する者を、黠菩薩と爲し、校計を修せざるをば、癡の菩薩と爲す」と云ひ、「校計を修せざるものが癡で、校計を修するも

この大聖一切智人こそ、乃ち能く汝に安隱無畏を施すべきを說く（以上日密分缺）。

すると一切の大龍王及び眷屬が、等しくこの大聖卽ち今の釋迦如來に歸依するので、光味が如來の德を種種讃說する。

念佛三昧品では、諸龍が光味の言を信受するので、離暗と名くる魔女も、五百の姊妹と共に發心歸佛する。魔王は怖畏・瞋恚を生じ、憔悴して獨り宮內に居る。佛は光味と共の大衆の爲に種種の說法せられるので、五百の魔女は女身を捨てゝ男身を得る。

次で（昇須彌山頂品）佛が須彌山に昇らんとせられると、梵天以下の諸天が、各諸寶を以て階橋を化作し、佛の渡御を請ふ。佛は八種の如來身を化作して、各の寶橋を渡つて須彌の頂に登り、帝釋や憍陳如等の爲に說法がある。難陀・優波難陀の二龍王は、身を以て橋と作して、須彌より佉羅坻山へ渡し、此處に至つて、一切の龍の爲に說法せられんことを求める（卷四三）。

三歸濟龍品では、佛がこの龍身の橋を踏んで佉羅坻山に下り、娑伽羅龍以下の諸龍が、現に龍身を受くるに至つた因緣を述べて、福德を修し、寺舍を建て、僧を供養すべきことを說かれる。龍の中には、過去に於て、造つた行業を佛に懺悔し、現在の苦痛を訴へて、救を願ふので、三歸を授けて、苦惱の中より脫せしめられる（卷四四）。

護塔品では、佛が閻浮提內の王舍城中なる、聖人處所を、婆婁那龍王に付せられたを始めとし、西瞿耶尼、東弗婆提、北鬱單越に於ける、諸聖人住處や、摩伽陀國以下、摩偸羅國、憍薩羅國、乾陀羅國、罽賓國、于闐國、震旦國などに於ける二十の聖人住處をも、諸龍及び夜叉等に付囑して守護せしめられる。蓋し此等の聖人住處は、日藏法寶を流布すべき福地であるから。魔王波旬も、佛の塵及び衆生に對する、平等無二の態度に感じて、佛に歸依する。次で佛は一魔子に對し、眼と色、乃至意と法との關係以下の說法があり、六十頻婆羅の龍が發心して、此の日藏大授記辟富略修多羅を奉持せんと云ひ、最後に此の日藏授記大集經書寫の利益を擧げて終る（卷六十）。

卷四六――五六。月藏分、譯者の都合により、大集部第四參照。

須彌藏分（卷五七―五八）、內題には須彌藏分第十五とあるので、月藏分の次に編入せられたのであらうが、內容から云へば、地藏十輪經と密接な關係を有して居る。宋等の三本では、大集須彌藏經として上下二卷に分れて居る。

經は四品から成つて居り、佛の佉羅坻

時に欲界の魔王波旬が、娑婆世界の一切が、佛の身中に在るを見て、悲泣涕涙し、懊惱・苦悶するので、魔王の軍主戒依止と名くるが、世間の摧き難き三種の毒(一に天魔、二に惡龍、三に定もて五通を得たる仙人)あり、第一は破られたが、第二の龍の境界は牢固たり、王の爲に彼等に令して瞿曇を壞せんとは云ふが、佛の神力の爲に、戒依止もその軍衆、並に諸龍も、その所期を果たすを得ないで、悉く皆佉羅坻山なる牟尼聖人の住處に在り、魔王が本心を喪ひ神力を失へるによつて、四天王やその他の聖人を禮拜する。この時雪山には六人の聖人があり、その中の一人光味といふが、他の五人の爲に、種種釋迦如來の德を讃歎してゐると、五人の者が諸龍の救濟を求乞する聲を聞き、飛んで諸龍の所へ至り、彼等の師たる光味(殊致阿羅娑)聖人こそ、能く救ふべきを教へるので、諸龍は光味に救を求める。光味は空に乘じて佉羅坻山頂に至り、諸龍の爲に星宿の法を說く。

光味は星宿の說を以て、佉盧虱吒仙人の所說なりとし、昴宿より胃宿に至る二十八の宿、その姓、その屬する天、乃至は祭るに供ふべき物などを說く(卷四一)。

次で此等の宿を月並に日に配し、その日並に月をば、かの宿に支配せらるゝものとして、その日に生れたるものゝ運命、その日に作すべき事、作すべからざる事などを詳細に列擧し、八月の滿月を起點として、一ケ年に亘る日子に各宿を配し、一年を六期に分つことなどを述べる(卷四二)。

因に星宿乃至占法に關する記事では、本經に見えるもの、宿曜經のそれと相併んで、詳細なものゝ一である。而も本經のは、十二宮や七曜に關する說は殆んど無くて、二十八宿に關するものゝみである點に於て、宿曜經程に整つては居らぬが、舍頭諫經や摩登伽經のそれよりも、詳しい點に於て、形式上それ等よりも後代に成れるものと云ひ得る。前に云つた寶幢分中の宿曜說も、同じく光味が諸龍の爲に語つたとあるから、今のこの日藏分中の說も、直接の系統は、寶幢分中の說から來ることは想像に難くはない。かくて寶幢分中の說の如きものが、更に發展して舍頭諫經等に見る如きものとなり、それが進んで今の日藏分中の說とはなつたもと云ひ得るであらう。尙ほ月藏分中の攝受品中の說は、日藏分中の說を豫想したものと考へられる。

次の送使品では、光味の語がつゞいて、虱吒仙と青眼帝釋との談話があり、諸龍王が、此の世界の諸地分中に停止して守護すること、佉羅虱吒仙人が、無量劫來、種種の福德を、具足し圓滿すること乃至は淨飯王家に、摩耶夫人を母として生れたることなどを述べ、諸龍に語つて、

南方からは、娑婆幢世界の山帝釋王佛が、香象菩薩をして、隨順空忍陀羅尼と無盡根大授記陀羅尼とを持つて、娑婆世界に至らしめ（卷三五）、西方の堅固幢世界からは、智德峯王佛の命に依り、炎德藏菩薩が、無願忍陀羅尼と智慧依止授記陀羅尼とを持つて至り、北方の普上香世界の、德華藏佛の所からは、虛空藏菩薩が、奢摩裴多悉致大授記陀羅尼と、滅一切惡及諸惡夢と名くる陀羅尼（日密分には此の段缺けたり）とを持つて至る（卷三六）。

頻婆娑羅王が、この四方の使者達を見、心に歡喜して居ると、日行藏菩薩が先づ佛を讚し（以下卷末まで日密分缺く）、次で其の持參した二種の陀羅尼を說くと、佛は是を長老耶舍に付せられ、香象菩薩が彼の二種の陀羅尼を述べると、佛は是を憍陳如に付せられ、炎德藏菩薩の說いた二種をば、長老舍利弗に付せられ（この付囑の文だけは、日密分に相當文あり）、最後に虛空藏菩薩が、その持來した二種の陀羅尼を說くと、佛は是を目連に付して居られる（卷三七）。

次に憍陳如が佛に對して、經中に說かれる愛と富伽羅とに就て尋ね、一切の大集諸來衆が、欲の過に就て宣說せられんことを願ふので、不淨觀の說法が續けられ、更に憍陳如に對して、八種の解脫門を以て、東方からの四諦順陀羅尼を解說し、南方からの空順陀羅尼を說くには、觸欲と四種の空門とを以てし、西方からの無願順陀羅尼に就ては、不樂の想と食中の諸顚倒の想とを除くべきことを述べ（卷三八）、更に世間不可樂の想を細說して、地獄・畜生・餓鬼・人間・天の五趣の相を述べ、食不樂の想としては不淨觀を說き、北方からの奢摩裴多悉帝那陀羅尼に就いては、四倒を破する無我を說き、各陀羅尼の勢力、並に利益を述べて終る（卷三九）。

次の護持品（日密分には缺けたり）に在つては、一切の諸天並に八部衆が、信心有る男女をば守護するも、彼の行者を、或は瞋り或は障礙する者をば、守護せざることを述ぶると、佛は之を賞して記莂を與へられる。すると娑婆世界の惡心の諸餓鬼も、亦發心歸佛し、牢固地天・大德天なども、佛法護持を誓ふ。次で彌勒菩薩と金剛力士との間に、虛空の法に就ての問答があつて終る。

次の佛現神通品では、頻婆娑羅王が、菩薩の諸の光相に就て、佛と問答し、次で佛が如來境界三昧に入りたまふと、十方刹中の一切諸佛が、自刹に於て佛を稱讚し、無量の大衆が又來つて佛を供養し、無量の衆生が記莂を受ける。又諸の菩薩あつて、佛身を化作し、乃至は龍身・鬼身を化作して、以て釋迦如來を供養し、それ〴〵供養し已つて、各自の國へ歸る（卷四〇）。

巻四三　念佛三昧第十……………………巻二三　救龍品第六（同上三三六—）
巻四三　昇須彌山頂品第十一……………巻二三　同　上（同上三三六—）
巻四四　三歸濟龍品第十二……………
巻四五　護塔品第十三……………………

是に依ると、日藏分の殆んど大部分が、日密分中に約說せられて居る樣に見えるが、その實は、日密分中の最初の二品のみが、日藏分の文と一致し、日密分第三・第四並に第六（本文中には第五品を缺く、右の表に依ると、第五品は恐らく日藏分の星宿品に相當するものであつたであらう）の諸品は、僅に日藏分の一部を成すのみであり、卷、四一の後半、四二、四三の前半、四四、四五に相當するものが、全く日密分には存しないのである。

而かも日密分に缺けた部分の中、卷四一、四二、并に四五に於ける內容は、佛教といふ立場から見て、果して妥當であるか否かは問題であるが、他の諸經に見ざる所を含んで居る關係上、日藏分としては主要な部分と云はなければならない。特に星宿品の說の如きは、簡單ではあるが、寶幢分の神足品（卷二〇、大集部第二、三八頁以下）にも既に說かれて居り、次で來るべき月藏分の星宿攝受品（卷第五十六）に關係あるものである。また卷第四十五護塔品に見ゆる、諸聖人の住處を示す爲に擧げられた諸國には、印度より西域・震旦（漢國とあり）に亘る國々が含まれて居る。從つて前者は印度の天文說並に天文依る占法の資料を提供するものであり、後者は佛教の東漸史乃至は大乘經典の成立――、少くも本經の成立――に關して、何程かのヒントを與ふるものとして、注意さるべき部分を成すものである。日密分では、全然此等に說き及ばないのであるから、日密分の次に、是等を含んで居る日藏分の輯錄された事は、當を得たものと言ひ得る。

今なるべく日密分との重複を避けて、日藏分十三品の概要を示すならば、（卷三四—三六）佛が虛空日安那波那甘露法門を說かれて後、王舍城迦蘭陀竹園に在はすや、功德蓮華光と名くる大梵天の讃佛に始まり、會中の菩薩が各諸深三昧に入り、大光明を放つので、十方世界の諸菩薩等が、一念の頃に來至する。佛は供養の事から、頻婆娑羅王に對し、破戒の比丘が諸惡報を受くべき事を種種に說示される（卷三四）。

次で東方の無盡德世界からは、瞻波迦華色如來が、日行藏菩薩（娑婆世界の一優婆塞毘摩羅詰）を遣はして、一切の貪・慢・見などを除く四諦順忍陀羅尼と、一切の欲河を乾かす大力日眼蓮華陀羅尼とを持つて、娑婆世界の佛の所に至らしめる。

大方等大集經（卷三四―四五）（卷五七―六〇）

各品概要（其三）

日藏分（卷三四―四五） は、底本たる麗藏では、十三品に細分せられて居るが、宋・元・明の三本に於ては、大乘大方等日藏經十卷として別行して居るもので、麗藏の日藏分は、かの僧就に依つて、日密分の次に輯錄せられたものであること、大集部第一の解題に於て述べた如くである。日密分は、大集部第二の終に、卷三一―三三に亘つて譯出した五品より成つて居るから、日藏分と日密分とは廣略の差と云へばそれまでだが、日密分に缺けた多數の頁が、日藏分では漢譯されて居るので、六十卷本では、內容のやゝ類似した二品を相列べたとは云ふものゝ、その品數が示す如く、日密分は單なる日藏分の部分譯では無くして、日密分に於けるが如き內容が、更に進んで、日藏分に見る如きものとなつたと見るを得る點に於て、兩者の存在が意義付けられるのである。勿論大集經一部としては、この二品は具略の差有るのみで、獨立の別本としての意義は、むしろ日藏分に存すること言を俟たない。今參考の爲に、日密分に存する所をば、日藏分に對比すると、次の如くである。

日藏分	日密分
卷三四 護持正法品第一	卷三一 護法品第一（大集部第二 二七九―）
卷三五 陀羅尼品第二の一	卷三一 四方菩薩品第二（同上 二八八―）
卷三六 同 第二の二	卷三一 同 第二の二（同上 二九八―）
卷三七 菩薩使品第三	卷三一 分別說欲品第三（同上 三〇六―）
卷三八 定品第四	卷三一 分別品第四（同上 三〇七―） 卷三二 同 第四の二（同上 三一六―）
卷三九 惡業集品第五	卷三二 同（同上 三二〇―）
卷四〇 護持品第六	
卷四〇 佛現神通第七	卷三二 同（同上 三二六―）
卷四一 星宿品第八	卷三二 同（同上 三二九―）
卷四二 同 上	
卷四三 送使品第九	

◇　　◇

目次

大集部 三

蓮澤成淳譯

國譯一切經

大東出版社藏版